

# 上幌内モイ遺跡（2）

—厚幌ダム建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 2—

2007.3

厚真町教育委員会

# 上幌内モイ遺跡 (2)

—厚幌ダム建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 2—

2007.3

厚真町教育委員会

巻頭カラー1



1. ⅢGP-01完掘【アイヌ文化期】 (SW→)



2. ⅢGP-01出土漆塗椀片



3. ⅢGP-01出土副葬品 刀の鐔部分



4. ⅢGP-02出土漆塗椀片



5. ⅢH-07出土漆塗椀片

## 巻頭カラー2



1. ⅢH-02(前),05(奥)完掘 【アイヌ文化期】 (SW→)



2. 集中区1検出状態 【擦文文化期】 (SE→)

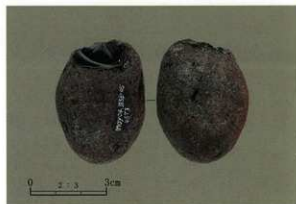
巻頭カラー3



1. 集中区2検出状態 [擦文文化期] (S→)



2. 集中区2 III BB-01検出状態 (S→)



3. 集中区2出土の黒曜石原石



4. 集中区1,2,18出土の擦文土器群及び須恵器

巻頭カラー4



擦文文化期出土の遺物

## 序 文

厚真町は、胆振・日高地区屈指の豊かな水田地帯を有する農業の町であります。この穀倉地帯を潤す厚真川は夕張山地の南端を源として流れ、農作物への恩恵を授ける大切な河川でもあります。この豊かな厚真川と豊かな“ふるさと厚真”を更なる発展へと進めるために、近代的農業開発と治水対策を主な柱とした多目的ダム「厚幌ダム」が、平成7年度に本格着工されました。

さて、本書はこの厚幌ダム建設に先駆けて、沈み行く地域に残された埋蔵文化財の記録保存を目的として発掘調査された上幌内モイ遺跡の報告書であります。平成16年より始まった調査により、約1万4千年前の旧石器時代にまで厚真町の歴史が遡り、約1,000年前の儀礼場跡や朝鮮半島産と思われる銅鈍、本州産の土師器・須恵器などや、北海道の先住民族であるアイヌ民族の約500年前の集落跡の発見など、山間部の遺跡から数々の重要な成果を得ることができました。

上幌内モイ遺跡のほか、厚幌ダム建設事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査は、今後も数ヵ年にわたり継続される予定でございますが、この様な貴重な埋蔵文化財を、地域の教育的資源、文化的財産として普及活用を推し進めてまいりたいと思う所存でございます。また、本書が、広く、埋蔵文化財の保護並びに調査・研究の一助となれば幸いに存じます。

最後となりましたが、調査・整理・報告にあたり御指導、御支援を賜りました関係諸氏ならびに諸機関に、真に厚く、感謝申し上げる次第であります。

厚真町教育委員会  
教育長 幅田 敏夫

## 例言

1. 本書は、平成 16・17 年度に行った厚幌ダム建設事業に伴い発掘調査された上幌内モイ遺跡(登録番号: J-13-79)の発掘調査報告書で、縄文時代晩期から近世アイヌ文化期(Ⅲ層)までについて掲載するものである。
2. 調査は、北海道の委託を厚真町が受託し、厚真町教育委員会が発掘調査を行った。
3. 調査・整理は以下の体制で行った。

調査担当者: 乾 哲也 小野 哲也 奈良 智法

技能作業員・写真工: 赤井文人 海津孝之 宮崎美奈子

乾: 縄文土器実測・復元・拓影土器撮影、拓影図作成、礫石器(一部 奈良)・集石構成礫・骨角器・炭化キビ塊等の実測・撮影

小野: 檜土器実測、土器属性表表作成、銅鉤・炭化キビ塊等の写真実測・金属器の実測・撮影、遺構図作成・編集

奈良: 剥片石器実測・撮影、遺構・遺物等の各種集計・計測表作成、写真図版作成・編集

4. 本書の編集は乾・小野が行い、各節の執筆は、文末に記す。
5. 関連諸科学については、以下の機関および個人に依頼し、玉稿を賜った。

AMS 法  $^{14}\text{C}$  年代測定: 株式会社 バリノ・サーヴェイ

独立行政法人 国立環境学研究所 鶴野 光

金属製品保存処理・分析: 岩手県立博物館 赤沼 英男・佐々木 整

動物遺存体同定: 千歳サケのふるさと館 高橋 理

炭化種子同定: 札幌国際大学 研究員 椿板 恭代

炭化材樹種同定: バリノ・サーヴェイ株式会社

古人骨同定: 札幌医科大学 松村 博文・金 美善・水島 衣美

土坑土壌分析: 酪農学園大学獣医学部感染・病理部門/野生動物医学センター

浅川 満彦・渡邊 秀明・的場 洋平

6. 地形測量は、株式会社 シン技術 コンサルに委託した。
7. 本調査によって得られた資料等は、厚真町教育委員会が保管している。
8. 調査期間中にアイヌ墓を調査したことから、社団法人 北海道ウタリ協会・胆振地区支部連合会の協力により、「カムイノミ・イチャルバ」(アイヌ文化振興・研究推進機構 国内交流事業助成)を執り行った。
9. 調査・報告にあたって下記機関および個人より御指導御協力を頂いた。記して感謝申し上げます。

北海道教育庁生涯学習部文化・スポーツ課、北海道胆振支庁、北海道室蘭土木実業所 厚幌ダム建設事務所、財団法人 北海道埋蔵文化財センター、社団法人 北海道ウタリ協会・胆振地区支部連合会、財団法人 アイヌ文化振興・研究推進機構、財団法人 アイヌ文化研究推進センター、札幌医科大学、北海道開拓記念館、千歳さけのふるさと館、苫小牧駒沢大学、札幌学院大学 人文学部、札幌国際大学、苫小牧市博物館、千歳市埋蔵文化財センター、平取町沙流川歴史館、日高町教育委員会、新ひだか町教育委員会、恵庭市教育委員会、富良野市教育委員会、浦幌町教育委員会、上磯町教育委員会、花巻市立博物館、青森県埋蔵文化財センター、岩手県立博物館、伊達市教育委員会、富山大学 酒井研究室、財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団、白根記念 渋谷区郷土博物館・文学館、財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団、群馬県立歴史博物館、長野県立歴史館、長野市埋蔵文化財センター、長野市立考古博物館



館、厚真町幌内自治会 (有)講神組

青野 友哉、赤石 慎三、秋野 茂樹、浅田 智晴、阿部 義明、天方 博章、天野 哲也、石川 朗、乾 芳宏、井上 雅孝、井上 典子、臼杵 勲、右代啓視、宇部 則保、大竹 憲昭、大塚 和義、大西 雅広、大屋 道則、大塚 和義、岡田 路明、小野 昌子、小野 裕子、小保内 裕之、風間 栄一、粕谷 崇、葛城 和徳、加藤 博文、川内谷 修、神原 雄一郎、工藤 研治、久保 泰、熊谷 仁志、柴原 真宜、合地 信夫、講神 喜助、越田 賢一郎、小林 克、小林 幸二、小針 大志、小山 卓臣、今野 公顕、桜岡 正信、酒井 英男、酒井 宗孝、佐藤一夫、佐藤 剛、佐藤 智生、澤田 健、澤本 幸雄、芝田 直人、白崎 恵介、白鳥 文雄、杉山 秀宏、鈴木 信、鈴木 琢也、鈴木 靖民、仙庭 伸久、高橋 和樹、田口 尚、田才 雅彦、田中 哲朗、種市 幸生、田村 俊之、鶴丸 俊明、土肥 研品、豊田 宏良、直井 雅尚、中田 裕香、長田 佳宏、長沼 孝、長町 章弘、中村 宅雄、西 隆幸、西田 茂、西脇 対名夫、野月 寿彦、畑 宏明、原 芳明、福井 淳一、藤田 巧、藤原 秀樹、藤原 弘明、布施 和洋、松崎 水徳、松田 淳子、松田 浩介、松田 猛、松谷 純一、三浦 圭介、三浦 正人、養島 栄紀、宗像 公司、室野 秀文、森 秀樹、森岡 健治、森田 真一、藪中 剛司、山田 央、山田 悟郎、山田 雄正、山原 敏朗。

## 凡 例

1. 本書の遺構・遺物等について下記の略号を用いた。なお、層位がこれらの略号に付加している。

【遺構】 住居址：H 住居内のピット：HP 墓壇：GP 土坑：P 焼土：F 灰集中：AS  
杭穴：KP 性格不明遺構：X

【遺物】 土器：P 撤文土器：SP 絞縄文土器：ZP 土製品：CP 剥片石器：FT 礫石器：ST  
フルイ・チャップ：FC 礫：S 石製品：STP 鉄製品：IP 銅製品：BP ガラス製品：GP  
骨角器：BHP 炭化種子：SD 獣骨：B

【遺物等集中】 土器片集中：PB フレイク・チップ集中：FCB 礫集中：SB 鉄器集中：IPB  
獣骨集中：BB 炭化物集中：CB

2. 調査区を含めた周辺の河岸段丘面に以下の記号を用いた。

標高約 56.2-56.8m(氾濫原)：T<sub>0</sub> 標高約 58m：T<sub>1</sub> 標高約 62m：T<sub>2</sub> 標高約 68m：T<sub>3</sub>  
標高約 72.5-75m：T<sub>4</sub> 標高約 80-100m：T<sub>5</sub>

3. 地層等について下記の略号を用いた。

【堆積土】 樽前 a 砂質降下火山灰：Ta-a 駒ヶ岳 c2 砂質降下火山灰：Ko-c2 樽前 b 降下軽石：Ta-b  
白頭山苦小牧火山灰：B-Tm 樽前 c 砂質降下軽石：Ta-c 樽前 d1 細礫質降下スコリア：Ta-d1  
樽前 d2 中礫質降下軽石：Ta-d2.p 粘土質黄褐色シルト(いわゆるローム)：L 攪乱：KR

【色 調】 小山・竹原編著(1994)『新版 標準土色帳』に従った。

【注 記】 土層注記は下記の略号を用いて、左側より混合比率の順列をつけている。また、混入土については ( ) 内に粒径(単位：mm)、状態を記載した。


混入土の比率

A + B：A と B が同量比混じる A-B：A を主体に B が多量に混じる

A = B：A を主体に B が少量 A≡B：A を主体に B が微量

φ：粒径(単位・mm) ↓：以下 (状態)：斑状に混じる・均一に混じる

[層位] 標準堆積層はローマ数字を用い、遺構覆土や風倒木攪乱などの二次的に堆積したものにはアラビア数字を用いた。堆積図中には以下のトーンが対応している。また、一覧表中には下記の略号を用いている。

 : 白頭山苦小牧火山灰(B-Tm)

U: 上位 M: 中位 L: 下位

[焼土] 被熱による土壌赤色化の度合いの表現に以下のトーンを用いた。




4. 挿図は基本的に次のように縮尺を統一したが、異なるものについては図中スケールに縮尺を明記している。  
 遺構周辺図: 1/80, 1/60, 1/40 住居跡: 1/50 住居跡に付属する柱穴その他の土坑: 1/20 土坑: 1/40  
 焼土: 1/20 集中遺物出土状態: 1/10 または 1/20

土器実測図: 1/3 または 1/4 土器拓影図: 1/3 剥片石器実測図: 1/2 礫石器実測図: 1/3 または 1/4

5. 遺構実測図中に以下の線種・トーンを用いている。

[線種] - - - - - : オーバーハング ———— : トレンチ ———— : 攪乱・トレンチによる遺構推定

[柱穴] 平地式住居址柱穴の確認面からの深さ 20cm 以上のものは、平面図中にトーンを用いた。また断面図において、しまりの強い壁面に斜線を用いている。

[平面]  : 確認面からの深さが20cm以上の柱穴

[断面]  : 柱穴の壁面周辺が強くしまる部分

6. 土器・石器・金属製品の挿図および写真図版の番号に後続する枝番号は同一個体表記である。また、写真図版中の「●」は実測図掲載遺物である。

7. 遺物実測図中に以下の略号を用いている。

[断面] V———V : たたき痕 |———| : 剥片石器 微細刻離 / 礫石器 擦り痕・滑沢面

[平面]  : 滑沢面範囲  : 被熱による赤色化/付着物範囲

8. 一覧表中の石材については、奈良および乾が肉眼観察で分類し、下記の略号を用いた。ただし凝灰質砂岩については砂岩に、緑泥片岩は緑色泥岩に含めている。また、頁岩・泥岩の分類については、粒度による基準ではなく、破断面等の肉眼観察によるものである。

Age: メノウ Age-Sh: メノウ質頁岩 And: 安山岩 Bl-Sch.: 青色片岩 Cha.: チャート

Con: 礫岩 Dio: 閃緑岩 Gra.: 花崗岩 Gr-Mud.: 緑色泥岩 Mud.: 泥岩 Obs.: 黒曜石

Qu.: 石英 Qu-Sch.: 石英片岩 Qua.: 珪岩 Sa.: 砂岩 Sh.: 頁岩 Tu.: 凝灰岩 Ser.: 蛇紋岩

## 本文目次

巻頭カラー		1. 土器	19
1-1 III GP-01 完掘 [アイヌ文化期]		2. 剥片石器	20
1-2 III GP-01 出土漆塗碗片		3. 礫石器	21
1-3 III GP-01 出土刷葬品 刀の銜部分			
1-4 III GP-02 出土漆塗碗片			
1-5 III H-07 出土漆塗碗片			
2-1 III H-02(前), 05(奥) 完掘 [アイヌ文化期]		<b>第II章 アイヌ文化期の調査</b>	
2-2 集中区1 検出状態 [擦文文化期]		第1節 平地式住居址と関連遺構	22
3-1 集中区2 検出状態 [擦文文化期]		第2節 建物跡	85
3-2 集中区2 III BB-01 検出状態		第3節 杭列・杭跡	89
3-3 集中区2 出土の黒曜石原石		第4節 土塚墓	96
3-4 集中区1, 2, 18 出土の擦文土器群 及び須恵器		第5節 集中区	105
4 擦文文化期の出土遺物		第6節 焼土	111
		第7節 灰集中	117
		第8節 獣骨集中	120
		第9節 集中遺物	125
		第10節 包含層出土遺物	129
序文		<b>第III章 擦文文化期の調査</b>	
例言		第1節 円形周溝遺構	134
凡例		第2節 堅穴様遺構	141
		第3節 集中区	143
		第4節 土坑	239
		第5節 焼土	243
		第6節 集中遺物	251
		第7節 包含層出土遺物	254
<b>第I章 調査の概要</b>		<b>第IV章 続縄文・縄文時代の調査</b>	
第1節 遺跡の位置	1	第1節 集中遺物	261
1. 厚真町の概要	1	第2節 包含層出土遺物	261
2. 遺跡の位置と周辺の環境	6		
3. 地形と地質	6		
第2節 調査に至る経緯	10		
1. 厚幌ダム建設事業	10		
2. 発掘調査までの経緯	11		
第3節 平成16～18年度の調査結果の概要	11		
1. 平成16・17年度の調査概要	12		
2. 平成18年度の調査概要	13		
第4節 調査要項と体制	15		
1. 調査要項	15		
2. 調査体制	16		
第5節 調査の方法	16	<b>第V章 自然科学的分析</b>	
1. 発掘区の設定	16	第1節 年代測定	263
2. グリッド設定	16	第2節 古人骨同定	271
3. 包含層および遺構調査の方法	17	第3節 動物遺存体同定	275
4. 整理作業	19	第4節 炭化種子同定	301
第6節 遺物の分類	19	第5節 炭化材樹種同定	318
		第6節 寄生蠕虫類虫卵分析	323
		第7節 鉄製品分析	326
		第8節 銅製品分析	347

写真図版	351
引用・参考文献	350

報告書抄録	467
奥付	468

## 挿 図 目 次

### 第 I 章

図 I-1	町内遺跡分布図	3
図 I-2	発掘調査区と周辺の地形	7
図 I-3	発掘調査区内の地形	7
図 I-4	基本土層柱状図	8
図 I-5	グリッド設定図	17

### 第 II 章

図 II-1	アイヌ文化期遺構配置図	23
図 II-2	1号平地式住居址平面図 及び付属炉跡	25
図 II-3	1号平地式住居址柱穴断面及び集石	26
図 II-4	1号平地式住居址出土遺物	28
図 II-5	2号・5号平地式住居址周辺平面図	31
図 II-6	2号平地式住居址平面図 及び付属炉跡	33
図 II-7	2号平地式住居址柱穴断面図	35
図 II-8	2号平地式住居址出土遺物(1)	37
図 II-9	2号平地式住居址出土遺物(2)	38
図 II-10	2号平地式住居址出土遺物(3)	39
図 II-11	2号平地式住居址床面遺物出土状態 及び出土遺物(4)	40
図 II-12	5号平地式住居址平面図 及び付属炉跡	43
図 II-13	5号平地式住居址柱穴断面 及び出土遺物	44
図 II-14	獣骨集中 3 平面図	45
図 II-15	III BB-03 出土遺物	48
図 II-16	獣骨集中 4 平面図	49
図 II-17	3・4・7 号平地式住居址周辺平面図	53
図 II-18	3号平地式住居址平面図 及び柱穴断面	55
図 II-19	3号平地式住居址付属炉跡 及び見通しエレベーション	56
図 II-20	3号平地式住居址出土遺物(1)	57
図 II-21	3号平地式住居址床面遺物出土状態 及び出土遺物(2)	58
図 II-22	4号平地式住居址平面図 及び柱穴断面	61
図 II-23	4号平地式住居址付属炉跡 及び出土遺物(1)	62
図 II-24	4号平地式住居址床面遺物出土状態 及び出土遺物(2)	63
図 II-25	7号平地式住居址平面図	66
図 II-26	7号平地式住居址付属遺構 及び柱穴断面	67
図 II-27	7号平地式住居址出土遺物(1)	68
図 II-28	7号平地式住居址床面遺物出土状態 及び出土遺物(2)	69
図 II-29	灰集中 1・2	73
図 II-30	灰集中 1・2 出土遺物	75
図 II-31	獣骨集中 10 平面図及び 出土遺物	77
図 II-32	獣骨集中 11 平面図	78
図 II-33	獣骨集中 14 平面図	79
図 II-34	6号平地式住居址平面図	

	及び柱穴断面	82	図III-5	集中区1及び土器集中2・3平面図	145
図II-35	6号平地式住居址付属炉跡 及び出土遺物	83	図III-6	III F-20・50N・S断面、III CB-61平面図 及び出土炭化キビ塊	147
図II-36	建物跡1~3	87	図III-7	集中区1出土遺物(1)	149
図II-37	建物跡4・5	88	図III-8	集中区1出土遺物(2)	150
図II-38	杭列(1)	90	図III-9	集中区1出土遺物(3)	151
図II-39	杭列(2)	91	図III-10	集中区1出土遺物(4)	152
図II-40	杭跡(1)	93	図III-11	III PB-03 個体別出土位置(1)	153
図II-41	杭跡(2)	94	図III-12	III PB-03 個体別出土位置(2)	154
図II-42	1号土壇墓	97	図III-13	集中区2及び関連遺構断面	158
図II-43	1号土壇墓埋葬状態及び 副葬品出土位置	99	図III-14	集中区2出土遺物(1)	159
図II-44	1号土壇墓出土遺物	100	図III-15	集中区2出土遺物(2)	160
図II-45	2号土壇墓	102	図III-16	集中区2出土遺物(3)	161
図II-46	2号土壇墓埋葬状態・副葬品 出土位置及び出土遺物	104	図III-17	III SB-05 平面図及び出土遺物(4)	162
図II-47	集中区4平面図及び出土遺物	106	図III-18	獣骨集中1・銅鏡出土状態及び III CB-53 と出土炭化キビ塊	163
図II-48	集中区14平面図及び出土遺物	108	図III-19	集中区3平面図及び関連遺構断面	165
図II-49	集中区19平面図及び関連遺構断面	109	図III-20	集中区3関連遺構	168
図II-50	集中区19出土遺物	110	図III-21	集中区3出土遺物(1)	171
図II-51	アイヌ文化期焼土(1)	113	図III-22	集中区3出土遺物(2)	172
図II-52	アイヌ文化期焼土(2)	114	図III-23	集中区3出土遺物(3)	173
図II-53	アイヌ文化期焼土出土遺物	115	図III-24	集中区3出土遺物(4)	174
図II-54	灰集中4・5・6平面図	118	図III-25	集中区3出土遺物(5)	175
図II-55	灰集中5出土遺物	119	図III-26	集中区5平面図及び関連遺構断面	179
図II-56	獣骨集中5・8	121	図III-27	集中区6平面図	181
図II-57	獣骨集中2・6・7・9・13	122	図III-28	集中区6関連遺構	183
図II-58	獣骨集中出土遺物	124	図III-29	集中区6出土遺物	184
図II-59	鉄器集中1	126	図III-30	集中区7平面図及び関連遺構断面	187
図II-60	礫集中4	128	図III-31	III PB-08 平面図・エベレーション及び 出土遺物	188
図II-61	アイヌ文化期包含層(III層上~中位) 出土遺物(1)	130	図III-32	集中区8平面図	189
図II-62	アイヌ文化期包含層(III層上~中位) 出土遺物(2)	131	図III-33	集中区8関連土坑及び焼土断面	192
			図III-34	集中区8出土遺物(1)	194
			図III-35	集中区8出土遺物(2)	195
			図III-36	集中区9平面図及び関連遺構断面	198
			図III-37	集中区9出土遺物(1)	199
			図III-38	集中区9出土遺物(2)	200
			図III-39	集中区10平面図・関連遺構断面 及び出土遺物(1)	203
			図III-40	集中区10出土遺物(2)	204

### 第三章

図III-1	擦文文化期遺構配置図	135
図III-2	円形周溝遺構	137
図III-3	円形周溝遺構出土遺物	140
図III-4	竪穴様遺構及び出土遺物	142

図Ⅲ-41	集中区 11 平面図及び関連遺構断面	206	図Ⅲ-56	集中区 18 出土遺物(1)	236
図Ⅲ-42	集中区 12 平面図及び関連遺構断面	208	図Ⅲ-57	集中区 18 出土遺物(2)	237
図Ⅲ-43	ⅢPB-12 平面図及び出土遺物	209	図Ⅲ-58	集中区 18 出土遺物(3)	238
図Ⅲ-44	集中区 13 平面図及び関連遺構断面	211	図Ⅲ-59	土坑(1)	240
図Ⅲ-45	集中区 13 関連土坑 及び出土遺物(1)	214	図Ⅲ-60	土坑(2)	242
図Ⅲ-46	集中区 13 出土遺物(2)	215	図Ⅲ-61	焼土(1)	245
図Ⅲ-47	集中区 13 集石平面図 及び出土遺物(3)	216	図Ⅲ-62	焼土(2)	246
図Ⅲ-48	集中区 15 平面図及び関連遺構断面	220	図Ⅲ-63	焼土(3)	247
図Ⅲ-49	集中区 15 集石平面図及び出土遺物	221	図Ⅲ-64	焼土(4)	248
図Ⅲ-50	集中区 16 平面図	223	図Ⅲ-65	焼土(5)及び焼土出土遺物	249
図Ⅲ-51	集中区 16 関連遺構断面 及び出土遺物(1)	224	図Ⅲ-66	土器集中平面図及び出土遺物	252
図Ⅲ-52	集中区 16 出土遺物(2)	225	図Ⅲ-67	礎集中平面図及び出土遺物	253
図Ⅲ-53	集中区 17 平面図及び関連遺構断面	228	図Ⅲ-68	擦文文化期包含層出土遺物(1)	255
図Ⅲ-54	集中区 17 関連遺構及び出土遺物	229	図Ⅲ-69	擦文文化期包含層出土遺物(2)	256
図Ⅲ-55	集中区 18 平面図及び関連遺構断面	233	図Ⅲ-70	擦文文化期包含層出土遺物(3)	258
<b>第四章</b>					
図Ⅳ-1	統縄文・縄文土器	262			

## 表 目 次

### 第 I 章

表 I-1	厚真町内遺跡一覧表(1)	4
表 I-2	厚真町内遺跡一覧表(2)	5
表 I-3	上幌内モイ遺跡 Ⅲ層遺構群一覧表	13
表 I-4	上幌内モイ遺跡 年度別概要一覧表	14
表 I-5	Ⅲ層出土遺物一覧表	14

### 第 II 章

表 II-1	アイヌ文化期 遺構群一覧表	22
表 II-2	ⅢH-01 属性表	27
表 II-3	ⅢH-01 付属炉属性表	27
表 II-4	ⅢH-01 柱穴属性表	27
表 II-5	ⅢSB-03 礎属性表	27
表 II-6	ⅢH-01 出土遺物属性表	29
表 II-7	ⅢH-02 属性表	35

表 II-8	ⅢH-02 付属炉属性表	35
表 II-9	ⅢBB-12 属性表	35
表 II-10	ⅢH-02 柱穴属性表	36
表 II-11	ⅢH-02 出土遺物属性表	40
表 II-12	ⅢSB-09 礎属性表	41
表 II-13	ⅢSB-10 礎属性表	42
表 II-14	ⅢH-05 属性表	44
表 II-15	ⅢH-05 付属炉属性表	44
表 II-16	ⅢH-05 柱穴属性表	47
表 II-17	ⅢH-05 出土遺物属性表	47
表 II-18	ⅢSB-17 礎属性表	47
表 II-19	ⅢBB-03 属性表	51
表 II-20	ⅢBB-03 出土遺物属性表	51
表 II-21	ⅢBB-04 属性表	51
表 II-22	ⅢH-03 属性表	56
表 II-23	ⅢH-03 付属炉属性表	56

表Ⅱ-24	ⅢH-03 柱穴属性表	56	表Ⅱ-64	ⅢGP-02 墓標穴属性表	105
表Ⅱ-25	ⅢH-03 出土遺物属性表	58	表Ⅱ-65	ⅢGP-02 出土遺物属性表	105
表Ⅱ-26	ⅢSB-15 礫属性表	59	表Ⅱ-66	集中区4 出土遺物属性表	110
表Ⅱ-27	ⅢH-04 属性表	64	表Ⅱ-67	集中区14 出土遺物属性表	110
表Ⅱ-28	ⅢH-04 付属炉属性表	64	表Ⅱ-68	集中区19 焼土属性表	110
表Ⅱ-29	ⅢBB-15 属性表	64	表Ⅱ-69	集中区19 出土遺物属性表	110
表Ⅱ-30	ⅢH-04 柱穴属性表	64	表Ⅱ-70	アイヌ文化期焼土属性表	116
表Ⅱ-31	ⅢH-04 出土遺物属性表	64	表Ⅱ-71	アイヌ文化期焼土出土遺物属性表	116
表Ⅱ-32	ⅢSB-08 礫属性表	64	表Ⅱ-72	灰集中属性表	118
表Ⅱ-33	ⅢH-07 属性表	70	表Ⅱ-73	ⅢAS-05 出土遺物属性表	120
表Ⅱ-34	ⅢH-07 付属炉・灰集中属性表	70	表Ⅱ-74	獣骨集中属性表	120
表Ⅱ-35	ⅢH-07、PIT01 属性表	70	表Ⅱ-75	ⅢBB-05-06 出土遺物属性表	124
表Ⅱ-36	ⅢH-07 柱穴属性表	70	表Ⅱ-76	ⅢIFB-01 出土遺物属性表	127
表Ⅱ-37	ⅢH-07 出土礫石器属性表	70	表Ⅱ-77	ⅢSB-04 出土礫石器属性表	128
表Ⅱ-38	ⅢSB-11 礫属性表	71	表Ⅱ-78	ⅢSB-04 礫属性表	129
表Ⅱ-39	ⅢSB-12 礫属性表	71	表Ⅱ-79	包含層出土遺物属性表	132
表Ⅱ-40	ⅢAS-01-02 属性表	73			
表Ⅱ-41	ⅢAS-01 出土遺物属性表	76	<b>第三章</b>		
表Ⅱ-42	ⅢAS-02 出土遺物属性表	76	表Ⅲ-1	原文文化期 遺構群一覧表	133
表Ⅱ-43	ⅢBB-10 属性表	78	表Ⅲ-2	ⅢX-01 属性表	140
表Ⅱ-44	ⅢBB-10 出土遺物属性表	78	表Ⅲ-3	ⅢX-01 付属遺構属性表	140
表Ⅱ-45	ⅢBB-11 属性表	81	表Ⅲ-4	ⅢX-01 出土遺物属性表	140
表Ⅱ-46	ⅢBB-14 属性表	81	表Ⅲ-5	ⅢX-02 属性表	141
表Ⅱ-47	ⅢH-06 属性表	83	表Ⅲ-6	ⅢX-02 付属遺構属性表	141
表Ⅱ-48	ⅢH-06 付属炉属性表	83	表Ⅲ-7	ⅢX-02 出土土器属性表	143
表Ⅱ-49	ⅢH-06 柱穴属性表	84	表Ⅲ-8	ⅢX-02 出土礫石器属性表	143
表Ⅱ-50	ⅢH-06 出土遺物属性表	84	表Ⅲ-9	集中区1 焼土属性表	147
表Ⅱ-51	建物跡1 柱穴属性表	86	表Ⅲ-10	集中区1 炭化物集中属性表	147
表Ⅱ-52	建物跡2 柱穴属性表	88	表Ⅲ-11	集中区1 出土土器属性表	148
表Ⅱ-53	建物跡3 柱穴属性表	88	表Ⅲ-12	集中区1 出土遺物属性表	155
表Ⅱ-54	建物跡4 柱穴属性表	89	表Ⅲ-13	ⅢPB-03 礫属性表	155
表Ⅱ-55	建物跡5 柱穴属性表	89	表Ⅲ-14	ⅢSB-02 礫属性表	156
表Ⅱ-56	杭列01 属性表	95	表Ⅲ-15	ⅢSB-06 礫属性表	156
表Ⅱ-57	杭列02 属性表	95	表Ⅲ-16	ⅢSB-14 礫属性表	156
表Ⅱ-58	杭列03 属性表	95	表Ⅲ-17	集中区2 焼土属性表	158
表Ⅱ-59	杭跡属性表	95	表Ⅲ-18	ⅢCB-40-53 属性表	158
表Ⅱ-60	ⅢGP-01 属性表	99	表Ⅲ-19	ⅢBB-01 属性表	159
表Ⅱ-61	ⅢGP-01 墓標穴属性表	99	表Ⅲ-20	集中区2 ⅢKP 属性表	159
表Ⅱ-62	ⅢGP-01 出土遺物属性表	99	表Ⅲ-21	集中区2 出土土器属性表	164
表Ⅱ-63	ⅢGP-02 属性表	105	表Ⅲ-22	集中区2 出土遺物属性表	164





## 写真目次

図版 1-1	平成 16 年度調査区近景	352	図版 7-3	ⅢF-40 セクション	358
図版 1-2	平成 17 年度調査区近景	352	図版 7-4	ⅢH-02 周辺鉄鍋出土状態	358
図版 2-1	33 ライン付近沢状地形セクション	353	図版 7-5	45, 46, 48, 49 セクション	358
図版 2-2	沢状地形セクション拡大	353	図版 7-6	27 セクション	358
図版 2-3	S-21 区 基本層	353	図版 7-7	32 セクション	358
図版 2-4	17 年度調査区すき取り	353	図版 7-8	01 セクション	358
図版 2-5	T <sub>2</sub> -T <sub>1</sub> 段丘崖調査状況	353	図版 7-9	64 セクション	358
図版 2-6	ベルトコンベア作業	353	図版 8-1	ⅢH-03 完掘	359
図版 3-1	遺物取り上げ・実測	354	図版 8-2	ⅢF-57 検出	359
図版 3-2	獣骨検出作業	354	図版 8-3	ⅢF-57 セクション	359
図版 3-3	獣骨取り上げ作業	354	図版 8-4	ⅢF-58 検出	359
図版 3-4	焼土古地磁気サンプル採取作業	354	図版 8-5	ⅢF-58 セクション	359
図版 3-5	17 年度町民体験発掘	354	図版 9-1	ⅢF-57, 58、ⅢSB-15 検出状態	360
図版 3-6	カムイノミ(1)	354	図版 9-2	ⅢSB-15 出土状態	360
図版 3-7	カムイノミ(2)	354	図版 9-3	ⅢF-57 小札出土状態	360
図版 3-8	イチヤルパ	354	図版 9-4	10 セクション	360
図版 4-1	ⅢH-01 完掘	355	図版 9-5	57 セクション	360
図版 4-2	ⅢH-01 床面遺物出土状態	355	図版 9-6	ⅢH-04 完掘	360
図版 4-3	ⅢSB-03 出土状態	355	図版 10-1	ⅢF-43 [右], 44 [左] 検出	361
図版 4-4	ⅢF-04 検出	355	図版 10-2	ⅢF-43 上位セクション	361
図版 4-5	ⅢF-04 セクション	355	図版 10-3	ⅢF-44 セクション	361
図版 5-1	ⅢF-05 検出	356	図版 10-4	ⅢF-43 刀子出土状態	361
図版 5-2	ⅢF-05 セクション	356	図版 10-5	03 セクション	361
図版 5-3	01 セクション	356	図版 10-6	07 セクション	361
図版 5-4	02 セクション	356	図版 10-7	09 セクション	361
図版 5-5	03 セクション	356	図版 10-8	12 セクション	361
図版 5-6	04 セクション	356	図版 10-9	13 セクション	361
図版 5-7	05 セクション	356	図版 10-10	40 セクション	361
図版 5-8	07 セクション	356	図版 11-1	ⅢH-05 完掘	362
図版 5-9	08 セクション	356	図版 11-2	ⅢF-66 [奥], 67 [前] 検出	362
図版 6-1	ⅢH-02 柱穴検出状態	357	図版 11-3	ⅢF-66, 67 セクション	362
図版 6-2	ⅢSB-09 出土状態(1)	357	図版 11-4	ⅢSB-17 出土状態	362
図版 6-3	ⅢSB-10 出土状態	357	図版 12-1	ⅢF-66 セクション	363
図版 6-4	ⅢSB-09 出土状態(2)	357	図版 12-2	ⅢF-67 セクション	363
図版 6-5	ⅢH-02 床面遺物出土状態	357	図版 12-3	01 セクション	363
図版 7-1	ⅢF-39 セクション	358	図版 12-4	04 セクション	363
図版 7-2	ⅢF-39 [右], 51 [左] セクション	358	図版 12-5	32 セクション	363

図版 12-6	35 セクション	363	図版 17-4	22 セクション	368
図版 12-7	ⅢH-06 完掘	363	図版 17-5	23 セクション	368
図版 13-1	ⅢF-71 [前], 72 [奥] 検出	364	図版 17-6	24 セクション	368
図版 13-2	ⅢH-06 床面鉤状鉄製品出土状態	364	図版 17-7	建物跡 3 完掘	368
図版 13-3	ⅢF-71 検出	364	図版 17-8	71 セクション	368
図版 13-4	ⅢF-71 セクション	364	図版 17-9	建物跡 4 完掘	368
図版 13-5	ⅢF-72 検出	364	図版 17-10	76 セクション	368
図版 13-6	ⅢF-72 セクション	364	図版 18-1	建物跡 5 完掘	369
図版 13-7	02 セクション	364	図版 18-2	88 セクション	369
図版 13-8	05 セクション	364	図版 18-3	91 完掘	369
図版 13-9	30 セクション	364	図版 18-4	杭列跡完掘	369
図版 13-10	46 セクション	364	図版 18-5	34 セクション	369
図版 14-1	ⅢH-07 完掘	365	図版 18-6	35 セクション	369
図版 14-2	ⅢF-25、ⅢSB-11 [左], 12 [右] 検出状態	365	図版 18-7	36 セクション	369
図版 14-3	ⅢAS-03 検出	365	図版 18-8	37 セクション	369
図版 14-4	ⅢF-25 セクション	365	図版 18-9	38 セクション	369
図版 14-5	ⅢSB-11 出土状態	365	図版 19-1	ⅢGP-01 完掘	370
図版 15-1	ⅢSB-12 出土状態	366	図版 19-2	ⅢGP-01 検出	370
図版 15-2	ⅢH-07、PIT01 遺物出土状態	366	図版 19-3	ⅢGP-01 人骨検出状態	370
図版 15-3	ⅢH-07、PIT01 出土漆塗椀片	366	図版 20-1	ⅢGP-01 中柄出土状態	371
図版 15-4	ⅢH-07、PIT01 完掘	366	図版 20-2	ⅢGP-01 漆塗椀片出土状態	371
図版 15-5	03 セクション	366	図版 20-3	ⅢGP-01 エムシ出土状態	371
図版 15-6	05 セクション	366	図版 20-4	ⅢGP-01 短軸セクション	371
図版 15-7	06 セクション	366	図版 20-5	墓標穴	371
図版 15-8	08 セクション	366	図版 20-6	ⅢGP-01 長軸セクション	371
図版 15-9	10 セクション	366	図版 20-7	ⅢGP-01 人骨取り上げ作業	371
図版 15-10	11 セクション	366	図版 21-1	ⅢGP-02 完掘	372
図版 15-11	12 セクション	366	図版 21-2	ⅢGP-02 刀子、漆塗椀片出土状態	372
図版 15-12	13 セクション	366	図版 21-3	ⅢGP-02 鉄鍋出土状態	372
図版 16-1	ⅢH-01, 建物跡 1, 2 柱穴検出状態	367	図版 21-4	ⅢGP-02 長軸セクション	372
図版 16-2	05 セクション	367	図版 21-5	墓標穴	372
図版 16-3	07 セクション	367	図版 22-1	ⅢGP-02 N 側短軸セクション	373
図版 16-4	15 セクション	367	図版 22-2	ⅢGP-02 S 側短軸セクション	373
図版 16-5	19 セクション	367	図版 22-3	ⅢGP-02 人骨取り上げ作業(1)	373
図版 16-6	21 セクション	367	図版 22-4	ⅢGP-02 人骨取り上げ作業(2)	373
図版 16-7	建物跡 1 完掘	367	図版 22-5	ⅢGP-02 完掘	373
図版 17-1	建物跡 2 完掘	368	図版 23-1	ⅢF-06 検出	374
図版 17-2	04 セクション	368	図版 23-2	ⅢF-06 セクション	374
図版 17-3	08 セクション	368	図版 23-3	ⅢF-07 検出(1)	374
			図版 23-4	ⅢF-07 検出(2)	374

図版 23-5	ⅢF-07 セクション	374	図版 30-4	ⅢBB-03 銅製品出土状態	381
図版 23-6	ⅢF-09 検出	374	図版 30-5	ⅢBB-04 検出	381
図版 23-7	ⅢF-09 セクション	374	図版 30-6	ⅢBB-04 鹿角出土状態	381
図版 23-8	ⅢF-10 検出	374	図版 30-7	ⅢBB-05 シカ下顎出土状態	381
図版 24-1	ⅢF-10 セクション	375	図版 30-8	ⅢBB-05 鹿角出土状態	381
図版 24-2	ⅢF-11 検出(1)	375	図版 31-1	ⅢBB-05 出土状態	382
図版 24-3	ⅢF-11 検出(2)	375	図版 31-2	ⅢBB-05 作業状況	382
図版 24-4	ⅢF-11 セクション	375	図版 31-3	ⅢBB-05 出土銅製品	382
図版 24-5	ⅢF-26 検出	375	図版 31-4	ⅢBB-06 検出	382
図版 24-6	ⅢF-26 鉄鍋出土状態	375	図版 31-5	ⅢBB-06 拡大	382
図版 24-7	ⅢF-31 検出	375	図版 32-1	ⅢBB-09 検出	383
図版 24-8	ⅢF-31 セクション	375	図版 32-2	ⅢBB-09 シカ下顎	383
図版 25-1	ⅢF-33 周辺遺物出土状態	376	図版 32-3	ⅢBB-09 シカ肩甲骨	383
図版 25-2	ⅢF-33 検出	376	図版 32-4	ⅢBB-09 シカ上腕骨	383
図版 25-3	ⅢF-33 セクション	376	図版 32-5	ⅢBB-10 検出	383
図版 25-4	ⅢF-35 検出	376	図版 32-6	ⅢBB-10 鹿角	383
図版 25-5	ⅢF-35 セクション	376	図版 32-7	ⅢBB-10 シカ上顎	383
図版 26-1	ⅢF-41 検出	377	図版 32-8	ⅢBB-10 シカ下顎	383
図版 26-2	ⅢF-41 セクション	377	図版 33-1	ⅢBB-10 上顎臼歯列	384
図版 26-3	ⅢF-45 検出	377	図版 33-2	ⅢBB-11 下顎臼歯列	384
図版 26-4	ⅢF-45 セクション	377	図版 33-3	ⅢBB-11 シカ下顎後臼歯列	384
図版 26-5	ⅢF-63 検出	377	図版 33-4	ⅢBB-13 距骨(44), 踵骨?(45), 距骨?(46)	384
図版 26-6	ⅢF-63 セクション	377	図版 33-5	ⅢBB-14 検出(1)	384
図版 26-7	ⅢF-86 検出	377	図版 34-1	ⅢBB-14 検出(2)	385
図版 26-8	ⅢF-86 セクション	377	図版 34-2	ⅢBB-14 拡大	385
図版 27-1	ⅢAS-01 検出	378	図版 34-3	ⅢBB-14 検出(3)	385
図版 27-2	ⅢAS-01 シカ四肢骨出土状態	378	図版 34-4	ⅢBB-14 完掘	385
図版 27-3	ⅢAS-01 梳土ブロック及び鉄製品 出土状態	378	図版 34-5	I-28 区 ⅢbU 鹿角	385
図版 27-4	ⅢAS-01 穂摘具(ピン)出土状態	378	図版 34-6	O-27 区 ⅢbU シカ上顎歯列	385
図版 27-5	ⅢAS-01 刀子出土状態	378	図版 35-1	ⅢSB-04 検出	386
図版 28-1	ⅢAS-01 南北セクション	379	図版 35-2	ⅢIPB-01 検出(1)	386
図版 28-2	ⅢAS-02 検出	379	図版 35-3	ⅢIPB-01 検出(2)	386
図版 28-3	ⅢAS-02 セクション	379	図版 35-4	ⅢIPB-01 検出(3)	386
図版 28-4	ⅢAS-04 セクション	379	図版 36-1	ⅢX-01 完掘	387
図版 29-1	ⅢBB-02 検出	380	図版 36-2	ⅢX-01 検出	387
図版 29-2	ⅢBB-03 検出	380	図版 36-3	ⅢX-01 周溝東西セクション	387
図版 30-1	ⅢBB-03 拡大	381	図版 36-4	ⅢX-01 東側内郭セクション	387
図版 30-2	ⅢBB-03 ヒグマ臼歯検出	381	図版 36-5	ⅢX-01 内郭整地部セクション	387
図版 30-3	ⅢBB-03 シカ下顎及び四肢骨	381	図版 37-1	ⅢX-01 周溝南北セクション	388

図版 37-2	ⅢX-01 周溝完掘(1) .....	388	図版 43-1	ⅢP-18 完掘 .....	394
図版 37-3	ⅢX-01 内郭周溝検出 .....	388	図版 43-2	ⅢP-18 セクション .....	394
図版 37-4	ⅢX-01 周溝出土礫 .....	388	図版 43-3	ⅢP-20 完掘 .....	394
図版 37-5	ⅢX-01 周溝完掘(2) .....	388	図版 43-4	ⅢP-20・ⅢF-126 セクション .....	394
図版 38-1	ⅢX-01 内郭周溝東側セクション .....	389	図版 43-5	ⅢP-21 完掘 .....	394
図版 38-2	ⅢX-01 内郭周溝西側セクション .....	389	図版 43-6	ⅢP-21 セクション .....	394
図版 38-3	ⅢF-48 検出 .....	389	図版 43-7	ⅢP-22 完掘 .....	394
図版 38-4	ⅢF-48 セクション .....	389	図版 43-8	ⅢP-22 セクション .....	394
図版 38-5	ⅢX-02 完掘(1) .....	389	図版 44-1	ⅢSB-24 検出(1) .....	395
図版 39-1	ⅢX-02 南側セクション .....	390	図版 44-2	ⅢSB-24 検出(2) .....	395
図版 39-2	ⅢX-02 北側セクション .....	390	図版 44-3	ⅢP-48(ⅢSB-24)セクション .....	395
図版 39-3	ⅢX-02 西側セクション .....	390	図版 44-4	ⅢP-48 坑底面出土遺物 .....	395
図版 39-4	ⅢX-02 東側セクション .....	390	図版 44-5	ⅢP-48 完掘 .....	395
図版 39-5	ⅢF-56 検出 .....	390	図版 44-6	ⅢF-95 検出 .....	395
図版 39-6	ⅢF-56 セクション .....	390	図版 44-7	ⅢP-49 完掘 .....	395
図版 39-7	ⅢX-02 完掘(2) .....	390	図版 44-8	ⅢP-49・ⅢF-95 セクション .....	395
図版 40-1	ⅢP-07 (ⅢF-119) セクション .....	391	図版 45-1	ⅢPB-02, 03・ⅢSB-02, 06 出土状態 .....	396
図版 40-2	ⅢP-07 完掘 .....	391	図版 45-2	ⅢPB-03 出土状態 .....	396
図版 40-3	ⅢSB-22 検出(1) .....	391	図版 45-3	ⅢSB-06 出土状態 .....	396
図版 40-4	ⅢSB-22 検出(2) .....	391	図版 45-4	ⅢPB-02 出土状態 .....	396
図版 40-5	ⅢP-08・ⅢSB-22 セクション .....	391	図版 45-5	銅鈍片出土状態 .....	396
図版 40-6	ⅢP-08 完掘 .....	391	図版 46-1	ⅢSB-14, ⅢF-50 出土状態 .....	397
図版 40-7	ⅢP-09 完掘 .....	391	図版 46-2	ⅢF-20 検出 .....	397
図版 40-8	ⅢP-09 セクション .....	391	図版 46-3	ⅢF-20 セクション .....	397
図版 41-1	ⅢP-10 完掘 .....	392	図版 46-4	ⅢF-50 検出 .....	397
図版 41-2	ⅢP-10 セクション .....	392	図版 46-5	ⅢF-50 炭化キビ塊出土状態 .....	397
図版 41-3	ⅢP-11 完掘 .....	392	図版 47-1	ⅢSB-14 検出 .....	398
図版 41-4	ⅢP-11, F セクション .....	392	図版 47-2	板状土製品出土状態 .....	398
図版 41-5	ⅢP-11 東西セクション .....	392	図版 47-3	ⅢBB-01, ⅢF-14 検出 .....	398
図版 41-6	ⅢP-12 完掘 .....	392	図版 47-4	ⅢSB-05 出土状態 .....	398
図版 41-7	ⅢP-12 セクション .....	392	図版 47-5	ⅢBB-10 検出 .....	398
図版 42-1	ⅢP-14 完掘 .....	393	図版 47-6	ⅢF-14 検出 .....	398
図版 42-2	ⅢP-14 セクション .....	393	図版 47-7	ⅢF-14 セクション .....	398
図版 42-3	ⅢP-16 完掘 .....	393	図版 48-1	ⅢF-15 検出 .....	399
図版 42-4	ⅢP-16 セクション .....	393	図版 48-2	ⅢF-15 セクション .....	399
図版 42-5	ⅢP-17 完掘 .....	393	図版 48-3	ⅢCB-41 クルミ出土状態 .....	399
図版 42-6	ⅢP-17 セクション .....	393	図版 48-4	銅鈍出土状態 .....	399
図版 42-7	ⅢP-18(左), 20(右), ⅢF-126(20上) .....	393	図版 48-5	ⅢCB-53 炭化キビ塊出土状態 .....	399
図版 42-8	ⅢF-126 検出 .....	393	図版 49-1	ⅢSB-13 出土状態 .....	400
			図版 49-2	ⅢP-03, ⅢF-47, 76 検出 .....	400

図版 49-3	ⅢF-47, ⅢP03 セクション	400	図版 56-1	ⅢPB-15, ⅢSB-21, ⅢP-15, ⅢF-101, 102 検出	407
図版 49-4	ⅢP-03 セクション	400	図版 56-2	ⅢP-15 セクション	407
図版 49-5	ⅢP-03 完掘	400	図版 56-3	ⅢF-101 [左], 102 [右]	407
図版 50-1	ⅢF-76 セクション	401	図版 56-4	ⅢF-101 セクション	407
図版 50-2	ⅢP-04 完掘	401	図版 56-5	ⅢF-102 セクション	407
図版 50-3	ⅢP-04 セクション	401	図版 57-1	ⅢF-08, ⅢPB-01	408
図版 50-4	ⅢP-04 覆土出土カバノキ属樹皮	401	図版 57-2	ⅢPB-01 検出 [1 段目]	408
図版 50-5	ⅢP-05 完掘	401	図版 57-3	ⅢPB-01 検出 [2 段目]	408
図版 50-6	ⅢP-05, ⅢSB-13①	401	図版 57-4	ⅢF-08 検出	408
図版 50-7	ⅢP-05 坑底面付近セクション	401	図版 57-5	ⅢF-08 セクション	408
図版 50-8	ⅢF-82 セクション	401	図版 58-1	ⅢF-12 検出	409
図版 51-1	ⅢP-06 完掘	402	図版 58-2	ⅢF-12 セクション	409
図版 51-2	ⅢP-06 セクション	402	図版 58-3	ⅢF-13 [下], 16 [上] 検出	409
図版 51-3	ⅢF-82 セクション	402	図版 58-4	ⅢF-13 セクション	409
図版 51-4	ⅢP-13 上位遺物出土状態	402	図版 58-5	ⅢF-16 セクション	409
図版 51-5	ⅢP-13 完掘	402	図版 58-6	ⅢF-17 検出	409
図版 51-6	ⅢP-13 セクション	402	図版 58-7	ⅢF-15 検出	409
図版 51-7	ⅢF-80 検出	402	図版 58-8	ⅢF-15 セクション	409
図版 51-8	ⅢF-80 セクション	402	図版 59-1	ⅢF-18 検出 [右はⅢF-13, 16]	410
図版 52-1	巻貝出土状態	403	図版 59-2	ⅢF-18 セクション	410
図版 52-2	北大式土器出土状態	403	図版 59-3	ⅢF-19 検出	410
図版 52-3	ⅢP-03, 04, 05, 06, 13 完掘	403	図版 59-4	ⅢF-19 セクション	410
図版 53-1	ⅢSB-16, 20, ⅢF-62, 65, 70, 73 検出	404	図版 59-5	ⅢF-28, 32, 97, 116, 117, 119, 122, 123 検出	410
図版 53-2	ⅢSB-16 検出	404	図版 60-1	ⅢF-28 検出	411
図版 53-3	ⅢSB-20 検出	404	図版 60-2	ⅢF-28 セクション	411
図版 53-4	ⅢF-62 検出・セクション	404	図版 60-3	ⅢF-32 検出	411
図版 53-5	ⅢF-65 検出	404	図版 60-4	ⅢF-32 セクション	411
図版 54-1	ⅢF-65 セクション	405	図版 60-5	ⅢF-97 検出	411
図版 54-2	ⅢF-70 セクション	405	図版 60-6	ⅢF-97 セクション	411
図版 54-3	ⅢF-73 検出	405	図版 60-7	ⅢF-116 検出	411
図版 54-4	ⅢF-73 セクション	405	図版 60-8	ⅢF-117 検出	411
図版 54-5	ⅢPB-09 出土状態	405	図版 61-1	ⅢF-117 セクション	412
図版 54-6	ⅢPB-07 出土状態	405	図版 61-2	ⅢF-118 検出	412
図版 54-7	ⅢPB-13 出土状態	405	図版 61-3	ⅢF-118 セクション	412
図版 54-8	ⅢPB-16 出土状態	405	図版 61-4	ⅢF-119 検出	412
図版 55-1	ⅢPB-10, ⅢSB-18, ⅢF-68 検出	406	図版 61-5	ⅢF-122 [右], 123 [左] 検出	412
図版 55-2	ⅢF-68 検出	406	図版 61-6	ⅢF-122 [右], 123 [左] セクション	412
図版 55-3	ⅢF-68 セクション	406			
図版 55-4	ⅢSB-21, ⅢP-15, ⅢF-101, 102 検出	406			
図版 55-5	ⅢPB-15 検出	406			

図版 61-7	ⅢF-23 検出	412	図版 66-7	ⅢF-99 セクション	417
図版 61-8	ⅢF-23 セクション	412	図版 66-8	ⅢF-100 検出	417
図版 62-1	ⅢF-30 検出	413	図版 67-1	ⅢF-100 セクション	418
図版 62-2	ⅢF-30 セクション	413	図版 67-2	ⅢF-103 検出	418
図版 62-3	ⅢF-38 セクション	413	図版 67-3	ⅢF-103 セクション	418
図版 62-4	ⅢF-49 セクション	413	図版 67-4	ⅢF104 [右], B [左]	418
図版 62-5	ⅢF-42 検出	413	図版 67-5	ⅢF-104 セクション	418
図版 62-6	ⅢF-42 セクション	413	図版 67-6	ⅢF-105 検出	418
図版 62-7	ⅢF-53 セクション	413	図版 67-7	ⅢF-105 セクション	418
図版 62-8	ⅢF-54 セクション	413	図版 67-8	ⅢF-106 検出	418
図版 63-1	ⅢF-55 検出	414	図版 68-1	ⅢF-106 セクション	419
図版 63-2	ⅢF-55 セクション	414	図版 68-2	ⅢF-107 検出	419
図版 63-3	ⅢF-60 検出	414	図版 68-3	ⅢF-107 セクション	419
図版 63-4	ⅢF-60 セクション	414	図版 68-4	ⅢF-108 セクション	419
図版 63-5	ⅢF-59 検出	414	図版 68-5	ⅢF-109 検出	419
図版 63-6	ⅢF-61 と周辺の遺物出土状態	414	図版 68-6	ⅢF-109 セクション	419
図版 63-7	ⅢF-61 検出	414	図版 68-7	ⅢF-110 検出	419
図版 63-8	ⅢF-61 セクション	414	図版 68-8	ⅢF-110 セクション	419
図版 64-1	ⅢF-69 検出及びセクション	415	図版 69-1	ⅢF-111 [右], 112 [左]	420
図版 64-2	ⅢF-70 セクション	415	図版 69-2	ⅢF-111 セクション	420
図版 64-3	ⅢF-74 検出	415	図版 69-3	ⅢF-112 セクション	420
図版 64-4	ⅢF-74 セクション	415	図版 69-4	ⅢF-113 検出	420
図版 64-5	ⅢF-77 [左], 78 [右] 検出	415	図版 69-5	ⅢF-113 セクション	420
図版 64-6	ⅢF-77 セクション	415	図版 69-6	ⅢF-114 検出	420
図版 64-7	ⅢF-78 セクション	415	図版 69-7	ⅢF-114 セクション	420
図版 64-8	ⅢF-79 検出	415	図版 69-8	ⅢF-115 検出	420
図版 65-1	ⅢF-79 セクション	416	図版 70-1	ⅢF-115 セクション	421
図版 65-2	ⅢF-83 セクション	416	図版 70-2	ⅢF-118 検出	421
図版 65-3	ⅢF-85 セクション	416	図版 70-3	ⅢF-118 セクション	421
図版 65-4	ⅢF-87 検出	416	図版 70-4	ⅢF-120 検出	421
図版 65-5	ⅢF-87 セクション	416	図版 70-5	ⅢF-121 検出	421
図版 65-6	ⅢF-88 検出	416	図版 70-6	ⅢF-121 セクション	421
図版 65-7	ⅢF-88 セクション	416	図版 70-7	ⅢF-124 検出	421
図版 65-8	ⅢF-89 検出	416	図版 70-8	ⅢF-124 セクション	421
図版 66-1	ⅢF-89 セクション	417	図版 71-1	ⅢF-125 検出, セクション	422
図版 66-2	ⅢF-94 検出	417	図版 71-2	ⅢF-127 検出	422
図版 66-3	ⅢF-94 セクション	417	図版 71-3	ⅢF-128 検出	422
図版 66-4	ⅢF-96 検出	417	図版 71-4	ⅢF-128 セクション	422
図版 66-5	ⅢF-96 セクション	417	図版 71-5	ⅢF-129 検出	422
図版 66-6	ⅢF-99 検出	417	図版 71-6	ⅢF-130 検出	422

図版 71-7	ⅢF-130 セクション	422	図版 77-4	R-35 区 ニシタツ ⅢbU	428
図版 71-8	ⅢF-131 検出	422	図版 77-5	S-19 区 罫	428
図版 72-1	ⅢF-132 [中], 133 [左], 135 [右]		図版 77-6	Q-14 区 刀子 ⅢbU	428
	ⅢCB-76 検出	423	図版 77-7	J-26 区 罫 ⅢbL	428
図版 72-2	ⅢF-131 セクション	423	図版 77-8	R-18 区 鉄斧 ⅢbL	428
図版 72-3	ⅢF-132 セクション	423	図版 78	1号平地式住居址出土火打石 ・金属製品及び礫集中出土完形礫	429
図版 72-4	ⅢF-133 セクション	423	図版 79	2号平地式住居址出土礫石器	430
図版 72-5	ⅢF-133 鉄製品出土状態	423	図版 80	2号平地式住居址出土礫石器 ・礫・金属製品	431
図版 73-1	ⅢF-135 セクション	424	図版 81	2号平地式住居址礫集中出土完形礫	432
図版 73-2	ⅢF-134 検出	424	図版 82	3号平地式住居址出土礫石器・金属 製品・骨角器及び礫集中出土完形礫	433
図版 73-3	ⅢF-134 セクション	424	図版 83	4号平地式住居址出土礫石器・ 金属製品及び礫集中出土完形礫	434
図版 73-4	ⅢF-136 検出	424	図版 84-1	5号平地式住居址出土礫石器 及び礫集中出土完形礫	435
図版 73-5	ⅢF-136 セクション	424	図版 84-2	6号平地式住居址出土金属製品	435
図版 73-6	ⅢF-137 検出	424	図版 85	7号平地式住居址出土礫石器 ・金属製品・ガラス玉	436
図版 73-7	ⅢF-137 セクション	424	図版 86	7号平地式住居址 礫集中出土完形礫	437
図版 73-8	ⅢF-138 検出	424	図版 87-1	1号土壇墓副葬品	438
図版 74-1	ⅢF-138 セクション	425	図版 87-2	2号土壇墓副葬品	438
図版 74-2	ⅢF-139 検出	425	図版 88-1	集中区 4 出土礫石器	439
図版 74-3	ⅢF-139 セクション	425	図版 88-2	集中区 14 出土礫石器・金属製品	439
図版 74-4	ⅢF-140 検出	425	図版 88-3	集中区 19 出土礫石器・金属製品	439
図版 74-5	ⅢF-140 セクション	425	図版 89-1	アイヌ文化期 焼土出土礫石器 ・金属製品・骨角器	440
図版 74-6	ⅢF-141 検出	425	図版 89-2	礫集中 4 出土礫石器及び完形礫	440
図版 74-7	ⅢF-141 セクション	425	図版 90	灰集中 01, 02, 05 出土礫石器・金属製品 ・ガラス玉・骨角器・徳筒具	441
図版 74-8	ⅢF-142 検出	425	図版 91-1	獣骨集中 3, 5, 6, 10 出土礫石器 ・金属製品・角器・動物遺存体	442
図版 75-1	ⅢF-142 セクション	426	図版 91-2	鉄器集中 1 出土金属製品	442
図版 75-2	ⅢF-143 検出	426	図版 92	アイヌ文化期包含層出土火打石・ 礫石器・金属製品・ガラス玉・骨角器	443
図版 75-3	ⅢF-143 セクション	426	図版 93-1	円形周溝(ⅢX-01)出土金属製品 ・貝化石(赤色顔料塗布)	444
図版 75-4	Ⅲ層調査状況	426	図版 93-2	竪穴様遺構(ⅢX-02)出土土器	
図版 75-5	沢地形作業状況	426			
図版 76-1	ⅢPB-06 出土状態	427			
図版 76-2	ⅢPB-11 出土状態	427			
図版 76-3	ⅢPB-12 出土状態	427			
図版 76-4	ⅢPB-14 出土状態	427			
図版 76-5	ⅢPB-04 出土状態	427			
図版 76-6	ⅢPB-08 出土状態	427			
図版 76-7	ⅢSB-19 出土状態(1)	427			
図版 76-8	ⅢSB-19 出土状態(2)	427			
図版 77-1	H-27 区 小札 ⅢbM	428			
図版 77-2	R-18 区 ニンカリ ⅢbU	428			
図版 77-3	O-30 区 刀子 ⅢbU	428			

	・礫石器 …………… 444	図版 108-1	集中区 12 出土土器 …………… 459
図版 94	集中区 1 出土土器 …………… 445	図版 108-2	集中区 13 出土土器・礫石器・ 金属製品・獣骨 …………… 459
図版 95	集中区 1 出土土製品・黒曜石・ 礫石器・金属製品・炭化キビ塊 …… 446	図版 109	集中区 13 礫集中出土完形礫 …… 460
図版 96	集中区 1 礫集中出土完形礫(1) …… 447	図版 110-1	集中区 15 出土礫石器 …………… 461
図版 97	集中区 1 礫集中出土完形礫(2) …… 448	図版 110-2	集中区 16 出土土器・土製品 …… 461
図版 98	集中区 2 出土土器・黒曜石・ 礫石器・金属製品 …………… 449	図版 111-1	集中区 16 出土礫石器・金属製品 …… 462
図版 99	集中区 2 出土金属製品 ・炭化キビ塊・シカ焼骨 …………… 450	図版 111-2	集中区 17 出土土器・礫石器 及び礫集中出土完形礫 …………… 462
図版 100	集中区 2 礫集中出土完形礫 …… 451	図版 112	集中区 18 出土土器・火打石 ・礫石器・金属製品 …………… 463
図版 101	集中区 3 出土土器・礫石器 …… 452	図版 113-1	縄文文化期 土坑・焼土出土土器・ 礫石器・骨角器 …………… 464
図版 102	集中区 3 出土礫石器 …………… 453	図版 113-2	縄文文化期 土器集中出土土器 …… 464
図版 103	集中区 3 礫集中出土完形礫 ・巻貝・樹皮 …………… 454	図版 114	縄文文化期 包含層出土土器 …… 465
図版 104-1	集中区 6 出土土器・礫石器 ・金属製品 …………… 455	図版 115-1	縄文文化期 包含層出土礫石器 ・金属製品 …………… 466
図版 104-2	集中区 7 出土土器 …………… 455	図版 115-2	縄文時代・縄文時代晩期 土器集中及び包含層出土土器 …… 466
図版 105	集中区 8 出土土器・礫石器・ 金属製品及び礫集中出土完形礫 …… 456		
図版 106	集中区 9 出土土器・礫石器・ 金属製品及び礫集中出土完形礫 …… 457		
図版 107	集中区 10 出土土器・礫石器 及び礫集中出土完形礫 …………… 458		



## 第1章 調査の概要

### 第1節 遺跡の位置

#### 1. 厚真町の概要

##### A 地理的環境

厚真町は、石狩低地帯南部の東縁、北海道胆振支庁の東部に位置し、夕張山地南部から太平洋に注ぐ二級河川厚真川水系に水田地帯が広がる、人口 5,085 人の農業の町である。町域の総面積は 404.56km<sup>2</sup>で、流路 52.3km の二級河川厚真川流域に広がり南北 32.5km、東西 17.3km と細長く、南部は約 6.5km にわたって太平洋に面し、勇払平野の東端に位置している。全国においても、源流部から河口までの 1 河川流域で行政区域を有する自治体は数少ない。北部は、夕張市や由仁町と接し、夕張山地南端域の標高 200～600m の山地が続き、総面積の約 70% を山林が占めている。東には、夕張山地から続く低い山地を挟んでむかわ町と接し、北西には標高 100m 前後の山地性丘陵を挟んで安平町、西は厚真町域を含む苫小牧東部工業地帯（以下、苫東）内で苫小牧市と接している。厚真町の語源は 3 説ほどあるが、最も有力な説として「アットママ」(at-to-mam「向こうの湿地帯」)で、南部に広がる湿地帯に付けられたものから転訛したといわれている(厚真村 1956)。

町内は、大きく 4 つの地区に分かれ、厚真川沿いに下流域の浜厚真・上厚真地区、中流域の厚真市街地周辺、中流から上流域の幌内地区で、むかわ町と接し、入鹿別川流域の鹿沼地区がある。ここでは厚真川流域を中心に概略を述べる。

南部は砂浜が続く、明治期より地引網での鱈漁が盛んであったが、現在では、苫小牧沿岸にかけてホッキ貝(ウバガイ)の全国一の漁場となっている。かつては標高 10m 前後の砂丘列が発達し、背後には勇払原野の湿地帯が広がっていたが、現在は苫東地区の一部で、苫小牧東港や道内最大の火力発電所、石油備蓄タンク群等の工業用地となっている。また国道や高規格道路、鉄道があり、石狩低地帯の札幌圏から日高方面への主要幹線路ともなっている。地形的には、苫東地区の静川・源武台地と同じ様相を示し、樹枝状に開折された標高 10～20m 前後の支筋火山・樽前山の火山灰で構成される低平な台地と湿地、湖沼群が見られる。特に厚真川左岸から入鹿別川右岸にかけての厚和地区は静川台地と全く同じ地形・地質様相を呈している(仮称厚和台地)。中部には厚真町の中心市街があり、官公署や住宅地が集中し、鶴川、平取・穂別、早来、浜厚真方面への道道交差部に形成されている。かつては、町内の石油資源や林産資源、農産物の集散地として発展していた。地形的には厚真川本流と比較的大きな支流である知決辺川、ウクル川などの合流点に形成された平野部に位置し、夕張山地系と馬追山地南端部の山地性丘陵に挟まれた地域となる。中部以北では、厚真川は顔美宇川との合流点付近において流路方向を変え、左岸には河岸段丘が発達する。北部の幌内地区は、厚真川流域沿いの沖積地の最奥部で、本流とシュルク川、日高幌内川の 3 河川の合流点でもある。この地区は上流域の山間部より産出される豊富な林産資源の集積地として発展し、昭和初期から昭和 24 年まで早来駅とを結ぶガソリン機関車軌道が敷設されていた。これより上流域は、新第三紀の堆積岩を基盤とする山地が続く。標高 400m 以上の頂部は少ないが、小河川の浸食により比較的急峻な山稜を呈している。厚真川は夕張市、由仁町との 1 市 2 町の境界線付近、標高 500m 付近の夕張山地南域に源流部がある。

## B 歴史的環境

### (1) 先史時代

厚真町内には現在 106ヶ所の埋蔵文化財包蔵地が確認されている(図 I-1)。時期は昨年度報告した後期旧石器時代から近世アイヌ文化期にいたるまでである。苫東地区において、厚真町と隣接する苫小牧市静川 5 遺跡では蘭越型細石刃核が出土している(大泉他 1998)ことから、今後も町内全域にわたって発見される可能性がある。遺跡の分布傾向として、開発行為の多寡に左右され、南部の苫東地区や厚真川から入鹿別川にかけての仮称厚和台地と夕張山地から続く丘陵縁辺部、厚真川中流域の支流沿い、北部の高丘地区および幌内地区にまとまる傾向がある。立地は、南部において、湿地と隣接する台地縁辺部や湧水地付近、中部では厚真川沿いや小河川との合流点付近の河岸段丘縁辺部に多い。北部の山間部では、頗美宇川流域の高丘地区や厚幌ダム水没地域内多くに分布する。これらは安平町安平地区や夕張市紅葉山地区、むかわ町徳別・稲里地区に抜ける山越えのルート上の遺跡と思われる。

時期的には、縄文時代の最も古いもので、豊沢 4 遺跡の試掘調査で早期前半の物見台系貝殻土器片 1 点が出土している。やや時期が下って、浜厚真 3 遺跡で東釧路Ⅱ式土器がややまとまって出土しており(鎌田・中山他 2003)、これ以降、縄文時代後期初頭までの遺跡が段階的に増加し、特に中期末葉から後期初頭の時期の遺跡数が多い。しかし、後期中葉から後葉にかけての遺跡数が激減し、晩期前葉以降再び増加する傾向にある。統縄文時代からアイヌ文化期にかけての遺跡数も少ない。この様な各時期における遺跡数の偏りは苫小牧市の傾向と一致している。

町内における埋蔵文化財の研究史は、最初の記録として、大正 5 年、現在の朝日遺跡と思われる地点から出土した縄文土器を、教材として学校に保管する許可書が発行されたことである。遺物の多くは縄文晩期と思われ、数点の土偶片も出土している(厚真村郷土研究会 1956、亀井 1956)。その後、元厚真村長 亀井喜久太郎氏の熱心な働きかけにより昭和 27 年に八幡一郎氏、30 年に児玉作左衛門氏、大場利夫氏等が来村し、町内の遺跡・遺物を実見している。また、亀井氏は昭和 28 年に厚真村郷土研究会を発足させ、地域の文化財保護・研究・活用に大きな功績を残している。

町内での組織的な発掘調査は、昭和 37 年に厚真村郷土研究会によって朝日遺跡と共和遺跡で行われている。詳細は不明だが、コンテナにして 5 箱分の遺物が厚真町教育委員会に保管されている。その後、昭和 48 年から苫小牧市埋蔵文化財調査センターによる苫東地区の試掘・発掘調査が開始され、昭和 59 年までの 12 年間で厚真町域にかかるもので新規発掘 14 遺跡、調査終了 9 遺跡があり、縄文時代早期～擦文文化期までの資料が得られている。昭和 51 年調査の厚真 1 遺跡では、この地域では初めての T ピットが確認され、縄文時代中期中葉の「厚真 1 式土器」(赤石 1999)の標識遺跡でもある。また、共和遺跡では苫東地区内で唯一の擦文文化期の壑穴式住居跡も調査されている(佐藤・宮夫他 1987)。近年は、開発に伴う試掘調査や工事立会增加し、豊川 1 遺跡(田才・長橋 2001)、鯉沼 2 遺跡(西脇・宗像 2001)、鯉沼 3 遺跡(藤原・奈良 2005、藤原・乾 2006)があり、高規格道路日高自動車道の建設に伴う(財)北海道埋蔵文化財センターによる浜厚真 3 遺跡の調査では、187 基の T ピットが調査されている(鎌田・中山他 2003)。

### (2) 歴史時代

厚真町に係わる最初の記述は、1692(元禄 5)年に書かれた『続々類従本蝦夷記』でシャクシャインの戦

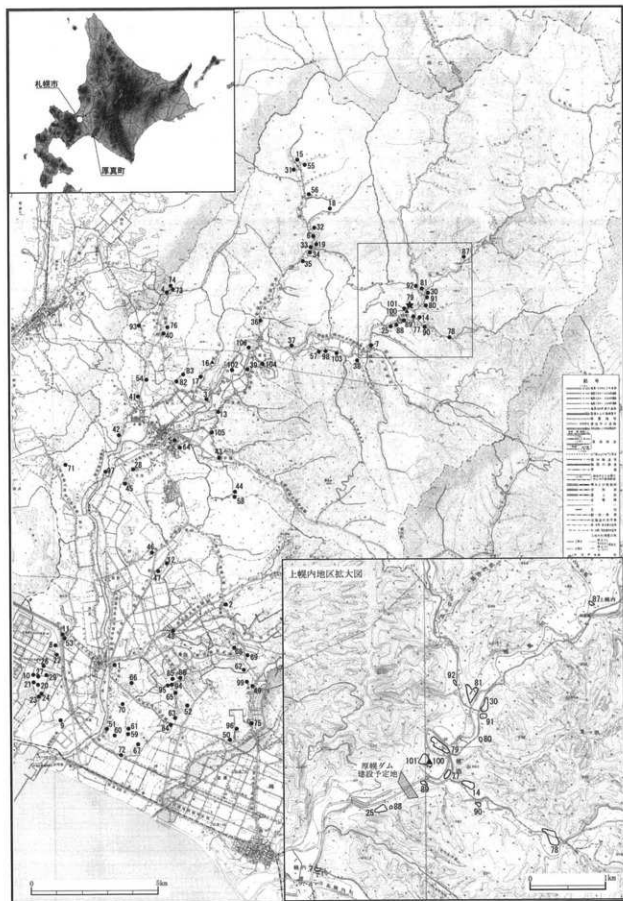


図 I-1 町内遺跡分布図

表 I-1 厚真町内遺跡一覧表(1)

登録番号	種別	名称	時代	文献等
1	遺物包含地	上厚真遺跡	縄文中～後期・統縄文・擦文	1
2	遺物包含地	軽舞遺跡	縄文中期・統縄文	1
3	遺物包含地	朝日遺跡	縄文後～晩期・統縄文・擦文	1,2
4	遺物包含地	幌里1遺跡	縄文中期・統縄文	1
5	遺物包含地	新町遺跡	縄文中期・統縄文・擦文・アイヌ	1
6	遺物包含地	高丘1遺跡	縄文中期・統縄文	
7	遺物包含地	幌内1遺跡	縄文中期・統縄文	
8	遺物包含地	共和遺跡	縄文晩期・擦文	4
9	遺物包含地	浜厚真遺跡	縄文?	
10	遺物包含地	厚真10遺跡	縄文中・晩期	3
11	遺物包含地	厚真11遺跡	縄文晩期	
12	遺物包含地	豊沢1遺跡	統縄文	
13	遺物包含地	東和遺跡	統縄文	
14	集落跡	オニキシベ1遺跡(旧幌内2遺跡)	縄文中～後期・アイヌ?	1
15	遺物包含地	高丘3遺跡	縄文中期	
16	チャシ跡	桜丘チャシ跡	アイヌ	
17	遺物包含地	桜丘1遺跡	縄文晩期	
18	遺物包含地	高丘2遺跡	縄文?	
19	遺物包含地	高丘10遺跡	縄文?	
20	遺物包含地	厚真1遺跡	縄文中期	3
21	遺物包含地	厚真2遺跡	縄文中期?	3
22	遺物包含地	厚真3遺跡	縄文早・中～晩期・統縄文	5
23	遺物包含地	厚真4遺跡	縄文	
24	遺物包含地	厚真5遺跡	縄文前～晩期・統縄文・擦文	8
25	集落跡	厚幌1遺跡	縄文早～後期・アイヌ	9
26	遺物包含地	厚真7遺跡	縄文早・中～晩期・統縄文・擦文	4
27	遺物包含地	厚真8遺跡	縄文中～晩期	3
28	遺物包含地	美里2遺跡	縄文早・中期・アイヌ?	
29	遺物包含地	厚真12遺跡	縄文中・晩期・擦文	5
30	遺物包含地	上幌内1遺跡(旧幌内3遺跡)	縄文中期	
31	遺物包含地	高丘4遺跡	縄文	
32	遺物包含地	高丘5遺跡	縄文?	
33	遺物包含地	高丘6遺跡	縄文?	
34	遺物包含地	高丘7遺跡	縄文?	
35	遺物包含地	高丘8遺跡	縄文?	
36	遺物包含地	高丘9遺跡	統縄文	
37	遺物包含地	富里1遺跡	縄文中～後期	
38	遺物包含地	幌内4遺跡	縄文中期?	
39	遺物包含地	チコマナイ遺跡	縄文?	
40	遺物包含地	幌里2遺跡	縄文中期	
41	遺物包含地	本郷1遺跡	縄文中・晩期	
42	遺物包含地	本郷2遺跡	縄文後期	
43	遺物包含地	宇隆1遺跡	縄文・擦文	
44	遺物包含地	宇隆2遺跡	統縄文	
45	遺物包含地	美里1遺跡	縄文	
46	遺物包含地	豊沢2遺跡	擦文	
47	遺物包含地	豊沢3遺跡	統縄文	
48	遺物包含地	鯉沼1遺跡(文献1上周文遺跡か?)	縄文	
49	遺物包含地	鹿沼2遺跡	縄文中期	10
50	遺物包含地	鹿沼1遺跡	縄文	10
51	遺物包含地	厚和1遺跡	縄文中期・アイヌ	
52	遺物包含地	鹿沼3遺跡	縄文中・晩期	
53	遺物包含地	厚真13遺跡	縄文早～中・晩期・統縄文・擦文	6
54	遺物包含地	本郷3遺跡	縄文?	
55	遺物包含地	高丘11遺跡	縄文晩期	
56	遺物包含地	高丘12遺跡	縄文	
57	墳墓	幌内5遺跡	縄文前期・アイヌ	
58	遺物包含地	豊沢4遺跡	縄文早・中～後期	
59	遺物包含地	厚和2遺跡	縄文中期	
60	遺物包含地	厚和3遺跡	縄文後期	

表 I-2 厚真町内遺跡一覧表(2)

登録番号	種別	名称	時代	文献等
61	遺物包含地	厚和4遺跡	縄文中期	
62	遺物包含地	鹿沼4遺跡	縄文	
63	遺物包含地	厚和5遺跡	縄文	
64	遺物包含地	新町2遺跡	縄文中期	
65	遺物包含地	鹿沼5遺跡	縄文後期	
66	遺物包含地	厚和6遺跡	縄文前期	
67	遺物包含地	浜厚真2遺跡	縄文早期	
68	溝穴遺構	鯉沼2遺跡	縄文中期	11
69	遺物包含地	豊丘遺跡	縄文中期	
70	集落跡	厚和7遺跡	縄文後期	
71	集落跡	豊川1遺跡	縄文前・後～晩期	12
72	遺物包含地	浜厚真3遺跡	縄文早・後期	13
73	遺物包含地	ニタツポロ沢遺跡	縄文後・晩期	
74	遺物包含地	幌里神社遺跡	縄文早・後期	
75	溝穴遺構	入鹿別沼遺跡	縄文中期?	
76	溝穴遺構	幌里3遺跡	縄文	
77	遺物包含地	オニキシベ2遺跡	縄文中～後期・続縄文・檜文	
78	遺物包含地	オニキシベ3遺跡	縄文後期	
79	遺物包含地	上幌内モイ遺跡	田石器・縄文早・中～後期・続縄文・檜文・アイヌ	14,17
80	遺物包含地	一里沢遺跡	縄文前～中期・アイヌ	
81	集落跡	シヨロマ1遺跡	縄文前・後期	
82	遺物包含地	東ニタツポロ1遺跡	縄文中・晩期	
83	遺物包含地	東ニタツポロ2遺跡	縄文中・晩期	
84	遺物包含地	浜厚真4遺跡	縄文中期	
85	溝穴遺構	鯉沼3遺跡	縄文前～後期	15,16
86	溝穴遺構	鯉沼4遺跡	縄文後期	
87	遺物包含地	イクバンドユクチセ遺跡	縄文後期	
88	遺物包含地	厚幌2遺跡	縄文前期	
89	遺物包含地	オニキシベ4遺跡	縄文	
90	遺物包含地	オニキシベ5遺跡	縄文中期	
91	溝穴遺構	上幌内2遺跡	縄文・アイヌ	
92	遺物包含地	シヨロマ2遺跡	縄文中期	
93	溝穴遺構	幌里4遺跡	縄文	
94	集落跡	厚和8遺跡	縄文中～後期	
95	遺物包含地	厚和9遺跡	縄文中期	
96	遺物包含地	鹿沼6遺跡	縄文	
97	遺物包含地	豊川2遺跡	続縄文・檜文	
98	遺物包含地	幌内6遺跡	縄文後期	
99	溝穴遺構	鹿沼7遺跡	縄文早～晩期	
100	チャシ跡	ラチャラセナイチャシ跡	アイヌ	
101	遺物包含地	ラチャラセナイ遺跡	縄文早～後期・続縄文・中世アイヌ期	
102	遺物包含地	吉野1遺跡	縄文中・晩期	
103	遺物包含地	幌内7遺跡	縄文晩期・檜文	
104	遺物包含地	ニタツポロ遺跡	縄文前・晩期	
105	遺物包含地	宇降3遺跡	縄文中期	
106	遺物包含地	富里2遺跡	縄文後・晩期・アイヌ	

1:厚真村郷土研究会 1956『厚真村古代史』 2:亀井喜久太郎 1957「厚真出土の土偶」『先史時代』  
 3:3:苫小牧市教育委員会 1986『苫小牧東部工業地帯の遺跡群Ⅰ』 4:苫小牧市教育委員会 1987  
 『苫小牧東部工業地帯の遺跡群Ⅱ』 5:苫小牧市教育委員会 1990『苫小牧東部工業地帯の遺跡群Ⅲ』  
 6:苫小牧市教育委員会 1992『苫小牧東部工業地帯の遺跡群Ⅳ』 7:苫小牧市教育委員会 1995『苫  
 小牧東部工業地帯の遺跡群Ⅴ』 8:苫小牧市教育委員会 1974『苫小牧東部工業地帯内埋蔵文化財分  
 布調査報告書』 9:厚真町教育委員会 2004『厚幌1遺跡』 10:鶴川町教育委員会 1977『鶴川町遺跡  
 分布調査報告書』 11:厚真町教育委員会 2001『鯉沼2遺跡』 12:厚真町教育委員会 2001『豊川1遺  
 跡』 13:(財)北海道埋蔵文化財センター 2003『厚真町 浜厚真3遺跡』 14:厚真町教育委員会 2006  
 『上幌内モイ遺跡(1)』 15:厚真町教育委員会 2005『鯉沼3遺跡』 16:厚真町教育委員会 2006『鯉沼  
 3遺跡(2)』 17:厚真町教育委員会 2007『上幌内モイ遺跡(2)』  
 (小野)

いにおいて「於多久見具印住處阿津摩ニテ討取ル」というものである(野澤 1692)。厚真中部に位置する桜丘チャシ跡は、壕の上幅 11.8m、深さ 3m で、Ta-b 降下後に構築されたものと思われ、この時期に使用された可能性がある。その後、寛政年間(18 世紀末)に八王子千人同心等、数名の和人が浜厚真に移り住むが定住することはない。近世アツマ場所の産物としては、干鮭や椎茸、シナ縄があげられているが、詳細な記述はなく、以降の和人の紀行文や測量日誌にも記されるが、交通路であった厚真と鶴川間の厚真川河口周辺の簡単な記述に留まっている。

内陸部まで詳述したものは、松浦武四郎による『戊午安都摩日誌』(松浦・高倉 1985、松浦・吉田 1962)で、1857(安政 5)年 6 月に厚真から厚真川河口を経てトニカ(現富里)にて 2 泊している。この時、町内にはアツマ(厚真川口)、キムコタン(現厚和・厚和 1 遺跡)、シナイ(現新町・新町遺跡)もしくはチケツヘ(現本郷)、トニカ(現富里)、ヲフムセナイ(現幌内)もしくはニタツナイ(現富里)の 5 か所のコタンが記録されている。この中で比較的規模の大きいキムコタンやトニカコタンでは、アワ、ヒエ、インゲンなどの畑作が盛んで、漆器や刀剣類の宝物が多く、「文化度の高さ」に驚いている。しかし、直前に襲った厚真川の洪水によって、畑地のほとんどが流されていることも記され、かつてより氾濫の多い河川であったことが伺える。その他、猟犬としての北海道大厚真系の活躍にも記述している。上流部に関しては聞き取りによる記述で、3 穴の吊耳鉄鍋の残置伝承があるカニシユウ(現幌内・一里沢遺跡)も記述されている。

これらの記録以前のアイヌ文化期については、厚幌ダム水没地域内の試掘・発掘調査で確認されたものが多く、当遺跡の他、平成 14 年度調査の厚幌 1 遺跡(乾・小野 2004)、平成 17 年には本遺跡の南西対岸でヲチャラセナイチャシ跡が発見されているにすぎず、町内における詳細は不明である。(乾)

## 2. 遺跡の位置と周辺の環境

上幌内モイ遺跡は河口から約 30km、市街地から約 15km 山間部に入った厚真川上流域左岸に位置し、穂別側に源流部をもつ支流オニキシベ川と夕張山地に源流部をもつショロマ川の合流点に挟まれた河岸段丘上に立地する。オニキシベはアイヌ語で「語源は「入り口で・木を・削り・つけている・もの」の義。この沢の入り口に昔シナノキがたくさん生えていて、アイヌはいつもその皮を剥いて繊維をとり、縄にしたり衣料にしたりしたという。」とあり、ショロマは「クサソテツ」(いわゆるコゴミ)の義。それがこの沢に群生していたので名づけたという。また、この上流に滝があるので「ソロマブ」(滝が・そこ・にある・もの)と名づけたのが、訛ってソロマとなり、さらにソルマになったとも考えられる(厚真村 1956)とあり、遺跡周辺には生活するための材料や食料等の資源が豊富であったことが想像できる。厚真川本流に取り囲まれた河岸段丘上に立地するこの遺跡は、周囲に日光を遮る山体が迫っておらず、西向きで日照条件が良い。

発掘前の現況は山林・荒蕪地であったが、平成 15 年まで T<sub>2</sub> は宅地および畑地、T<sub>1</sub> には水田が造成されていた。T<sub>2</sub> は一部整地、耕作の影響を受けているが、包含層の残りは比較的良好であった。T<sub>3</sub> - T<sub>4</sub> の段丘崖には、直径 50~60cm のカラマツが植林され、一部にサクラ・ニレ・ナラ属の木木類が見られる林地となっていた。T<sub>1</sub> - T<sub>2</sub> の段丘崖には草本類のクマザサが一面に群生しており、ヨシ属も多く分布している。(奈良)

## 3. 地形と地質 (図 I-2~4)

上幌内モイ遺跡は T<sub>1</sub> - T<sub>2</sub> (図 I-2) の河岸段丘面に形成されている。北東より流れる厚真川が T<sub>1</sub> 東側侵食崖で北西方向に流路を変え、遺跡を取り囲むようにして南西へ流れている。遺跡は北西一

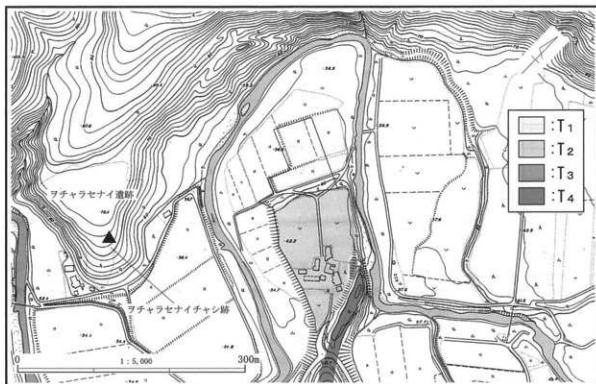


図 I-2 発掘調査区と周辺の地形

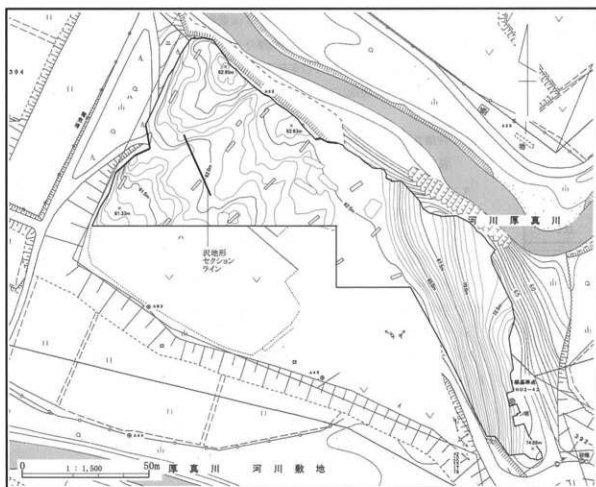


図 I-3 発掘調査区内の地形

## 〔基本土層〕

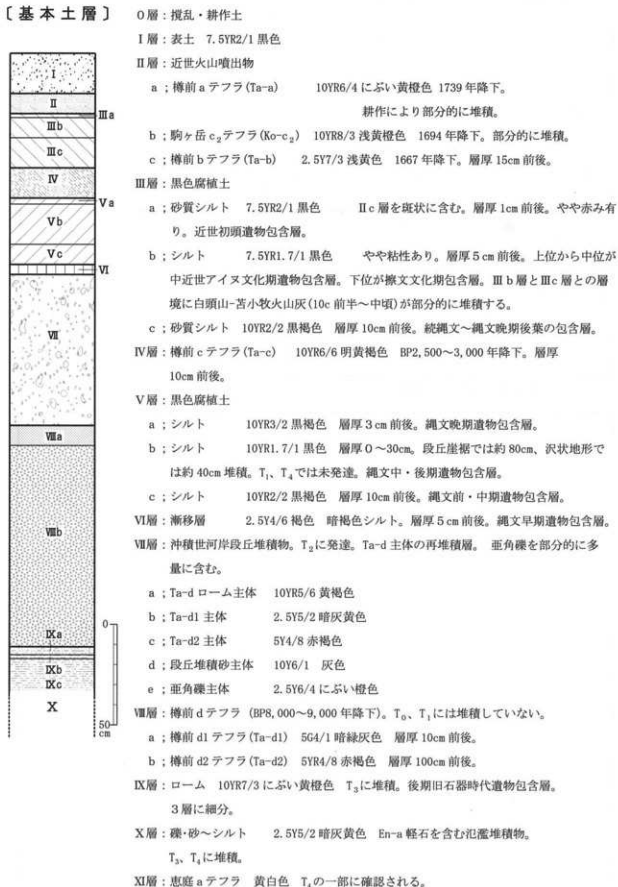


図 I-4 基本土層柱状図



南東に長軸をもつ半島状の地形をしている。河川が台地を取り囲むように蛇行して川の流れが一部緩やかになるような地形をアイヌ語で「モイ」と呼ぶことから、本遺跡は「上幌内モイ遺跡」と名づけられている。

平成16・17年度に発掘調査が終了したのは標高約70m-75mのT<sub>4</sub>、標高約68mのT<sub>3</sub>、標高約62mのT<sub>2</sub>の一部で、平成18年度の調査区域に標高約58mのT<sub>1</sub>がある(図I-5)。

発掘調査範囲であるT<sub>1</sub>-T<sub>4</sub>の微地形については、Ta-b 火山灰除去後に作成したⅢ層上面の地形測量図を参考に高位段丘面から解説する。

T<sub>4</sub>: 調査区の東側に位置している。遺跡内で一番高位にあたり、南北へ尾根状に細長くのびる。南端が標高約75mと一番高く北側へ緩やかに傾斜し、西側の段丘崖は最大仰角が約40°ある。段丘北側の標高約71m-73mは等高線幅も広く、平坦面が形成される。調査区東側は河川までの比高差が約19mある浸食崖であるが、遺物の出土状態などから本来は東に広がっていたと思われる。遺跡周辺の基盤層は地質図幅説明書「早来」(松野・石田1960)によると「振老層」と称される新第三紀の砂岩泥岩の互層堆積物である。T<sub>4</sub>の基盤層は泥岩層の層理が発達し、東側の浸食崖で観察することができる。上層には第四紀堆積物である、河岸段丘堆積物、更新世末から現世までの火山活動によって降下した恵庭岳・樽前山などの火山噴出物、黒色腐植土層が堆積している。En-a テフラは段丘堆積物(層厚未計測)上位、T<sub>4</sub>の一部に確認されているが上部を水成堆積によって切られている(早田2006)。Ta-dは河岸段丘堆積物を被覆するように約1m堆積している。黒色腐植土層はTa-a~Ta-dに挟まれるように二枚確認されているが、T<sub>2</sub>に比べて発達していない。

T<sub>3</sub>: T<sub>4</sub>の段丘面北側に位置している。調査区内でもっとも狭い段丘面であるが、標高68m付近で等高線の幅が広がり、僅かに平坦面を形成している。西側はT<sub>4</sub>と一連の段丘崖によって急な傾斜が続く。Ta-d テフラ下層には遺跡内で唯一の後期旧石器遺物包含層(IXc層)が確認されている。IXc層上面はⅢ層上面に比べ標高46.5m~65.7mと、ほぼ水平な地形をしている。

IXc下層にはEn-a 軽石を含む氾濫原堆積物が堆積し、上層には斜面堆積物が被覆している。Ta-d テフラは斜面堆積物を水平に被覆しており、西側段丘崖に向って層厚が減少している。黒色腐植土はT<sub>4</sub>の斜面からT<sub>3</sub>の平坦面にかけて発達している。

T<sub>2</sub>: 調査区の中で最も面積が広いT<sub>2</sub>は本遺跡の主体となる面で、縄文時代・擦文文化期・アイヌ文化期の遺構・遺物が多数出土している。標高が約62mで等高線の幅が広く北東-南西方向に緩やかな傾斜をもつ地形をしている。微地形は22ライン(南北軸)付近を境界に東西でやや様相が異なる。東側は段丘崖裾にほぼ水平な地形が広がる。西側は表土を除去すると、22・23、27~29、31~34ラインのⅢ層上面が整地による削平で、下層のTa-c~V層上面が露出していた(図版I-1・2)。削平ラインに沿った波状の窪みにはTa-bが約25cmと厚く堆積していたため、本来は起伏に富む地形であったと思われる。起伏の要因は北西-南東に軸をもつ埋没した沢状地形と思われ、両側は自然堤防状の高まりがあったと考えられる。沢状地形にはVb層が約40cmと厚く堆積しているが、下位は色調が暗く上位はやや明るいいため、上位の黒色土は沢地形の窪地に流れ込んだ二次堆積層と考えられる。

T<sub>2</sub>からT<sub>1</sub>にかけては、沖積世河岸段丘堆積物であるTa-d主体の再堆積層が発達している。Ta-d テフラは東側の再堆積層50~70cm下層に確認されるが、西側ではTビット壁面(約1m下位)で

も確認されていない。Ta-d 主体の再堆積層は河川活動による流路、流速の影響で礫、砂、Ta-d1・2・しを含む量に相違がみられる。包含層・Tピットの断面観察で東側は比較的、礫、砂を主体とする再堆積層であるが、層位変化が著しいため地点ごとの堆積傾向を見出すことは困難である。再堆積層を狭んで上層には黒色腐植土が二枚、火山噴出物である Ta-b、Ko-c<sub>2</sub>、Ta-a が確認されている。黒色腐植土は段丘崖裾で約 80cm と厚く堆積しているが、基本的には水平である。

T<sub>1</sub> : 調査区の西側に位置している。標高は 58m とともに低位である。現代の水田造成により整地されているが、現河川方向に緩やかな傾斜をもつ。

T<sub>2</sub> - T<sub>2</sub> にかけての段丘崖には Ta-a テフラが被覆しており、黒色腐植土も比較的残りが良い。T<sub>1</sub> は基本的に洪水堆積層に覆われている。厚真川の上流側またはより低位面では Ta-d 再堆積層上層および二枚の黒色腐植土に粘土質シルト、砂質シルトが厚く被覆している。また、黒色腐植土層に混在して T<sub>2</sub> より供給された Ta-a テフラ (再堆積) も確認される。洪水堆積層が被覆する要因として、「厚幌 1 遺跡の地すべりの発生時期と馬迫断層の最新活動期が重なることは注目される。」(田近他 2004) とあることから、遺跡の下流または対岸で地すべりが発生し、厚真川が一時的にせき止められ、湖沼化した可能性も考えられる。(奈良)

## 第 2 節 調査に至る経緯

### 1. 厚幌ダム建設事業

町内を縦貫する厚真川中下流域には約 3,000ha もの水田地帯が広がっている。このため、春の灌漑用水の確保は勿論のこと、融雪や豪雨による洪水への治水対策が開拓期以来の課題とされていた。

昭和 45 (1970) 年に現河川より 38km 地点に、農業用ダムである「厚真ダム」が完成した。しかし、このダムは洪水調整機能が不十分で、昭和 45 年には洪水と渇水、昭和 48・50・56 年にも洪水が発生し、近年においても、平成 12 年春の融雪期と平成 13 年秋に、家屋や農地に被害をおよぼす洪水が発生している。また、昭和 59・60・63 年には深刻な水不足にも見舞われている。特に田植え時期における農業用水の確保は、農業者にとっては勿論のこと、厚真町民にとっても関心事であり、厚真町の基幹産業である農業、豊かな穀倉地帯を築くうえで、治水と農業灌漑などを目的とする新たなダム建設が陳情されていた。また、市街地への人口集中の進行により、水道用水の需要が急増し、取水可能量は限界に達していることから、新たな水源確保が急務となっている。

これらの状況から、抜本的な治水等の改善策として、昭和 52 年に北海道土木現業所により厚幌ダム建設事業の予備調査が着手されている。その後、昭和 61 年に実施設計である「厚真川総合開発事業計画調査」の着手が決まり、平成 7 (1995) 年に北海道と厚真町との間で「厚真川総合開発事業厚幌ダム建設工事に関する基本協定」が結ばれ、洪水調整、灌漑用水、水道水の確保、流水の正常な機能維持の多目的ダムとして、現厚真ダム下流に「厚幌ダム」の建設着工が決定された。また、同年には地元厚真町内に厚幌ダム建設事務所が開設され、その後、沿岸漁業団体への説明会や環境アセスメントも実施されている。近年ではダム事業に関連して、道道切替工事や町内各地区の水田基盤整備事業、農業用水路再編対策事業(導水路建設)が展開され、営農の効率化が促進されている。厚幌ダムの本格着工として、平成 14 年度からの水没地域内用地買収とともに、一般道道上幌内早来停車場線の切替工事に着手し、むかわ町穂別まで延長開通の計画である。厚幌ダムの規模は、堤体長 480m、高さ 47.2m、下流に面した垂直の重力式コンクリートダムで、上幌内モイ遺跡よ

り約700m下流に堤体を建設する計画である。貯水は常時湛水面標高85.4m、最深湛水面標高88.1mであり、総貯水量は47,400千 $m^3$ 、現在の厚真ダムのおおよそ4.7倍の貯水量となり、多方面にわたって絶大な効果波及が想定され、早期完成が望まれている。(乾)

## 2. 発掘調査までの経緯

前述の厚幌ダム建設事業の本格化を踏まえて、平成12年7月6日に北海道室蘭土木現業所 厚幌ダム建設事務所(以下、ダム事務所)より、ダム事業全体に係わる埋蔵文化財事前協議書(室土厚幌第158号)が厚真町教育委員会(以下、町教委)を経て北海道教育委員会(以下、道教委)へ提出されたのが始まりである。協議区域は最深湛水面標高88.1m以下の区域と道道切替路線幅の合計約235,500 $m^2$ におよぶ。まず、平成13年6月に道教委により道道切替路線の試掘調査が行われた。結果、約8,250 $m^2$ の「要発掘調査」面積が回答され、厚幌1遺跡(J-13-25)として新規登録された(平成13年7月18日付 教文第4265号)。これを受け、厚幌ダム関連の埋蔵文化財発掘調査について道教委と町教委で協議した結果、ダム関連の試掘調査までは道教委が行い、厚幌ダム建設に係わる受益者が厚真町1町であることから、発掘調査については厚真町と北海道室蘭土木現業所で委託契約を結び、町教委が主体となって行うこととなった。翌平成14・15年度の2ヵ年で厚幌1遺跡の発掘調査を行っている(乾・小野 2004)。

ダム本体の水没地域内については、平成13年10月に踏査(A調査)が行われ、周知の遺跡(オニキシベ1遺跡・旧幌内2遺跡、上幌内1遺跡・旧幌内3遺跡)も含め16ヵ所、面積235,500 $m^2$ の「要試掘調査」の回答がなされた(平成13年11月16日付 教文第4532号)。追加箇所もあるが、以後、平成17年度までに8回、16地点の試掘調査が行われ、現在までに13ヵ所、約133,000 $m^2$ の要発掘地点が確認されている(図I-1)。

上幌内モイ遺跡については、道教委によって平成14年11月に $T_0$ 、平成15年10月に $T_2$ の試掘調査が行われ、15,650 $m^2$ の発掘面積(うち遺構確認調査面積670 $m^2$ )が回答された(平成15年11月14日付 教文第6492号)。なお、平成16年度の発掘調査期間中に $T_1$ - $T_2$ への傾斜の緩い段丘崖において、遺物を採集したことから、道教委と協議し、10月に町教委による $T_1$ の試掘調査を行った。その結果、擦文・アイヌ文化期を中心とする遺物包含層を確認し、6,514 $m^2$ が追加され調査対象総面積は22,164 $m^2$ となった(平成16年11月22日付 教文第4617号)。

また、平成16年度の調査中に、 $T_3$ においてTピットの坑底面杭穴を調査中に後期旧石器時代の遺物が出土した。調査終了後、 $T_3$ と $T_1$ 全域のIX層を対象に試掘調査を行い、295 $m^2$ の再調査面積を追加した。

なお、次年度以降の報告対象となるが、平成18年度は残りの $T_2$ のほぼ全域と $T_1$ 南半の計8,000 $m^2$ の調査を終え、平成19年度をもって上幌内モイ遺跡の発掘調査終了する予定である。(乾)

### 第3節 平成16～18年度の調査結果の概要

平成16年度からの過去3年間の調査では、後期旧石器時代～中近世アイヌ期までの遺構・遺物が検出された。調査面積は、16,460 $m^2$ で、これに後期旧石器包含層の再調査面積295 $m^2$ が含まれている。平成16・17年度調査の後期旧石器時代と縄文時代の一部については平成17年度に本報告書を刊行している(乾・小野・奈良 2006)。ここでは、本書所収の縄文時代晩期以降の概要と平成18年度調査の概要について記載する。

## 1. 平成 16・17 年度の調査概要 (本書掲載内容)

本書は樽前 b テフラと樽前 c テフラに挟在する黒色土(Ⅲ層)に帰属する遺構・遺物を対象としている。時期的には縄文時代晩期中葉以降から近世アイヌ文化期までの時期にあたる。縄文時代晩期、続縄文時代については土器が数個体出土しているのみで、遺構・遺物は擦文文化期からアイヌ文化期にかけてのものが大多数を占めている。平成 16・17 年度の調査区は T<sub>2</sub>~T<sub>4</sub> で、遺跡全体の北半域となる。調査では両時期共に最も広い T<sub>2</sub> を主体領域とし、T<sub>3</sub>・T<sub>4</sub> では遺構・遺物はほとんど検出されていない。擦文文化期の遺構等は層位的にⅢ層下位(ⅢbL)で検出しており、一部 B-Tm を被覆するものもある。これらの主体時期は刻文を施す擦文土器が多く、擦文後期に属するものである。検出遺構等は、円形周溝遺構 1、竪穴様遺構 1、集中区 16、土坑 21、焼土 99、炭化物集中等である。円形周溝遺構(ⅢX-01)としたものは外周直径約 9m、溝幅約 1.2~2.5m の周溝を検出し、内郭には焼土 1 ヶ所を伴う。時期決定可能な伴出遺物は無いが、周溝内堆積状態や B-Tm との層位関係より当該期のものと判断した。竪穴様遺構(ⅢX-02)は直径約 5m の浅い皿状掘り込みと中央に焼骨片を含む焼土を伴うものである。「集中区」としたものは、焼土群やその周辺同一面に遺物集中などが周辺グリッドより密に検出された領域を認定したもので、今年度報告対象のものは整理報告段階で設定したものが殆どである。このうち 4 ヶ所については、調査段階より認定した領域で、集中区 1・2 は遺物出土状態、遺物の種別構成、出土遺物の状態から儀礼場の性格が伺えるものである。土坑は定形的なタイプとして、平面形が円形(ⅢP-10 ほか)のものど方形(ⅢP-09 ほか)のものがあり、前者は坑底が水平で、壁面は垂直に立ち上がり、開口部が「ろうと」状に開く形態の特徴をもつ。後者は少数例であるが水平な坑底面で開口部と坑底面形状が一致する。出土遺物は、擦文土器が約 3 割、礫が 6 割で構成され、他に金属器や礫石器等が出土している。特筆する遺物としては、集中区 1・2 から二次被熱した擦文土器甕や坏のほか、須恵器壺や青銅製鉤、鉄鏃、黒曜石転礫などの搬入系遺物や刻文を施した板状土器甕、炭化キビ塊等が出土している。他の集中区や包含層からは、刀子や刀装具などの各種鉄製品類やメノウ・チャート製の火打石と考えられる石器も出土している。これらの遺構・遺物の分布は段丘面 T<sub>2</sub> の中央部に帯状に認められ、厚真川上流域に面する範囲にはⅢX-01 や集中区 1・2 などの特殊な遺構群が分布している。

中近世アイヌ文化期はⅢ層上位(ⅢbU)~Ⅲ層中位(ⅢbM)で遺構・遺物を検出している。時期的には層位より大きく 2 時期に分けられ、AMS 法 <sup>14</sup>C 年代測定からも幅広い年代結果が得られている(本書第 V 章 1 節)。遺構は盛土および周溝を伴う土壇墓 2、平地式住居址 7、集中区 3、建物跡 5、焼土 15、灰集中 6、鉄器集中 1、獣骨集中 15、炭化物集中等を検出している。擦文文化期と同様 T<sub>2</sub> を主体に広がり、鉄器集中のみ T<sub>3</sub> で検出された。土壇墓は長軸方向を概ね東西に構築する長台形で、副葬品は刀子、漆碗の他、男性の墓壇にはエムシ(蝦夷太刀)、女性の墓壇には鉄鍋が出土している。平地式住居址は楕円~長楕円の付属炉を伴うもので、周囲には打ち込み杭が検出されている。その配列からいわゆる“チセ”と同様な構造のものと思われ、推定する住居の長軸が概ね東西方向のものと、北東-南西方向のものとがあり、遺物出土層位を考慮すると少なくとも 2 ステージが想定される。建物跡は掘立柱で、5 本構成も検出している。灰集中は地山被熱層を伴わない検出灰層で、ⅢAS-01 からは動物遺存体の他、鉄製品や骨角器などの多種にわたる遺物や炭化種子等が出土している。獣骨集中はいずれもエゾシカの遺存体で構成され、平坦面にやや散逸して出土するものと不

表 I-3 上幌内モイ遺跡 Ⅲ層遺構群一覧表

遺構名	所属時期	規模(cm)		グリッド	層位	付属・関連遺構	備考
		長軸	短軸				
ⅢH-01	アイヌ文化期	510	430	V・W-19・20	ⅢbU	ⅢF-04-05, ⅢSB-03, ⅢBB-02	
ⅢH-02	アイヌ文化期	965	440	F-32・33, G-32~34, H-33・34	ⅢbM	ⅢF-39・40, ⅢSB-09・10, ⅢBB-12, ⅢBB-03-04	主体部と付属施設全体の規模
ⅢH-03	アイヌ文化期	505	400	I-28・29, J-28~30, K-29・30	ⅢbM	ⅢF-57・58, ⅢSB-15	ⅢH07(最新)・04(中)・03(古)の新旧関係
ⅢH-04	アイヌ文化期	790	460	J-27・28, K-27~29, L-27・28	ⅢbM	ⅢF-43・44, ⅢSB-08, ⅢBB-15	付属施設含むの規模。ⅢH07(最新)・04(中)・03(古)の新旧関係
ⅢH-05	アイヌ文化期	510	405	E-30~32, F-31~33	ⅢbM	ⅢF-66・67, ⅢSB-17	ⅢH-02より古い。
ⅢH-06	アイヌ文化期	590	380	P-27・28, Q-27~29, R-28	ⅢbM	ⅢF-71・72	
ⅢH-07	アイヌ文化期	555	455	I・J-25, J・K-26, J-27	ⅢbU	ⅢF-25, ⅢAS-03, ⅢSB-11・12	ⅢH07(最新)・04(中)・03(古)の新旧関係
集中区1	縄文文化期	850	750	M・N-20・21	ⅢbL	ⅢF-20・50, ⅢPB-02・03, ⅢFCB-01, ⅢSB-02-06・14, ⅢCB-61・72	
集中区2	縄文文化期	600	400	O-17・18	ⅢbL	ⅢF-14・15, ⅢSB-05, ⅢBB-01, ⅢCB-40-53	
集中区3	縄文文化期	1,200	1,100	P-34, Q・R-34~36	ⅢbL	ⅢF-47・76・80・82, ⅢP-03~06・13, ⅢSB-13	
集中区4	アイヌ文化期	880	460	L-29	ⅢbU	-	
集中区5	縄文文化期	630	310	N・O-18	ⅢbL	ⅢF-13・16・17・18	
集中区6	縄文文化期	1,120	600	M-22, I・M-23, K・L-24	ⅢbL	ⅢP-07, ⅢF-28・32・93・97・113・115・116・117・119・120・121・122・123	
集中区7	縄文文化期	450	350	L-21・22	ⅢbL	ⅢF-38・49・53・54, ⅢPB-08	
集中区8	縄文文化期	1,500	700	P-22・24, Q-21・22, Q-23・24	ⅢbL	ⅢF-42・91・92・100・109, ⅢP-08-09・11, ⅢPB-13・16, ⅢSB-22	
集中区9	縄文文化期	700	550	J-28・29, K-28	ⅢbL	ⅢF-60・62・65・70・73・74・137, ⅢPB-09, ⅢSB-16・20	
集中区10	縄文文化期	300	250	Q-28	ⅢbL	ⅢF-68, ⅢPB-10, ⅢSB-18	
集中区11	縄文文化期	740	730	O-32, M・N-32・33	ⅢbL	ⅢF-77・78・125・139・141, ⅢCB-63・75	
集中区12	縄文文化期	750	600	O-24・25	ⅢbL	ⅢF-106・129, ⅢPB-12	
集中区13	縄文文化期	700	550	N-23, O-22・23・24, P-23・24	ⅢbL	ⅢF-101・102・105, ⅢP-10・15・48, ⅢPB-15, ⅢSB-21・23・24, ⅢCB-60・71	
集中区14	アイヌ文化期	700	(450)	J-25	ⅢbU	-	短軸は調査区外へ広がる。
集中区15	縄文文化期	810	560	M-30・31, N-31	ⅢbL	ⅢF-130・134, ⅢSB-59	
集中区16	縄文文化期	700	600	P-37・38	ⅢbL	ⅢF-132・133・135, ⅢPB-07, ⅢCB-76	
集中区17	縄文文化期	1,050	750	O・P-31・32	ⅢbL	ⅢP-21, ⅢF-136, ⅢSB-19, ⅢCB-77	
集中区18	縄文文化期	700	550	S・T・U-19, T-20	ⅢbL	ⅢF-08, ⅢCB-32, ⅢPB-01・05	
集中区19	アイヌ文化期	850	600	L-24・25	ⅢbU	ⅢF-29・33	

表 I-4 上幌内モイ遺跡 年度別概要一覧表

項目	Ⅲ層			V層			IX層		
	平成16年度	平成17年度	合計	平成16年度	平成17年度	合計	平成16年度	平成17年度	合計
発掘調査面積(m <sup>2</sup> )	3,517	4,518	8,035	3,517	2,293	5,810	6	289	295
遺構確認面積(m <sup>2</sup> )	425	0	425	425	2,225	2,650	0	0	0
調査面積合計(m <sup>2</sup> )	3,942	4,518	8,460	3,942	4,518	8,460	6	289	295
竪穴住居跡	0	0	0	4	1	5	0	0	0
平地式住居跡	1	6	7	0	0	0	0	0	0
建物跡	2	3	5	0	0	0	0	0	0
杭列跡	0	3	3	0	0	0	0	0	0
竪堀	0	2	2	0	0	0	0	0	0
Tピット	0	0	0	21	19	40	0	0	0
土坑	0	21	21	8	7	15	0	0	0
焼土	20	108	128	4	3	7	0	1	1
円形周溝遺構	0	1	1	0	0	0	0	0	0
竪穴様遺構	0	1	1	0	0	0	0	0	0
灰集中	0	6	6	0	0	0	0	0	0
炭化物集中	31	22	53	3	2	5	0	0	0
土器集中	6	9	15	3	0	3	0	0	0
礫集中	6	18	24	1	0	1	0	0	0
鉄器集中	1	0	1	0	0	0	0	0	0
銅片集中	0	1	1	0	2	2	0	0	0
獣骨集中	2	13	15	0	0	0	0	0	0
遺物点数	5,794	18,255	24,049	13,652	15,795	29,447	385	1,027	1,412
表採遺物点数									123
遺物総点数									54,908

表 I-5 Ⅲ層出土遺物一覧表

遺物種別	土器	銅片	石器	礫石器	鉄製品	銅製品	土製品	石製品	銅片類	礫	その他
小計	6,436	30	347	262	352	7	3	1,237	15,058		317
合計											24,049

定形の土坑に一括廃棄されるものがある。前者にはさらに上顎・下顎骨が主体となるものと、破砕された四肢骨等が多数含まれるものがあり大きく3タイプが検出されている。遺物の殆どが自然礫で、棒状礫が主体を占めている。また、礫石器としてたき石、台石等が出土している。これらは遺跡全体に樽前cテフラが挟在するため、縄文時代の土器や石器の混在が極めて少なく、擦文文化期またはアイヌ文化期に属するものと考えられ、礫石器類が多量に出土していることも本遺跡の特徴と言える。他に内耳鉄鍋、刀装具、縫い針、古銭等の金属製品やガラス玉、土掘り具と思われる鹿角製品、穂摘み具と思われる穿孔のあるカワシンジウガイ等、多種にわたる遺物が出土している。

## 2. 平成18年度の調査概要

段丘面 T<sub>2</sub> 南半と T<sub>1</sub> の一部の計 8,000 m<sup>2</sup> の調査を行った。縄文時代では、竪穴住居跡 1、Tピット 71 等が検出されている。時期的には、縄文時代早期後葉中茶路式期と後期初頭余市式期が主体を占め、前期以外の各時期の遺物が出土している。特記事項としては、新たな調査区地形面となった T<sub>1</sub> において 47 基の Tピット群を検出した。このうち、25 基が段丘崖裾に検出し、等高線に対し長軸を直行させる配列であった。

Ⅲ層の調査では、縄文時代晩期からアイヌ文化期にわたって墓壇 1、平地式住居跡 1、建物跡 2、土坑 23、焼土 82、廃滓場跡 1 等を検出した。

縄文時代では、焼土 10、土器集中 12、フレイク・チップ集中等を検出している。これまでの調査を含め、遺構や遺物集中を伴う状態での検出は、はじめて判明した様相である。分布域として

はT<sub>2</sub>の南西縁辺部に帯状に広がり、限られた範囲で検出している。主な時期は、後北A~C<sub>1</sub>式期にかけて形成され、土器片集中のほか、シカで構成される多量の焼骨片集中や黒曜石や片岩のチップ集中を検出している。構成される遺物の種類や出土状態から、片岩製石織の製作場跡と思われる地点も検出している。

擦文文化期では、調査段階で焼土を中心に集石や土器集中に伴う集中区を検出している。これらは、調査時点に柱穴の検出を目的とした精査を行ったが、柱穴は検出されていない。また、集中区からはシカの頭蓋骨集中を検出し、1.5m四方に6個体以上の上顎歯列を確認した。また、伸展葬の人骨を伴う墓壇も1基検出している。頭位は北北東で、墓壇内副葬品に擦文土器小型甕1、環状鉄製品1、刀子1、鎌1、黒曜石転礫1、墓壇外掘り上げ土直上に擦文土器大型甕1個体が出土している。構築時期は、土器から判断すると遺跡内における擦文文化期のなかでも新しい時期で11世紀代と思われる。平成17年度に検出した円形周溝遺構とほぼ同時期の所産の可能性がある。人骨はほぼ全身が遺存していたものの、保存状態は不良で、バインダーで硬化処理した後、札幌医科大学に復元と同定を依頼している。廃滓場はT<sub>2</sub>-T<sub>1</sub>段丘崖裾に検出し、4.1×2.8mの範囲から羽口片、鉄滓、残滓、鍛造剥片、炉壁と思われる被熱した大型の板状礫が出土した。焼土は検出されなかったことから、別地点で鍛冶作業が行われ、これらの遺物が廃棄されたものと思われる。時期については、出土層位や羽口にスサを含んでいないことから擦文文化期のものと考えている。

アイヌ文化期では、平地式住居址1、建物跡2、獣骨集中等を検出した。住居址は層位的な観察から新しい時期のものと思われ、灰層がマウンド状に堆積し、炉の長軸方向がⅢH-01と同様、東西軸となっていた。遺物集中区のうち1カ所は、南西-北東方向に2カ所の長楕円形の炉が形成されていることから、古い時期の平地式住居址の可能性もあるが、柱穴の検出確認には至らなかった。この炉は“灰層の掻き出し”が認められ、これに起因するであろう灰集中を約15m離れた段丘縁辺部に検出している。他の遺物集中区では完形の金鋸1点と製品素材と思われる延べ板状の鉄製品1点が重なって出土している。これらの3ヶ所の集中区は段丘面T<sub>2</sub>の南東域に分布し、時間的に同時期の可能性がある。T<sub>1</sub>では、シカの頭蓋・下顎骨集中1カ所を検出している。

上記のように、上幌内モイ遺跡は中小河川である厚真川の流域に形成された遺跡ではあるが、平成16年度からの3カ年の調査で予想を超え、後期旧石器時代からアイヌ文化期に至るまで多様な遺構・遺物が多数検出されている。(乾)

## 第4節 調査要項と体制

### 1. 調査要項

事業名：厚幌ダム建設事業に係わる埋蔵文化財発掘調査

委託者：北海道胆振支庁

受託者：厚真町教育委員会

遺跡名：上幌内モイ遺跡（J-13-79）

所在地：厚真郡厚真町字幌内395-1

調査面積：平成16年度 3,942㎡（旧石器包含層調査面積の6㎡含む。）

平成17年度 4,518㎡（他、旧石器包含層再調査面積289㎡。）

平成18年度 8,000㎡

受託期間：平成16年4月1日～平成17年3月31日

平成17年4月1日～平成18年3月31日

平成 18 年 4 月 1 日 ~ 平成 19 年 3 月 31 日

調査期間：(発掘) 平成 16 年 5 月 11 日 ~ 平成 16 年 10 月 31 日

(整理) 平成 16 年 11 月 1 日 ~ 平成 17 年 3 月 18 日

(発掘) 平成 17 年 5 月 10 日 ~ 平成 18 年 10 月 31 日

(整理) 平成 17 年 11 月 1 日 ~ 平成 18 年 3 月 17 日

(発掘) 平成 18 年 5 月 9 日 ~ 平成 18 年 11 月 10 日

(整理) 平成 18 年 11 月 1 日 ~ 平成 19 年 3 月 20 日

(乾)

## 2. 調査体制

厚真町教育委員会 教育長 幅田 敏夫

社会教育課 課長 當田 昭則 係長 森田 正樹

学芸員 乾 哲也 (調査担当者)

嘱託職員 小野 哲也 (調査担当者)

# 奈良 智法 (調査担当者)

# 佐々木 都 (事務員)

臨時職員 赤井文人(平成 18 年度)・海津 孝之・宮崎 美奈子(技能作業員)

平成 16 年度 発掘作業員 44 名 整理作業員 18 名

平成 17 年度 発掘作業員 45 名 整理作業員 21 名

平成 18 年度 発掘作業員 55 名 整理作業員 26 名

(乾)

## 第5節 調査の方法

### 1. 発掘区の設定

上幌内モイ遺跡の発掘調査範囲は、ダム水没地域内であることから、遺跡の全面が調査対象となっており、道教委の試掘調査によって回答された「要発掘範囲」に基づいている。平成 16 年度は、半島状に突出する T<sub>3</sub>・T<sub>4</sub>およびその段丘崖と、T<sub>2</sub>北東側の一部で、3,942 m<sup>2</sup> (旧石器包含層 6 m<sup>2</sup>含む) の調査を行い、平成 17 年度は T<sub>2</sub>の北半部分の 4,518 m<sup>2</sup>と後期旧石器時代の包含層、289 m<sup>2</sup>(平成 16 年度調査済み)の調査を行った。T<sub>4</sub>の調査区は、北東側が厚真川によって浸食されており、崖面崩落の危険性があったことから 1.5m の安全帯を設けた。T<sub>2</sub>では河川侵食が停滞していることなどから、段丘面縁辺近くまでの調査区とした。

このうち、T<sub>4</sub>から南側の山体に続く尾根状部分の段丘崖は最大仰角が約 40°あり、遺物の流出が想定されたことから、尾根基部の狭小な平坦面と斜面裾の調査に留め、バックホーを用いた遺構確認調査に切り替えている。

(乾)

### 2. グリッド設定

グリッドは公共座標(日本測地系)に従い、遺物包含層が想定される段丘面全てを含む 260m×240m の広域に設定し、5m 四方のメッシュで区分した。グリッド網の起点(A-1区: X=-136680.000 Y=-20120.000)は北東コーナーとし、南北の X 軸を A・B・C・・・のアルファベット列で、東西の Y 軸ラインを 1・2・3・・・のアラビア数字列とした。各グリッドの呼称も北東コーナーの杭とし、A-1区、A-2区・・・とし記した。しかし、調査途中に発掘区が北側へ拡張したことから、A ラインより北側のものをアルファベット+アラビア数字とし、グリッド網も拡張した。なお、集中区 1・



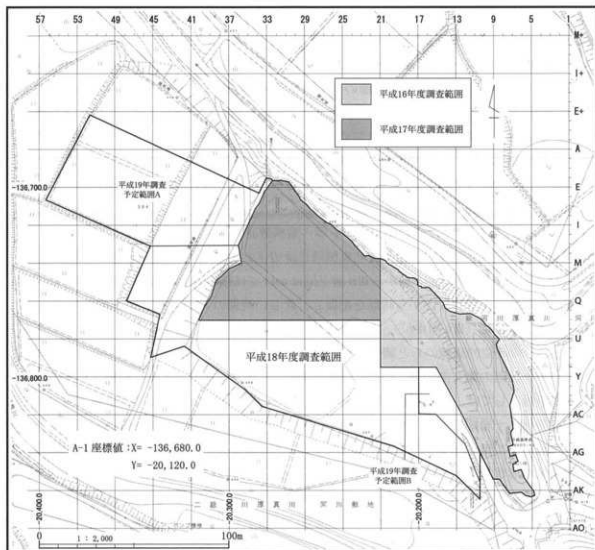


図 I-5 グリッド設定図

2は1mメッシュの中グリッドを設定し、微細遺物の回収を目的とする土壌サンプリングを行っている。中グリッドは5m四方グリッドを1mメッシュの25分割したもので、呼称は全てアラビア数字とした。配列としては、東西のY軸方向は基点より1~5とし、南北のX軸方向へ折り返し、6~10、11~15・・・としている。

現地での設定方法は、初年度に基準杭20点の設置を衛星技術コンサルに委託し、これらから調査開始と共に技能作業員が光波式トータルステーションを用いて設置した。

絶対高は、道道上幌内早来停車場線沿いに南西方向へ約1,100mに所在する「厚真川2000 仮BMNo.22 H=50.437M 北海道室蘭土木現業所」に準拠し、平成14・15年度調査の厚幌1遺跡との整合性を確保している。(乾)

### 3. 包含層および遺構調査の方法

調査の準備段階として、伐採および安全柵設置の後、調査員立会のもとバックホーにより樹根を残しながら表土とTa-b火山灰の除去を行った。Ⅲ層上面でアイヌ文化期の遺構、遺物が検出されることから火山灰は3cm前後残し、Ⅲ層上面まではジョレンを用いて人力による清掃作業を行った。

発掘区全面の火山灰除去が終了した時点でラジヘリを用いた地形測量を測量会社に委託し、並行して調査区内のグリッド杭設置も行った。

地形の変化に富む平成16年度調査区は、大きく①T<sub>4</sub>と段丘崖およびT<sub>3</sub>、②遺構確認調査の尾根と段丘崖急傾斜面、③T<sub>2</sub>、④T<sub>1</sub>南部平坦面の地形的特徴毎に区分し、Ta-c火山灰(IV層)を挟んだIII層とV層の層位毎に行った。T<sub>4</sub>についてはIII層上面で溝跡を確認できなかったもののチャン跡である可能性が想定されたことから、VI層までの先行トレンチを段丘面中央の北西-南東軸に掘削し、造成痕の有無を確認してから包含層調査を行った。また、調査排土についてはT<sub>4</sub>まで、ベルトコンベアを設置し、人力併用で調査区外への排出作業を行った。段丘崖の遺構確認調査区は、尾根と裾部を移植ゴテで先行調査し、遺物点数が極度に少なかったことから、バックホーでIII~VI層までを1回で除去した後、ジョレンを用いてTピット等の遺構確認精査を行った。

T<sub>2</sub>の調査については、厚真川に面した北東側段丘縁辺部およびT<sub>3</sub>-T<sub>2</sub>段丘崖裾から開始した。

III層については、基本的にIIIa層からIIIb層下位にかけては移植ゴテを用いて1cm程度ずつ掘り下げ、面的な遺物出土状態などから時期を把握し、新しい時期のアイヌ文化期(IIIb層上位)、古い時期のアイヌ文化期(IIIb層中位)、擦文文化期(IIIb層下位)の3面を考慮したうえでの調査を行っている。この層位的認識のもと調査担当者間で討議し、時間幅があり時期決定遺物の少ないアイヌ文化期や前段階の擦文文化期について、調査段階からある程度のステージを押さえることができた。調査手順としては、焼土燃焼面に被覆する包含層の厚さを観察するため、III層上面で窪地となっている範囲に土層観察用のベルトを設定し、焼土等の平面的な遺構の形成時期の把握に努めた。包含層の調査としてIIIa層は調査区全面にわたって面的に調査し、IIIb層は地形的特徴や攪乱削平範囲、発掘区の形状などから数地点に区切ってIIIb~IIIc層中位までの調査を行っている。土坑や柱穴等のIIIb層の落ち込みによって検出される遺構は、IIIc層上位から中位にて遺構確認の精査を行っている。なお、平地式住居址に伴う柱穴の確認は困難なものが多く、散水による乾燥状態の判断などを行い、数回にわたって精査を行っている。柱穴の認定にあたっては全てを半載し、断面状態の観察の結果行っている。おおよそ半数は、根穴などの自然営力による落ち込みのものであった。

無遺物層のIV層(Ta-c)の除去はバックホーとジョレンでの人力並用で行い、V層はVc層までの遺物出土頻度を確認し、一部ジョレンを用いての調査とした。平成16年度の調査の結果T<sub>2</sub>の縄文期(V・VI層)の遺物点数が少ないことから、平成17年度は25%調査を実施した。その結果、ゆるやかな沢状地形で区切られるT<sub>2</sub>北端部において比較的、遺物点数が多いことが分かり、沢状地形を大まかな境界とした範囲をVI層まで移植ゴテで行う調査区とし、それ以外はバックホーによりVI層中まで掘削する遺構確認調査に切り替えた。

遺構は、住居跡など包含層上面から上位で窪みとして確認できたものは、先行トレンチや土層観察ベルトを設定し、できるだけ遺構構築面の把握や構築面での調査を考慮した。焼土や遺物集中区、炭化物集中区等については、燃焼面や形成面のほぼ全量をフローテーションサンプルとして採取し、平成16・17年度の土壌サンプル量は合計6,000g以上におよんでいる。処理は作業用水の井戸を掘削し、現場期間中にフローテーション処理を行っている。記録図化については光波式トータルステーションを用いて平面形およびエレベーションを記録し、堆積状態については調査担当者が分層と土層注記を行い、技能作業員が堆積図作成の実測を行った。各調査経過は35mm一眼レフカメラで

デジタル・モノクロ・リバーサル・ネガカラーフィルムで写真記録し、一部は6×7中盤カメラでも撮影を行っている。

なお、焼土については、土層の断面実測と燃焼面サンプルを採取後、富山大学 理学部 酒井 英男 研究室の協力、依頼を受け古地磁気年代測定のプロックサンプルを、各焼土につき10点ほど採取している。結果については、次年度以降の本報告に掲載する予定である。

遺物については、全点に遺物番号を付した。取り上げについては調査員による層位確認と段丘堆積物中の自然礫とを認定区分したうえで、光波式トータルステーションによるXYZ座標(XYは旧公共座標)をデジタル記録し、取り上げた。この時、手簿(日付・グリッド・層位・遺物名等)の記載も行い、データ入力ミスの補完を行っている。(乾)

#### 4. 整理作業

一次整理は、一部現場段階から水洗、注記作業を行い、整理業務に入ってから各担当の調査員が調査区遺構名や層位、種別、細分類、分類等の台帳確認作業を行った。また並行して、一部のフローテーション作業と処理後の選別作業も行っている。

二次整理は、遺構図等の第二原因の作成、各種遺物の接合・復元・実測・拓本等の作業を行い、トレース作業・編集については、パソコン(0s Windows Adobe IllustratorCS)で行った。なお、銅鏡や炭化キビ塊などの脆弱遺物については、パソコン上での写真実測を行っている。写真撮影は35mm一眼レフデジタルカメラで行い、パソコン(0s Windows Adobe PhotoshopCS)でのコントラスト補正等を行っている。報告書掲載図や写真図版、一覧表の編集・版組みも上記のソフトで行い、本文のWord文書と合わせて印刷所へデジタル入稿している。

遺物の保管は、報告書掲載のものは図版毎に行い、それ以外のは、分類および調査区毎にコンテナに収納し町内の廃校舎に収蔵している。(乾)

## 第6節 遺物の分類

### 1. 土器

縄文時代早期から弥生文化期までの土器をローマ数字に群別し、アルファベットで時期細分した。なお、縄文時代晩期前葉以前については本書で取り扱っていないことから、群別までの記載とする。

第I群土器 縄文時代早期に属する土器群。

第II群土器 縄文時代前期に属する土器群。

第III群土器 縄文時代中期に属する土器群。

第IV群土器 縄文時代後期に属する土器群。

第V群土器 縄文時代晩期に属する土器群。

第VI類 縄文時代晩期に属する土器群。

A類 晩期前葉の土器群。

A1類 爪形文や刺突文を施すもの。

A2類 大洞B・BC式土器に相当するもの。

B類 晩期中葉の土器群。

B1類 縄線文や円弧文を施すもの。美々3式、

ママチI・II群に相当するもの。

B2類 大洞C1・C2式土器に相当するもの。

C類 晩期後葉の土器群。

C1類 ママチIII・IV・V群に相当するもの。

C2類 大洞A・A'式土器に相当するもの。

第VI群土器 続縄文時代に属する土器群。

A1類 砂沢式・二枚橋式に並存する在地の土器。

- a: 札幌市H37遺跡 丘珠空港地点相当のもの。  
 b: いわゆる沙見式相当。縄線文が施され、地文に帯縄文発達以前の土器。
- A2類 砂沢式・二枚橋式に並存する搬入系土器。  
 a: 砂沢式土器。 b: 二枚橋式土器。
- B1類 アヨロ2類土器並行の土器。  
 a: アヨロ2類 a 相当の土器。  
 b: アヨロ2類 b 相当の土器。
- B2類 アヨロ3類相当の土器。  
 C1類 江別太1~3式土器。  
 C2類 後北B式土器。  
 C3類 後北C<sub>1</sub>式土器。  
 C4類 後北C<sub>2</sub>-D式-D土器。  
 D1類 北大I式土器。  
 D2類 北大II式土器。
- (乾)

### 第VII群土器 縄文文化期に属する土器群。

#### A 北大III式相当

B3e: 無文のもの

#### B 甕形

B3f: 口縁部文様帯に数条の沈線を廻らせたもの

##### B1: 縄文「前期」に相当するもの

主として胴部上半に横走沈線のみを施す一群

B1a: 軽い段により頸部を形成した無文も

しくは数条の横走沈線を廻らすもの

B1b: 多条の横走沈線を施すものもの

##### B2: 縄文「中期」に相当するもの

主として口縁部文様帯が未形成もしくは単調な刻みのみの一群

B2a: 横走沈線を地文とし、刻文を重ねるもの

B2b: 刻文のみのもの

B2c: 無文のもの

##### B3: 縄文「後期」に相当するもの

主として口縁部文様帯を形成した一群

B3a: 横走沈線を地文とするもの

B3b: 綾杉文主体のもの

B3c: 斜文、あるいは縦位の沈線で鋸歯状文、「X」字状文等を施すもの

B3d: 胴部文様帯を3段以上に区画した上でVII B3a~cの文様要素を施したのもの

#### C 坏形

C1: 台部を有さないもの

C2: 平底の低い台部を有するもの

C3: 平底の高台部を有するもの

C4: 上げ底の高台部を有するもの

C3a: 口縁部に沈線を有するもの

C3b: 体部に刻文を施すもの

#### D 壺形

#### E ロクロ成形土器

E1: 甕形

E2: 壺形

E3: 鉢形

E4: 坏形

E3a: 軟質で内面黒色処理を施さないもの

E3b: 軟質で内面黒色処理を施すもの

E3c: 硬質で酸化炭焼成のもの

E3d: 硬質で還元炭焼成のもの

(小野)

## 2. 剥片石器

本書掲載の剥片石器としては下記の火打石のみの出土である。時期は、縄文文化期のものとアイヌ文化期のものが出土している。

火打石 メノウ、チャート、石英（水晶）を石材とし縁辺部等に微細剥離が観察できるもの。

(奈良)

### 3. 礫石器

Ⅲ層からは平成16・17年度の調査で15,058点の自然礫と共に347点の礫石器が出土している。これらの礫石器のうち縄文・続縄文時代の石斧類の混入は極少数にすぎないことから、多くはⅢ層の主体時期である擦文・アイヌ期に帰属するものと考えられる。なお、扁平、棒状・角柱状の分類にあたっては短軸/厚さの比率からの分類を試みたが、素材礫の計測部位が礫の最大数値としたことから、使用部位の形態的特徴を明確な数値として導き出せなかった。このため、担当者の主観で分類したものである。

#### たたき石

敲打痕が面状に形成されるもので、素材礫の形状で細分類を行った。

##### I 平面形が縦長のもの。

###### A: 扁平のもの。

- 1: 素材礫の平坦面に敲打痕を有するもの。
- 2: 素材礫の側縁稜あるいは端部に敲打痕を有するもの。
- 3: 1・2を並存するもの。

###### B: 棒状または角柱状のもの。

- 1: 素材礫の平坦面に敲打痕を有するもの。
- 2: 素材礫の側縁稜あるいは端部に敲打痕を有するもの。
- 3: 1・2が並存するもの。

##### II 平面形が方形～不整形で幅広のもの。

###### A: 扁平のもの。

- 1: 素材礫の平坦面に敲打痕を有するもの。
- 2: 素材礫の側縁稜あるいは端部に敲打痕を有するもの。
- 3: 1・2を並存するもの。

###### B: 棒状または角柱状のもの

- 1: 素材礫の平坦面に敲打痕を有するもの。
- 2: 素材礫の側縁稜あるいは端部に敲打痕を有するもの。
- 3: 1・2が並存するもの。

##### III 平面形が円～楕円形のもの。

###### A: 扁平のもの。

###### B: 球形または棒状のもの。

##### IV 破片のため上記に分類不可のもの。

#### 加工痕のある礫

加工目的の剥離があるもので、剥離加圧(打点)部分に潰打痕が形成されず、側面観が稜線状となるもの。

#### 砥石

素材礫の形状が変形する研磨面を有するもの。

#### 滑沢面のある礫

素材礫の形状を変えず、平滑な面を有するもの。線条痕はほとんど観察できない。

#### 線条痕のある礫

肉眼観察において、明瞭な線条痕があるもの。

#### 台石

便宜的に素材礫の重量が900g以上で、素材礫の平坦面に敲打痕があるもの。

#### 滑沢面と敲打痕のある大型礫

I 表裏面にそれぞれが単独で認められるもの。

II 一面に両方の痕跡が認められるもの。

#### 自然礫

加工痕や明瞭な使用痕が認められないもの。

I 平面形が縦長のもの。

A: 扁平のもの。

B: 棒状または角柱状のもの。

II 平面形が方形～不整形で幅広のもの。

A: 扁平のもの。

B: 棒状または角柱状のもの。

III 平面形が円～楕円形のもの。

A: 扁平のもの。

B: 球形または棒状のもの。

(乾)

## 第二章 アイヌ文化期の調査

上幌内モイ遺跡の平成16・17年度調査のアイヌ文化期における概況は、主な遺構として平地式住居址7軒、人骨を伴う土墓2基、集中区3カ所等を検出している。これらは、擦文文化期終焉後から樽前bテフラ降下以前の年代幅をもつ遺構群である。今回の報告の中において最大の成果としては、調査時の層位関係から、古い時期のアイヌ文化期と新しい時期のアイヌ文化期を捉えることができたことである。また、隣接する遺構間においても遺物の出土層位や出土状態から新旧関係がある程度推定できた。報告書掲載にあたっては、隣接する遺構間を空間的に連結し、新旧関係等を時系列で再検討、構築することを目的に報告書を編集している。(乾)

表Ⅱ-I アイヌ文化期 遺構群一覧表

遺構名	規模 長軸 短軸	主体部 付属施設 短軸	グリッド	層位	長軸 方向	付属遺構				関連 遺構	備 考
						焼土等	土 坑	礫集中	獣骨集中		
ⅢH-01	510	430	V・W-19・20	ⅢbU	N-96° E	ⅢF-04-05	-	ⅢSB-03	ⅢBB-02	-	掲載のⅢH中、最も新しい。
ⅢH-02	605	440	F-32・33, G-32~34.	ⅢbM	N-50° E	ⅢF-39-40	-	ⅢSB-09-10	ⅢBB-12	ⅢB-03 ・04	ⅢH-05より新しい。
	360	175									
ⅢH-03	505	400	I-28~29, J-28~30.	ⅢbM	N-43° E	ⅢF-57-58	-	ⅢSB-15	ⅢBB-14	-	(古)ⅢH03→04→07(新)の新旧
	-	-									
ⅢH-04	485	465	J-27・28, K-27~29.	ⅢbM	N-49° E	ⅢF-43-44	-	ⅢSB-08	ⅢBB-15	-	(古)ⅢH03→04→07(新)の新旧
	305	250									
ⅢH-05	510	405	E-30~32, F-31~33	ⅢbM	N-70° E	ⅢF-66-67	-	ⅢSB-17	-	-	ⅢH-02より古い。
	-	-									
ⅢH-06	590	380	P-27・28, Q-27~29.	ⅢbM	N-51° E	ⅢF-71-72	-	-	-	-	
	-	-									
ⅢH-07	555	455	I・J-25, J・K-26.	ⅢbU	N-71° E	ⅢF-25, ⅢAS-03	PT01	ⅢSB-11-12	-	-	(古)ⅢH03→04→07(新)の新旧
	-	-									
集中区4	880	460	L-29	ⅢbU	-	-	-	-	-	-	
集中区14	700	(450)	J-25	ⅢbU	-	-	-	-	-	-	
集中区19	850	600	L-24・25	ⅢbU	-	ⅢF-29-33	-	-	-	-	

## 第1節 平地式住居址と関連遺構

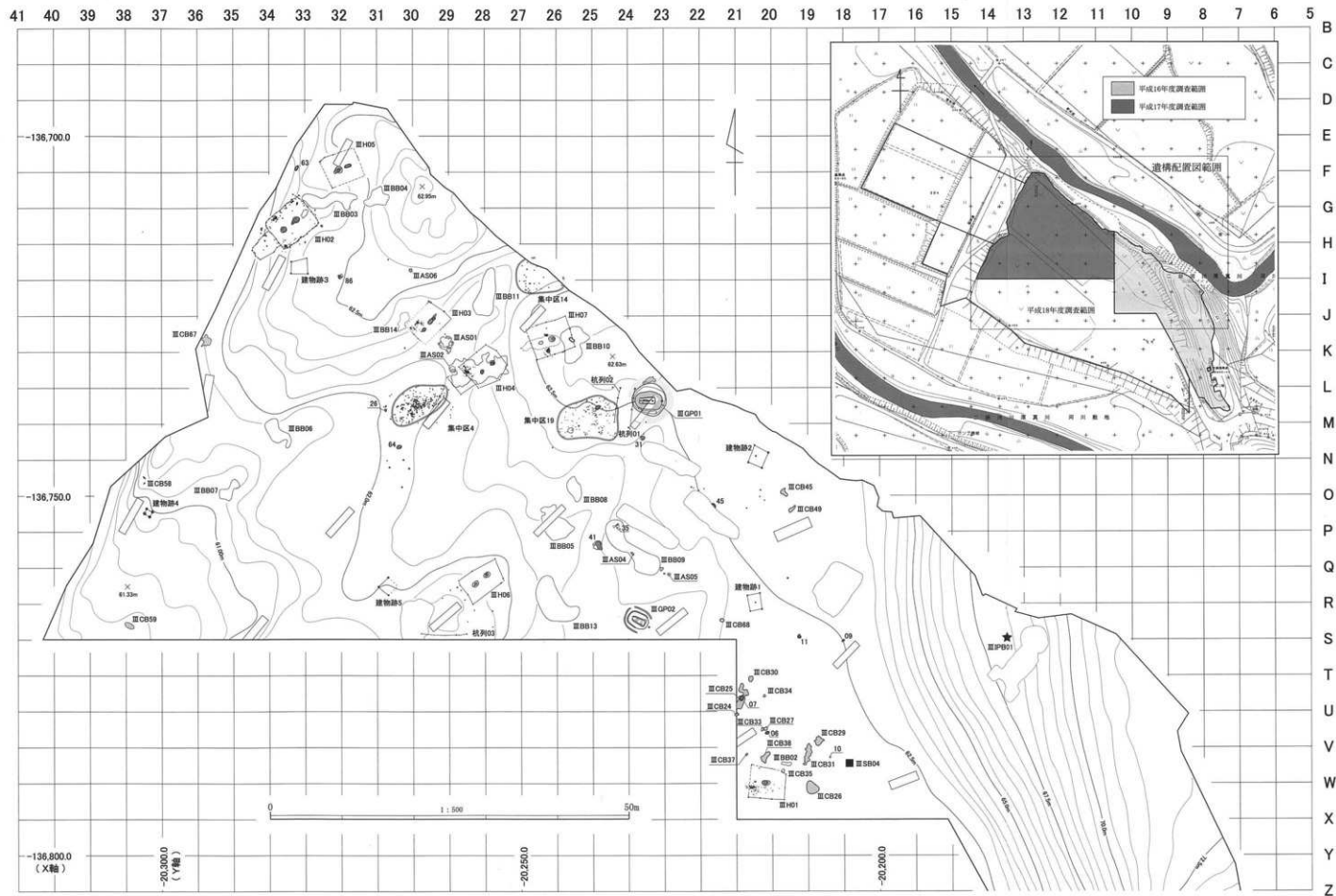
## 1号平地式住居址〔ⅢH-01〕 (図Ⅱ-2~4 図版4-1~5 図版5-1~9)

位 置：V・W-19・20区 規 模：510×430 cm

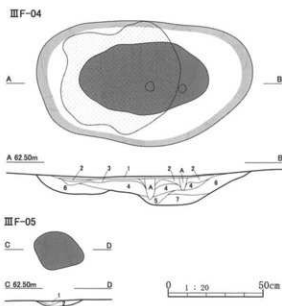
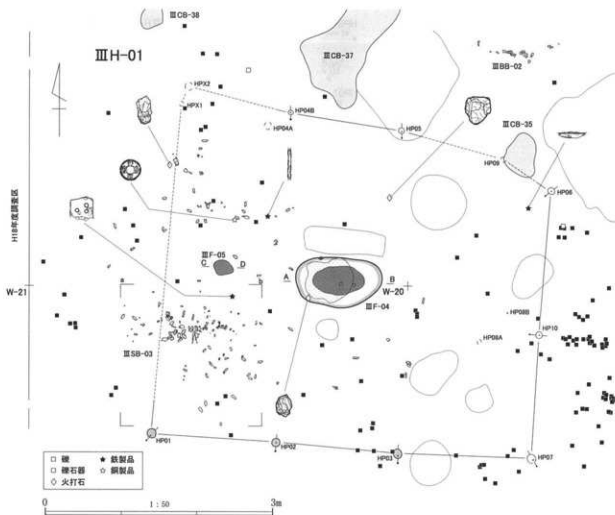
長軸方向：N-96° E 付属遺構：炉跡 ⅢF-04・05 礫集中 ⅢSB-03

関連遺構：獣骨集中 ⅢBB-02

確認・調査(図Ⅱ-2)：V・W-20区のⅢa層を除去した段階で、東西方向に直線上に並ぶⅢF-04・05と同一面の南側に密集度の低い集石(ⅢSB-03)を検出した。ⅢF-04は灰層を伴い、規模も大きいことから、平地式住居址を想定した調査に切り替えた。付属炉検出し、同一面の遺物出土状態の実測・撮影・取り上げ後、付属炉を半載し諸記録を行った。その後、付属炉周辺を床面レベルで台状に残したうえで、周囲をⅢc層上位からⅣ層中位まで掘削し、柱穴確認作業を進めた。主体部を構成する柱穴列は南側で明瞭に確認でき、これを参考に北側列や東西列、付属施設である「前小屋(セム)」を構成する柱穴の検出作業を行った。柱穴認定後、付属炉と配列する柱穴で完掘状態の撮影を行った後、付属炉周辺の床面土壌サンプルを回収し、全てをⅣ層上面まで掘り下げ、調査を終了した。



図II-1 アイヌ文化期遺構配置図



- III F-04**
1. 10YR3/1 黒褐色 IIIa - 焼骨片 = 灰(面状)炭化物  
下底面が焼土熱地面
  2. 7.5YR3/1 黒褐色 IIIa - 焼骨片 = 灰(均一)炭化物  
A坑周囲は引き込まれ有
  3. 7.5YR6/2 灰褐色 灰層 = 焼骨片しまり層
  4. 7.5YR6/8 褐色 焼土(III)地山被熱層
  5. 7.5YR4/6 褐色 焼土(IV)地山被熱層
  6. 10YR2/2 黒褐色 IIIc = 焼骨片・炭化物
  7. 10YR3/2 黒褐色 IV層 = 炭化物  
IIIa 10YR4/2 灰黄褐色 黒層 = 黒色土(しまり)粘性なし  
III F-04より新しい時期の坑穴

- III F-05**
1. 7.5YR4/3 褐色 焼土(III)地山被熱層  
= 焼骨片・炭化物(上面)
  2. 7.5YR4/3 褐色 焼土(弱い)III)地山被熱層

図Ⅱ-2 1号平地式住居(IIIH-01)平面図及び付属炉跡





図II-3 1号平地式住居址柱穴断面及び集石

付属炉(図Ⅱ-2)：灰層を伴うⅢF-04と小規模なⅢF-05の2基で、長軸方向を東西に揃え直線上に並ぶ位置関係で検出した。ⅢF-04は焼骨片を含むⅢa層(1層)を被覆し、中央部が緩やかに窪む皿状で検出した。炭化物を含む燃焼部層位である2層は中央部に認められず、灰層(3層)が下層に認められることや地山被熱層(4層)の規模に対し、灰層の土量が少ないことなどから、灰層の掻き出しを行っていると思われる。なお、断面図A層は当住居址廃絶後に打ち込まれた杭跡で、覆土が耕作土であることから、開拓期以降のものである。ⅢF-05は燃焼面が残るが、面長軸が14cm、厚さ4cmと小規模で、灰層を伴わないことからⅢF-04と性格の異なる付属炉と思われる。

表Ⅱ-2 ⅢH-01属性表

挿図 番号	図版 番号	遺構名	グリッド	層位	長軸方向	規模(cm)				柱穴		付属遺構	
						主体部		付属部		本数			
						長軸	短軸	長軸	短軸	主体	付属		他
Ⅱ-2	4-1	ⅢH-01	V-W-19-20	Ⅲa-ⅢbU	N-96°-E	510	430	-	-	8	-	3	挿12 集石1

表Ⅱ-3 ⅢH-01付属炉属性表

挿図 番号	図版 番号	遺構名	グリッド	層位	タイプ	平面形	規模(cm)			灰・骨片 の有無	備考
							長軸	短軸	厚さ		
Ⅱ-2	4-5	ⅢF-04	V-W-20	ⅢbU	炉	楕円形	114	66	15	灰・骨	
Ⅱ-2	5-1	ⅢF-05	V-20	ⅢbU	炉	楕円形	26	22	3	骨	

表Ⅱ-4 ⅢH-01柱穴属性表

挿図 番号	図版 番号	遺構名	規模(cm)			傾き (度)	タイプ	備考
			上端	下端	深さ			
Ⅱ-3	5-3	HP01	12	1	38	6°	打込み	
Ⅱ-3	5-4	HP02	11	2	40	1°	打込み	
Ⅱ-3	5-5	HP03	13	2	49	3°	打込み	
Ⅱ-3	5-6	HP04	6	1	9	2°	打込み	
Ⅱ-3	5-8	HP05	8	1	18	3°	打込み	
Ⅱ-3	-	HP06	9	1	28	0.5°	打込み	
Ⅱ-3	5-9	HP07	12	3	19	8°	打込み	
Ⅱ-3	-	HP10	9	1	18	1°	打込み	

表Ⅱ-5 ⅢSB-03礎属性表

挿図 番号	図版 番号	個体 名称	遺物 番号	層位	状態	計測値(mm)					長短比 標準 偏差	長短比 偏差	重量(g)	被熱	材質	備考		
						長軸	標準 偏差	短軸	標準 偏差	厚さ							標準 偏差	
Ⅱ-3-1	78-9	-	425	ⅢbU	完形	59.1	(5.4)	25.1	(4.8)	20.4	3.5	2.4	0.1	37.2	被熱	Sa.		
Ⅱ-3-2	78-9	-	1086	ⅢbU	完形	58.4	(6.1)	35.0	5.1	19.8	2.9	1.67	(0.55)	49.2	被熱	Sa.		
Ⅱ-3-3	78-9	3S0049	1059他	ⅢbU	欠損	(61.0)	-	31.9	-	18.0	-	1.91	-	28.8	被熱	Mud.	他1点	
Ⅱ-3-4	78-9	-	1112	ⅢbU	完形	65.9	1.4	33.9	4.0	17.9	1.0	1.94	(0.28)	53.6	-	Sa.		
Ⅱ-3-5	78-9	-	1084	ⅢbU	完形	67.4	2.9	39.2	9.3	15.4	(1.5)	1.72	(0.50)	49.9	-	Sa.		
Ⅱ-3-6	78-9	3S0050	1077他	ⅢbU	完形	75.6	11.1	39.9	10.0	13.8	(3.1)	1.89	(0.33)	41.6	被熱	Sa.	他1点	
Ⅱ-3-7	78-9	-	1182	ⅢbU	完形	72.3	7.8	42.4	12.5	23.2	6.3	1.70	(0.52)	78.0	-	Mud.		
Ⅱ-3-8	78-9	-	1065	Ⅲa	完形	70.9	6.4	30.2	0.3	21.5	4.6	2.35	0.13	57.8	被熱	Sa.		
Ⅱ-3-9	78-9	-	1099	ⅢbU	完形	73.1	8.6	31.2	1.3	19.0	2.1	2.34	0.12	32.3	-	Mud.		
Ⅱ-3-10	78-9	-	1011	ⅢbU	完形	74.3	9.8	30.2	0.3	18.4	1.5	2.46	0.24	51.9	-	Sa.		
Ⅱ-3-11	78-9	-	1094	ⅢbU	完形	80.5	16.0	25.5	(4.4)	15.9	(1.0)	3.16	0.94	39.4	-	Sa.		
Ⅱ-3-12	78-9	3S0048	1056他	ⅢbU	完形	145.3	80.8	63.4	33.5	38.4	21.5	2.29	0.07	376.0	被熱	Sa.	他1点	
-	-	-	1074	ⅢbU	完形	49.8	(14.7)	30.9	1.0	14.6	(2.3)	1.61	(0.61)	32.1	-	Sa.		
完形合計						3998.1	838.7	1853.3	456.4	1048.8	233.8	137.67	25.01	2,743.1				
完形平均値						64.5	13.5	29.9	7.4	16.9	3.8	2.22	0.40	44.2				
遺物総重量																4,487.1		

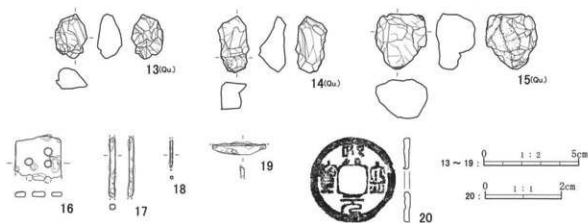
※完形 62点

柱 穴(図Ⅱ-3)：認定できた柱穴は8本である。他にIV層上位にて検出したⅢb層の柱穴状の落ち込みは半截の結果、根穴と判断したものである。主体部構造上、位置的に想定できるものであることから、主体部平面形の推定線として結線した。柱穴の検出は、南側列において比較的容易であった。しかし、北側列は不明瞭であったことから、南側列と付属炉の位置関係より推定した範囲を中心に重点的に精査した結果、検出できたものである。また、HP01-07は付属炉方向へ傾く「外ふんばり」を呈していることから主体部の角に位置する柱穴と思われる。南側の柱穴列を構成する4本(HP01-02-03-07)は160～175cmのほぼ等間隔で、付属炉に対し「外ふんばり」の傾斜である。なお、前小屋部分の柱穴は検出できなかった。

遺物出土状態(図Ⅱ-2)：ⅢSB-03を含む床面遺物は、入り口側と思われる西側に偏る傾向にあるが散逸した状態で出土している。この範囲からは、火打石(14)や小札(16)、針?(17)、古銭(20)が出土している。針と古銭は約40cmの距離で比較的近位置の出土で、セット関係の可能性がある。ⅢF-04からは火打石(15)とフローテーションでの回収遺物として針(18)が出土している。

出土遺物(図Ⅱ-4)：1～12はⅢSB-03の構成礫で、未掲載の完形資料も含めた全点で62点が出土している。長短比の平均値が2.22で、棒状礫で構成されている。13～15は火打石である。長軸が約30mm以下の塊状で、無色透明の石英結晶(水晶)を使用している。結晶頂部に磨耗痕が観察できる。16は折損した小札で破損部も含め5穴が認められる。17は断面形が約2mm四方の方形を呈する針状鉄製品である。一般的な縫い針ではなく、作業用の針の一部と思われる。18は断面形が円形の縫い針で直径が約1mmの縫い針で、針孔と先端部の一部が欠損している。19は板状の鉄片、20は篆書体の「熙寧元寶」(北宋 初鋳年1068年)で、器表面は若干摩滅している。

関連遺構(図Ⅱ-57)：ⅢBB-02は本住居址の北側柱穴列から北へ約1mの距離に位置している。ジョレンによるIV層除去中に検出したことから、V層上面を坑底とする掘り込みに廃棄されたものと思われる。四肢骨を主体に構成されており、後述するⅢBB-14(図Ⅱ-33)と同じタイプと思われる。



図Ⅱ-4 1号平地式住居址出土遺物

表II-6 IIIH-01出土遺物属性表

神田 番号	図版 番号	個体 名称	遺物 番号	遺物名	分類	層位	遺構名	グリッド	計測値(mm)			重量(g)	材質	備考
									長軸	短軸	厚さ			
II-4-13	78-1	-	1222	火打石	-	IIIbU	III F-04	W-20	17.0	23.5	18.0	4.8	Qu.	
II-4-14	78-2	-	1054	火打石	-	IIIbU	-	V-20	30.0	11.5	14.0	7.3	Qu.	
II-4-15	78-3	-	1053	火打石	-	IIIbU	-	V-20	29.5	22.0	21.0	17.7	Qu.	
II-4-16	78-4	-	1017	小札	-	IIIaL	-	W-20	(23.0)	24.0	2.2	4.3	Fe	
II-4-17	78-5	-	3418	針?	-	IIIbU	-	V-20	(32.0)	2.4	2.0	1.1	Fe	
II-4-18	78-6	-	18618	針	-	IIIbU	III F-04	W-20	(14.8)	1.3	1.0	0.1	Fe	FLT40
II-4-19	78-7	-	465	板状鉄片	-	IIIbU	-	V-19	(23.5)	(7.0)	2.0	1.3	Fe	
II-4-20	78-8	-	3416	古銭	-	IIIbU	-	V-20	22.2	22.0	1.8	3.1	Cu	

## 2号・5号平地式住居址周辺の概況 (図II-5)

2号・5号平地式住居址は河岸段丘面 T<sub>2</sub> の北西側縁辺部に立地し、いずれも付属炉の長軸方向が南西-北東軸である。住居址間の位置関係はそれぞれの付属炉跡間で約8mの距離にあり、比較的近い位置にある。新旧関係は付属炉灰層の残存状態や遺物の出土状態から5号住居址が古く、2号住居址が新しいと考えられる。このことは第V章第1節の年代測定結果からも肯定できる。周辺の遺構として、獣骨集中3・4がある。いずれも、黒色土を被覆するIIIb層中位からの検出である。住居址との位置関係や出土状態などから2号平地式住居址と並存するものと思われる。他に住居址の北西にIII F-63、2号住居址の南に隣接して建物跡5がある。いずれも住居址との時間的關係は不明である。

## 2号平地式住居址 [IIIH-02] (図II-5~11 図版6-1~5・7-1~9)

位置: F・G-32, F・G-H-33, G・H-34区

規模: [全体] 965×440cm [主体部] 605×440cm [付属施設] 360×175cm

長軸方向: N-50° E

付属遺構: 炉跡 III F-39・40・51 集石 III SB-09・10 焼骨片集中 III BB-12

関連遺構: 獣骨集中 III BB-03・04

確認・調査(図II-5・6): 火山灰除去中に H-33・G-34 区等のIII層上面で内耳鉄鍋の一部(18)や大型礫等を検出した。IIIa層を除去したところ、長軸が同一の直線上に位置する付属炉2カ所(III F-39・40)のやや土壌化した灰層頂部と集石2カ所(III SB-09・10)を検出した。この時点で、大型礫などの遺物が付属炉を「コ」の字状に取り囲む状態で出土しており、平地式住居址を想定して調査を開始した。遺物群を住居址の屋内と考え、付属炉に対し外側のIIIb層の調査を先行し、柱穴の検出作業を行った。同時に、付属炉およびIII SB-09・10や住居址床面の調査も行い、III F-39に付随する小規模なIII F-51や焼骨片集中のIII BB-12を検出した。柱穴の多くはIIIc層上位でIIIb層落ち込みとして検出。散水・乾燥での観察や、スタッフを用いての配列を想定した上での精査を行い、いわゆる前小屋(セム)と考えられる付属施設も確認できた。住居址全体の平面形が判明したことから、III H-02と設定し、検出時点で柱穴番号を付し、平面形の記録とセクションラインの設定、一部検出状態の撮影を行った。柱穴の調査は、全てを半載し、断面を確認してから認定を行った。柱穴確定後に半載残存の付属炉と柱穴群を残した状態で完掘状態を撮影し、調査を終了した。

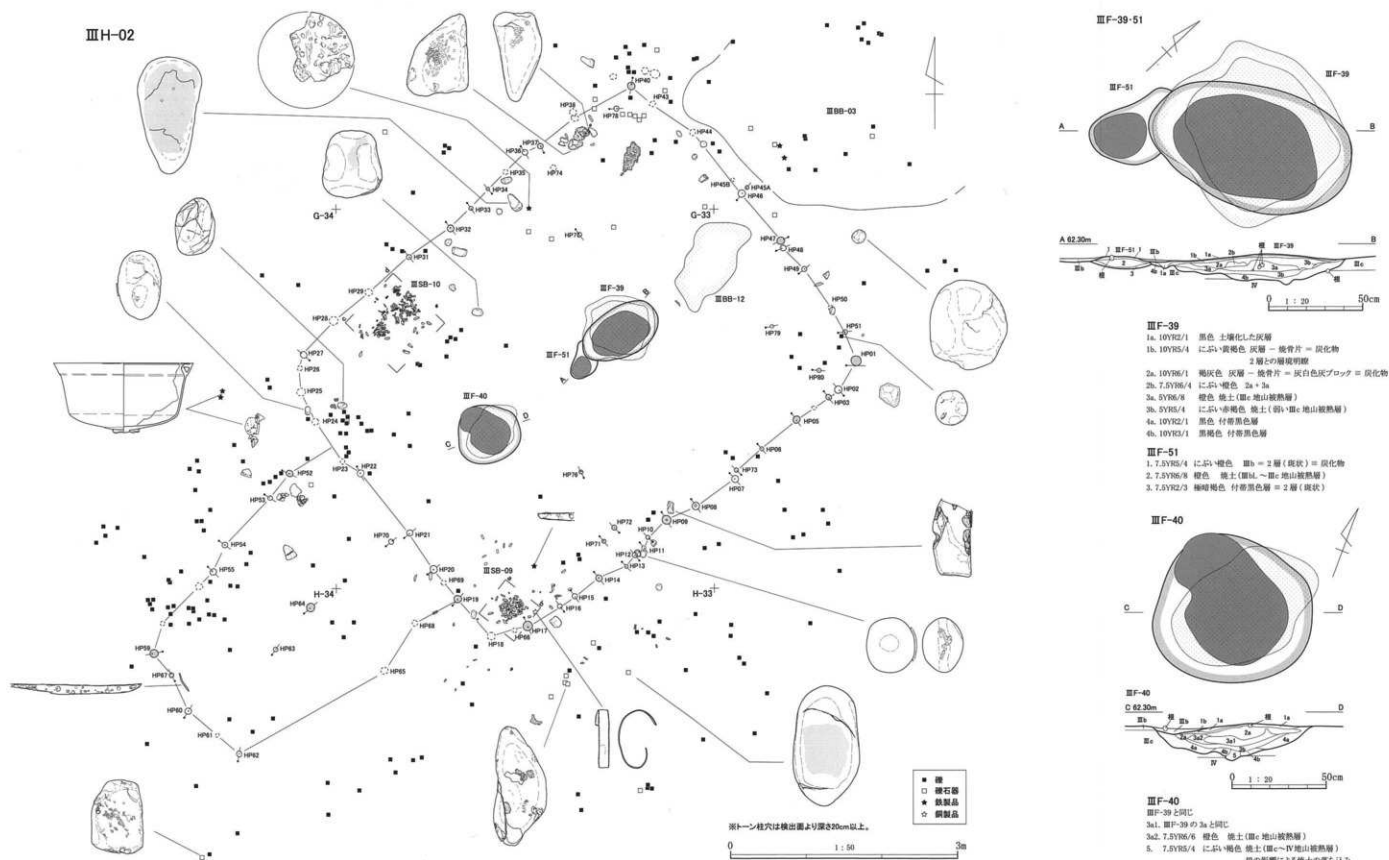
付属炉(図II-6): 灰層を伴うIII F-39・40と小規模なIII F-51の3基を検出した。いずれも住居址の長軸中央に直線状に位置する。III F-39・40は共通した属性で、IIIb層を被覆し、灰層の平面形が楕円

形で、マウンド状に堆積している。断面観察では灰層の縁辺部や上層(1a層)は、土壌化が進み粘性が強い。灰層(2a・b層)とⅢc層の地山被熱層(3a・b層)との境界は明瞭に分層できるが、炭化物を伴う燃焼面が認められないことから、使用時において攪拌する行為がなされていたものと思われる。また、ⅢF-39の半載調査中に長軸延長線上南西側に隣接して小規模なⅢF-51を確認した。ⅢF-51は灰層を伴わないものの、上層に層厚1cm以下の炭化物を含む燃焼面が確認できた。しかし、被熱赤色化の度合いは低く、にぶい橙色である。2基の焼土と性格が異なるものと思われる。これらの焼土周辺に礫や丸太材などの抜き取り痕などに注意したが、認められなかった。

柱穴(図Ⅱ-7)：Ⅲc層上面からⅣ層上位で検出した円形のⅢb層落ち込みは74カ所である。北西列は不明瞭であったことからⅣ層上位にて検出し、半載の結果も浅いものや柱穴と認定できなかったものが多かった。しかし、住居の構造上、これらの検出した落ち込みは柱穴列を構成するものと思われ、調査技術の問題や地山層の状態によるものと思われる。ただし、ⅢH-01の北側柱穴列も同様な状態であったことから、住居の構造上の特徴の可能性もある。柱穴と認定できたものは53本で、全て打ち込み杭であった。検出面からの深さ20cm以上の主柱穴状ものが24本、20cm以下のもの支柱穴状ものが29本である。主体部を構成する柱穴は42本、前小屋を構成するものは11本、主体部の内部に検出したものが6本である。主体部構成の南東列と北東列はⅢc層中で確認でき、直径10cm前後の主柱穴状のものと5cm前後の支柱穴状のものを検出した。支柱穴状のものはⅢb層が先端部まで落ち込むものが主体である。主柱穴状のものは付属炉方向へ傾斜するものが多く、南東列では115~125cm間隔で配列され(HP01・05・73・09・14・17)、この間を1~2本で補完する支柱穴(HP02・03・06・07・10・13・15・16)を検出している。北東面では、付属炉長軸上に2本1対の主柱穴状のものを検出したが、構成柱穴自体が少数であった。南西列は付属炉長軸延長上には柱穴間がやや広いHP21・22があり、出入口部と思われる。南西方向に張り出す付属施設の柱穴は検出段階で16本、うち認定できたもの11本であった。配列は、付属施設の南西列がやや短く、台形状となる。このうち、HP70・64・63の3本は付属施設の中央部付近に直線状に配列されている。HP64は深さ33cmで付属施設全体の中央部に位置することから、付属施設の構造上、重要な柱であったものと思われる。主体部内の柱穴は明瞭な配列を確認できなかったものの、直径が5~7cm、深さが9cm以上である。うち、HP76・77はⅢF-39を中心に対照する位置にあり、セット関係と思われる。これら以外は壁構成列に近く、構造上の柱穴と別な性格のものと思われる。この他、柱穴として認定できなかったものの、北コーナー付近のHP38は新旧切り合いのある落ち込みとして確認できたものであった。

遺物出土状態(図Ⅱ-6・11)：付属炉周辺からの出土はほとんど無く、壁を構成する柱穴列の内側に大型礫や礫石器、金属器などが出土している。検出した2基の礫集中は主体部の入り口側に位置し、ⅢSB-09は南側コーナーに密集した状態で検出した。これらの礫集中は棒状礫で構成され、完全形品長軸平均値(標準偏差平均)および長短比はⅢSB-09で約65(5.9)mm・2.5(0.40)、ⅢSB-10で70(9.1)mm・2.7(0.47)で、選択的に持ち込まれ、使用されていることが伺える。また、これらの遺物と同一面、同じ分布で未被熱の獣骨も少数出土しており、伴うものと思われる。特筆する遺物として、北西柱穴列北側付近からは円板状鉄製品が出土している。付属施設からは、柱穴南西列内側で付属炉の延長直線上の位置から比較的大型の刀子が出土している。根穴に落ち込んだ状態で出土しているが、付属施設の壁面に掛けられていた可能性もある。この他、住居構成の柱穴列から外れる範囲で西コーナーから内耳鉄鍋、南側からは台石などの遺物群が出土している。これらも、床面と





図Ⅱ-6 2号平地式住居(ⅢH-02)平面図及び付属炉跡

表Ⅱ-7 ⅢH-02属性表

棟号	図版番号	遺構名	グリッド	層位	長軸方向	規模(cm)		柱穴		付属遺構		
						主体部	付属部	本数				
						長軸	短軸	短軸	主体		付属	他
Ⅱ-6	6-1	ⅢH-02	F-C-F-C-F-C 33.0-44.34	ⅢbM	N-50°-E	605	440	360	175	54	16	9

表Ⅱ-8 ⅢH-02付属炉属性表

棟号	図版番号	遺構名	グリッド	層位	タイプ	平面形	規模(cm)			灰・骨片の有無	備考
							長軸	短軸	厚さ		
Ⅱ-6	7-1	ⅢP-39	G-33	ⅢbM	炉	横円形	110	60	16	灰・骨	
Ⅱ-6	7-3	ⅢP-40	G-33	ⅢbM	炉	円形	86	82	18	灰・骨	
Ⅱ-6	7-2	ⅢP-51	G-33	ⅢbM	炉	横円形	50	34	6	-	

表Ⅱ-9 ⅢBB-12属性表

棟号	図版番号	遺構名	グリッド	層位	平面形	規模(cm)		主体部位	被熱の有無	関連遺構	備考
						長軸	短軸				
Ⅱ-6	-	ⅢBB-12	G-32・33	Ⅲa~ⅢbM	横円形	132	72	不明	被熱	ⅢH-02	

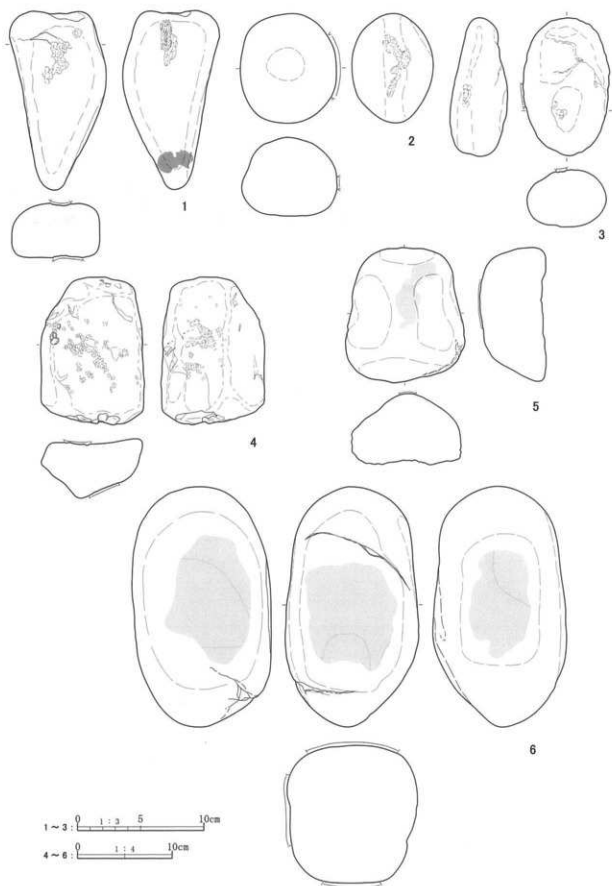


図Ⅱ-7 2号平地式住居址柱穴断面図



表Ⅱ-10 ⅢH-02柱穴属性表

棟号	図版番号	遺構名	規模 (cm)			傾き (度)	タイプ	備考
			上端	下端	深さ			
Ⅱ-7	7-8	HP01	14	3	61	2°	打込み	
Ⅱ-7	-	HP02	9	2	16	6°	打込み	
Ⅱ-7	-	HP03	8	1	20	2°	打込み	
Ⅱ-7	-	HP05	9	1	22	4°	打込み	
Ⅱ-7	-	HP06	5	1	12	1°	打込み	
Ⅱ-7	-	HP07	9	1	24	1°	打込み	
Ⅱ-7	-	HP08	10	5	15	3°	打込み	
Ⅱ-7	-	HP09	12	3	58	0°	打込み	
Ⅱ-7	-	HP10	5	1	17	7°	打込み	
Ⅱ-7	-	HP11	6	2	15	4°	打込み	
Ⅱ-7	-	HP12	7	1	17	2°	打込み	
Ⅱ-7	-	HP13	5	1	7	2°	打込み	
Ⅱ-7	-	HP14	9	1	46	1°	打込み	
Ⅱ-7	-	HP15	7	1	12	12°	打込み	
Ⅱ-7	-	HP16	6	1	15	9°	打込み	
Ⅱ-7	-	HP17	12	3	40	2°	打込み	
Ⅱ-7	-	HP19	10	1	23	1°	打込み	
Ⅱ-7	-	HP20	10	2	19	2°	打込み	
Ⅱ-7	-	HP21	8	2	29	4°	打込み	
Ⅱ-7	-	HP22	9	2	10	1°	打込み	
Ⅱ-7	7-6	HP27	9	1	21	10°	打込み	
Ⅱ-7	-	HP31	6	2	11	6°	打込み	
Ⅱ-7	7-7	HP32	9	2	36	1°	打込み	
Ⅱ-7	-	HP33	5	3	11	4°	打込み	
Ⅱ-7	-	HP34	4	1	10	2°	打込み	
Ⅱ-7	-	HP36	7	1	10	8°	打込み	
Ⅱ-7	-	HP37	7	1	24	1°	打込み	
Ⅱ-7	-	HP40	10	2	39	4°	打込み	
Ⅱ-7	7-5	HP45	10	2	59	0°	打込み	
Ⅱ-7	7-5	HP46	5	1	10	2°	打込み	
Ⅱ-7	-	HP47	11	2	53	6°	打込み	
Ⅱ-7	7-5	HP48	7	2	25	3°	打込み	
Ⅱ-7	7-5	HP49	7	1	15	1°	打込み	
Ⅱ-7	-	HP51	7	1	10	2°	打込み	
Ⅱ-7	-	HP52	9	1	29	0°	打込み	
Ⅱ-7	-	HP53	6	1	8	3°	打込み	
Ⅱ-7	-	HP54	7	2	11	1°	打込み	
Ⅱ-7	-	HP55	8	2	16	7°	打込み	
Ⅱ-7	-	HP59	11	2	32	3°	打込み	
Ⅱ-7	-	HP60	8	1	12	0°	打込み	
Ⅱ-7	-	HP62	8	1	12	1°	打込み	
Ⅱ-7	-	HP63	6	2	12	3°	打込み	
Ⅱ-7	7-9	HP64	11	2	33	3°	打込み	
Ⅱ-7	-	HP67	6	1	28	4°	打込み	
Ⅱ-7	-	HP70	6	2	26	5°	打込み	
Ⅱ-7	-	HP71	5	1	16	2°	打込み	
Ⅱ-7	-	HP72	7	1	21	1°	打込み	
Ⅱ-7	-	HP73	6	1	35	2°	打込み	
Ⅱ-7	-	HP76	5	1	21	1°	打込み	
Ⅱ-7	-	HP77	6	2	9	5°	打込み	
Ⅱ-7	-	HP78	7	2	12	3°	打込み	
Ⅱ-7	-	HP79	5	1	17	3°	打込み	
Ⅱ-7	-	HP80	6	1	16	0°	打込み	



図Ⅱ-8 2号平地式住居址出土遺物(1)

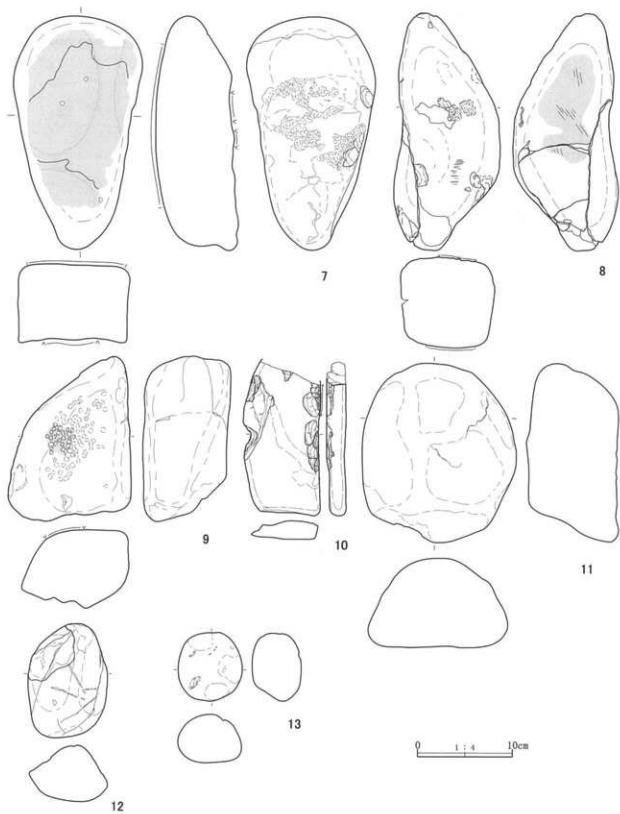
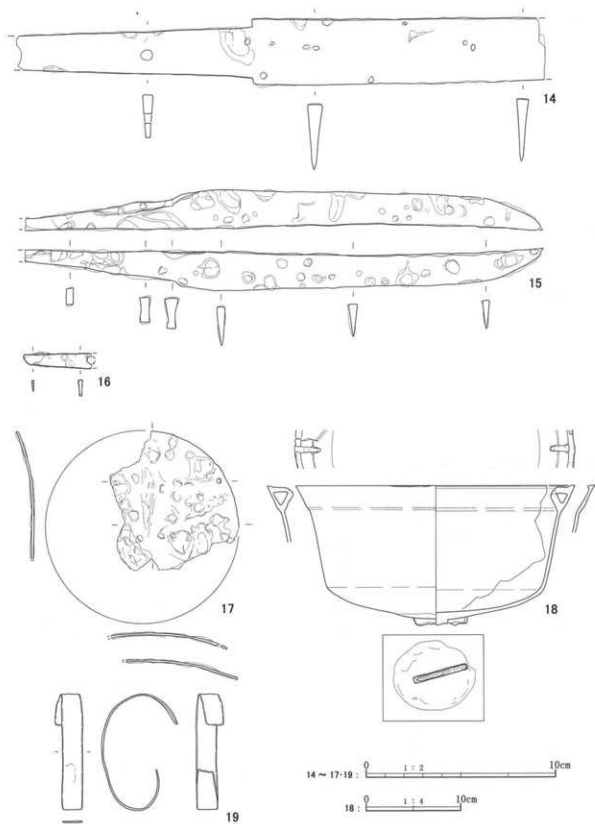
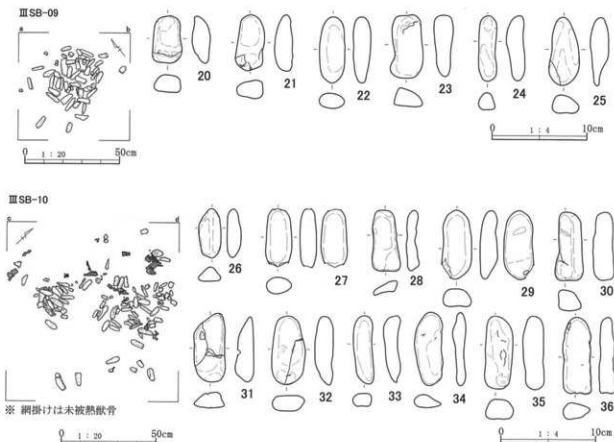


图 II-9 2号平地式住居址出土遺物(2)



図II-10 2号平地式住居址出土遺物(3)



図Ⅱ-11 2号平地式住居址床面遺物出土状態及び出土遺物(4)

表Ⅱ-11 ⅢH-02出土遺物属性表

神図 番号	図版 番号	個体 名称	遺物 番号	遺物名	分類	刷位	遺構名	グリッド	計測値(mm)			重量(g)	材質	備考
									長軸	短軸	厚さ			
Ⅱ-8-1	79-1	-	33673	たたき石	I A3	ⅢbM	-	F-33	142.0	72.0	69.0	633.0	Sa.	
Ⅱ-8-2	79-7	-	24106	たたき石	ⅢB2	ⅢbM	-	G-33	87.0	77.0	62.0	598.0	Gra.	
Ⅱ-8-3	79-3	-	24150	たたき石	ⅢB1	ⅢbL	-	G-34	110.0	69.0	45.0	448.0	Gra.	
Ⅱ-8-4	79-2	-	24201	台石	-	ⅢbM	-	H-34	155.0	109.0	63.0	1,498.0	Sa.	
Ⅱ-8-5	79-4	-	24058	自然礫	Ⅱ A	ⅢbM	-	G-33	151.0	141.0	70.0	1,862.0	Gra.	
Ⅱ-8-6	79-10	-	24131	滑沢面のある礫	-	ⅢbM	-	H-33	253.0	142.0	145.0	8,280.0	Sa.	
Ⅱ-8-7	79-9	-	24047	滑沢面と敲打痕のある大型礫	I	ⅢbM	-	F-33	246.0	134.0	86.0	404.0	Sa.	
Ⅱ-8-8	79-8	3ST0001	24136他	滑沢面と敲打痕のある大型礫	Ⅱ	ⅢbM	-	H-33	250.0	117.0	95.0	3,340.0	Sa.	他2点
Ⅱ-9-9	79-6	-	33674	滑沢面と敲打痕のある大型礫	Ⅱ	ⅢbM	-	F-33	193.0	134.0	90.0	2,640.0	Sa.	
Ⅱ-9-10	79-5	-	24110	加工痕のある礫	-	ⅢbM	-	G-33	162.0	82.0	19.0	361.0	Sa.	
Ⅱ-9-11	80-11	-	33677	自然礫	Ⅱ A	ⅢbM	-	G-32	189.0	164.0	95.0	4,240.0	Gra.	
Ⅱ-9-12	80-12	-	24060	自然礫	Ⅲ B	ⅢbM	-	G-33	123.0	81.0	83.0	751.0	Sa.	
Ⅱ-10-13	80-13	-	24006	自然礫	Ⅲ B	ⅢbM	-	G-32	73.0	68.0	51.0	348.0	Gra.	
Ⅱ-10-14	80-16	-	20006	刀基部	-	ⅢbU	-	F-33	(420.0)	51.0	12.5	89.7	Fe	
Ⅱ-10-15	80-17	-	28093	刀子	-	ⅢbM	-	H-34	(411.0)	33.0	7.0	28.0	Fe	
Ⅱ-10-16	80-18	-	24111	刀子茎	-	ⅢbM	-	G-33	(57.0)	12.0	2.0	1.9	Fe	
Ⅱ-10-17	80-20	-	20380	円板状	-	ⅢbU	-	F-33	(105.0)	(105.0)	10.9	20.5	Fe	他2点
Ⅱ-10-18	80-19	-	20001他	内耳鉄鑄	-	ⅢbM	-	G-34	294.0	148.0	3.0	2.0	Fe	他2点
Ⅱ-10-19	80-21	-	20516	刀装具	-	ⅢbU	ⅢSB-09	H-33	61.0	10.0	40.0	36.3	Cu	
-	80-15	-	33671	自然礫	-	ⅢbM	-	F-33	235.0	165.0	65.0	3,420.0	Qu.	大石目 滑沢面
-	80-14	-	24036	滑沢面のある礫	I B	ⅢbM	-	F-33	87.0	52.5	38.4	278.0	Gra.	

同一面であることから同時期のものと思われる。全体として床面の遺物出土状態に“まとまり”を看取できることから、住居廃絶後の擾乱を受けず、ほぼ原位置を保っているものと思われ、良好な一括遺物群と考えられる。

出土遺物(図II-8~11)1~3はたたき石で、いずれも比較的細かい敲打痕、4は台石で表裏面に明瞭な敲打痕が観察できる。5・6は滑沢面のある礫で、5は素材礫の表面の稜部分を使用し、6は長軸253mmと大型の角柱状礫で3面に明瞭な使用痕が認められる。7~9は滑沢面・敲打痕が認められる大型礫で、8は比較的軟質の砂岩で線条痕も観察できる。これらの滑沢面は、素材礫の他の転礫面と異なり、凹凸が少なく、光沢を有している。特に、礫岩の礫表面に突出する構成小礫が平坦となり、一定方向の微細線条痕が観察できるものがある。これらは対象物が軟質な植物性あるいは動物性の有機質素材の加工等の作業に使用された可能性が高い。10は加工痕のある礫で、左側縁に折り状の加工と右側縁に連続する剥離加工が施されたもので、敲打面は形成されていない。10~12は、自然礫で花崗岩や硬質の砂岩で、使用痕は観察できないものの規模・形態的に、台石やたたき石として使用されていた可能性がある。その他、図示はしていないが、住居北コーナーの位置からたたき石(1)と滑沢面および敲打痕のある礫(9)に挟まれる状態で長軸235mm、重量3,420gの石英の大型自然礫(図版80-15)が出土している。鍾洞中には無色透明の水晶が形成されている。アイヌ文化期の火打石では、この種の石材が利用されている(IIIH01・図II-4-23~25)ことから、素材として持ち込まれた可能性がある。14は刀基部で平棟平造りの両区で、茎は直線状で目釘穴が作出され、断面形も刀身部同様に刃部側が薄くなる台形状を呈している。遺跡内出土の刀子と比較して良好な資料である。15は茎の一部が欠損しているがほぼ完形の資料で、長軸272mmの大型の刀子である。切先がやや反り、刀身基部付近で刃縁がやや湾入することから、数度にわたって研ぎ直しが行われたものと思われる。中茎部分は断面形が長方形を呈し、目釘穴も作出されていない。また、刀身基部から茎部分にかけて刃縁からの“折り返し”が認められる。これらのことから刀剣類の再加工作品と思われる。16は目釘穴を有する刀子茎。17は実測破片の他9点の破片が出土している。推定直径153mm、厚さ2mmの円板状鉄製品で、直径約2mmの孔1カ所を有する。縁辺部には折り返し等の加工が認め

表II-12 III SB-09礫属性表

種号	図版番号	個体名称	遺物番号	層位	状態	計測値(mm)						長短比		重量(g)	被熱	材質	備考			
						長軸	標準偏差	短軸	標準偏差	厚さ	標準偏差	長短比	標準偏差							
II-11-20	81-22	-	23278	IIIbU	完形	59.0	-5.6	30.0	3.0	18.0	0.2	1.97	-0.49	44.5	-	Sa				
II-11-21	81-22	-	23281	IIIbU	完形	70.0	5.4	27.0	0.0	18.0	0.2	2.59	0.13	44.0	-	Sa				
II-11-22	81-22	-	23280	IIIbU	完形	66.0	1.4	34.0	7.0	20.0	2.2	1.94	-0.52	56.0	-	Sa				
II-11-23	81-22	-	23273	IIIbU	完形	69.0	4.4	20.0	-7.0	19.0	1.2	3.45	0.99	30.1	-	Mud				
II-11-24	81-22	3S0255	23247他	IIIbU	完形	72.0	7.4	33.0	6.0	19.5	1.7	2.18	-0.28	48.1	-	Sa	組立			
完形合計						1422.1	128.9	593.7	70.9	392.1	55.3	54.03	8.89	858.6						
完形平均値						64.6	5.9	27.0	3.2	17.8	2.5	2.46	0.40	39.0						
遺物総重量																	1,168.6			

※完形 22点

表Ⅱ-13 ⅢSB-10磔属性表

棟図 番号	図版 番号	個体 名称	遺物 番号	層位	状態	計測値(mm)						長短比 標準 偏差	重量(g)	被熱	材質	備考	
						長軸	標準 偏差	短軸	標準 偏差	厚さ	標準 偏差						
Ⅲ-11-25	81-23	-	22785	ⅢbM	完形	52.0	-17.5	24.0	-2.6	15.0	-1.7	2.17	-0.53	19.5	-	Mud.	
Ⅲ-11-26	81-23	-	22805	ⅢbM	完形	61.0	-8.5	28.0	1.4	17.0	0.4	2.18	-0.52	39.6	-	Sa.	
Ⅲ-11-27	81-23	-	22838	ⅢbM	完形	65.0	-4.5	30.0	3.4	14.0	-2.7	2.17	-0.53	32.0	-	Mud.	
Ⅲ-11-28	81-23	-	22846	ⅢbM	完形	72.0	2.5	32.0	5.4	19.0	2.4	2.25	-0.45	52.6	-	Sa.	
Ⅲ-11-29	81-23	-	22867	ⅢbM	完形	72.0	2.5	30.0	3.4	21.0	4.4	2.40	-0.30	63.5	-	Mud.	
Ⅲ-11-30	81-23	3S0248	22843總	ⅢbM	完形	73.0	3.5	33.0	6.4	19.0	2.4	2.21	-0.49	39.3	-	Mud.	標2点
Ⅲ-11-31	81-23	3S0244	22862	ⅢbM	完形	72.0	2.5	36.0	9.4	19.0	2.4	2.00	-0.70	59.1	-	Sa.	
Ⅲ-11-32	81-23	-	22826	ⅢbM	完形	72.0	2.5	21.0	-5.6	17.0	0.4	3.43	0.73	31.9	-	Mud.	
Ⅲ-11-33	81-23	-	22831	ⅢbM	完形	77.0	7.5	29.0	2.4	14.0	-2.7	2.66	-0.04	31.7	-	Mud.	
Ⅲ-11-34	81-23	-	22865	ⅢbM	完形	77.0	7.5	30.0	3.4	22.0	5.4	2.57	-0.13	68.1	-	Sa.	
Ⅲ-11-35	81-23	-	22861	ⅢbM	完形	81.0	11.5	30.0	3.4	17.0	0.4	2.70	0.00	53.7	-	Sa.	
完形合計						2431.1	317.5	931.2	143.8	582.6	115.4	94.35	16.39	1,349.1			
完形平均値						69.5	9.1	26.6	4.1	16.7	3.3	2.70	0.47	38.6			
遺物総重量						1,954.1											

※完形 35点

られない。推定される断面形として中心部に向かって緩やかに湾曲する皿状の形態を示している。孔の作出や形態的特徴から、“シトキ(飾り板)”の可能性が考えられる。18は口径約300mm、深さ約150mmの一字湯口の内耳鉄鍋である。底部は丸底気味で、胴部へは不明瞭な屈曲をもって立ち上がり、口縁部は僅かに外傾する。口縁部は幅22mm前後の段を有し直線的に開く。口唇部は内削ぎで内面に張り出しをもつ。耳部は正三角形に作り出され、口縁部側の耳部が水平となり、断面形は丸く直径5mm前後である。湯口は長軸58mm、短軸6.8mm、高さ約6~8mmで、中央部が低く緩い弓状となつて、湯口周辺の底面は円形に緩い段状で、湯口縁部は凹凸が著しい稜を呈し、再調整等はされていない。この他、ⅢBB-12土壌サンプルからは石英片9.9gが出土している。(乾)

## 5号平地式住居 [ⅢH-05] (図Ⅱ-12~13 図版11-1~4)

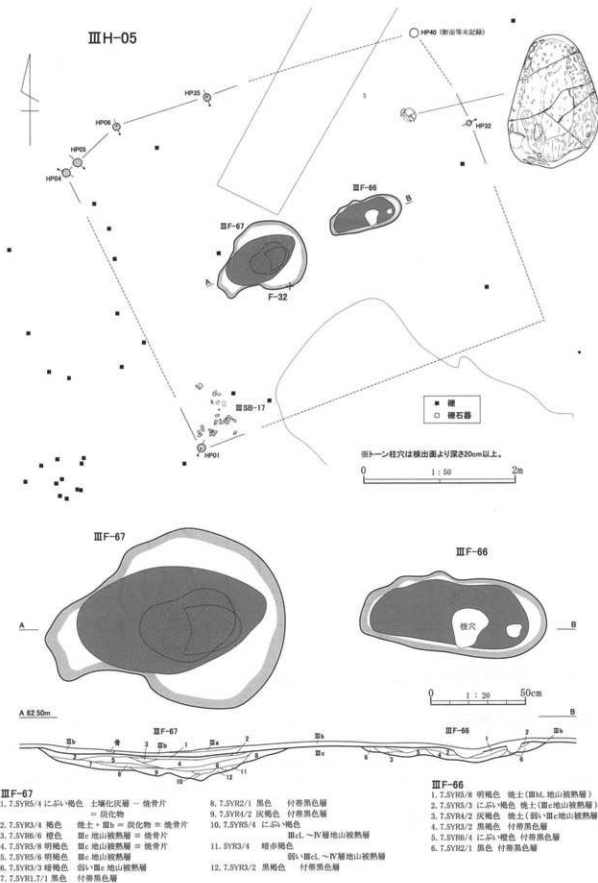
位置: E・F-30・32, F-33区

規模: 510×405cm 長軸方向: N-70° E

付属遺構: 炉跡 ⅢF-66・67 磔集中 ⅢSB-17

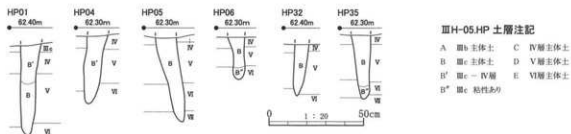
確認・調査(図Ⅱ-5・12): ⅢH-02の調査と平行して、周辺グリッドのⅢb層中位~下位の調査中にE-31・32区で直線上に並ぶ長楕円形の焼土2基(ⅢF-66・67)と集積度合いの低い磔集中(ⅢSB-17)を検出した、周辺からの出土遺物は少数であったが、平地式住居を想定した調査に切り替えた。2基の付属炉と集石や床面遺物の線条痕のある磔(1)の位置関係を参考に住居平面形を想定し、Ⅲc層下位~Ⅳ層中位にかけての面で柱穴の検出作業を行った。柱穴はⅢSB-13の南西に付属炉方向へ傾斜する「外ふんばり」のHP01を確認できたことから、住居の柱穴と考え5号住居を設定した。散水やピンボールでの確認の方法で、精査範囲も広げて柱穴検出作業を続行し、40ヵ所以上のⅢb層落ち込みを半載したが、确实なものとして認定できたものは少ない。柱穴調査終了後に付属炉および集石等の床面遺物の諸記録、取り上げを行い、付属炉周辺の床面をⅣ層まで掘削し調査を終了した。

付属炉(図Ⅱ-12): ⅢF-66・67の2基で、ともに平面形は長楕円形で皿状に窪み、Ⅲb層を2cm程度被覆している。ⅢF-66は地山被熱層に直接Ⅲb層が被覆していることから、掻き出しにより燃焼面および灰層が遺失したものと思われる。ⅢF-67は土壌化が進んだ灰層(1層)を伴うが、焼骨片や



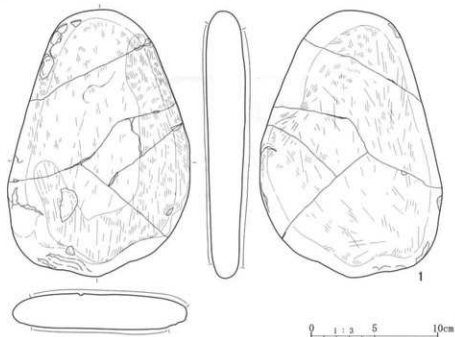
図II-12 5号平地式住居(IIIH-05)平面図及び付属炉跡



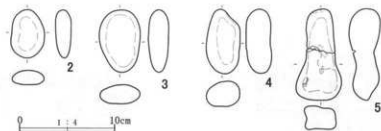


ⅢH-05HP 土層注記

- A Ⅲb 主体土 C IV層主体土  
 B Ⅲc 主体土 D V層主体土  
 B' Ⅲe - IV層 E VI層主体土  
 B\* Ⅲc 粘性あり



ⅢSB-17



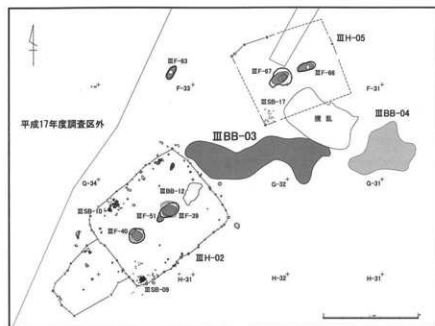
図Ⅱ-13 5号平地式住居柱穴断面及び出土遺物

表Ⅱ-14 ⅢH-05属性表

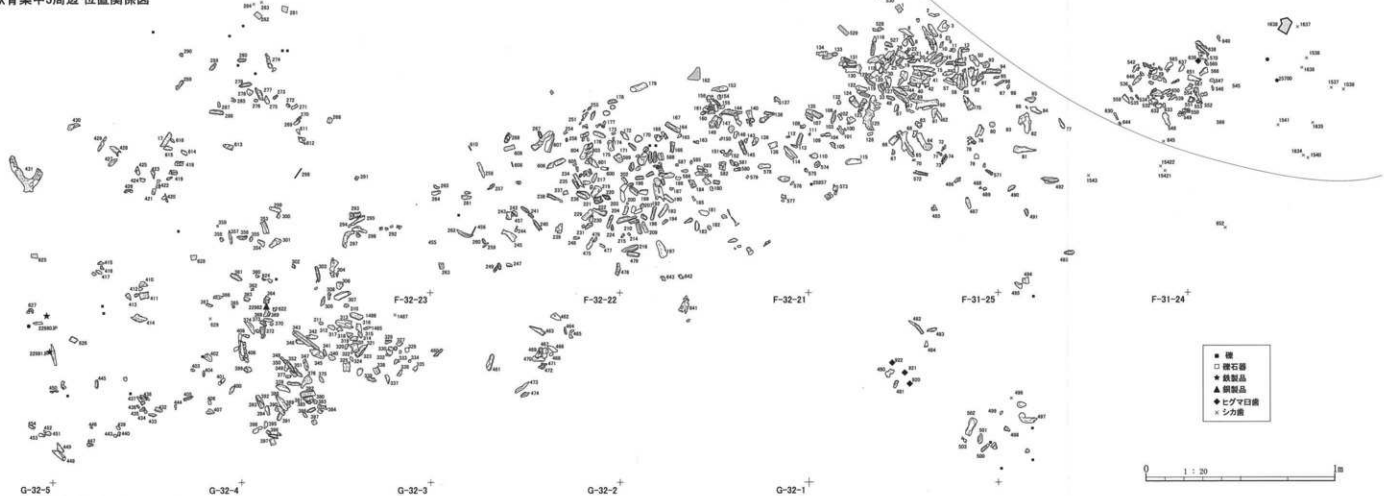
棟号	図版番号	遺構名	グリッド	層位	長軸方向	規模(cm)		柱穴		付属遺構
						主体部	付属部	本数	付属	
Ⅱ-12	11-1	ⅢH-05	E-F-30-32, F-33	ⅢbM	N-70° -E	510	405	-	6	-

表Ⅱ-15 ⅢH-05付属属性表

棟号	図版番号	遺構名	グリッド	層位	タイプ	平面形	規模(cm)			灰・骨片の有無	備考
							長軸	短軸	厚さ		
Ⅱ-12	11-2	ⅢF-66	E-31	ⅢbL	炉	長楕円形	98	42	6	骨	
Ⅱ-12	11-2	ⅢF-67	E-31-32, F-32	ⅢbM	炉	楕円形	124	98	12	灰・骨	



獣骨集中3周辺位置関係図



図II-14 獣骨集中3(III BB-03)平面図

炭化物を残すのみとなっており(2層)、上層のⅢb層中から未被熱の獣骨が出土している。

柱 穴(図Ⅱ-13)：検出作業が極めて困難で、認定できた柱穴は7本である。うち、HP40は断面等未記録の柱穴で、これ以外は確認面からの深さが全て20cm以上のものである。うち、HP01・04は住居主体部のコーナーを構成する柱穴と思われ、付属炉方向の対角線状に比較的強く内傾する「外ふんばり」の柱穴である。他の柱穴についても付属炉方向へ内傾している。

遺物出土状態(図Ⅱ-12)：床面と思われる層位からの出土遺物も少なく、南コーナーに検出したⅢSB-17も含め、散逸した状態で出土している。出土層位はⅢb層下位で、他の平地式住居址と比較しても低い層位で、床面が造成されていた可能性もある。

出土遺物(図Ⅱ-13)：1は明瞭な線状痕を有する板状礫で、両面に認められるが、滑沢面は形成されていない。部分的な赤色化や焼けはじけなどの被熱痕が認められ、破砕礫の状態で出土している。2～5はⅢSB-17の構成礫である。ⅢSB-17は完形品14点のみで構成されている。(乾)

表Ⅱ-16 ⅢH-05柱穴属性表

挿図 番号	図版 番号	遺構名	規模(cm)			傾き (度)	タイプ	備考
			上端	下端	深さ			
Ⅱ-13	12-3	HP01	11	3	48	3°	打込み	
Ⅱ-13	12-4	HP04	11	3	36	9°	打込み	
Ⅱ-13	-	HP05	11	2	44	11°	打込み	
Ⅱ-13	-	HP06	9	4	22	2°	打込み	
Ⅱ-13	12-5	HP32	8	1	27	6°	打込み	
Ⅱ-13	12-6	HP35	10	2	34	2°	打込み	

表Ⅱ-17 ⅢH-05出土遺物属性表

挿図 番号	図版 番号	個体 番号	遺物 番号	遺物名	分類	層位	遺構名	グリッド	計測値(mm)			重量(g)	材質	備考
									長軸	短軸	厚さ			
Ⅱ-13-1	84-1	3S0260	33754	縄糸首のある礫	-	ⅢbM	-	E-30	210.0	140.0	31.0	1,560.0	Mud.	被熱

表Ⅱ-18 ⅢSB-17礫属性表

挿図 番号	図版 番号	個体 名称	遺物 番号	層位	状態	計測値(mm)							重量(g)	被熱	材質	備考			
						長軸	標準 偏差	短軸	標準 偏差	厚さ	標準 偏差	長短比					標準 偏差		
Ⅱ-13-2	84-2	-	33737	Ⅲbl.	完形	52.0	-16.3	35.0	-3.1	16.0	-8.2	1.49	-0.32	42.2	-	Mud.			
Ⅱ-13-3	84-2	-	33712	Ⅲbl.	完形	62.0	-6.3	44.0	5.9	21.0	-3.2	1.41	-0.40	71.2	-	Sa.			
Ⅱ-13-4	84-2	-	33720	Ⅲbl.	完形	69.0	0.7	36.0	-2.1	27.0	2.8	1.92	0.11	82.7	-	Sa.			
Ⅱ-13-5	84-2	3S0258	33722	Ⅲbl.	完形	97.0	28.7	48.0	9.9	33.0	8.8	2.02	0.21	167.4	-	Sa.	他1点		
完形合計						955.7	141.9	533.0	56.8	338.2	78.3	25.38	4.00	1,126.5					
完形平均値						68.3	10.1	38.1	4.1	24.2	5.6	1.81	0.29	80.5					
遺物総重量																835.9			

※完形 14点

### 獣骨集中3 [ⅢBB-03] (図Ⅱ-5・14・15 図版29-2 30-1~4)

位置：F-31・32区

主体検出層位：Ⅲb層中位

規模：774×252cm

主要動物/部位：シカ・頭蓋骨および四肢骨

確認・調査：本獣骨集中は、隣接するⅢBB-04と共に火山灰除去段階から一部を検出しており、平成17年度の調査において最初に認定された獣骨集中である。構成する動物骨は600点以上で、同定されたものから推定して、殆どがエゾシカと思われる。平面形は東西に長い帯状を呈している。この範囲はⅢ層上面でのコンターラインで極小規模な沢状地形の中に位置している。僅かな窪みでの獣骨集中の検出は、厚観1遺跡の獣骨集中03と共通している。

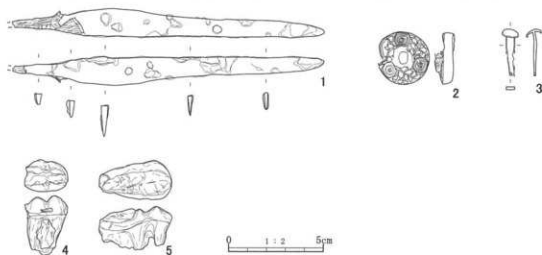
調査はⅢH-02の調査中盤より着手した。検出作業にあたっては、おおよその規模と平面が判明していたことから、長軸東西方向に幅10cmのベルトセクションを設定した後に、Ⅲa層およびⅢb層

上位の除去を行った。獣骨点数や規模も大きいことから、調査は検出作業を行った後、10cm メッシュの取り枠を据えてデジタルカメラで撮影し、プリント画像に1点ずつ番号を付し、光波式トータルステーションを用いて位置を記録した。保存状態は獣骨の密集度合いに比例し、散在している範囲は脆弱で、密集している範囲ではやや良好な遺存状態であった。このため、取り上げにあたっては、酢酸ビニル系樹脂(木工用ボンド)を希釈したものを2~3回ほど塗布し、乾燥硬化の後、番号毎に取上げている。

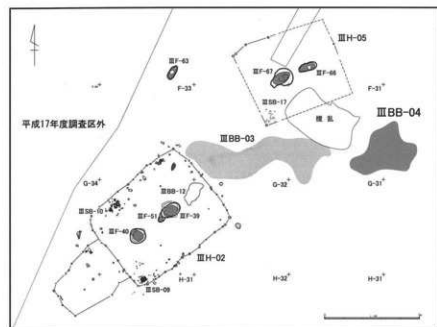
出土状態(図II-14)：概ね東西に長い分布域の中でも、東側は間層を挟まずに2~3面に重複しており、密集の度合いも高い。東端の一部はTa-b降下以降の樹木根により大きく攪乱を受け、切り取られるように水平方向は東側へ、垂直方向は下方へ潜り込む状態での移動が見られる(図II-14の攪乱内の獣骨ブロック)。攪乱内出土の獣骨は、保存状態が極めて良好で、この範囲から出土したヒグマ臼歯(B. 639)は後日DNA分析を行う予定である。獣骨部位の分布としては東西両端の頭蓋骨に由来する、下顎臼歯や下顎骨、上顎骨や角が多い傾向がある。また、同定されたヒグマ上顎臼歯(B. 920-922. 639)は東端と、やや離れた南側の小集中から出土している。

整理：保存状態が悪く、脆弱なものは周囲の土壌毎取上げた。このため、室内でのクリーニング作業を行ってから、同定を委託した。報告書作成にあたっては、出土状態のデジタル画像を5分の1スケールに縮小した画像と「遺跡管理システム」での位置と照合させて、素図を作成した。

獣骨の特徴：遺存体の同定は、財団法人千歳サケのふるさと館 学芸員 高橋 理氏に依頼し、報告は第V章3節に記載されている。構成獣骨はシカが殆どで完存部位としては距骨の比率が高いが、他の部位は殆どが破砕された状態で出土している。特徴的な部位としては、長管骨が多くシカの四肢骨が主体を占めるようである。これらは、骨髄食や骨角器製作工程で打ち割られ、使用部分以外の廃棄されたものと思われる。また、椎骨や肋骨の出土が少ない点は調査時点より看取でき、同定の結果からも肯定されている。同定されたヒグマ上顎臼歯(B. 639. 920-922)は、上顎第二・三後臼歯の左右で、下顎歯は1点も出土していない。上顎歯の左右が重複しないことから下顎が切り離された頭蓋骨1個が持ち込まれていた可能性がある。



図II-15 III BB-03出土遺物



獣骨集中4周辺 位置関係図



図Ⅱ-16 獣骨集中4(III BB-04)平面図

表Ⅱ-19 ⅢBB-03属性表

挿図 番号	図版 番号	遺構名	グリッド	層位	平面形	規模(cm)		主体部位	破熟の 有無	関連 遺構	備 考
						長軸	短軸				
Ⅱ-5	29-2	ⅢBB-03	F-31・32	ⅢbM	不整形	774	252	シカ・ヒグマ 頭蓋・四肢	未破熟	ⅢH-02	

表Ⅱ-20 ⅢBB-03出土遺物属性表

挿図 番号	図版 番号	個体 名称	遺物 番号	遺物名	分類	層位	遺構名	グリッド	計測値(mm)			重量(g)	材質	備考
									長軸	短軸	厚さ			
Ⅱ-15-1	91-1	-	22980他	刀子	-	ⅢbM	ⅢBB-03	F-32	(164.8)	15.2	3.5	16.8	Fe	他1点
Ⅱ-15-2	91-2	-	22982	目貫	-	ⅢbM	ⅢBB-03	F-32	27.0	27.0	11(6)	8.2	Cu	
Ⅱ-15-3	91-3	-	22983	鋸	-	ⅢbM	ⅢBB-03	F-33	24.0	8.0	7.0	1.2	Cu	
Ⅱ-15-4	-	-	B.921	ヒグマ臼歯	-	ⅢbM	ⅢBB-03	F-33	30.9	20.2	20.2	5.1	B	
Ⅱ-15-5	91-4	-	B.639	ヒグマ臼歯	-	ⅢbM	ⅢBB-03	F-33	30.2	20.2	20.2	-	B	

出土遺物(図Ⅱ-15)：1 は中茎基部が僅かに欠損?した刀子で、茎部分には木質が残存している。刀身基部から中部にかけて刃縁が緩やかに湾入していることから、研ぎ直しを繰り返した結果の形態と思われる。刃部と茎の境界にあたる区は不明瞭で、刀身から茎へは漸移的に変化する。2 は円形の目貫で、中心に目釘穴がある。表面の装飾は枝葉模様の透かしと、亀甲形の浮き彫りが3ヵ所に施されている。3 は銅製の鋸で、頭部はやや丸みを帯びている。鋸本体は板状を呈し、先端部に1mm以下の孔が存在している。4 はヒグマ上顎後臼歯(B.639)でDNA分析を予定している資料。5 はヒグマの上顎左臼歯(B.921)で保存状態は不良で歯根部分は空洞となっている。(乾)

#### 獣骨集中4〔ⅢBB-04〕 (図Ⅱ-16 図版30-5・6)

位 置：F-31・32区 検出層位：Ⅲb層中位～下位

規 模：360×264cm 主要動物・部位：シカ・頭蓋骨

確認・調査：検出・調査方法はⅢBB-03とほぼ同一状況なので省略する。立地は、ⅢBB-03の東側で03の長軸延長線上に位置し、東側の微高地から西向きの緩斜面に形成されている。出土層位は、Ⅲb層の発達が弱いことから、Ⅲb層下位での取り上げとなっている。なお、遺存体取り上げ後、Ⅲc層上面～上位で小ビット等の検出を目的に精査を行ったが検出できなかった。

分 布：ⅢBB-03の東側に検出し、散逸した状態で出土しており、保存状態も悪いものが多い。大きく2つのブロックで、集中範囲の西南西(ⅢBB-03側)にはやや密集度の高いブロックがある。

獣骨の特徴：上顎・下顎臼歯の比率が高く、角や頭蓋骨も出土している。

表Ⅱ-21 ⅢBB-04属性表

挿図 番号	図版 番号	遺構名	グリッド	層位	平面形	規模(cm)		主体部位	破熟の 有無	関連 遺構	備 考
						長軸	短軸				
Ⅱ-5	30-5	ⅢBB-04	F-30・31	ⅢbM・ⅢbL	不整形	360	264	シカ頭蓋	-	ⅢH-02	

## 3・4・7号平地式住居址周辺の概況(図Ⅱ-17)

3・4・7号平地式住居址は厚真川上流側段丘縁において、25m四方の範囲内に形成されている。この内、7号平地式住居址はⅢbUに構築された炉を伴い、3・4号平地式住居址はⅢb層を被覆する炉を伴っている。以上の層位的観察から、7号平地式住居址は3・4号平地式住居址よりも新しいと判断した。また遺物出土状態から、3号と4号平地式住居址の間にも時間差があると判断した。こうした調査所見は第V章1節の年代測定結果からも肯定できる。これら住居址の周囲には灰集中1・2、獣骨集中10・11・14がある。いずれもⅢa～ⅢbMの形成であり、検出位置を考慮すると灰集中2は4号住居址と、獣骨集中14は3号住居址と並存すると考えられる。(小野)

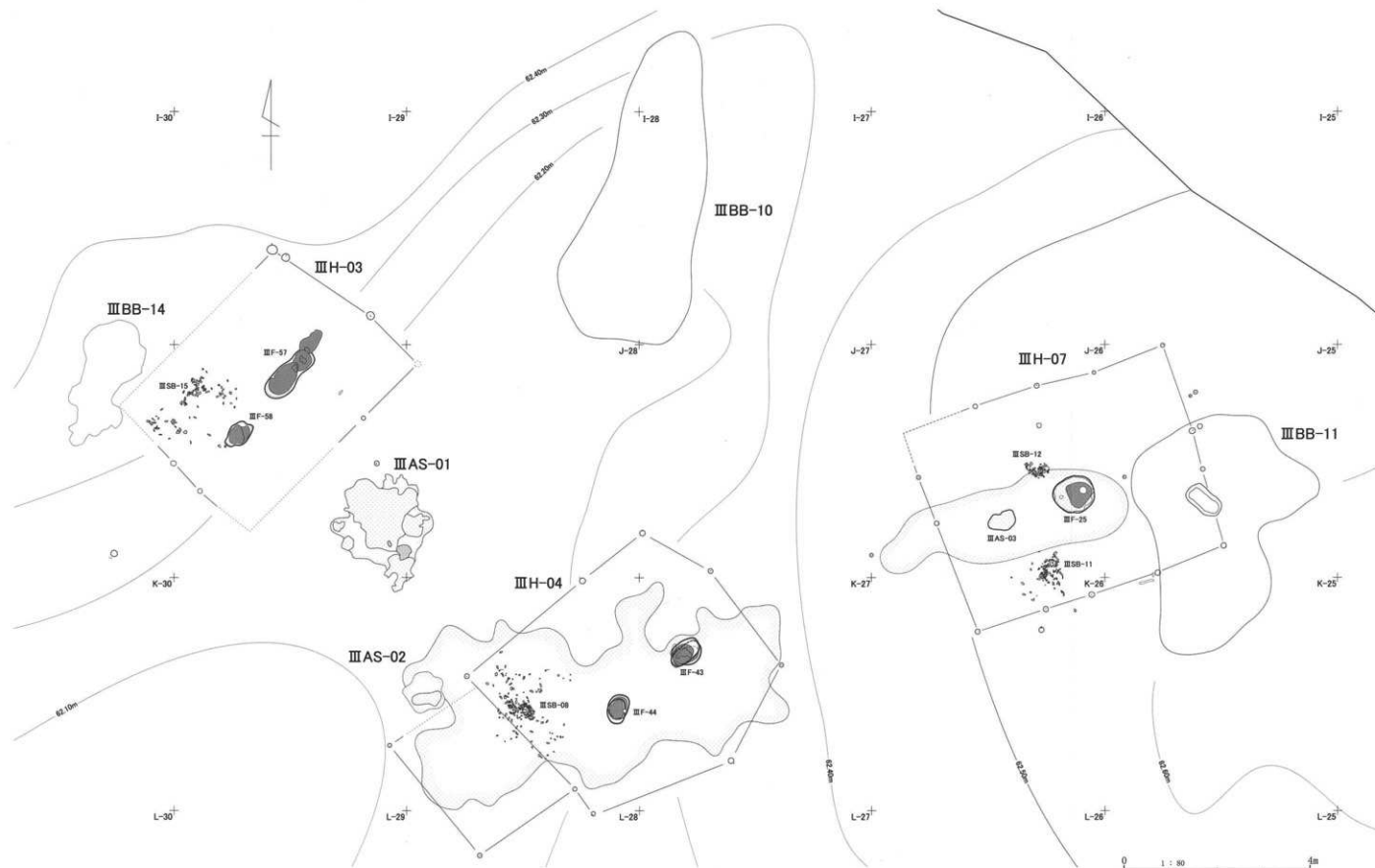
## 3号平地式住居址〔ⅢH-03〕(図Ⅱ-18～21 図版8-1)

位置：I-28・29, J-28～30, K-29・30区 規模：505×400cm  
 長軸方向：N-43°E 付属遺構：炉跡 ⅢF-57・58 礫集中 ⅢSB-15  
 関連遺構：獣骨集中 ⅢBB-14

確認・調査：後述する灰集中1(ⅢAS-01)調査終了後、周囲のⅢ層掘削を進めた際、Ⅲb層を被覆する2基の焼土(ⅢF-57・58)を検出した。焼土はいずれも同じ長軸方向で一直線状に並ぶ配置で検出され、周囲からは棒状礫が多数出土したことから(ⅢSB-15)、住居址に伴う付属炉と考え、以後住居址と想定した上での調査に入った。炉の調査は平面形の写真撮影・実測後、長軸にセクションラインを設定した上で半截し、断面の記録を行った。その際、フローテーションによる微細遺物の回収を目的に、付属炉上位にある灰・骨片を含む土壌(燃焼部層)、並びに付帯黒色部上位の土壌を全て採取した。付属炉断面の記録後は、住居址完掘時の撮影用に残り半分の焼土層を残した上で調査を進めた。炉を中心とする半径2m程の範囲で遺物が面的に出土したことから、出土状態の撮影・実測を行い、遺物取上げを行った。柱穴の確認は、周囲をⅢc層下位～Ⅳ層上面までジョレンで面的に下げ、散水して乾燥状態の差異を考慮しながら精査した。認定にあたっては、検出した径10cm前後ある黒色円形プランを、炉の方向にセクションラインが向く形で半截し、断面を観察した上で行った。結果、明確ではないが、列を構成すると考えられる7本の杭跡と、構成から外れる2本の杭跡を検出した。炉の検出状態や礫集中の存在が、他の住居址と共通する特徴であることから、住居址柱穴と判断し、3号平地式住居址として設定した。柱穴の断面記録後、完掘写真を撮影し、調査を終了した。なお、柱穴列の西側で、不整形土坑内部に未被熱シカ遺存体を土坑内に埋めた獣骨集中(ⅢBB-14)を検出しており、本住居址に関連するものとして注意される。

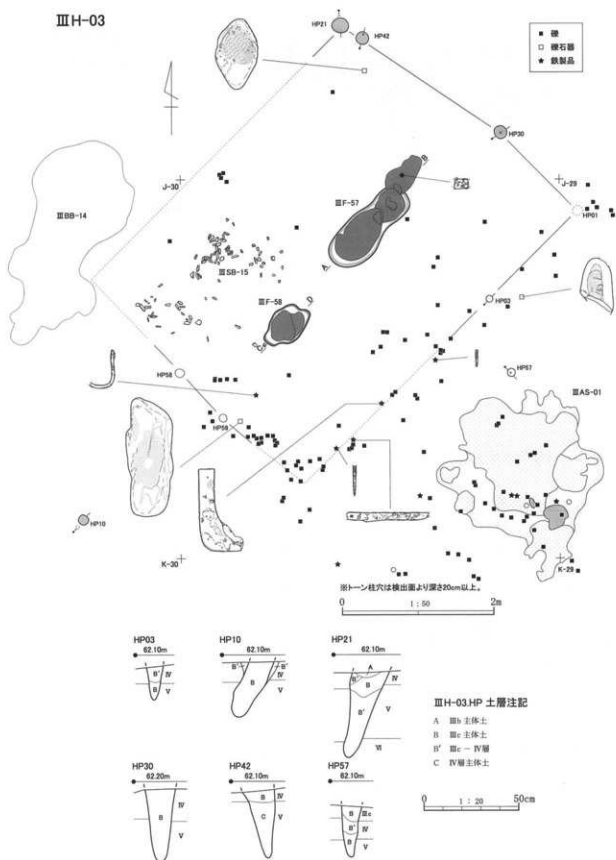
付属炉(図Ⅱ-19)：本住居址に付属する炉跡はⅢF-57・58の2基である。ⅢF-57は、平面形・断面の観察により、3つの焼土(ⅢF-57A・B・C)が重なって1つの長大な焼土となったものであることが判明した。A(1～6層)が最も新しく、B(7～10層)、C(11・12層)の順に古い。いずれも上位に極微かな灰層を伴う。ⅢF-58はⅢF-57に比較し小規模な炉跡である。2層は被熱した土壌であるが、焼骨片を含み、また下位に灰層(4層)が位置していることから、灰を掻き出しながら使用されていたと考えられる。フローテーションの結果、ⅢF-57からは魚骨と僅かな哺乳綱の骨の他、キビ、ブドウ科、クルミ属の炭化種子を得ている。またⅢF-58からはウグイを含む魚骨と哺乳綱の骨、ブドウ科の炭化種子を得ている。

柱穴(図Ⅱ-18)：本住居址の柱穴は極めて不明瞭であり、柱穴列を構成するものとして、7本



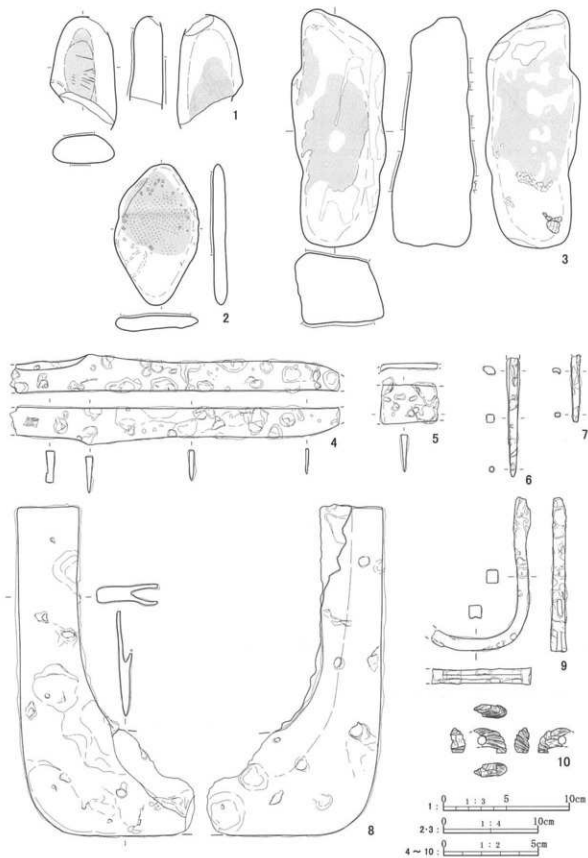
図II-17 3・4・7号平地式住居址周辺平面図



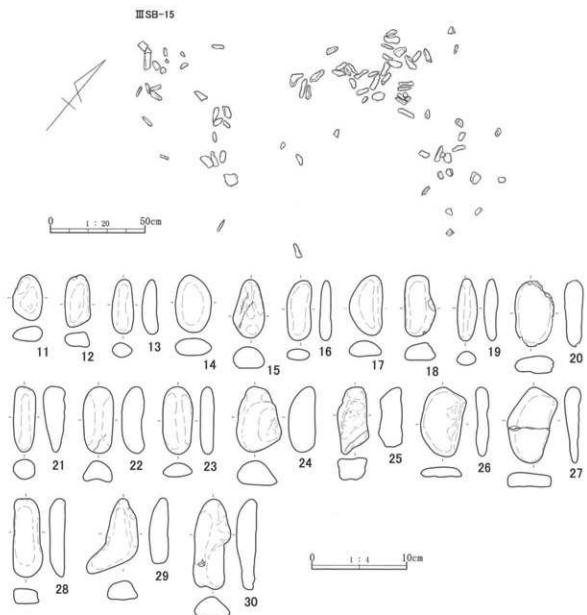


図Ⅱ-18 3号平地式住居址(ⅢH-03)平面図及び柱穴断面





図II-20 3号平地式住居址出土遺物(1)



図Ⅱ-21 3号平地式住居址床面遺物出土状態及び出土遺物(2)

表Ⅱ-25 ⅢH-03出土遺物属性表

挿図 番号	図版 番号	個体 名称	遺物 番号	遺物名	分類	層位	遺構名	グリッド	計測値(mm)			重量(g)	材質	備考
									長軸	短軸	厚さ			
Ⅱ-20-1	82-1	-	28840	砥石	-	ⅢbM	-	J-29	(89)	56.0	25.0	114.0	Tu.	
Ⅱ-20-2	82-2	-	29257	藤条痕のある礎	-	ⅢbM	-	I-29	149.0	89.0	15.0	320.0	Gr- mud.	
Ⅱ-20-3	82-3	-	30193	滑沢面のある礎	-	ⅢbL	-	J-29	250.0	101.0	87.0	2,820.0	Sa.	
Ⅱ-20-4	82-4	-	24220	刀子	-	ⅢbM	-	J-29	(174.0)	19.0	5.0	49.5	Fe	
Ⅱ-20-5	82-5	-	30961	刀子片	-	ⅢbM	ⅢF-57B	-	(31.2)	24.8	4.3	8.5	Fe	
Ⅱ-20-6	82-6	-	24219	釘	-	ⅢbM	-	J-29	(63.0)	7.0	5.0	8.0	Fe	
Ⅱ-20-7	82-7	-	20514	棒状製品	-	ⅢbM	-	J-29	(36.0)	6.0	3.0	1.5	Fe	
Ⅱ-20-8	82-8	-	24221	鋏(鐵)先	-	ⅢbM	-	J-29	175.0	99.0	12.0	286.0	Fe	
Ⅱ-20-9	82-9	-	28917	長尺製品未成品	-	ⅢbM	ⅢH-03	J-29	81.0	52.5	7.0	26.0	Fe	
Ⅱ-20-10	82-10	-	51104	骨製装飾品	-	I	ⅢF-57	-	(17.0)	13.0	7.5	0.7	B	FLT1380

柱穴(図Ⅱ-18)：本住居址の柱穴は極めて不明瞭であり、柱穴列を構成するものとして、7本(HP01-03-21-30-42-58-59)を検出した。また柱穴列の構成から外れた位置でも2本の杭跡を検出している(HP10-57)。いずれも打ち込みによる柱穴で、確認面での径は15cm前後であり、堆積土のしまりはやや弱いものである。この内HP01-21-42は柱穴上方が住居址内側に傾く「外ふんばり」の状態であった。柱穴列から外れるHP10も大きく傾くが、検出された他の住居址での様相を考慮すると、前小屋に関連する柱穴の可能性が高い。

遺物出土状態(図Ⅱ-18-21)：本住居址に伴う遺物の大半は棒状の礫で、炉から約2mの範囲において、南西側を中心に出土している。西コーナーでは棒状礫で構成される礫集中(ⅢSB-15)を検出した。礫個体総数96点、内完形59点であり、208×145cmの範囲内にやや散漫な状態で出土している。南コーナーでは鍬(鋤)先(8)をはじめ、鉄製品が多く出土した。またⅢF-57では燃焼面から刀子片(5)が出土した他、回収した土壌中より骨角器(10)が得られた。本住居址は沢地縁辺部の斜面地に形成されているが、遺物が炉と同一面においてほぼ水平に出土していたことから、住居址構築時に整地が行われた可能性がある。

出土遺物(図Ⅱ-20)：1は凝灰岩製の砥石で、棒状礫の1面に明瞭な砥ぎ面が形成され裏面には滑沢面が認められる。柱穴列外側で出土したが、本住居址に関連する遺物と考えた。本遺跡における数少ない砥石出土例の1つである。2は緑色泥岩の扁平礫で、1面に線条痕の残る範囲が確認できる。3は2面に滑沢面が認められる角柱状の礫である。4~9は鉄製品である。4は刀子で、製作時の特徴であろうか、茎の断面縁辺部が潰れ、肥厚している。5は炉から出土した刀子片、6・7は棒状の製品で、一端が細くなっているため釘の可能性が高い。8は平面方形の鍬(鋤)先。9はL字形に曲がった棒状製品で側面に溝状の窪みが形成されている。鉤状製品の未成品の可能性が高い。10は骨製の装飾品で、精緻な刻みが施され、径4mmの大きさで穿孔されている。形状は刀装具の粟形に類似する。11~30はⅢSB-15で出土した棒状礫の一部である。(小野)

表Ⅱ-26 ⅢSB-15礫属性表

標本番号	図版番号	個体名称	遺物番号	層位	状態	計測値(mm)				長短比	長短比標準偏差	重量(g)	被熱	材質	備考	
						長軸	標準偏差	短軸	標準偏差							厚さ
Ⅱ-21-11	82-11	-	30114	-	完形	49.0	-17.3	32.0	2.5	16.0	-1.0	1.53	-0.94	28.0	-	Sa.
Ⅱ-21-11	82-11	-	30139	-	完形	56.0	-10.3	30.0	0.5	16.0	1.0	1.87	-0.60	35.2	-	Sa.
Ⅱ-21-11	82-11	-	30143	ⅢbM	完形	57.0	-9.1	23.0	-6.1	17.0	0.1	2.48	0.01	25.1	-	Sa.
Ⅱ-21-11	82-11	-	30153	-	完形	61.0	-5.3	38.0	8.5	18.0	1.0	1.61	-0.86	52.8	-	Sa.
Ⅱ-21-11	82-11	-	30088	-	完形	61.0	-5.3	33.0	3.5	23.0	6.0	1.85	-0.62	65.3	-	Gra
Ⅱ-21-11	82-11	-	30138	ⅢbM	完形	64.0	-2.1	26.0	-3.1	12.0	-4.9	2.46	-0.01	25.2	-	Mud.
Ⅱ-21-11	82-11	-	30103	-	完形	63.0	-3.3	35.0	5.5	16.0	-1.0	1.80	-0.67	48.5	-	Sa.
Ⅱ-21-11	82-11	-	30124	-	完形	61.0	-5.3	33.0	3.5	19.0	2.0	1.85	-0.62	65.3	-	Sa.
Ⅱ-21-11	82-11	-	30155	ⅢbM	完形	66.0	-0.1	22.0	-7.1	14.0	-2.9	3.00	0.53	18.8	-	Tu.
Ⅱ-21-11	82-11	-	30106	ⅢbM	完形	70.0	3.9	41.0	11.9	19.0	2.1	1.71	-0.76	70.8	被熱	Sa.
Ⅱ-21-11	82-11	-	30108	ⅢbM	完形	69.0	2.9	24.0	-5.1	23.0	6.1	2.88	0.41	44.4	-	Sa.
Ⅱ-21-11	82-11	-	30104	ⅢbM	完形	71.0	4.9	31.0	1.9	24.0	7.1	2.29	-0.18	63.8	-	Sa.
Ⅱ-21-11	82-11	-	30081	ⅢbM	完形	71.0	4.9	32.0	2.9	14.0	-2.9	2.22	-0.25	41.3	-	Sa.
Ⅱ-21-11	82-11	-	30083	ⅢbM	完形	70.0	3.9	48.0	18.9	28.0	11.1	1.46	-1.01	89.3	-	Mud.
Ⅱ-21-11	82-11	-	30080	ⅢbM	完形	72.0	5.9	32.0	2.9	25.0	8.1	2.25	-0.22	70.6	-	Sa.
Ⅱ-21-11	82-11	-	30151	ⅢbM	完形	74.0	7.9	48.0	18.9	14.0	-15.5	1.54	-0.93	48.3	-	And.
Ⅱ-21-27	82-11	3S0256	30129他	ⅢbM	完形	80.0	80.0	54.0	54.0	17.0	17.0	1.48	1.48	65.3	-	Sa. 他1点
Ⅱ-21-28	82-11	-	30089	ⅢbM	完形	84.0	17.9	32.0	2.9	17.0	0.1	2.63	0.16	61.9	-	Sa.
Ⅱ-21-29	82-11	-	30100	ⅢbM	完形	79.0	12.9	54.0	24.9	20.0	3.1	1.46	-1.01	59.2	-	Sa.
Ⅱ-21-30	82-11	-	30091	ⅢbM	完形	95.0	28.9	40.0	10.9	21.0	4.1	2.38	-0.09	76.3	被熱	And.
完形合計						3912.8	735.5	1740.6	435.3	1007.5	253.3	144.68	39.40	2,798.9		
完形平均値						66.3	12.5	29.5	7.4	17.0	4.3	2.47	0.67	47.4		
遺物総重量														3,740.4		

※完形 59点

## 4号平地式住居址〔ⅢH-04〕 (図Ⅱ-22~24 図版9-6, 10-1~10)

位置: J~L-27-28, K-29区

規模: [主体部] 485×465cm [付属部] 305×250cm 長軸方向: N-49° E

付属遺構: 炉跡 ⅢF-43・44 灰集中 ⅢAS-02 礫集中 ⅢSB-08 獣骨集中 ⅢBB-15

関連遺構: 灰集中 ⅢAS-02

確認・調査: K-28区のⅢa層を除去した際、棒状礫で構成される礫集中を検出した(ⅢSB-08)。当初の礫集中が住居址に伴うものとの認識が無かったため、検出状態を記録した上で取上げた。その後、Ⅲb層調査の際、礫集中検出位置の周囲において、長軸約850m、短軸約400cmの範囲で北東-南西方向に広がる焼骨片の分布(ⅢBB-15)を確認した。土壌サンプルを回収し、Ⅲ層の調査を進めたところ、Ⅲb層を被覆し、ほぼ同一の長軸方向を向く2基の焼土(ⅢF-43・44)を検出した。礫集中(ⅢSB-08)との関連を考慮し、住居址付属炉の可能性を考え、以後住居址を想定した調査に切り替えた。付属炉は平面形・断面の記録後、台状に残し、柱穴確認のため周囲のⅢ層掘削を進めた。柱穴確認・認定はⅢH-03と同様の方法で行った。結果、付属炉を取り囲む形で列を構成する8本の杭跡を検出したため、これらを住居址柱穴と判断し、4号住居址として設定した。柱穴の断面記録後、付属炉と合わせて完掘状態を撮影し、調査を終了した。なお柱穴列西側に小型鉄製品を伴う小規模な灰集中(ⅢAS-02)を検出した。本住居址に関連する遺構として注意される。

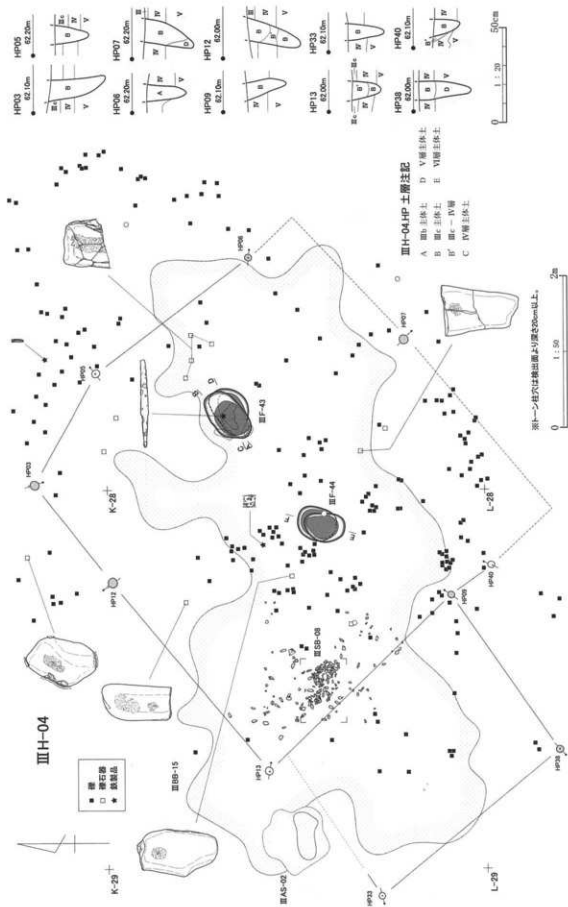
付属炉(図Ⅱ-23): 本住居址に付属する炉跡はⅢF-43・44の2ヵ所である。いずれも上下2段に焼土が形成されており、焼土中に骨片を含むことや、ⅢF-43では焼土下位に灰層(19層)が混入していることから、灰の掻き出しを行った上で炉を再構築したと考えられる。ⅢF-43においては上下で焼土の長軸方向が異なる。フローテーションの結果、ⅢF-43からはサケ科の魚骨とヒエ属、キビ、ブドウ科、キハダ、クルミ属の炭化種子を得ている。ⅢF-44からは、ムギ類、ヒエ属、キビ、シソ属、バラ科、ブドウ科、クルミ属等多種の炭化種子を得ている。

柱穴(図Ⅱ-22): 柱穴列を構成するものとして8本(HP03-05-06-07-09-12-13-40)、外れた位置で2本(HP33-38)の計10本を検出した。いずれも打ち込みによるもので、確認面での径は10cm前後、確認面からの深さは最深で30cmのものがあり、堆積土のしまりはやや弱い。HP03-07-09-12は柱穴上方が住居址内側に10°以上傾く「外ふんばり」の状態で打ち込まれている。HP33-38は柱穴列の短軸方向と並行する配列であることから、前小屋を構成する柱穴と考えられる。

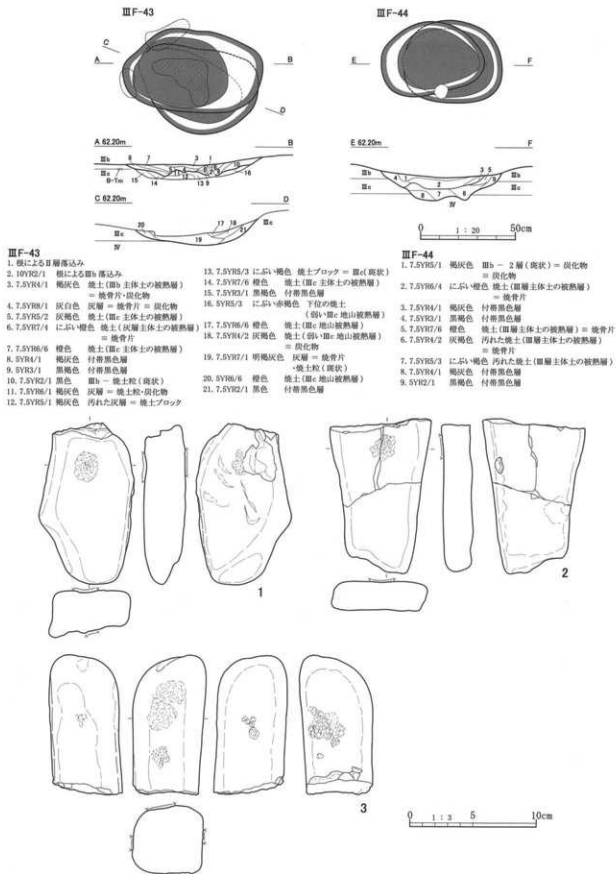
遺物出土状態(図Ⅱ-22-24): 出土した遺物の大半は棒状礫であり、南西側で出土密度が高い。西コーナーに位置する礫集中(ⅢSB-08)は礫個体総数185点、内完形50点で、長軸長平均5.9cmの棒状礫で構成されている。82×61cmの範囲内で、非常にまとまり良く密集した状態で出土した。

出土遺物(Ⅱ-23~24): 1~5はたき石で、1・2は扁平で縦長の礫を、3は角柱状の礫を素材とし、いずれも平坦面を使用している。4は不整形礫を素材とし、平坦面の他、側縁や頂部も使用している。6はⅢF-43の灰層中から出土した刀子、7は小札片、8は潰されて断面形状が変形した棒状製品である。9~23はⅢSB-08出土棒状礫の一部である。

(小野)



図Ⅱ-22 4号平地式住居址(ⅢH-04)平面図及び柱穴断面



図Ⅱ-23 4号平地式住居址付属炉跡及び出土遺物(1)



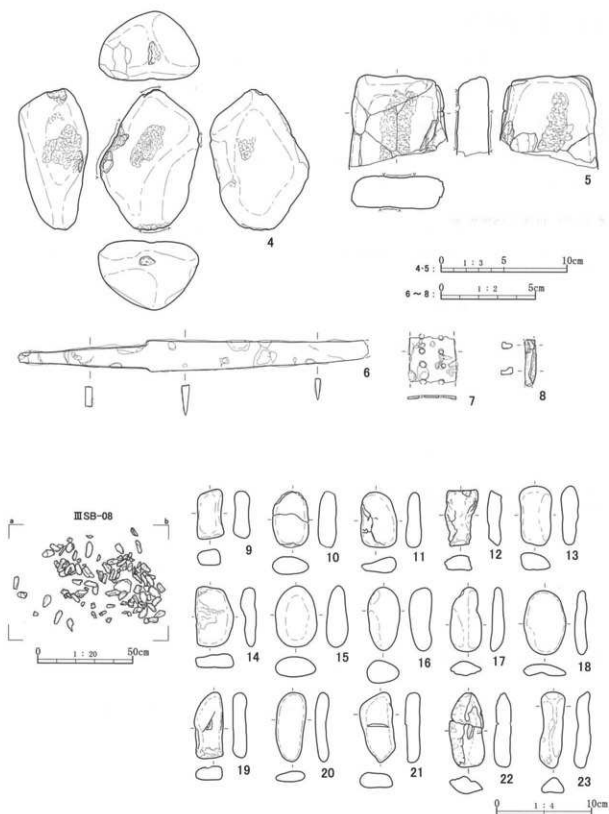


図 II-24 4号平地式住居址床面遺物出土状態及び出土遺物(2)

表Ⅱ-27 ⅢH-04属性表

挿入 番号	図版 番号	遺構名	グリッド	層位	長軸方向	規模(cm)				柱穴		付属遺構
						主体部		付属部		本数		
						長軸	短軸	長軸	短軸	主体	付属	他
Ⅱ-22	9-6	ⅢH-04	J-K・L-27・ 28・K-29	ⅢbM	N-49°-E	485	465	305	250	8	2	-

表Ⅱ-28 ⅢH-04付属炉属性表

挿入 番号	図版 番号	遺構名	グリッド	層位	タイプ	平面形	規模(cm)			灰・骨片の 有無	備考
							長軸	短軸	厚さ		
Ⅱ-23	10-1	ⅢF-43	K-27	ⅢbM	炉	長楕円形	75	55	6	灰・骨	2基重複
Ⅱ-23	10-3	ⅢF-44	K-28	ⅢbM	炉	楕円形	65	35	12	骨	2基重複

表Ⅱ-29 ⅢBB-15属性表

挿入 番号	図版 番号	遺構名	グリッド	層位	平面形	規模(cm)		主体部位	被熱の有 無	関連遺構	備考
						長軸	短軸				
Ⅱ-22	-	ⅢBB-15	K-27・28	ⅢbJ	不整形	850	405	不明	被熱	ⅢH-04	

表Ⅱ-30 ⅢH-04柱穴属性表

挿入 番号	図版 番号	遺構名	規模(cm)			傾き (度)	タイプ	備考
			上端	下端	深さ			
Ⅱ-22	10-4	HP04	12	3	30	14°	打込み	
Ⅱ-22	-	HP05	10	2	18	1°	打込み	
Ⅱ-22	-	HP06	9	1	21	0°	打込み	
Ⅱ-22	10-6	HP07	12	3	26	19°	打込み	
Ⅱ-22	10-7	HP09	10	2	22	11°	打込み	
Ⅱ-22	10-8	HP12	12	3	29	17°	打込み	
Ⅱ-22	10-9	HP13	10	2	15	1°	打込み	
Ⅱ-22	-	HP33	9	2	20	2°	打込み	
Ⅱ-22	-	HP38	10	2	28	0°	打込み	
Ⅱ-22	10-10	HP40	9	1	15	8°	打込み	

表Ⅱ-31 ⅢH-04出土遺物属性表

挿入 番号	図版 番号	個体 名称	遺物 番号	遺物名	分類	層位	遺構名	グリッド	計測値(mm)			重量(g)	材質	備考
									長軸	短軸	厚さ			
Ⅱ-23-1	83-1	-	26037	たたく石	I A1	ⅢbM	ⅢF-44	K-28	127.0	76.0	34.0	460.0	Sa	
Ⅱ-23-2	83-2	3ST0010	24597他	たたく石	I A1	ⅢbJ	ⅢF-33	L-25	123.0	81.0	25.0	185.0	Sa	被熱地2点
Ⅱ-23-3	83-3	-	23881	たたく石	I B1	ⅢbJ	-	K-28	116.0	78.0	55.0	557.0	Sa	
Ⅱ-24-4	83-4	-	23490	たたく石	Ⅱ B3	ⅢbJ	-	J-28	110.0	79.0	55.0	476.0	Sa	
Ⅱ-24-5	83-5	3ST0044	25647他	たたく石	IV	ⅢbM	-	K-27	(75.0)	(72.0)	24.0	200.0	Sa	他5点
Ⅱ-24-6	83-6	-	24227	刀子	-	2	-	K-27	(184.0)	17.0	4.5	32.2	Fe	
Ⅱ-24-7	83-7	-	22001	小丸	-	ⅢbJ	-	K-28	(34.0)	26.0	2.0	3.9	Fe	
Ⅱ-24-8	83-8	-	20128	棒状製品	-	ⅢbJ	-	J-27	(25.0)	7.0	4.0	2.0	Fe	

表Ⅱ-32 ⅢSB-08隕属性表

挿入 番号	図版 番号	個体 名称	遺物 番号	層位	状態	計測値(mm)					長短比 標準 偏差	重量(g)	被熱	材質	備考		
						長軸	標準 偏差	短軸	標準 偏差	厚さ							
Ⅱ-24-9	83-9	-	20745	ⅢbJ	完形	52.0	-7.7	28.0	-2.2	17.0	0.6	1.9	-0.2	38.0	-	Sa	
Ⅱ-24-10	83-9	3S0344	20793他	ⅢbJ	完形	59.0	-0.7	38.0	7.8	19.0	2.6	1.6	-0.6	39.6	-	Sa	他1点
Ⅱ-24-11	83-9	-	20811	ⅢbJ	完形	59.0	-0.7	38.0	7.8	16.0	-0.4	1.6	-0.6	50.0	-	Sa	
Ⅱ-24-12	83-9	-	20914	ⅢbJ	完形	60.0	0.3	35.0	4.8	15.0	-1.4	1.7	-0.4	55.6	-	Mud	
Ⅱ-24-13	83-9	-	20886	ⅢbJ	完形	63.0	3.3	35.0	4.8	18.0	1.6	1.8	-0.3	52.8	-	Sa	
Ⅱ-24-14	83-9	-	20752	ⅢbJ	完形	64.0	4.3	40.0	9.8	17.0	0.6	1.6	-0.5	54.4	-	Sa	
Ⅱ-24-15	83-9	-	20881	ⅢbJ	完形	64.0	4.3	43.0	12.8	23.0	6.6	1.5	-0.6	81.5	-	Sa	
Ⅱ-24-16	83-9	-	20896	ⅢbJ	完形	67.0	7.3	34.0	3.8	24.0	7.6	2.0	-0.1	61.5	-	Sa	
Ⅱ-24-17	83-9	3S0310	20832他	ⅢbJ	完形	68.0	8.3	33.0	2.8	14.0	-2.4	2.1	0.0	32.1	-	Sa	他2点
Ⅱ-24-18	83-9	-	20792	ⅢbJ	完形	66.0	6.3	44.0	13.8	12.0	-4.4	1.5	-0.6	43.8	-	Mud	
Ⅱ-24-19	83-9	-	20734	ⅢbJ	完形	70.0	10.3	30.0	-0.2	14.0	-2.4	2.3	0.2	48.6	-	Sa	
Ⅱ-24-20	83-9	-	20788	ⅢbJ	完形	73.0	13.3	30.0	-0.2	14.0	-2.4	2.4	0.3	38.3	-	Sa	
Ⅱ-24-21	83-9	-	20749	ⅢbJ	完形	74.0	14.3	38.0	7.8	15.0	-1.4	2.0	-0.2	53.6	-	Sa	
Ⅱ-24-22	83-9	3S0317	20785他	ⅢbJ	完形	78.0	18.3	38.0	7.8	18.0	1.6	2.1	-0.1	51.2	-	Sa	他1点
Ⅱ-24-23	83-9	-	20911	ⅢbJ	完形	80.0	20.3	27.0	-3.2	17.0	0.6	3.0	0.9	35.0	-	Mud	
完形合計						2983.6	577.0	1511.6	298.6	822.0	193.2	105.79	20.60	2,054.8			
完形平均値						59.7	11.5	30.2	6.0	16.4	3.9	2.10	0.41	41.1			
遺物総重量														3,300.1			

※完形 50点

## 7号平地式住居址〔ⅢH-07〕（図Ⅱ-25～28 図版14-1～5, 15-1～12）

位置：I-25, J-25～27, K-26区 規模：555×455cm 長軸方向：N-71° E

付属遺構：炉跡 ⅢF-25 灰集中 ⅢAS-03 礫集中 ⅢSB-08 土坑 PIT01

確認・調査：本住居址は、住居址としての認識の遅れから、細切れの調査過程を経ている。付属遺構の内、付属炉(ⅢF-25)と礫集中(ⅢSB-11・12)の調査は、Ⅲ層調査開始直後に行った。火山灰除去後、J-25・26区のⅢ層上面において浅い窪みが認められたことから、窪みの長軸方向に合わせてベルトを設定した。Ⅲa層を除去した際、窪みの位置において、Ⅲa層を直接被覆する長軸長44cmの灰の集積を検出した。半截した結果、下位に焼土(ⅢF-25)の形成を確認したことから平面形・断面の記録を行った。並行して焼土形成面の状態を把握するため、周囲のⅢa層除去を進めたところ、Ⅲa層下位においてⅢF-25を中心に東西約5mの範囲に広がる焼骨片の分布が認められたため、土壌サンプルの回収を行った。また周囲のⅢb層上面で、ⅢSB-11・12を検出したことから、平面図を作成して取上げ、この場での調査を一端終了した。その後、ⅢF-25西側において、新たにⅢb層を僅かに被覆する灰の集中(ⅢAS-03)を確認したことから、記録後、土壌サンプルの回収を行った。ⅢF-25、ⅢAS-03、及び礫集中の配置が、既に調査済のⅢH-02～05と近似することから、住居址の可能性を想定し、柱穴確認を行った。結果、焼土を取り囲む形で13本の杭列が確認できたため、これらを住居址柱穴と判断し、7号住居址(ⅢH-07)として設定した。なお、柱穴確認のため精査を行っていた際、ⅢF-25北側において漆器椀塗膜が出土し、東側の住居址柱穴列にかかる形で、土坑を1基検出した(PIT01)。柱穴の断面記録後、完掘状態を撮影し、調査を終了した。

付属炉(図Ⅱ-26)：ⅢF-25の灰層は、検出面のⅢb層上面で僅かに盛り上る状態であった。しかし半截した結果、焼土面はⅢc層中に形成され、灰層はその上位に10cmの厚さで堆積していることが判明した。灰層と焼土面との層境が明瞭であったことから、灰を掻き出し焼土面を攪拌した上で新たな灰を敷き詰めた炉跡であることが確認できた。土壌サンプルからは、サケ科魚骨を主体とする骨片と、ヒエ属、キビを主体とする炭化種子を得ている。

灰集中(図Ⅱ-26)：ⅢAS-03は長軸長30cm、厚さ6cmの規模をもつ。ⅢF-25と異なり水平な基底面にマウンド状に形成されている。上面で炭化材が出土し、樹種同定の結果コナラ節と同定されている。フローテーションの結果、多量の魚骨と、アワ・ヒエ属・キビを主体とする炭化種子を得た。

土坑(図Ⅱ-26)：PIT01は、柱穴確認段階においてⅢc層中位の面で検出したため、構築面は既に削平していたが、確認面において長軸82cm、深さ5cmの規模をもつ略楕円形の土坑である。確認時、土坑上位にⅢBB-10に関連する未被熱獣骨が出土していた。土坑覆土に相当することから、ⅢBB-10に関連する遺構の可能性もあるが、本住居址と合わせて報告する。覆土はⅢc層主体でまわりは無い。立ち上がりは不明瞭で、坑底面も平坦ではないため規格的土坑ではないと考えられる。坑底面からは鉄製品が1点出土している。

柱穴(図Ⅱ-26)：柱穴列を組むものとして13本(HP02・03・04・05・06・07・08・10・11・12・13・14・15)、柱穴列から外れるものが西側に1本(HP17)、南側に1本(HP16)、東側に3本(ⅢKP-82・83・98)あり、柱穴列内側に2本(ⅢKP-80・81)ある。すべて打ち込みによるものであるが、柱穴列を組むものは大半が確認面から20cm以上の深さで、堆積土のしまりは極めて弱いものであった。またHP04・08・11は「外ふんばり」の状態、HP05はやや外側に傾く状態で打ち込まれている。柱穴列西側に

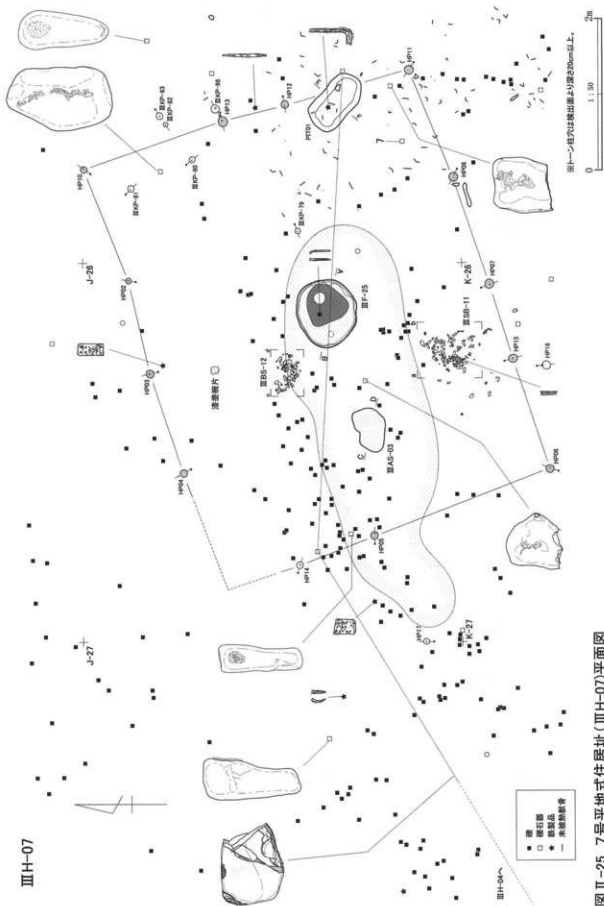


图 II-25 7号平地式住居址(ⅢH-07)平面图

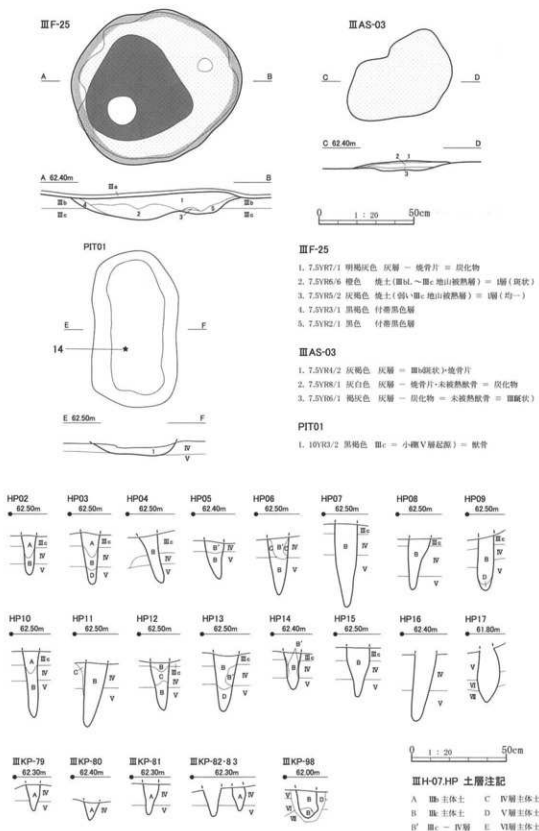
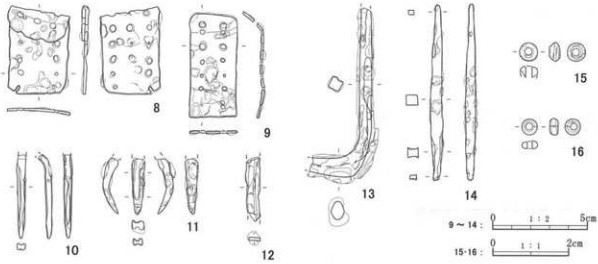


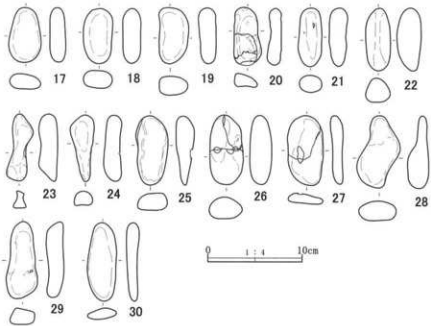
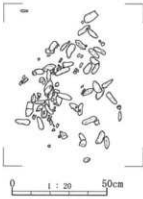
図 II-26 7号平地式住居址付属遺構及び柱穴断面



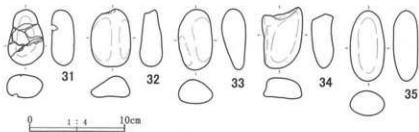
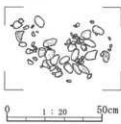
図Ⅱ-27 7号平地式住居址出土遺物(1)



III SB-11



III SB-12



図II-28 7号平地式住居址床面遺物出土状態及び出土遺物(2)

表Ⅱ-33 ⅢH-07属性表

棟号	図版番号	遺構名	グリッド	層位	長軸方向	規模(cm)				柱穴		付属遺構	
						主体部		付属部		本数			
						長軸	短軸	長軸	短軸	主体	付属		他
Ⅱ-25	14-1	ⅢH-07	J-25-26* 27-J-25 K-26	ⅢbU	N-71°-E	555	455	-	-	13	1	6	

表Ⅱ-34 ⅢH-07付属炉・灰集中属性表

棟号	図版番号	遺構名	グリッド	層位	タイプ	平面形	規模(cm)			灰・骨片の有無	備考
							長軸	短軸	厚さ		
Ⅱ-26	14-2	ⅢF-25・ⅢSB-11	J-25-26	ⅢbU	炉	円形	91	78	14	灰・骨	
Ⅱ-26	14-3	ⅢAS-03	J-26	ⅢbM	灰集中	不整形	60	40	6	灰	

表Ⅱ-35 ⅢH-07. PIT01属性表

棟号	図版番号	遺構名	グリッド	層位	平面形 調査面/ 坑底面	調査面規模(cm)		坑底面規模		深さ (cm)	備考
						長軸	短軸	長軸	短軸		
Ⅱ-26	15-2	PIT01	J-25	ⅢbU	楕円形/ 楕円形	82	46	70	28	5	坑底より鉄製品出土

表Ⅱ-36 ⅢH-07柱穴属性表

棟号	図版番号	遺構名	規模(cm)			傾き (度)	タイプ	備考
			上端	下端	深さ			
Ⅱ-26	-	HP02	7	2	21	1°	打込み	
Ⅱ-26	15-5	HP03	10	2	27	1°	打込み	
Ⅱ-26	-	HP04	10	2	26	17°	打込み	
Ⅱ-26	15-6	HP05	10	1	20	8°	打込み	
Ⅱ-26	15-7	HP06	11	2	31	2°	打込み	
Ⅱ-26	-	HP07	12	2	44	0.5°	打込み	
Ⅱ-26	15-8	HP08	11	2	27	8°	打込み	
Ⅱ-26	-	HP09	9	4	29	2°	打込み	
Ⅱ-26	15-9	HP10	9	2	35	2°	打込み	
Ⅱ-26	15-10	HP11	12	2	34	8°	打込み	
Ⅱ-26	15-11	HP12	10	2	25	5°	打込み	
Ⅱ-26	15-12	HP13	13	3	30	4°	打込み	
Ⅱ-26	-	HP14	9	2	20	1.5°	打込み	
Ⅱ-26	-	HP15	12	2	21	2°	打込み	
Ⅱ-26	-	HP16	12	4	36	7°	打込み	
Ⅱ-26	-	HP17	8	3	28	1°	打込み	
Ⅱ-26	-	ⅢKP-79	7	2	14	1.5°	打込み	
Ⅱ-26	-	ⅢKP-80	8	1	10	5°	打込み	
Ⅱ-26	-	ⅢKP-81	8	2	16	5°	打込み	
Ⅱ-26	-	ⅢKP-82	9	3	14	5°	打込み	
Ⅱ-26	-	ⅢKP-83	6	2	12	4.5°	打込み	
Ⅱ-26	-	ⅢKP-98	11	4	15	0.5°	掘立	

表Ⅱ-37 ⅢH-07出土礎石属性表

棟号	図版番号	個体名称	遺物番号	遺物名	分類	層位	遺構名	グリッド	計測値(mm)			重量(g)	材質	備考
									長軸	短軸	厚さ			
Ⅱ-27-1	85-1	-	3ST0022	21308火打石	-	ⅢbU	-	J-25	130.0	99.0	34.0	627.0		礎石使用 他2点
Ⅱ-27-2	85-2	-	-	21313 たたき石	I B1	ⅢbU	-	J-26	133.0	44.0	43.0	332.0	Sa.	
Ⅱ-27-3	85-3	-	-	22427 たたき石	I B1	ⅢbU	-	J-27	155.0	66.0	45.0	543.0	Sa.	
Ⅱ-27-4	85-4	-	-	22408 たたき石	II A1	ⅢbU	-	J-25	(119.0)	(100.0)	29.0	418.0	Sa.	
Ⅱ-27-5	85-5	-	-	21357 たたき石	II A3	ⅢbU	-	J-26	(95.0)	89.0	30.0	294.0	Mud.	
Ⅱ-27-6	85-6	-	-	22414 台石	-	ⅢbU	-	J-25	168.0	102.0	68.0	2,360.0	Sa.	
Ⅱ-27-7	85-7	-	-	22411 滑石のある礎石	-	ⅢbU	-	J-25	198.0	119.0	73.0	1,468.0	Sa.	被熱
Ⅱ-28-8	85-8	-	-	24222 小丸	-	ⅢbM	-	J-26	46.9	32.8	4.0	11.3	Fe	
Ⅱ-28-9	85-9	-	-	21446 小丸	-	ⅢbM	-	J-26	56.0	25.5	11.8	8.6	Fe	
Ⅱ-28-10	85-10	-	-	20707 鈎状製品	-	2	-	J-26	(44.2)	5.0	7.5	3.4	Fe	
Ⅱ-28-11	85-11	-	-	22428 鈎状製品先端部	-	ⅢbU	-	J-27	(30.0)	7.5	9.7	2.3	Fe	
Ⅱ-28-12	85-12	-	-	21363 棒状製品	-	ⅢbU	ⅢSB-11	J-26	(34.0)	7.8	7.5	3.1	Fe	
Ⅱ-28-13	85-13	-	-	34150 鈎状製品完成品	-	1	PIT01	J-25	92.5	36.8	10.0	34.1	Fe	
Ⅱ-28-14	85-14	-	-	20005 棒状製品	-	Ⅲa	-	J-25	93.0	7.2	7.0	10.8	Fe	
Ⅱ-28-15	85-15	-	-	51062 ガラス玉	-	1	ⅢF-25	J-26	5.0	5.0	3.0	0.1	G	PLT1128
Ⅱ-28-16	85-16	-	-	51063 ガラス玉	-	1	ⅢF-25	J-26	4.0	4.0	2.5	0.1	G	PLT1132



表II-38 III SB-11 礫属性表

挿入 番号	図版 番号	個体 名称	遺物 番号	層位	状態	計測値(mm)					長短比	長短比 標準 偏差	重量(g)	被熱	材質	備考	
						長軸	標準 偏差	短軸	標準 偏差	厚さ							標準 偏差
II-28-17	86-17	-	21208	IIIbU	完形	59.0	-7.8	35.0	4.7	17.0	-0.8	1.69	-0.57	42.2	-	Sa.	
II-28-18	86-17	-	21213	IIIbU	完形	58.0	-8.8	31.0	0.6	19.0	1.2	1.87	-0.39	48.3	-	Sa.	
II-28-19	86-17	-	21183	IIIbU	完形	59.0	-7.8	32.0	1.7	22.0	4.2	1.84	-0.42	53.5	-	Sa.	
II-28-20	86-17	3S0308	21188	IIIbU	完形	61.0	-5.8	29.0	-1.4	17.0	-0.8	2.10	-0.16	36.6	-	Sa.	
			21196	IIIbU													
			21287	IIIbU													
			21253	IIIbU													
II-28-21	86-17	-	21184	IIIbU	完形	62.0	-4.8	25.0	-5.4	19.0	1.2	2.48	0.22	39.7	-	Sa.	
II-28-22	86-17	-	21174	IIIbU	完形	67.0	0.2	27.0	-3.4	26.0	8.2	2.48	0.22	54.6	-	Sa.	
II-28-23	86-17	-	21180	IIIbU	完形	71.0	4.2	26.0	-4.4	19.0	1.2	2.73	0.47	34.8	-	Mud.	
II-28-24	86-17	-	21198	IIIbU	完形	71.0	4.2	25.0	-5.4	19.0	1.2	2.84	0.58	29.6	-	Mud.	
II-28-25	86-17	3S0292	21161	IIIbU	完形	74.0	7.2	34.0	3.7	19.0	1.2	2.18	-0.08	44.4	-	Sa.	
			21162	IIIbU													
			21163	IIIbU													
II-28-26	86-17	3S0266	21223	IIIbU	完形	74.0	7.2	35.0	4.7	23.0	5.2	2.11	-0.15	71.3	-	Sa.	
			21225	IIIbU													
			21228	IIIbU													
II-28-27	86-17	-	21246	IIIbU	完形	75.0	8.2	38.0	7.7	13.0	-4.8	1.97	-0.29	35.0	-	Mud.	
II-28-28	86-17	-	21190	IIIbU	完形	76.0	9.2	46.0	15.7	22.0	4.2	1.65	-0.61	65.5	-	Sa.	
II-28-29	86-17	-	21222	IIIbU	完形	81.0	14.2	33.0	2.7	19.0	1.2	2.45	0.19	59.8	-	Sa.	
II-28-30	86-17	-	21207	IIIbU	完形	83.0	16.2	31.0	0.6	13.0	-4.8	2.68	0.42	35.2	-	Mud.	

完形合計 3005.6 325.4 1366.1 172.5 803.2 118.2 101.69 17.63 1,981.8

完形平均値 66.8 7.2 30.4 3.8 17.8 2.6 2.26 0.39 44.0

遺物総重量 2,389.2

※完形 45点

表II-39 III SB-12 礫属性表

挿入 番号	図版 番号	個体 名称	遺物 番号	層位	状態	計測値(mm)					長短比	長短比 標準 偏差	重量(g)	被熱	材質	備考	
						長軸	標準 偏差	短軸	標準 偏差	厚さ							標準 偏差
II-28-31	86-18	-	21461	IIIbU	完形	58.0	-6.0	37.0	2.8	24.0	0.3	1.57	-0.22	59.9	-	Con.	地2点
II-28-32	86-18	-	21489	IIIbU	完形	61.0	-3.0	41.0	6.8	24.0	0.3	1.49	-0.31	74.1	-	Sa.	
II-28-33	86-18	-	21458	IIIbU	完形	65.0	1.0	35.0	0.8	25.0	1.3	1.86	0.07	67.8	-	Sa.	
II-28-34	86-18	-	21456	IIIbU	完形	64.0	64.0	43.0	43.0	22.0	22.0	1.49	1.49	79.0	-	Sa.	
II-28-35	86-18	-	21474	IIIbU	完形	75.0	11.0	35.0	0.8	26.0	2.3	2.14	0.35	93.9	-	Sa.	

完形合計 1032.1 105.7 550.5 78.3 379.9 46.7 28.62 3.18 1,080.1

完形平均値 68.8 6.6 36.7 4.9 23.7 2.9 1.79 0.20 67.5

遺物総重量 1,525.5

※完形 16点

位置する HP17 は、メインセクション 27 ラインにかかって検出したもので、深く打ち込まれており先端がVII層まで達する。他の住居址の検出状態を考慮すると、前小屋に関連するものである可能性が高い。

遺物出土状態(図II-25-28)：遺物の大半は棒状礫であり、西側で出土密度が高い。いずれもIIIb層上面で出土している。2ヵ所の礫集中はいずれも7cm前後の棒状礫で構成され、III SB-11 は80×56cmの分布範囲で礫個体総数135点中、完形個体は45点、III SB-12 は54×34cmの分布範囲で礫個体総数47点中、完形個体は16点であった。共に極めてまとまりの良い状態で出土している。またIII SB-11 では礫間で棒状の鉄製品(12)が出土している。付属炉北側で出土した漆塗碗は、内面

を上に向けた状態で出土した。Ⅲb 層の落込みから出土したが、人為的な窪みかは判断できなかった。柱穴列内外では、たたき石を中心とする礫石器(2~7)が多数出土している。ⅢBB-10 と重なるものもあるが、いずれもⅢb 層上面で出土していることから、本住居址に伴うものと考えている。その他火打石と考えられる赤色チャート製の石器(1)は、ⅢH-04 周辺出土資料と接合している。

出土遺物(図Ⅱ-27・28) : 1 は縁辺に剥離が認められる赤色チャート製の石器で、両面に滑沢面をもつ。縁辺部に細かい剥離が入り、稜に摩滅も認められることから、火打石として利用されたと考えられる。2~5 はたたき石である。2・3 は角柱状礫、4・5 は不整形礫を素材とし、いずれも面を主たる使用部としている。6 は台石、7 は滑沢面をもつ礫で、共に礫の稜が使用されている。8・9 は小札、10・11 は鉤状製品の先端部で 2 面に溝状の窪みが認められる。12 はⅢSB-11 で出土したもので、棒状製品としたが破断面の形状から刀子の茎の可能性もある。13 は PIT01 坑底で出土したもので、L 字形に曲がった棒状製品である。14 は両端に先端部を形成した棒状製品で、図の下端側の稜に潰れが認められる。刺突具として使用されたものかもしれない。15・16 はⅢF-25 灰層のサンプル土壤中より回収したガラス玉である。15 は白色、16 は鈍い青色で、共に透明度は極めて低い。16 は被熱により表面の劣化が激しい。細片化しており図示していないが、出土した漆塗碗は膜のみの状態で、内面は赤色、外面は黒色の上に赤色漆による文様が描かれている。(小野)

#### 灰集中 1 [ⅢAS-01] (図Ⅱ-29・30 図版 27-1~5, 28-1)

位置 : J-28・29, K-29 区 規模 : 252×216×6cm

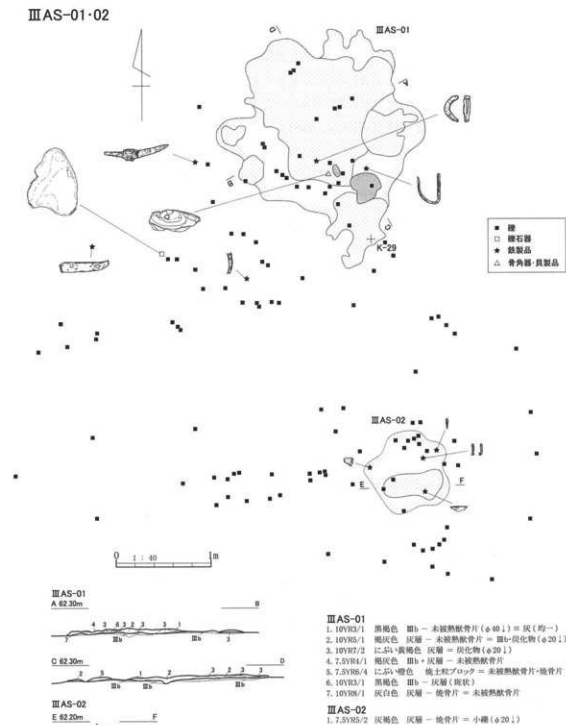
確認・調査 : 火山灰除去時、重機バケットにより J-29 区のⅢa 層を若干削平した際、灰層上面が露出した。調査が進みⅢa 層を掘削した結果、長軸 2.5m の規模をもつ灰集中(ⅢAS-01)であることが判明した。そこで平面形の記録後、灰の平面形に合わせて十字にベルトを設定し、灰層内部の調査を行った。調査はベルトで区切られた 4 つのブロックの精査を同時に進め、合わせて土壌サンプルの回収も行った。灰の中からは多量の動物遺存体の他、鉄製品をはじめとする遺物が出土した。遺存体については骨番号を付番し、位置を記録して取り上げている。4 ブロックで灰層基底面を検出した後、堆積状態の観察・記録を行い、ベルトの灰層を回収し調査を終えた。

平面形(図Ⅱ-29) : 灰層の平面形は、灰としての残りが良い範囲と土壌化が著しい範囲、並びに焼土ブロックを含む範囲というように、いくつかの単位で構成されていた。

堆積状態(図Ⅱ-29) : 堆積状態を観察したが、平面形で認識した灰層ブロック単位以上の細分はできなかった。灰層下位に焼土は形成されておらず、Ⅲb 層の水平な基底面に、6cm の厚さでマウンド状に盛られていた。

遺物出土状態(図Ⅱ-29) : 遺物は南西側ブロックにおいて特に多く出土している。灰層範囲内からは棒状礫の他、鉄製品 2 点(5・6)と貝製品 1 点(19)が出土し、周辺からも鉄製品を含む多数の遺物が出土している。ⅢH-03 が隣接しているが、灰層検出時に出土したⅢAS-01 に伴うと考えられる遺物は概ね灰の南西側に集中する。

遺存体出土状態 : 灰層中からはシカの全身に及ぶ骨やヒグマの手中・中足骨をはじめとし、多種にわたる遺存体が出土している。これらは検出時に把握した灰層単位の内、主として北側にある最も大きな灰層ブロック中において高密度で出土している。未被熱のものが大半を占め、灰層に覆われ



図Ⅱ-29 灰集中1・2(IIIAS-01-02)

表Ⅱ-40 IIIAS-01-02属性表

挿図番号	図版番号	遺構名	グリッド	層位	平面形	規模(cm)			灰・骨片の有無	備考
						長軸	短軸	厚さ		
II-29	27-1	IIIAS-01	J-28・29 K-29	IIIbU	不整形	252	216	6	灰・骨	未焼熟獣骨多量に含む
II-29	28-2	IIIAS-02	K-28	IIIbU	不整形	94	90	2	灰・骨	

ていたためか、遺存状態は極めて良好であった。フローテーションの結果、シカ以外にサケ科、ウグイといった魚骨と、カワシンジュガイや陸産貝類も得られた。

出土遺物(図Ⅱ-30)：1は不整形礫の縁辺を使用した蔽石。2は刀子で、鹿角製の柄の一部と考えられる部位が残存している。茎から刀身にかけて大きく屈曲し、錆化しているが樹皮を巻いた痕跡が残る。3・4も刀子で、3は切先や棟部が潰れ変形している。5は鉤状製品、6は鉤状製品未成品と思われる資料で、5・6共に2面に溝状の窪みが認められる。7は用途不明の棒状製品である。12～18・20・21はフローテーションサンプル中より回収した遺物である。12～18は骨角器で、13は端部断面が扁平なことから中柄、12・15～17は先端部側からの加圧剥離が入り、端部断面が丸いことから骨鏃と考えた。19は調査時に灰層中より出土したもので、カワシンジュガイに穿孔し、紐通しの穴を設けた穂筒である。20・21はガラス玉で、いずれも透明度の低い白色である。20は被熱によるクラックが著しい。

性格：平面形での観察結果、及び遺構の規模から考えて、数回に及ぶ単位で繰り返し灰が投棄されたと考えられる。また灰層中から得られた遺物の内容は、ⅢH-07等の付居炉灰層中遺物と内容が類似していることから、本遺構の灰の起源は、住居址跡跡である可能性が高い。V章3節の動物遺存体同定結果も考慮すると、単なる「ゴミ捨て場」ではなく、近世絵画にも描かれている「灰送り」の遺構と考えられる。

(小野)

#### 灰集中2〔ⅢAS-02〕 (図Ⅱ-29・30 図版28・2・3)

位置：K-28区 規模：94×90×2cm

確認・調査：ⅢAS-01南側のⅢb層を掘削した際、小規模な灰の集中を検出した。土壌化が進んでおり、ⅢAS-01程明瞭な灰層ではなかったが、灰集中2(ⅢAS-02)として設定した。平面形・断面の記録を行い、土壌サンプルを回収して調査を終えた。

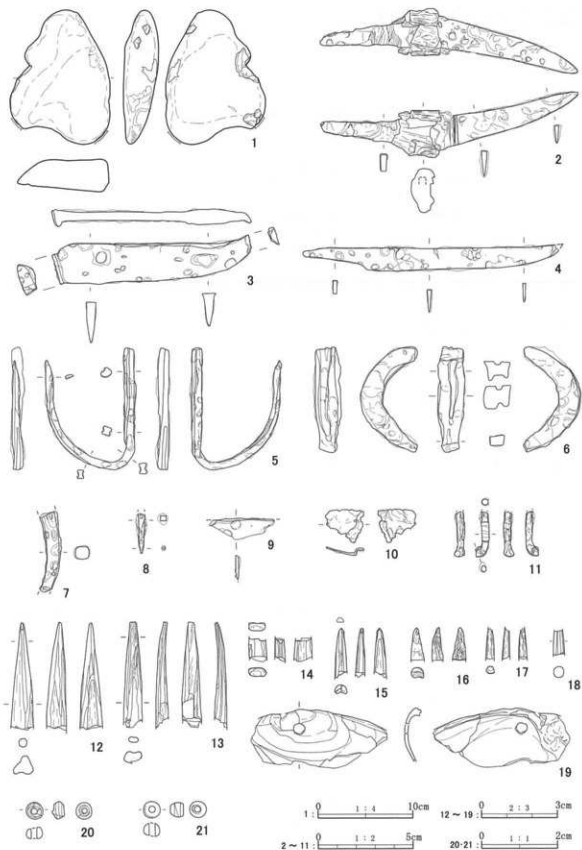
堆積状態(図Ⅱ-29)：Ⅲb層中の平坦面に2cmの厚さで堆積していた。

遺物出土状態(図Ⅱ-29)：灰層上面、及び西～南側を中心とする範囲で棒状を主体とする小型の礫が多数出土し、灰層上面からは鉄製品(8～11)も数点出土している。

出土遺物(図Ⅱ-30)：8～11は棒状・板状の鉄製品で、8は先端部が形成されていることから釘の可能性がある。11は錆化しているが樹皮巻の痕跡を残す。フローテーションの結果、シカ、アメマス、サケ属、コイ科の骨の他、アワ、ヒエ属、キビをはじめとする炭化種子が得られた。

性格：調査時はまだⅢH-04の認識に至っていなかったが、位置関係から住居址に関連する灰集中と考えられる。

(小野)



図II-30 灰集中1・2出土遺物(ⅢAS-01:1~7,12~21 ⅢAS-02:8~11)

表Ⅱ-41 ⅢAS-01出土遺物属性表

挿図 番号	図版 番号	個体 名称	遺物 番号	遺物名	分類	層位	遺構名	グリッド	計測値(mm)			重量(g)	材質	備考
									長軸	短軸	厚さ			
Ⅱ-30-1	90-1	-	24000	たたき石	ⅡA2	ⅢbU	ⅢAS-01	K-29	143.0	108.0	37.0	538.0	Sa.	
Ⅱ-30-2	90-2	-	20513	刀子	-	ⅢbM	ⅢAS-01	J-29	136.0	25.0	13.0	25.1	Fe	
Ⅱ-30-3	90-3	-	20181	刀子	-	ⅢbU	ⅢAS-01	K-29	105.8	22.0	9.7	45.1	Fe	
Ⅱ-30-4	90-4	-	35026	刀子	-	ⅢbM	ⅢAS-01	-	137.5	13.5	2.8	10.0	Fe	
Ⅱ-30-5	90-5	-	20510	鈎状製品	-	ⅢbM	ⅢAS-01	J-29	65.0	48.0	8.0	12.2	Fe	
Ⅱ-30-6	90-6	-	20511	鈎状製品未成品	-	ⅢbM	ⅢAS-01	J-29	55.0	30.0	15.0	36.6	Fe	
Ⅱ-30-7	90-7	-	20512	棒状製品	-	ⅢbM	ⅢAS-01	K-29	(43.0)	9.2	6.5	9.6	Fe	
Ⅱ-30-12	90-12	-	51092	骨鏝	-	ⅢbM	ⅢAS-01	-	(43.0)	9.0	7.0	1.6	B	PLT1395
Ⅱ-30-13	90-13	-	51492	中柄	-	ⅢbM	ⅢAS-01	-	(42.0)	8.0	5.0	1.1	B	PLT1124
Ⅱ-30-14	90-17	-	51093	中柄	-	ⅢbM	ⅢAS-01	-	(9.0)	7.0	3.8	0.2	B	PLT1395
Ⅱ-30-15	90-14	-	51491	骨鏝	-	ⅢbM	ⅢAS-01	-	(19.5)	5.0	4.0	0.3	B	PLT1123
Ⅱ-30-16	90-15	-	51494	骨鏝	-	ⅢbM	ⅢAS-01	-	(13.0)	5.0	4.7	0.3	B	PLT1171
Ⅱ-30-17	90-16	-	51493	骨鏝	-	ⅢbM	ⅢAS-01	-	(13.0)	3.5	3.5	1.1	B	PLT1122
Ⅱ-30-18	90-18	-	101390	骨鏝	-	ⅢbM	ⅢAS-01	-	(6.5)	3.0	3.0	0.1	B	
Ⅱ-30-19	90-19	-	23001	穂柄具	-	ⅢbU	ⅢAS-01	J-29	54.0	23.0	7.0	4.7	Shell.	
Ⅱ-30-20	90-20	-	51471	ガラス玉	-	ⅢbM	ⅢAS-01	-	4.5	4.5	3.5	0.1	G.	PLT1128
Ⅱ-30-21	90-21	-	51472	ガラス玉	-	ⅢbM	ⅢAS-01	-	4.5	4.0	4.7	0.1	G.	PLT1126

表Ⅱ-42 ⅢAS-02出土遺物属性表

挿図 番号	図版 番号	個体 名称	遺物 番号	遺物名	分類	層位	遺構名	グリッド	計測値(mm)			重量(g)	材質	備考
									長軸	短軸	厚さ			
Ⅱ-30-8	90-8	-	20305	針先端部?	-	ⅢbM	-	J-27	(21.0)	6.0	3.0	1.1	Fe	
Ⅱ-30-9	90-9	-	20306	板状製品	-	ⅢbM	-	K-27	(34.8)	(11.9)	1.5	2.1	Fe	
Ⅱ-30-10	90-10	-	20307	板状製品	-	ⅢbM	-	K-27	(20.0)	(17.5)	4.3	1.5	Fe	
Ⅱ-30-11	90-11	-	20304	棒状製品	-	ⅢbM	-	J-27	(24.0)	5.8	5.0	1.2	Fe	

## 獣骨集中 10〔ⅢBB-10〕 (図Ⅱ-31 図版 32-5~8, 33-1)

位置: J・K-25区 規模: 510×414cm

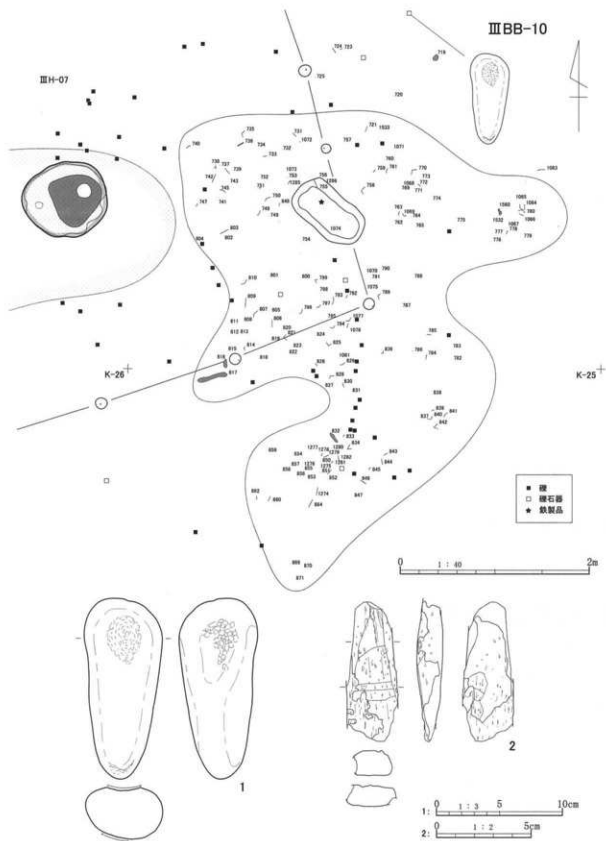
確認・調査: ⅢH-07 付属炉であるⅢF-25を検出するため、周囲のⅢa層を掘削した際、ⅢH-07 東側において多数の未被熱動物遺存体を検出した。ⅢF-25の調査を優先したため、遺存体出土部分のみ柱状に残して掘削を進めた。脆弱なシカの歯が多かったため、希釈した木工用ボンドを塗布して補強した。分布範囲が確定した後、骨番号を付番して取上げた。

遺存体出土状態: 出土した遺存体はいずれもⅢa層上位から中位で出土しており、ⅢH-07に伴う遺構・遺物とは面的に異なっていたことから、住居址より新しいものと判断した。

遺物出土状態: 遺存体分布範囲の外側で礫石器(1)が出土している。ⅢH-07との帰属関係の判断が難しいが、住居址柱穴列の外側になるため、ここで扱った。

出土遺物: 1は棒状礫の両面を使用しているたたき石で、使用部は敲打により著しく窪んでいる。2は鹿角を素材とし、筥状に加工された角器である。(小野)

獣骨の特徴: 同定された試料の多くがシカの頭蓋骨に由来する上・下顎臼歯および角である。その他、保存状態が不良で、不明とされたものが約90点出土している。これらも頭蓋骨片を含むものと思われ、出土部位の偏りはⅢBB-10の性格を濃く反映したものと思われる。(乾)



図II-31 獣骨集中10(III BB-10)平面図及び出土遺物

## ⅢBB-11



図Ⅱ-32 獣骨集中11(ⅢBB-11)平面図

表Ⅱ-43 ⅢBB-10属性表

採図 番号	図版 番号	遺構名	グリッド	層位	平面形	規模(cm)		主体部位	被熱の 有無	関連遺 構	備 考
						長軸	短軸				
Ⅱ-31	32-5	ⅢBB-10	J-K-25	Ⅲa~ⅢbM	不整形	510	414	シカ頭蓋	-	-	

表Ⅱ-44 ⅢBB-10出土遺物属性表

採図 番号	図版 番号	個体 名称	遺物 番号	遺物名	分類	遺構名	グリッド	計測値(mm)			重量(g)	材質	備考	
								長軸	短軸	厚さ				
Ⅱ-31-1	91-9	-	22416	たたき石	I B1	ⅢbU	ⅢBB-10	J-25	143.0	62.0	40.0	485.0	Sa.	
Ⅱ-31-2	91-10	B.736	101390	角器	-	ⅢbU	ⅢBB-10	J-25	73.0	26.0	14.0	8.7	B	

## 獣骨集中 11〔ⅢBB-11〕 (図Ⅱ-32 図版 33-2)

位置：H~J・27・28区 規模：860×276cm

確認・調査：沢地形の最深部にあたるI・27・28区において、860×276cmの範囲に広がる未被熱獣骨の集中を検出した。ⅢBB-11として設定し、骨番号を付番した上で取上げた。

遺存体出土状態：出土した遺存体はⅢb層上位を主体に出土しており、層位的にⅢBB-10よりも古い獣骨集中と考えられる。

獣骨の特徴：同定された試料はⅢBB-10と同様シカの頭蓋骨に由来する上・下顎白歯であり、総数245点の遺存体が出土している。ⅢBB-10と同じ性格の獣骨集中と考えられる。(小野)





図Ⅱ-33 獣骨集中14(ⅢBB-14)平面図

### 獣骨集中 14〔ⅢBB-14〕 (図Ⅱ-33 図版 33-5, 34-1~4)

位置：K-27・28区 規模：294×140cm

確認・調査：ⅢH-03の柱穴確認中、住居西側のⅢc層落ち込みから未被熱獣骨が出土した。当初根穴と想定していた落ち込みであったため、後から押し込まれたものと考えていた。しかし落ち込みの中を掘削したところ、多量の獣骨が出土したため、獣骨集中 14として設定し調査を行った。落ち込み内にはⅢc主体土が堆積していたことから、獣骨の検出に努めた。結果、長軸 2.9mの不整形な窪地の中に、大きく 4つの単位にまとまる形で遺存体を検出した。補強のため希釈した木工用ボンドを塗布した上で写真撮影を行い、ⅢBB-14で独立した骨番号を付番して取上げた。遺存体取上げ後、土坑の平面形・エレベーションを記録して調査を終了した。

遺存体出土状態：遺存体出土状態が 1カ所に積み重なる様相を呈していたことから、数回の単位で埋められたと考えられ、1回の土坑掘削範囲も遺存体集積単位の広がりとはほぼ同じ程度の規模であったと思われる。(小野)

獣骨の特徴：上腕骨、桡骨、大腿骨、脛骨、中手・中足骨が圧倒的多数を占める。部位を特定されていない長管骨についても、これらは四肢骨に由来する破片と考えられる。これらの四肢骨は、完形の部位は無く、骨角器素材や骨髄食等の目的をもって破砕されたものと思われる。ただし、距骨や踵骨も多く出土しているが、これらは完存のものが多く、上記の利用価値が無い部位であった可能性がある。このほか中手・中足骨までの遠位部位が出土しているものの、基節・中節・末節骨の出現頻度が低いことも特徴の一つである。このことは、遺跡内への持ち込み段階で切除されたか、解体方法や遺跡内での利用方法の差異などに起因するものと思われる。(乾)

表Ⅱ-45 ⅢBB-11属性表

挿図 番号	図版 番号	遺構名	グリッド	層位	平面形	規模(cm)		主体部位	被熱の 有無	関連遺構	備考
						長軸	短軸				
Ⅱ-32	33-2	ⅢBB-11	H・J-27・28	Ⅲa~ⅢbM	長横円形	860	276	シカ頭蓋	-	-	

表Ⅱ-46 ⅢBB-14属性表

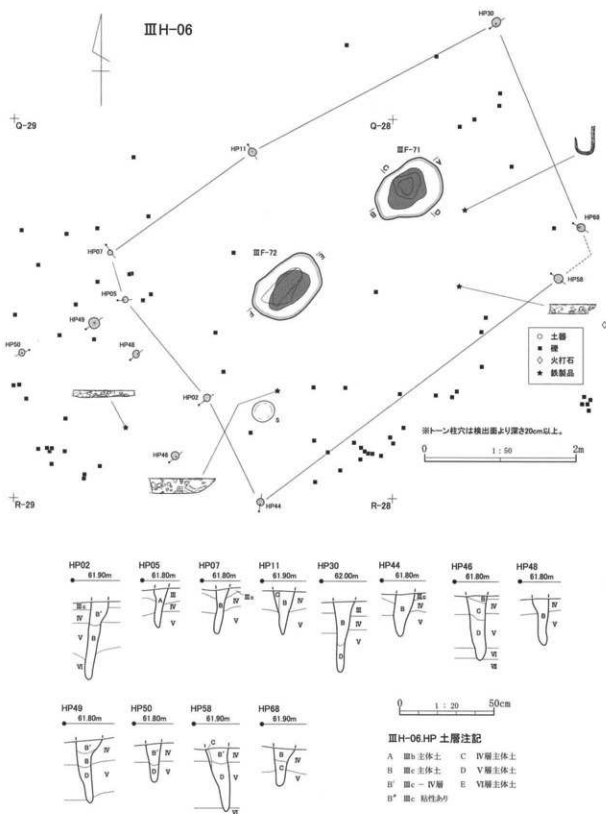
挿図 番号	図版 番号	遺構名	グリッド	層位	平面形	規模(cm)		主体部位	被熱の 有無	関連遺構	備考
						長軸	短軸				
Ⅱ-33	33-5	ⅢBB-14	K-27・28	ⅢbU	不整形	294	140	シカ四肢骨	-	ⅢH-03	

### 6号平地式住居址〔ⅢH-06〕 (図Ⅱ-34・35 図版 13-1~10)

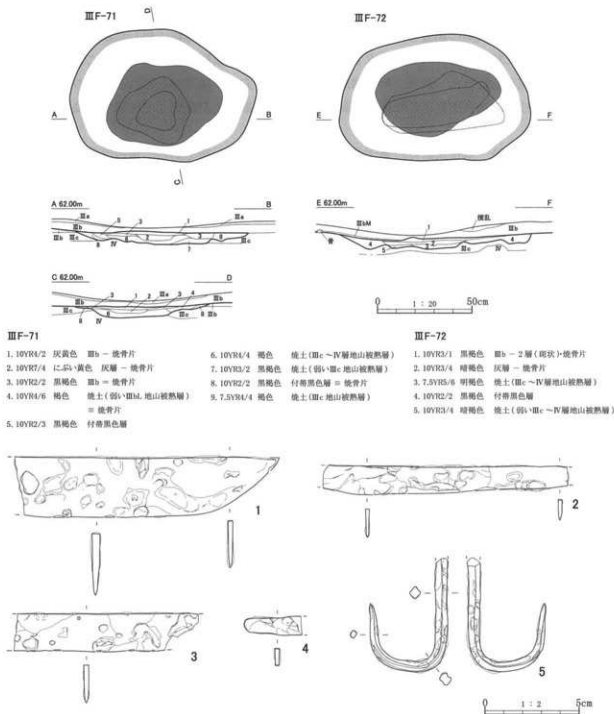
位置：P・Q-27・28区 規模：590×380cm

長軸方向：N-51° E 付属遺構：炉跡 ⅢF-71・72

確認・調査：Q-27・28区のⅢa層を調査するにあたり 3ヶ所の浅い窪みを確認した。中央にベルトを設定し黒色土を除去していくと、2ヶ所にⅢb層上位～中位を被覆する状態で付属炉(ⅢF-71・72)を確認した。灰層の残存状態や長軸方向に並列する状態で検出したことから住居の付属炉と想定して調査を行った。調査はそれぞれベルトを残した状態で灰層確認面まで掘り下げ、灰上層に堆積する黒色土のセクション図をとり、ベルトを除去してから付属炉の平面範囲記録を行った。セクションラインを同じ地点に設定し、それぞれ半載部分の灰・焼骨をフローテーションサンプルとして回収した後、被熱層を半載して断面記録を行った。床面の遺物は付属炉を中心とした 1.5~2m四方



図Ⅱ-34 6号平地式住居(ⅢH-06)平面図及び柱穴断面



図Ⅱ-35 6号平地式住居址付属炉跡及び出土遺物

表Ⅱ-47 III H-06属性表

神洞 番号	図版 番号	遺構名	グリッド	層位	長軸方向	規模(cm)				柱穴			付属遺構
						主体部		付属部		本数	付属	他	
						長軸	短軸	長軸	短軸				
II-34	12-7	III H-06	P-Q-27-28	III bM	N-51°-E	590	380	-	-	8	3	-	

表Ⅱ-48 III H-06付属炉属性表

神洞 番号	図版 番号	遺構名	グリッド	層位	タイプ	平面形	規模(cm)			灰・骨片 の有無	備考
							長軸	短軸	厚さ		
							II-35	13-1	III F-71		
II-35	13-1	III F-72	Q-28	III bM	炉	楕円形	66	39	5	灰・骨	

を対象とし、特徴あるものは写真撮影を行った。その際、残りの灰層サンプルも採取し、被熱面半分を残した状態で付属炉の調査を終了した。柱穴の調査は付属炉を台状に残した状態でⅢc層～Ⅳ層上位まで面的に精査を繰り返し、散水した後乾燥の度合いを観察しながら付属炉に並行しているかを考慮して調査を行った。結果、列を構成する8本の柱穴と、構成から外れる4本の柱穴を検出した。これら柱穴の調査を終了した後に付属炉を含めた発掘写真を撮影して住居址の調査を終了とした。

付属炉(図Ⅱ-34)：本住居址に付属する炉はⅢF-71・72の2カ所である。規模は同様であるがⅢF-71は燃焼面が窪み、被熱層と灰層の層境が明瞭であることから攪拌などを行っていたと考えられる。燃焼面レベルは低くⅢb層下位に近いが、灰層はⅢb層中位で検出している。

柱穴(図Ⅱ-35)：柱穴は不明瞭であるが、付属炉に並列するものとしてHP-02・05・07・11・30・44・58・68を柱穴と判断した。これらはいずれも打込みタイプで垂直もしくは付属炉側に内傾している(表Ⅱ-49)。中でもHP-30は深さ38cmあり住居址北側コーナーに位置しているため主柱穴と考えられる。また、HP-46・48・49・50は構成から外れるが、覆土の縮まり、傾きから住居址に関連するものと判断した。

遺物出土状態(図Ⅱ-35)：床面の遺物は付属炉の南東側に鉄製品及び礫が散漫に分布し、主体部には3点の鉄製品、主体部の外側には1点の鉄製品(2)が出土している。出土層位はⅢa～Ⅲb層中位で鉤状製品は根穴の窪みから出土している(図版13-2)。

出土遺物(図Ⅱ-35)：1～5は鉄製品である。1は切先の先端部、2は小柄、3は刀子、4は刀子の茎である。5は鉤状鉄製品で素材加工の際生じたと思われる浅い溝が両側縁に認められる。また、図示していないが28×24×2cmの扁平円礫(砂岩)が南西側で1点出土している。(奈良)

表Ⅱ-49 ⅢH-06柱穴属性表

神図 番号	図版 番号	遺構名	規模(cm)			傾き (度)	タイプ	備考
			上端	下端	深さ			
Ⅱ-34	13-7	HP02	9	2	42	7.5°	打込み	
Ⅱ-34	13-8	HP05	7	1	21	3°	打込み	
Ⅱ-34	-	HP07	7	2	24	6°	打込み	
Ⅱ-34	-	HP11	11	1	24	1.5°	打込み	
Ⅱ-34	13-9	HP30	11	2	38	3°	打込み	
Ⅱ-34	-	HP44	10	2	23	6.5°	打込み	
Ⅱ-34	13-10	HP46	11	2	35	2.5°	打込み	
Ⅱ-34	-	HP48	9	2	25	4.5°	打込み	
Ⅱ-34	-	HP49	14	2	34	4°	打込み	
Ⅱ-34	-	HP50	8	2	21	2°	打込み	
Ⅱ-34	-	HP58	12	1	34	8°	打込み	
Ⅱ-34	-	HP68	11	2	21	6.5°	打込み	

表Ⅱ-50 ⅢH-06出土遺物属性表

神図 番号	図版 番号	個体 名称	遺物 番号	遺物名	分類	層位	遺構名	グリッド	計測値(mm)			重量(g)	材質	備考
									長軸	短軸	厚さ			
Ⅱ-35-1	84-3	-	20714	刀切先	-	ⅢbU	-	Q-28	(139.0)	32.0	5.0	61.0	Fe	
Ⅱ-35-2	84-6	-	20204	小柄	-	ⅢbU	-	Q-28	(129.8)	15.2	2.0	14.1	Fe	
Ⅱ-35-3	84-4	-	20198	刀子	-	Ⅲa	-	Q-27	(98.0)	20.8	2.8	18.7	Fe	
Ⅱ-35-4	84-5	-	20706	刀子茎	-	ⅢbU	-	P-28	(30.8)	10.0	2.5	2.5	Fe	周辺
Ⅱ-35-5	84-7	-	34294	鉤状製品	-	ⅢbM	-	Q-28	(61.0)	41.5	6.0	12.1	Fe	

## 第2節 建物跡

複数の柱穴で構成され、上屋構造が想定される遺構を建物跡とした。本遺跡では4本構成と5本構成の2種類があり、5軒を検出した。所属時期確定の伴出遺物は無いが、報告にあたってアイヌ文化期の本節に含める。

### 建物跡1 (図II-36 図版16-1~7)

位置: Q・R-20区 規模: 225×180cm

構成: 5本柱 (ⅢKP-05・07・15・19・21)

確認・調査: 本遺構は南側約25mにⅢH-01、北側約20mに建物跡2を検出し、位置関係は南北直線上に並んで立地している。柱穴の確認はⅢc層～Ⅳ層上位までジョレンで面的に精査を繰り返し、散水した後乾燥の度合いを観察しながら黒色プランが等間隔または列を成すものを考慮して調査を進めた。構成を成すと考えられるプランは全て半載して縮まり具合、傾きを観察した。結果、Ⅳ層上位で5本構成の配列を確認した。

柱穴: 柱穴はいずれも掘立柱の丸底で坑底面がやや丸みを帯びる。覆土はⅢKP-05・07・15層が縮まりなくフカフカし堆積が共通する。ⅢKP-19・21もやや縮まりがない。傾きはほぼ垂直である。平面構成は長方形を呈し中心に1本の柱をもつサイコロの「5の目」状である。(奈良)

### 建物跡2 (図II-36 図版17-1~6)

位置: M・N-20区 規模: 255×220cm

構成: 5本柱 (ⅢKP-04・08・22・23・24)

確認・調査: 本遺構は建物跡1と同様に南北直線上の一番南側に立地する。Ⅳ層上位で黒色プランを検出し、構成を考慮しながら調査を進めた。

柱穴: 柱穴はⅢKP-04・22・24が掘立柱で坑底面がやや丸みを帯びる。ⅢKP-08は平底に近い。ⅢKP-23は約50cmある打込み杭である。覆土はⅢKP-04・08・22が上位に微量のB-Tmブロックを含み、ⅢKP-24はTa-cが多量に混入する。いずれも柱痕は不明。23は縮まりなく規格が異なるが傾きや覆土状態から建物跡の構成に加えた。規模は長方形を呈し、中心に1本の柱をもつサイコロの「5の目」状である。(奈良)

### 建物跡3 (図II-36 図版17-7・8)

位置: K・L-24, L-23区 規模: 250×180cm

構成: 4本柱 (ⅢKP-71~74)

確認・調査: ⅢH-02の南側でⅢc層中位～Ⅳ層にかけて、ⅢH-02周辺の柱穴確認精査中に検出した。検出過程は、「L」字型に配列されるⅢKP-71~73までを最初に認定し、想定される配置を参考に周辺の精査を行った。円形のⅢb層落ち込みを全て半載したが、杭穴として追認できたものはⅢKP-74のみであったことから、これらの柱穴をもって建物跡4とした。当初、ⅢH-02の関連遺構検出を目的としたが、位置関係よりⅢH-05ないしはそれ以外に伴う建物跡の可能性が高い。

柱穴: ⅢKP-71~74は底面が平坦状であることから掘立柱跡と思われる。71・73は、堆積状態においてしまりが他の覆土より弱い柱痕(B)や掘り方埋土と思われる層(B<sup>+</sup>・C)が認められる。74は推

定で図示したものの、形態や壁面のしまりより打ち込み杭跡と思われる、建物跡の構成から外れる可能性が高い。(乾)

#### 建物跡4 (図Ⅱ-37 図版17-9・10)

位置:L・K・L-27・28, K-29区 規模:485×465 cm

構成:4本柱(ⅢKP-75~76)

確認・調査:平成17年度調査区の西端に位置する。火山灰除去段階で検出していたが、当初は近現代の施設跡と想定し、調査を先送りしていた。しかし、覆土の構成土壌から耕作土を含まないこと、農業関連の施設として想定できないことから、樽前bテフラ降下以降で明治末期の入植以前の遺構として調査を開始した。セクションラインは「外ふんばり」の有無に注意し、4本構成の対角線上に設けた。柱穴上端規模が広いことから、柱穴の掘り方を残した調査を進め、土層堆積状態の撮影・実測を行った。建物跡4の規模は柱穴中心間が長軸85cm(75-76・77-78間)、短軸75cm(75-78・76-77間)で僅かに長方形となる。

柱穴:全て掘立柱跡である。掘り方の平面形は隅丸形状で、最小のもので一辺の長さが25cm(ⅢKP-75)、最大のものは35cmである。ⅢKP-76・77は坑底が段状の構造で、土層堆積の柱痕と一致する偏りがあり、壁面は垂直に立ち上がる。堆積状態はいずれも柱痕や掘り方埋土が明瞭に観察できる。柱痕覆土はしまりが無く、掘り方埋土は斑状でしまりが強い。柱痕の覆土および掘り方埋土には耕作土が含まれず、柱痕覆土には樽前bテフラや表土が落ち込んでいた。(乾)

#### 建物跡5 (図Ⅱ-37 図版18-1)

位置:Q-30区 規模:200×200cm

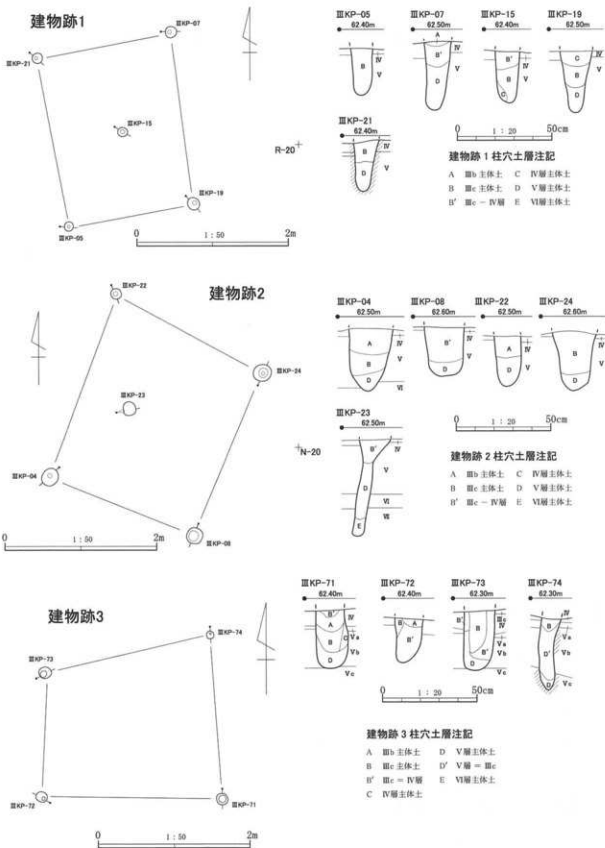
構成:4本柱(推定)(ⅢKP-88・90・91)

確認・調査:縄文時代の調査をしている際、VI層上位で黒色土の落ち込みを確認した。検出した黒色土はⅢ層基層としていたため上層の遺構(柱穴)と想定し周辺の配列を確認した。ジョレンによって周辺を面的に精査した結果、3本で構成する柱穴列を検出した。

柱穴:覆土にⅢ層を含む掘立柱で、坑底面からほぼ垂直に立ち上がる。いずれもしまりなく柱痕は確認できていない。検出したのは3本であるが本来は4本柱であったと想定され破線で推定位置を結び掲載した。(奈良)

表Ⅱ-51 建物跡1柱穴属性表

挿図番号	図版番号	遺構名	グリッド	規模(cm)			傾き(度)	タイプ	備考
				上端	下端	深さ			
Ⅱ-36	16-2	ⅢKP-05	Q・R-20	11	6	24	0.5°	掘立	
Ⅱ-36	16-3	ⅢKP-07		14	6	36	3°	掘立	
Ⅱ-36	16-4	ⅢKP-15		13	8	28	1°	掘立	
Ⅱ-36	16-5	ⅢKP-19		17	6	32	1°	掘立	
Ⅱ-36	16-6	ⅢKP-21		13	4	26	3.5°	掘立	



図II-36 建物跡1~3



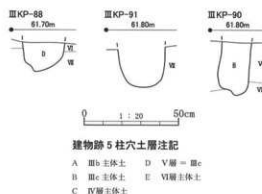
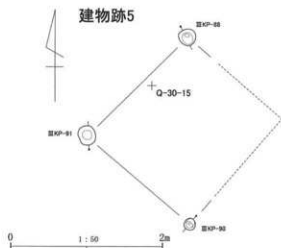
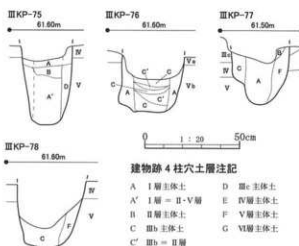
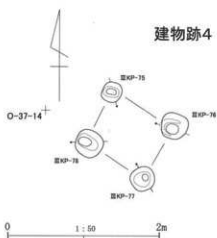


図 II-37 建物跡4・5

表 II-52 建物跡2柱穴属性表

挿図番号	図版番号	遺構名	グリッド	規模 (cm)			傾き (度)	タイプ	備考
				上端	下端	深さ			
II-36	17-2	III KP-04	M-N-20	23	6	32	4°	掘立	
II-36	17-3	III KP-08		21	12	26	0°	掘立	
II-36	17-4	III KP-22		14	6	26	2°	掘立	
II-36	17-5	III KP-23		16	5	51	10°	掘立	
II-36	17-6	III KP-24		23	8	31	6°	掘立	

表 II-53 建物跡3柱穴属性表

挿図番号	図版番号	遺構名	グリッド	規模 (cm)			傾き (度)	タイプ	備考
				上端	下端	深さ			
II-36	17-8	III KP-71	K-L-24	16	7	31	0°	掘立	
II-36	-	III KP-72		15	5	24	8°	掘立	
II-36	-	III KP-73		16	8	32	5°	掘立	
II-36	-	III KP-74	L-23	10	2	38	3°	掘立	

表II-54 建物跡4柱穴属性表

挿図番号	図版番号	遺構名	グリッド	規模(cm)			傾き(度)	タイプ	備考
				上端	下端	深さ			
II-37	-	IIIKP-75	O-37	27	14	42	0°	掘立	
II-37	17-10	IIIKP-76		33	18	30	3°	掘立	
II-37	-	IIIKP-77		31	10	28	0°	掘立	
II-37	-	IIIKP-78		36	22	36	5°	掘立	

表II-55 建物跡5柱穴属性表

挿図番号	図版番号	遺構名	グリッド	規模(cm)			傾き(度)	タイプ	備考
				上端	下端	深さ			
II-37	18-2	IIIKP-88	P-Q-30, P-31	22	7	16	5.5°	掘立	
II-37	-	IIIKP-90		16	14	28	4°	掘立	
II-37	18-3	IIIKP-91		25	14	20	2.5°	掘立	

### 第3節 杭列・杭跡 (図II-38~41 図版18-4~9)

IIIb層調査終了後、炬跡を伴わない建物跡の存在を考慮し、調査区内全体をIIIc層上面においてジョレン精査した際、方形プランの列を構成せず、1列、もしくは単独に打ち込まれた杭跡を確認した。調査区内各所で検出しており、列を構成するものを3カ所で確認している。(小野)

#### 杭列1-2(図II-38 図版18-4~9)

位置：L・M-23・24区

構成杭跡：杭列1 IIIKP-34・35・36・68 杭列2 IIIKP-37・38・39・89

規模：杭列1 565cm 杭列2 485cm 周辺杭跡：IIIKP-40・67・69・70

杭列1-2はIII GP-01西側で並行する配置で検出した。当初方形プランを構成する建物跡と考えていたが、検出した他の建物跡が全て掘立柱跡で構成され、正方形プランであったため、整理段階において杭列に変更した。杭列1-2共に確認面からの平均深度は40cm前後と深く、ほぼ垂直に打込まれている。堆積土のしまりは極めて弱く、断面記録中に崩れ落ちる状態であった。この堆積状態はIII GP-01の墓標穴と類似しており、住居址柱穴等、他の杭跡とは様相を異にしている。(小野)

#### 杭列3 (図II-39 図版18-4)

位置：Q-28・R-27・28区 規模：300cm

構成：1列 (IIIKP-31~33・60~62・92・93・95・96・99)

確認・調査：建物跡と同様に作業を行った。柱穴の確認は全て半截して覆土の状態、締め具合、傾きなどを観察し、根穴ではないと判断したものは杭跡、列を成しているものを杭列とした。

柱穴：杭列03は1列で、IIIKP-32・33・92・93・95・96の6本で構成され、96以外の5本は間隔が約60cmである。周辺にはIIIKP-31、60~61,99を検出しているが不規則な位置関係のため単独の杭跡と判断した。これら杭跡はすべて打込みによるものである。覆土はIIIc層主体でIV層を斑状・均一に含み締め具がない。また、報告対象外だが杭跡3は平成18年度調査区に並列し、関連する杭列跡の検出が予想されたため調査を行ったが杭跡見つからない。(奈良)



杭列 01・02

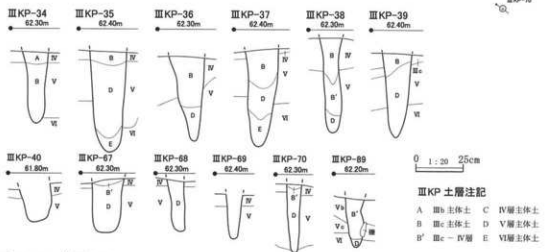
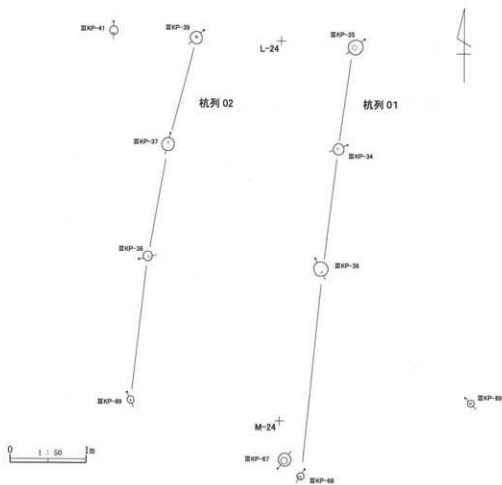


図 II-38 杭列(1)

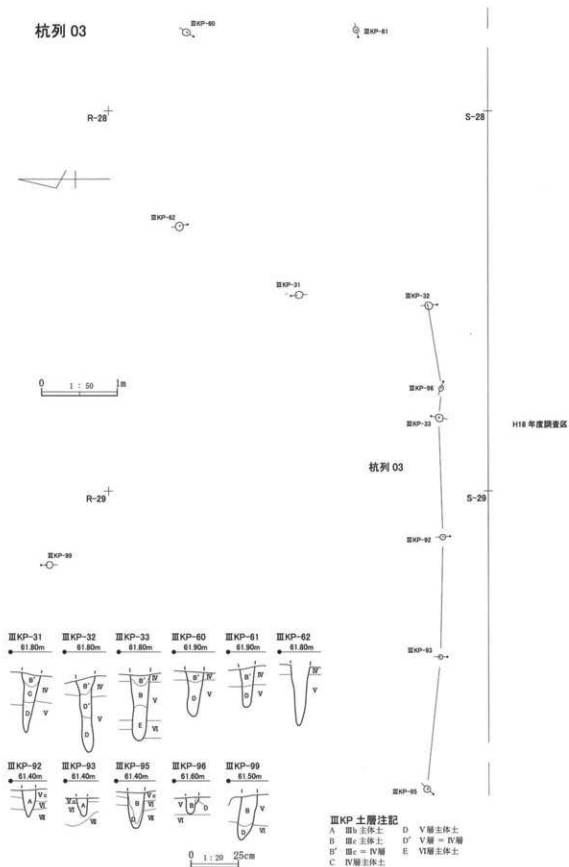


図 II-39 杭列(2)

## 杭跡 (図Ⅱ-40-41 図版 18-4~9)

列を構成しない杭跡は、単独で検出されることは少なく、調査区内各所である程度のもつ配置で検出した。検出位置は河岸段丘面 T<sub>2</sub>の中でも沢地形より東側で、遺構密度の高い厚真川上流よりに多く分布している。

H-I-31 区周辺：ⅢKP-51・52 の 2 本の杭跡を確認した。確認面からの深さはⅢKP-51 が 28cm、ⅢKP-52 が 33cm で、いずれも堆積土は上位にⅢc 層主体土、下位にV層主体土が位置する。またⅢKP-52 は杭跡上方が 8° 傾く状態で打ち込まれている。

M・N-25 区周辺：ⅢKP-58・59 の 2 本を検出した。確認面からの深さはⅢKP-58 が 44cm、ⅢKP-59 が 29cm で、堆積土は上位がⅢc 層主体土、下位がV層主体土である。ⅢKP-59 は最上位にⅢb 層主体土も堆積していた。いずれもほぼ垂直に打ち込まれている。

N-30 区周辺：ⅢKP-53・54・55・56・57 の 5 本を検出した。ⅢKP-56 を除き、確認面での規模が 20cm 前後ある太い杭跡で、確認面からの深さは 40cm 前後であった。堆積土の状態は、ⅢKP-56 において最上位にⅢb 層主体土が堆積する以外は、上位がⅢc 層主体土、下位がV層主体土であった。いずれもほぼ垂直に打ち込まれている。

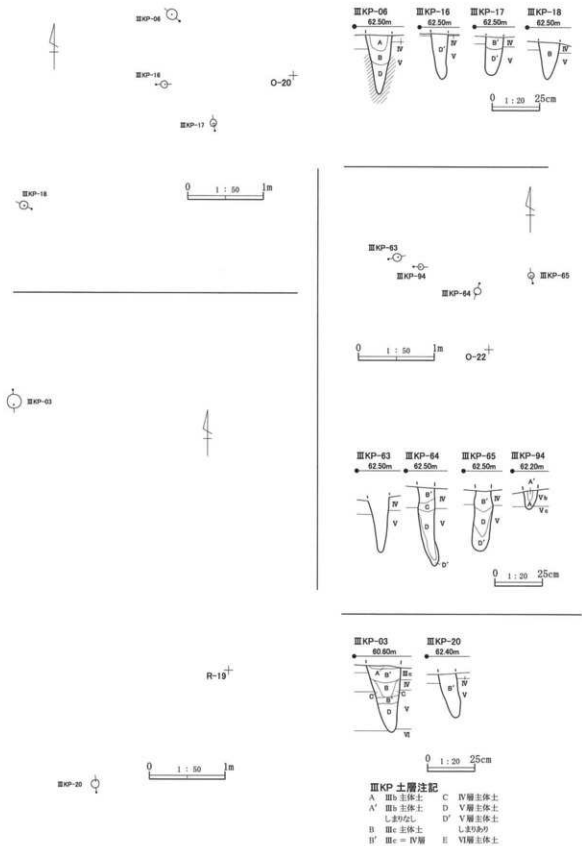
O-24 区：ⅢKP-97 の 1 本のみを検出した。V層調査の際、VI層上面におけるⅢc 層の落込みとして確認した。確認面からの深さは 10cm だが、VII層まで達しているためかなり深く打ち込まれた杭跡といえる。杭跡先端部までⅢc 層が堆積している。

N・O-20 区周辺：ⅢKP-06・16・17・18 の 4 本を検出した。確認面からの深さはⅢKP-06 が 30cm、他の 3 本が 20cm 前後であった。堆積土はⅢKP-06 ではⅢb 層が深く落込み、ⅢKP-16 ではV層主体土のみが堆積している。ⅢKP-06 では打ち込みによる層の押し付けからか、壁面のしまりが硬化している。なおⅢKP-17 は底面が丸みを帯びていることから、掘立の可能性もある。

N-21-22 区周辺：ⅢKP-63・64・65・94 を検出した。ⅢKP-94 のみV層調査中での確認である。確認面からの深さはⅢKP-64 が最も深く 42cm を測る。ⅢKP-94 もVc 層まで達しているため深く打ち込まれている。

Q・R-19 区周辺：ⅢKP-03・20 の 2 本を検出した。ⅢKP-03 は確認面での規模が 18cm ある比較的太い杭跡で、ⅢKP-20 は 12° 傾いた状態で打ち込まれている。 (小野)





図Ⅱ-41 杭跡(2)

表II-56 杭列01属性表

挿入番号	図版番号	遺構名	グリッド	規模(cm)			傾き(度)	タイプ	備考
				上端	下端	深さ			
II-38	18-5	III KP-34	L-23	14	4	38	1°	打込み	
II-38	18-6	III KP-35	L-23	19	6	53	1°	打込み	
II-38	18-7	III KP-36	L-23	19	2	44	5°	打込み	
II-38	-	III KP-68	M-23	9	4	28	5°	打込み	

表II-57 杭列02属性表

挿入番号	図版番号	遺構名	グリッド	規模(cm)			傾き(度)	タイプ	備考
				上端	下端	深さ			
II-38	18-8	III KP-37	L-24	18	4	52	2°	打込み	
II-38	18-9	III KP-38	L-24	12	4	50	0°	打込み	
II-38	-	III KP-39	K-L-24	16	2	44	2°	打込み	
II-38	-	III KP-89	L-24	10	2	26	2°	打込み	

表II-58 杭列03属性表

挿入番号	図版番号	遺構名	グリッド	規模(cm)			傾き(度)	タイプ	備考
				上端	下端	深さ			
II-39	-	III KP-32	R-28	10	2	40	3°	打込み	
II-39	-	III KP-33	R-28	10	3	34	1.5°	打込み	
II-39	-	III KP-92	R-29	7	2	14	1°	打込み	
II-39	-	III KP-93	R-29	6	2	10	5°	打込み	

表II-59 杭跡属性表

挿入番号	図版番号	遺構名	グリッド	規模(cm)			傾き(度)	タイプ	備考
				上端	下端	深さ			
II-38	-	III KP-40	K-24	16	6	20	4°	打込み	
II-38	-	III KP-67	M-23-24	17	8	28	3°	打込み	
II-38	-	III KP-69	L-23	8	2	24	0°	打込み	
II-38	-	III KP-70	M-23	8	2	36	1°	打込み	
II-39	-	III KP-31	R-28	10	2	32	5°	打込み	
II-39	-	III KP-60	R-27	10	2	24	1°	打込み	
II-39	-	III KP-61	R-27	8	2	22	0°	打込み	
II-39	-	III KP-62	R-28	10	2	32	1.5°	打込み	
II-39	-	III KP-51	R-28	8	2	23	10°	打込み	
II-39	-	III KP-99	H-30	14	3	28	4°	打込み	
II-40	-	III KP-52	I-30	14	3	33	8°	打込み	
II-40	-	III KP-53	M-N-30	18	3	40	0°	打込み	
II-40	-	III KP-54	N-30	20	4	32	4°	打込み	
II-40	-	III KP-55	N-30	16	3	36	5°	打込み	
II-40	-	III KP-56	N-30	8	3	44	0°	打込み	
II-40	-	III KP-57	N-30	20	4	39	1°	打込み	
II-40	-	III KP-58	M-26	11	2	44	4°	打込み	
II-40	-	III KP-59	M-25	12	4	29	1°	打込み	
II-40	-	III KP-97	O-24	12	2	10	1°	打込み	
II-41	-	III KP-63	N-22	12	2	28	2°	打込み	
II-41	-	III KP-64	N-22	10	3	42	5°	打込み	
II-41	-	III KP-65	O-21	8	4	32	2°	打込み	
II-41	-	III KP-94	O-22	7	2	10	0°	打込み	
II-41	-	III KP-03	U-17	18	2	36	7°	打込み	
II-41	-	III KP-06	T-17	14	2	31	0°	打込み	
II-41	-	III KP-16	U-17	9	3	23	4°	打込み	
II-41	-	III KP-17	V-20	10	3	20	5°	打込み	
II-41	-	III KP-18	V-20	11	2	20	2°	打込み	
II-41	-	III KP-20	U-20	10	2	24	12°	打込み	



## 第4節 土墳墓

### 1号土墳墓〔ⅢGP-01〕 (図Ⅱ-42~44 図版19-1~20-7)

位置：K・L・22・23区

規模：〔主体部〕 224×96cm×72cm 〔竪穴〕 476×460×12cm

〔封土〕 380×252×8cm

遺構の用語：〔墓 塚〕 本遺構全体の総称 〔主体部〕 遺体を埋葬した土坑部分

〔竪穴〕 円形竪穴部分 〔封土〕 主体部を覆うマウンド

〔掘上げ土〕 竪穴掘削時の掘上げ土

主体部平面形：長台形 長軸方向：N-92° E

確認・調査：平成15年度に道教委によって行われた試掘調査の際、掘削したトレンチ内に埋葬遺体の歯と、副葬品の刀子、及び中柄が出土したことで確認した墓塚である。トレンチ掘削により墓塚東半分の構築面は削平されたが、遺体層までは達しなかったため、墓塚内部は保持された。この際、露出した中柄3点と刀子の図化・取上げを行った上で、墓塚露出部分をブルーシートと土嚢で覆い保護した後、埋め戻し、本調査を待った。本調査は平成17年度に行った。調査は、まず火山灰除去後のⅢ層上面において、墓塚上部の落ち込みと、その周囲に円形に廻る溝状の落ち込みが確認できたことから、試掘トレンチ埋め戻し土を除去した状態で、空撮及び地形測量を行った。その後試掘トレンチ壁面と、墓塚長軸方向にセクションラインを設定し、調査を開始した。試掘トレンチ壁面において土層堆積状態を観察した結果、墓塚上部に封土の存在が確認でき、その上位に自然堆積のⅢa層が被覆していたことから、掘削は覆土のⅢa層を除去し封土上面を検出することから行った。合わせて周囲の溝状落ち込み部分の覆土除去も行い、墓塚構築時の状態の検出に努めた。盛土上面検出後、写真撮影・図化を経て、墓塚内部の調査に入った。墓塚長軸の断面観察のため調査は南半分の掘削から進めた。試掘調査時に遺体が残っていることを確認していたことから、遺体層直上で掘削を止め、土層断面の記録後、残り半分の掘削を行った。墓塚内部全体を遺体層直上まで掘削した後、遺体及び副葬品の検出を行った。検出後は写真撮影・図化を行い、副葬品を取上げ、遺体取上げの準備に入った。遺体の取上げは札幌医科大学の松村博文氏により、慎重に行われた。遺体取上げ後は、墓塚内部、及び周囲にトレンチを設定し、墓塚の構造把握に努めた。その際、墓塚東側セクションA-Bラインの延長上に墓標穴と考えられる杭跡を検出したことから、半截し断面の記録を行い、調査を終了した。

主体部形態(図Ⅱ-42)：主体部は東側が広く、西側に向けて狭くなる長台形の平面形を呈し、南北壁面では上部が崩落しているが、ほぼ垂直に立ち上がっている。西側壁面はやや開口しながら立ち上がっている。

堆積状態(図Ⅱ-42)：堆積土に関する所見について記載する。A-B、C-Dライン共に1層は窪みに堆積した覆土Ⅲb層、A-Bラインの2~4層、C-Dラインの2~5層は封土の土を混入しながら堆積した覆土で、主体部陥没継続中に堆積したと思われる。A-Bライン5層、C-Dライン6~10層は封土、及び掘り上げ土の溝への流れ込み。A-Bライン6・8・9層、C-Dライン11~13層は主体部縁辺の崩落を免れた封土。A-Bライン7・12~15層、C-Dライン14~24層は、主体部陥没による上位封土の崩落土。以上の所見に基づき構築過程を復元すると、本墓塚はⅢb層上面を構築面とし、径476cmの規模をもつ円形の浅い竪穴を掘削した後、竪穴中央に主体部を掘り込み、遺体埋葬後、

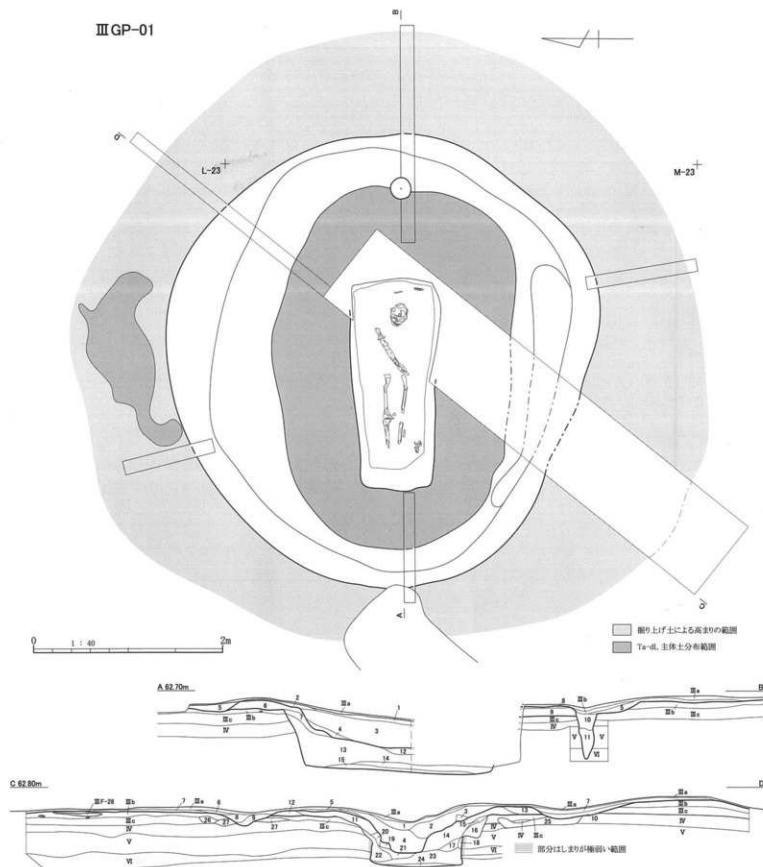
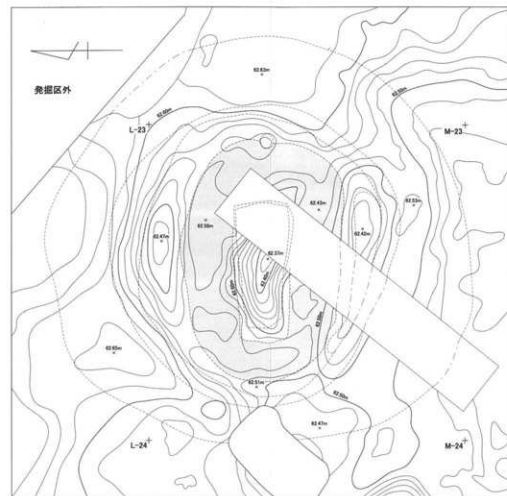


図 II-42 1号土墳墓(III GP-01)



## A-B セクション土層注記

1. 10YR2/1 黒色 土層 = シルト岩 (φ40.1)
2. 10YR2/2 黒褐色 土層 = Ta-dL (均一) = シルト岩 (φ40.1)
3. 10YR3/1 黒褐色 土層 = V層 (均一) = IV層 (均一)
4. 10YR2/1 黒色 土層 = Ta-dL (底状)
5. 2.5YR2/1 黒色 土層 = V層 (均一)
6. 7.5YR4/3 褐色 Ta-dL = V層 (均一) = シルト岩 (φ40.1)
7. 10YR2/2 黒褐色 土層 = V層 (均一) = シルト岩 (φ20.1)
8. 10YR2/2 黒褐色 土層 = Ta-dL (均一) = シルト岩 (φ40.1)
9. 7.5YR2/3 暗褐色 Ta-dL = V層 (均一) = シルト岩 (φ20.1)
10. 10YR2/2 黒褐色 土層 = V層 (底状) L-23埋納部
11. 10YR2/1 黒褐色 土層 = V層 (均一) = IV層 (底状)
12. 10YR2/2 黒褐色 V層 = IV層 (均一) = Ta-dL (底状)
13. 10YR2/2 黒褐色 V層 = IV層 (底状)
14. 10YR2/2 黒褐色 V層 = IV層 (均一) = シルト岩 (φ20.1) 上段L-23埋納部 下段L-23埋納部
15. 10YR2/1 黒色 V層 = Ta-dL (均一) 粘性強 遺体層

## C-D セクション土層注記

1. 10YR2/1 黒色 土層 = IV層 (底状)
2. 10YR2/2 黒褐色 土層 = V層 (均一) = V層 (底状)
3. 10YR3/1 黒褐色 土層 = Ta-dL (底状)
4. 10YR2/1 黒褐色 土層 = V層 (均一) = IV層 (均一)
5. 10YR2/2 黒褐色 Ta-dL = V層 (均一)
6. 10YR4/3 褐色 Ta-dL = III層 (底状)
7. 7.5YR2/1 褐色 土層 = IV層 (均一)
8. 10YR2/1 黒褐色 土層 = IV層 (均一)
9. 10YR2/2 黒褐色 IV層 = III層 (底状)
10. 10YR2/2 黒褐色 土層 = IV層 (底状)
11. 7.5YR4/3 褐色 Ta-dL = V層 (均一)
12. 10YR3/1 黒褐色 V層 = Ta-dL (底状) = IV層 (均一)
13. 7.5YR4/4 褐色 Ta-dL = シルト岩 (φ20.1) = V層 (底状)
14. 10YR2/2 黒褐色 土層 = IV層 (均一) = Ta-dL (均一)
15. 10YR2/1 黒色 土層 = IV層 (底状)
16. 10YR4/1 褐色 Ta-dL = IV層 (均一)
17. 10YR4/3 褐色 土層 = V層 (均一) = V層 (均一)
18. 10YR3/1 黒褐色 V層 = IV層 (底状) L-23埋納部
19. 10YR2/2 黒褐色 V層 = IV層 (均一) 掘り上げた土層
20. 10YR4/2 褐色 土層 = 遺体層 (底状)
21. 10YR4/1 褐色 Ta-dL = III層 (底状)
22. 10YR2/1 黒褐色 V層 = IV層 (均一)
23. 10YR2/2 黒褐色 V層 = IV層 (均一) = シルト岩 (φ20.1) L-23埋納部
24. 10YR2/1 黒色 V層 = Ta-dL (均一) L-23埋納部 遺体層
25. 10YR2/1 黒褐色 土層 = IV層 (均一) 掘り上げた土層
26. 7.5YR2/2 暗褐色 土層 = IV層 (底状) 掘り上げた土層
27. 10YR4/2 褐色 土層 = IV層 (底状) 掘り上げた土層

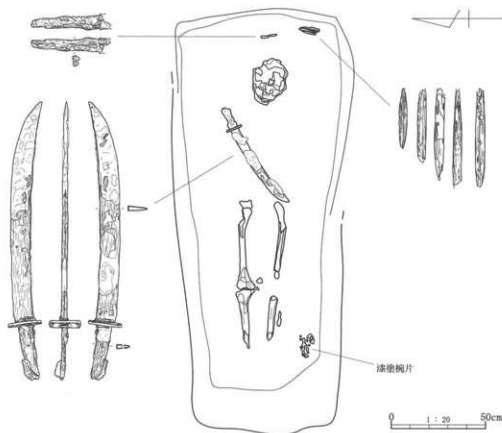


図 II-43 1号土壌墓埋葬状態及び副葬品出土位置

表 II-60 III GP-01 属性表

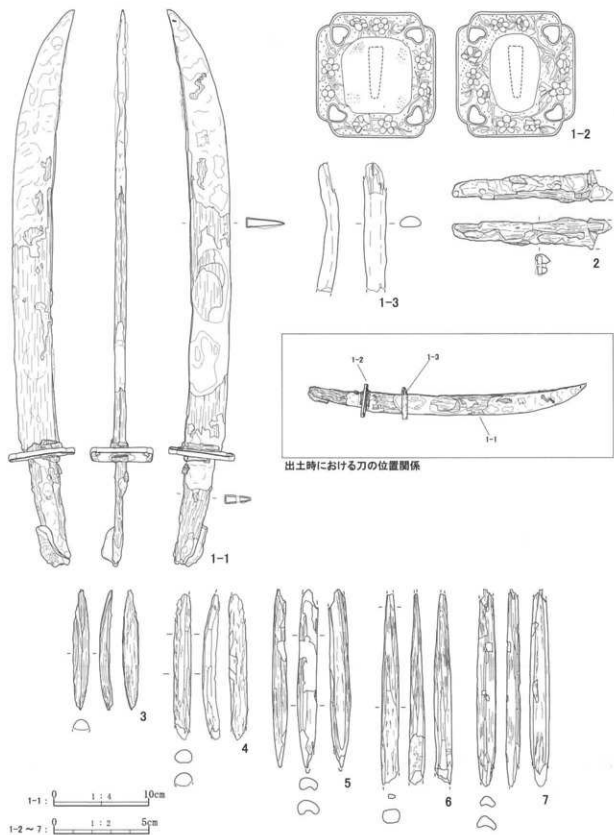
挿図 番号	図版 番号	層位	グリッド	平面形	調査面規模(cm)		坑底面規模(cm)		深さ (cm)	長軸方向	墓標 穴	備考
					長軸	短軸	長軸	短軸				
II-42	19-1	IIIbU	K・L- 22・23	長台形	224	96	196	84	72	N-92° -E	有	墓標上部にマウンドを 伴う墓穴

表 II-61 III GP-01 墓標穴属性表

挿図番号	図版番号	遺構名	規模(cm)			傾き(度)	タイプ	備考
			上端	下端	深さ			
II-42	20-5	III GP-01	22	2	50	0°	打込み	

表 II-62 III GP-01 出土遺物属性表

挿図 番号	図版 番号	個体 名称	遺物 番号	遺物名	分類	層位	遺構名	グリッド	計測値(mm)			重量(g)	材質	備考	
									長軸	短軸	厚さ				
II-41-1	87-1-1	-	20564	刀	-	4	-	L-23	587.0	32.0	10.5	640.0	Fe		
II-41-2	87-1-2	-	20564	鏝	-	4	-	L-23	67.0	64.0	6.0	-	Cu		
II-41-3	87-1-3	-	20564	鞘拵?	-	4	-	L-23	68.0	12.0	11.0	-	B?		
II-41-2	87-2	-	2608	刀子	-	4	-	L-23	(85.0)	17.0	8.0	9.6	Fe		
II-41-3	87-3	-	20566	中柄	-	IIIbU	-	L-23	(64.0)	9.0	7.0	1.3	B		
II-41-4	87-4	-	53543	中柄	-	IIIbU	-	L-23	(77.0)	9.0	9.0	3.2	B		
II-41-5	87-5	-	20565	中柄	-	IIIbU	-	L-23	(94.0)	8.0	11.5	4.2	B		
II-41-6	87-6	-	53544	中柄	-	IIIbU	-	L-23	(101.0)	9.0	8.0	4.8	B		
II-41-7	87-7	-	53546	中柄	-	IIIbU	-	L-23	(104.0)	10.0	8.0	4.5	B		
-	-	-	20563	漆塗柄片	-	IIIbU	-	L-23	-	-	-	-	-	jp	内志島産



図Ⅱ-44 1号土壌基出土遺物

主体部上位に封土を形成していることが解った。以上より、Ⅲ層上面で認められた墓塚周囲の溝は、封土と堅穴外壁との間の間隙であることが判明した。堅穴掘削時の掘上げ土は堅穴周囲に盛られたと考えられ、堅穴外部のⅢ層は若干の盛り上がり呈していた。堅穴を挟む形で擦文文化期の礫・礫石器の接合を確認しており(図Ⅲ-27)、堅穴掘削時に遺物が散ったことを示すと考えられる。封土はⅤ層主体土が下位に、Ⅵ層・Ⅶ層主体土が上位に堆積し、また堅穴外北西においてⅦ層主体土の分布が認められた。墓塚掘削時の順序を考慮すると、Ⅵ層・Ⅶ層主体土を上位に配するよう、盛り形成が意図的に行われていた可能性が高く、千歳市梅川4遺跡で報告された墓塚と共通する構築方法である(田村・乾 2002)。また主体部上位の落込みは、Ⅲ層上面において面的に確認していたが、堆積状態の観察により、上位の封土が約40cmの深さで落込んでいることを確認した。構築時、墓塚内部が木棺、または木柵の設置により空洞であった可能性がある。

墓標穴：主体部長軸の東側延長上において、封土の縁辺を切る状態で打ち込まれていた。確認面での規模は径22cm、深さ50cmで垂直に打ち込まれⅥ層まで達する。堆積土は極めてしまりがなく、断面実測中に崩れる状態であった。

出土遺体(図Ⅱ-42)：遺体の埋葬姿勢は、東頭位の仰臥伸展葬で、頭骸と大腿骨、脛骨のみ良好に残存していた。Ⅴ章2節の報告によれば、推定身長161cmの熟年男性との結果を得ている。

副葬品位置(図Ⅱ-43)：副葬品の配置は、遺体の胸の上に柄を頭側に向ける状態で刀(1)が置かれ、頭上に刀子(2)、南東コーナーに中柄(3~7)の束が置かれていた。また南西コーナーに膜のみの漆塗椀が伏せた状態で置かれていた。

出土遺物(図Ⅱ-44)：1は全長約60cmの刀である。平棟平造で、刀身と柄部に木質を残し、切先付近に極僅かだが赤色漆が塗られた痕跡を残す。鞘口、柄元には樹皮が巻かれている。鏢には草花文が描かれ部分的に銀が塗布されている。X線観察の結果、目釘穴はあるが、目釘は存在しないことが判明した。また目貫等、金属製の刀装具は付いていなかった。出土時、刀身中程に刀身と直行する状態で付着した突起物が確認できた。保存処理時に外した結果、この突起物は金属ではなく、骨と思われる有機質の物体であることが解った。鞘拵の一部と考えられる。Ⅴ章第7節の報告によれば、炭素量の低い鋼のみで造り込まれており、日本刀とは異なる製作方法であることが判明している。2は木質を残す刀子茎で、刀身部は試掘時に折損し失われている。3~7は束となって出土した中柄で、4~7はシカの中手・中足骨を素材とするが、3は鹿角製の可能性がある。また図示していないが、漆塗椀片は内面赤色、外面黒色のもので、細片化し不明瞭だが、外面に赤色漆で文様が描かれていたことが把握できた。

時期：墓塚封土の上にⅢa層が直接被覆していたことから、アイヌ文化期の中でも新しい時期に位置づけられる。また副葬品の漆塗椀片を対象に年代測定を依頼したところ、16世紀前葉~17世紀初頭とする結果を得た(第Ⅴ章1節)。(小野)

## 2号土墳墓 [III GP-02] (図Ⅱ-45-46 図版21-22)

位置：R-23・24区

規模：〔主体部〕208×108cm 深さ56cm 〔付属部〕(340)×336cm

主体部平面形：長台形 長軸方向：N-120°E

確認・調査：火山灰除去後、Ⅲ層上面において逆三角形プランの落ち込みとその周囲を馬蹄形に巡

III GP-02

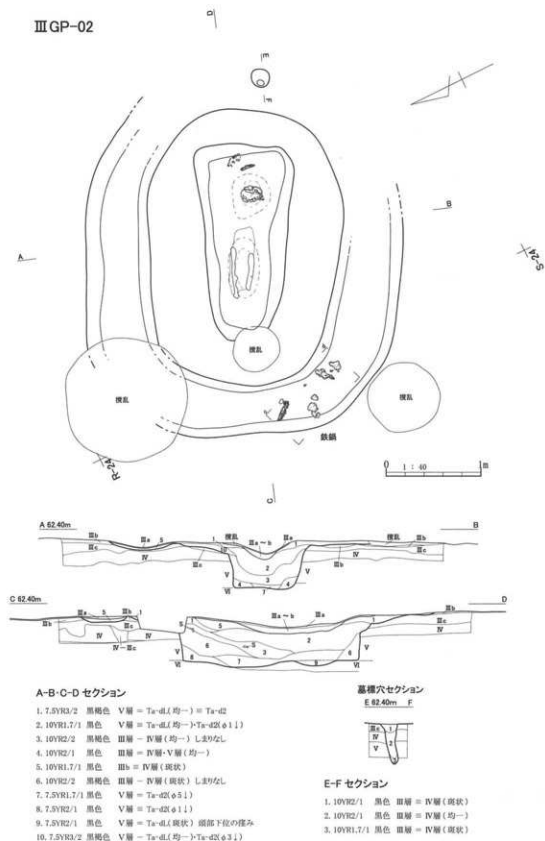


図 II-45 2号土墳墓(III GP-02)

る溝状の落ち込みを確認した。溝状の落ち込みは東側が削平されているため本来は円形プランであったと考えられる。落ち込みの西側で鉄鍋が出土していたことから土壇墓と想定し、1号土壇墓と同様に十字ベルトを設定し調査を行った。調査はベルトを残した状態で溝を含めたⅢa層全体を除去し、盛土層の確認を行った。その際、墓壇西側の溝に出土している鉄鍋を精査し、出土状態の記録を行った。墓壇主体部の調査はベルト南側を人骨及び副葬品確認面まで掘り下げ、南側短軸の断面1/2を記録し、ベルト除去後に長軸セクションの記録を行った。北側のセクションも同様に調査を行い、墓壇内埋土の全体を掘り下げ人骨及び副葬品の出土状態を記録した。人骨に関しては札幌医科大学の松村博文氏に依頼してバインダーで硬化処理後に取り上げを行った。人骨および副葬品の取り上げ後は坑底面の完掘と墓標穴の検出に努めた。墓標穴は墓壇の形態から位置を推定し黒色土のプランを面的に掘り下げながら行った。最後に人骨・副葬品を取り上げた状態の完掘写真を撮影して調査終了とした。

堆積状態(図Ⅱ-45)：覆土は溝及び墓壇内部の窪みにⅢb層が薄く堆積し、1層は東側大半が削平されている。1・2・10層はV層を基層としTa-dを斑状・均一に含み、1・10層はⅢa層を直接被覆している盛土層である。2層が深く落ち窪んでいることから内部には木棺または木柵などの構造があったと考えられる。5層はⅢ層を主体としIV層を斑状に含んでいる。3・6層はⅢ層を基層としIV層及び一部V層が含まれており、墓壇の中心～壁面に堆積している。7～9層はV層を基層としておりTa-dを斑状に含み坑底面付近に堆積している。7層は遺体層に当たりやや粘性が強い。9層は頭蓋骨下位の不明瞭な浅い窪みに堆積する黒色土である。

主体部形態(図Ⅱ-45)：墓壇本体は208×108×56cmで足側にむかって幅が狭くなる長台形を呈している。坑底面は頭蓋骨の下に浅い窪みがあり、西側にむかってやや傾斜し(図Ⅱ-45)、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。

出土遺体(図Ⅱ-46)：検出されたのは頭蓋骨のみで歯は下顎の第1、2大臼歯が残存している。上顎、下顎はほとんどが欠損し、土圧により顔面は南を向いている。上半身から下は遺存状態が不良で大腿骨にあたる部位に粘性の強い黒色土が残存していたため範囲を記録している(図Ⅱ-46)。同定の結果から熟年女性の墓であると報告されている(第V章第2節)。葬法は遺存状態が不良であるが遺体層から判断して仰臥伸展葬であると考えられ、頭位はN-120°-Eで概ね東南東方向である。長軸端部と人骨の間隔は頭骨側が約36cmで、足側は遺存体が不明瞭であるが遺体層から推定して約36cm、短軸は不明。

墓標穴(図Ⅱ-45)：頭蓋骨から東に約1.2mに1基検出した。確認面はⅢc層上位で黒色の円形プランを半載したところⅢb層主体の黒色土が堆積していた。規模は確認面で上端8cm、深さが44cmで墓壇側に内傾している(表Ⅱ-63)。東側は削平されているため溝の内か外かは不明である。

副葬品位置：墓壇内の副葬品は頭骨側の空いたスペースに刀子1点、その左上方に漆塗椀片が1点出土し、残存状態から横倒しになった状態で副葬されていたと考えられる。漆塗椀片のみのため形状を確認するに至らなかったが、大きさから内赤外黒椀と思われる。墓壇外からは足側の溝内に鉄鍋(2)が1点出土している。内側を上に向けた状態で検出し、攪乱を受けている胸部上半は出土していない。また、鉄鍋の北側に12cm×3cm、厚さ約1cmに満たない炭化材が出土している。

副葬品(図Ⅱ-46)：1は刀子で切先から茎部分にかけて木質が認められるため鞘に納まっていたと思われる。2は鉄鍋底部で残存推定底径は246mmで厚さは3mm、接合していないが脚部は2つのみ





残存している。湯口は丸形で湯口周囲に鳥目跡が残る。漆塗椀片は木地が残っていないため図示していない。

時期：副葬品の漆塗椀片を対象に年代測定を依頼したところ、17世紀前～後という結果を得ている。(第V章第1節) (奈良)

表Ⅱ-63 ⅢGP-02属性表

神図 番号	図版 番号	層位	グリッド	平面形	調査面規模		坑底面規模		深さ (cm)	長軸方向	墓標 穴	備考
				調査面/ 長軸形/ 長軸形	長軸	短軸	長軸	短軸				
Ⅱ-45	21-1	ⅢbU	R-23-24	長軸形/ 長軸形	208	108	188	80	56	N-120° -E	有	上部は耕作により削平

表Ⅱ-64 ⅢGP-02墓標穴属性表

神図番号	図版番号	遺構名	規模(cm)			傾き(度)	タイプ	備考
			上端	下端	深さ			
Ⅱ-45	21-5	ⅢGP-02	8	2	44	9°	打込み	

表Ⅱ-65 ⅢGP-02出土遺物属性表

神図 番号	図版 番号	個体 名称	遺物 番号	遺物名	分類	層位	遺構名	グリッド	計測値(mm)			重量(g)	材質	備考	
									長軸	短軸	厚さ				
Ⅱ-46-1	87-8	-	20715	刀子	-	3	ⅢGP-02	R-23	161.3	23.2	3.0	30.2	Fe		
Ⅱ-46-2	87-9	-	20004	鉄鍋底部	-	ⅢbM	ⅢGP-02	R-24	246.0	74.0	3.0	875.0	Fe		
-	-	-	101392	漆塗椀片	-	3	ⅢGP-02	R-23	-	-	-	-	-	Jp	

## 第5節 集中区

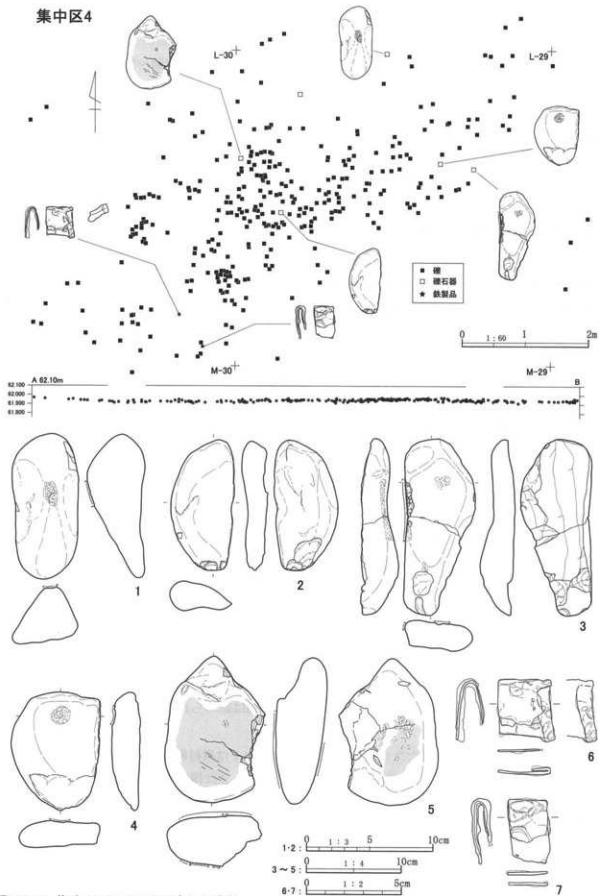
アイヌ文化期に属する集中区は3ヵ所検出した。このうち集中区 19 は屋外の焼土を伴い集中区 4・14 は遺物のみで構成されるものである。

### 集中区 4 (図Ⅱ-47)

位置：L-29-30区 規模：880×460cm 層位：Ⅲb層上位

確認・調査：本集中区は、整理段階でL-29区にⅢ層上位の遺物点集中が看取でき、遺物点Z座標においても、ほぼ同一レベルで連続した出土状態が復元できたことから設定した。なお、同一層位の焼土等の遺構は無いため、調査時点での遺物出土状態写真等の記録は残っていない。周辺遺構との位置関係は、ⅢH-04の長軸延長上にあるものの、層位的に異なり同時期性は何えない。図示した遺物点も全てⅢb層上位出土のものである。遺物の分布は30ライン付近に中心をもち、漸移的に散在化する傾向にあり、ブロック等は認められない。構成する遺物のほとんどは未熟熱の自然礫で、特徴的な属性は無い。何らかの作業行為を行っていた様相は認められず、領域の性格として廃棄場の可能性がある。

出土遺物(図Ⅱ-47)：1～4はたたき石に分類したもので、1は素材礫に厚さがあり、棒状礫を素材とするもので、表面に突出した頂部に敲打痕が認められる。2は楕円扁平礫を素材とし、長軸下縁に表裏面への剥離を伴う敲打痕がある。敲打部分は、大きく面的に形成されていないことから使用頻度は低いものと思われる。3・4は板状礫を素材とし、短軸の最大幅付近の長軸の一端に偏る位置に円形範囲の敲打痕がある。3は側縁も使用されている。4は素材礫の規模から板状の台石として使用された可能性もあるが、敲打痕の位置と重量からたたき石に分類した。5は滑沢面と敲打痕を有する礫で、滑沢面の一部には線条痕が観察できる。敲打痕の位置や重量等から作業台として使用さ



図Ⅱ-47 集中区4平面図及び出土遺物

れていたと思われる。6・7は長方形の板状鉄製品で、「U」字状に折り曲げられたものである。6は短軸の一部を完全に折り返した後に、長軸を折り曲げている。7は、鉄鍋などの板状製品の縁辺部を挟み込んでいた可能性がある。類似したものとして二風谷遺跡や美々8遺跡で鉄鍋の口縁部に据え付いた状態で出土しているものがある。  
(乾)

#### 集中区 14 (図Ⅱ-48)

位置：H・I-26区 規模：700×(450)cm 層位：Ⅲb層上位

確認・調査：本集中区は、整理段階で設定したものであるため、調査時の詳細な記録は残されていない。ただしⅢa層調査中、2枚の小札が重なって出土したため周囲を精査したが、遺構は検出できなかった。近くでは他に小札1点と刀装具と思われる銅製品1点の他、礫・礫石器が出土している。遺物分布状態からみて、調査区外まで拡がるものと考えられる。

出土遺物：1・2はたたき石で、1は棒状礫を素材とし、1面を使用したもので、使用部は深く窪んでいる。2は扁平な不整形礫の端部を使用し、礫表面に滑沢面が認められる。3～5は小札で、いずれも側縁、及び下端に縁取りをもつ定形的なもので、遺跡内に同時に持ち込まれたと考えられる。6は銅製の飾金具で、表面に金銅色の塗彩が僅かに認められる。  
(小野)

#### 集中区 19 (図Ⅱ-49・50 図版 25-1～3)

位置：L・M-24・25区 規模：850×600cm 層位：Ⅲb層上位

関連遺構：焼土 ⅢF-33 骨片集中：ⅢF-29

確認・調査：本集中区も整理段階で設定したものであるが、現場段階においても焼土と遺物の面的な出土状態を把握していたため、その経緯について記載する。L・24区のⅢa層を掘削した際、長軸約110cmの規模の灰層を検出した。アイヌ文化期の焼土である可能性を想定し、ⅢF-33として設定した。またⅢF-33の南西側においても焼骨片の集中を検出し、ⅢF-29として設定した。ⅢF-33の調査は、まず灰層平面形の記録後、土壌を回収しながら掘削を行った。結果下位に焼土を検出したため、焼土平面形を記録し、引き続き焼土を半載して断面の記録を行った。ⅢF-29については平面形の記録後、半載したが、極薄い焼骨片の集中であることが判明したため、断面の記録は行わず、土壌サンプルのみ回収して調査を終えた。ⅢF-33の周囲では同一面において礫石器を含む礫の散在が認められたため、平面図を作成した上で取上げた。

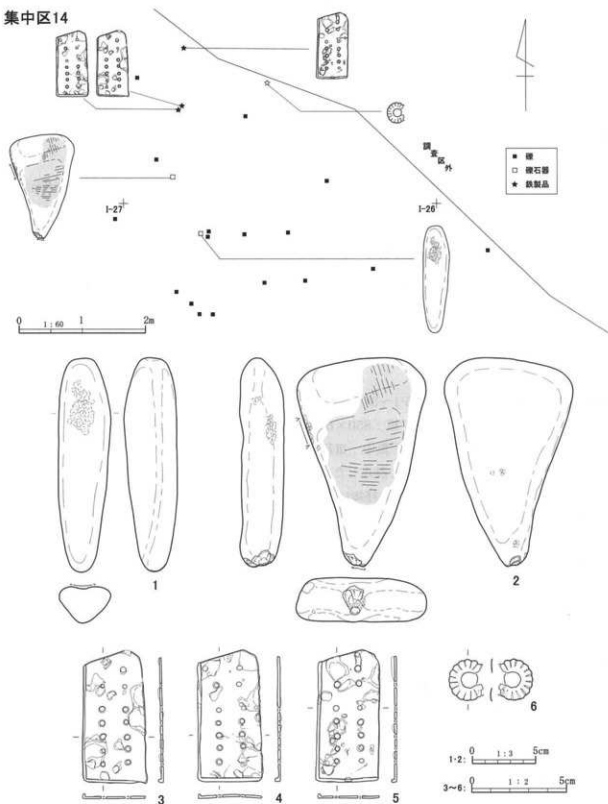
焼土(図Ⅱ-48)：ⅢF-33はⅢb層上面に形成された焼土で、厚さ4cmの灰層を伴う。焼土は長軸84cmの規模で窪む状態で形成され、灰層は焼土よりも南西側にさらに広い範囲で堆積する。焼土面と灰層の間に明瞭な層境が認められたことから燃焼面とともに灰を掻き出した後、新たに灰を敷き詰めたと考えられる。

骨片集中(図Ⅱ-48)：ⅢF-29は長軸長84cmの焼骨片の集中である。焼土粒は確認できなかった。

遺物出土状態(図Ⅱ-48)：遺物の出土状態は明確な集中をみせるものではなく、ⅢF-29・33それぞれの周辺で散在する形で出土した。両遺構間に遺物分布の間隙が認められる。

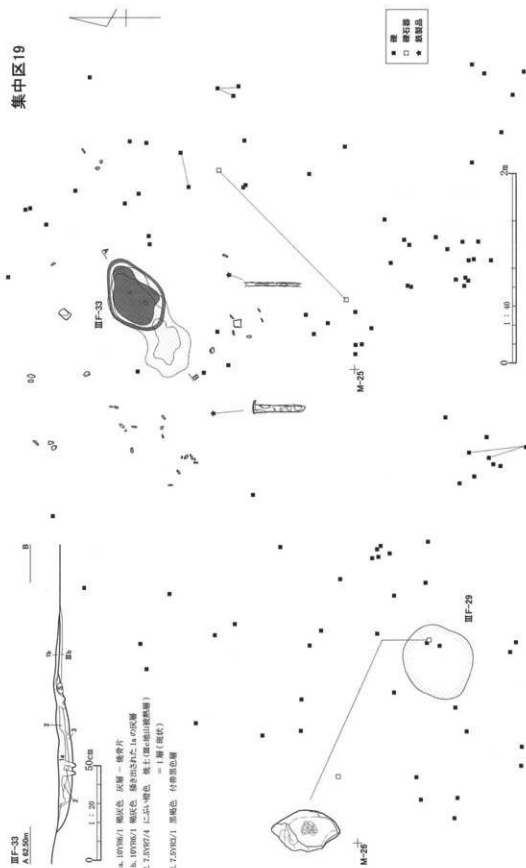
出土遺物(図Ⅱ-49)：1はたたき石で、不整形礫の両面が使用されている。2・3は棒状の鉄製品で、2にはねじれが、3の一端には潰れが認められる。  
(小野)

集中区14

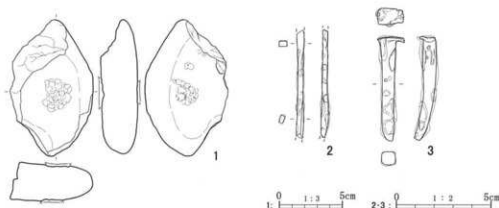


図Ⅱ-48 集中区14平面図及び出土遺物

集中区19



図Ⅱ-49 集中区19平面図及び関連遺構断面



図Ⅱ-50 集中区19出土遺物

表Ⅱ-66 集中区4出土遺物属性表

棟図 番号	図版 番号	個体 名称	遺物 番号	遺物名	分類	層位	遺構名	グリッド	計測値(mm)			重量(g)	材質	備考
									長軸	短軸	厚さ			
Ⅱ-47-1	88-1	-	21680	たたき石	I B3	ⅢbU	-	L-29	115.0	55.0	45.0	280.0	Sa.	
Ⅱ-47-2	88-2	-	21728	たたき石	I A2	ⅢbU	-	L-29	103.0	49.0	20.0	139.0	Sa.	
Ⅱ-47-3	88-3	3ST0041	29232	たたき石	I A3	ⅢbL	-	L-29	186.0	73.0	39.0	565.0	Sa.	
							N-32							
Ⅱ-47-4	88-4	-	24566	台石	Ⅱ A1	ⅢbU	-	L-29	125.0	94.0	29.0	466.0	Sa.	
Ⅱ-47-5	88-5	-	24552	滑沢面と敲打痕のある礎	I	ⅢbU	-	L-29	154.0	105.0	56.0	944.0	Sa.	
Ⅱ-47-6	88-6	-	20923	板状製品	-	ⅢbL	-	L-30	33.0	29.5	16.0	9.9	Fe	
Ⅱ-47-7	88-7	-	20922	板状製品	-	ⅢbL	-	L-30	35.0	22.0	10.0	8.9	Fe	

表Ⅱ-67 集中区14出土遺物属性表

棟図 番号	図版 番号	個体 名称	遺物 番号	遺物名	分類	層位	遺構名	グリッド	計測値(mm)			重量(g)	材質	備考
									長軸	短軸	厚さ			
Ⅱ-48-1	88-8	-	22419	たたき石	I B1	ⅢbU	-	I-26	169.0	42.0	29.0	260.0	Sa.	
Ⅱ-48-2	88-9	-	22418	たたき石	Ⅱ A2	ⅢbU	-	H-26	165.0	103.0	35.0	700.0	Sa.	滑沢面有
Ⅱ-48-3	88-11	-	20182	小札	-	ⅢbU	-	H-26	73.0	34.3	2.9	15.7	Fe	
Ⅱ-48-4	88-12	-	20183	小札	-	ⅢbU	-	H-26	69.8	34.5	3.0	16.5	Fe	
Ⅱ-48-5	88-10	-	24210	小札	-	ⅢbU	-	H-26	70.3	33.0	3.0	17.0	Fe	
Ⅱ-48-6	88-13	-	20927	飾金具	-	ⅢbU	-	H-26	22.0	(18.0)	1.0	1.3	Fe	

表Ⅱ-68 集中区19焼土属性表

棟図 番号	図版 番号	遺構名	グリッド	層位	平面形	規模(cm)			灰・骨片の有無	備考
						長軸	短軸	厚さ		
Ⅱ-49	-	ⅢF-29	M-25	ⅢbU	円形	80	72	-	灰・骨	
Ⅱ-49	25-1	ⅢF-33	L-24・25	ⅢbU	楕円形	84	76	8	骨	

表Ⅱ-69 集中区19出土遺物属性表

棟図 番号	図版 番号	個体 名称	遺物 番号	遺物名	分類	層位	遺構名	グリッド	計測値(mm)			重量(g)	材質	備考
									長軸	短軸	厚さ			
Ⅱ-50-1	88-14	-	20640	たたき石	Ⅱ A1	ⅢbU	ⅢF-33	M-25	108.0	65.0	30.0	230.0	Sa.	
Ⅱ-50-2	88-15	-	20582	棒状製品	-	ⅢbU	ⅢF-33	L-24	56.0	5.0	5.5	2.9	Fe	
			20184	棒状製品	-	ⅢbU	ⅢF-33	L-25	55.8	14.2	7.0	16.2	Fe	

## 第6節 焼土(図Ⅱ-51～53 図版 23～26)

Ⅲb 層上～中位で検出した焼土をアイヌ文化期に属するものとして扱う。アイヌ文化期の焼土は13カ所で確認したが、これらに多く認められる特徴として、a.灰層を伴うこと、b.焼土縁辺に明瞭な付帯黒色部が観察できること、c.焼土面が窪むこと、の3つがあげられる。次章で扱う擦文文化期の焼土と比較した場合、a・bの特徴は経年的な要素と考えられるが、cについてはアイヌ文化期の特徴的な要素と考えられる。住居址の付属炉や、集中区19のⅢF-33において灰の掻き出し行為が想定できる事例があるが、こうした行為と関連するかもしれない。

### ⅢF-06(図Ⅱ-51)

U-20区のⅢ層調査中Ⅲb層を被覆する形で検出した。灰層は残っておらず、僅かに焼骨片の分布が認められ、焼土中央はやや窪む。土壌サンプル中からは、魚骨の他、ウルシ属の炭化種子が得られた。周囲には炭化物集中が形成されていたが(ⅢCB-27・33・38)、これらに炭化種子は含まれていない。近くで出土した台石は板状礫の1面が使用されており、ⅢF-07 近辺出土資料と接合している(図Ⅱ-53-1)。

### ⅢF-07(図Ⅱ-51)

T-20区においてⅢb層を被覆する状態で検出した。Ⅲb層を挟んだ上位にアイヌ文化期の未被熱獣骨が出土しており、獣骨を残した段階と、焼土を形成した段階というように、アイヌ文化期の中での新旧関係を捉えた最初の遺構である。焼土上面に焼骨片の広がり認められ、哺乳綱の骨片が得られている。また周囲で検出した炭化物集中(ⅢCB-25・30・33・34)には、ブドウ科の種子が目立って含まれていた。

### ⅢF-09(図Ⅱ-51)

T<sub>2</sub>-T<sub>3</sub>段丘崖掘付近のR-17区で検出した。確認が遅れ、Ⅲb層下位まで掘削が進んだ段階で把握したため、当初は擦文文化期の遺構と考えていた。しかし土壌サンプル中より回収した炭化材の年代測定を依頼した結果、17世紀代との結果を得たことから、アイヌ文化期の遺構に変更した。確認時、燃焼面は削平されていたため、灰層・骨片の有無は把握できなかった。

### ⅢF-10(図Ⅱ-51)

V-18区において検出した。確認が遅れ、Ⅲc層下位において焼土層部分のみを把握した。燃焼面を削平したため時期の判別は困難であり、擦文文化期の遺構である可能性もある。

### ⅢF-11(図Ⅱ-51)

R-19区のⅢa層調査中、灰層の上面を確認した。広がりを確認するため、周囲のⅢa層を掘り下げた結果、長軸36cm、高さ約3cmの規模をもつ灰のマウンドを検出した。灰層平面形を記録後、半截した結果、下位に焼土を確認した。焼土は灰層の広がりに対し小規模なもので、窪んだ状態でⅢb層下位に形成されていた。灰層はその窪み内部を充填した上で、さらに盛り上がる形で堆積している。焼土面と灰層との層境が明瞭であることから、燃焼面を削平していると考えられ、灰を掻き出した上で、新たな灰を敷き詰めたと考えられる。土壌サンプル中から回収した炭化クルミ殻の年代測定を依頼した結果、17世紀代とする結果を得た。

### ⅢF-26(図Ⅱ-51)

火山灰除去中に、L-30区において鉄鍋の破片が出土した。同一個体片が土中に埋もれていること

が判明したため、Ⅲ層調査開始までその場に残した。Ⅲ層調査開始後、他の鉄鍋片検出を行った際、30cm離れた位置の浅い攪乱坑内で焼土を検出したことから、ⅢF-26として設定した。焼土は燃焼面が削平され、形成面を押さえられなかったが、鉄鍋下底面と同じⅢb層中位のものと思われる。鉄鍋は推定口径30.8cm、深さ12cmの大きさと、脚部を1つだけ残す(図Ⅱ-53-2)。全体の形状から、丸形湯口跡を伴う内耳鉄鍋であると考えられる。

#### ⅢF-31(図Ⅱ-51)

火山灰除去後、M-23区Ⅲ層上面において浅い窪みを確認したため、アイヌ文化期の焼土の可能性を想定し、ベルトを設定した。調査が進みⅢa層を掘削した際、窪みの位置で灰の広がりを検出したため、ⅢF-31として設定し、平面、断面の記録を行った。灰層は焼土規模より小さく、焼土北よりに3cmの厚さで堆積し、焼土は中央が窪んでいた。焼土上面、及び周囲からは棒状、板状の礫が散在して出土している。土壌サンプル中からは、サケ科と哺乳綱の骨片と、ブドウ科の種子の他、ヒエ属の種子も得ている。

#### ⅢF-35(図Ⅱ-51)

O-24区のⅢb層調査時に確認した。周囲は耕作によりⅢ層上面が削平されており、本焼土の灰層も耕作により移動したものと思われる。土壌サンプル中からは多数の魚骨と哺乳綱の骨の他、ブドウ科、クルミ属、コナラ属の種子も得られた。

#### ⅢF-41(図Ⅱ-52)

P-24区のⅢb層調査時に確認した。ⅢF-35と同様、耕作による攪乱を受けており、上面の凹凸が著しい。土壌サンプル中からは、哺乳綱を中心とした骨片が出土し、炭化種子ではブドウ科、クルミ属の他、ムギ類の種子も得えている。

#### ⅢF-45(図Ⅱ-52)

O-21区の攪乱坑壁面で確認した。厚さ8cmの灰層を伴い、焼土面は窪む状態で形成されている。灰層上位から打たれた径6cm前後の小規模な杭跡が5カ所確認できた。周囲からは礫・礫石器と共に鉄製品が5点出土した他、灰層の土壌サンプル中より骨角器片が得られた(図Ⅱ-53-4~10)。4は台石で、側縁に敲打痕が残る。5は板状の製品で、側縁に潰れが認められる。断面の一方が薄くなることから、刃部が潰された刀子片の可能性もある。6は壺もしくは筥状の製品で、側縁は潰れており一端に穿孔が認められる。7は一端を鉤状に曲げた棒状製品。8は棒状製品の一端に先端部が形成された釘状のもの。9は2面に溝が入った鉤状製品の先端部。10は加工痕の残る骨角器片。フローテーションの結果、多量のサケ科と哺乳綱の骨とタイ科、アメモサスの可能性のある魚骨を得ている。炭化種子ではブドウ科、キハダ属、クルミ属の他、ヒエ属、キビといった栽培種子も得ている。

#### ⅢF-63(図Ⅱ-52)

ⅢH-02北西の調査区縁近くで検出した。検出時、燃焼面は削平されており、灰・骨片の有無は確認できなかった。焼土中央は根により大きく落込んでいる。

#### ⅢF-64(図Ⅱ-52)

沢地形の底にあたるM-30区で検出した。当初擦文期の焼土と考えたが、土壌サンプル中より得た炭化種子の年代測定結果が15世紀中~16世紀前葉とする結果を得たことや、周囲の遺物がⅢb層中~上位で出土していることから、Ⅲb層中~上位を形成面とし、掘り窪めて構築された焼土で



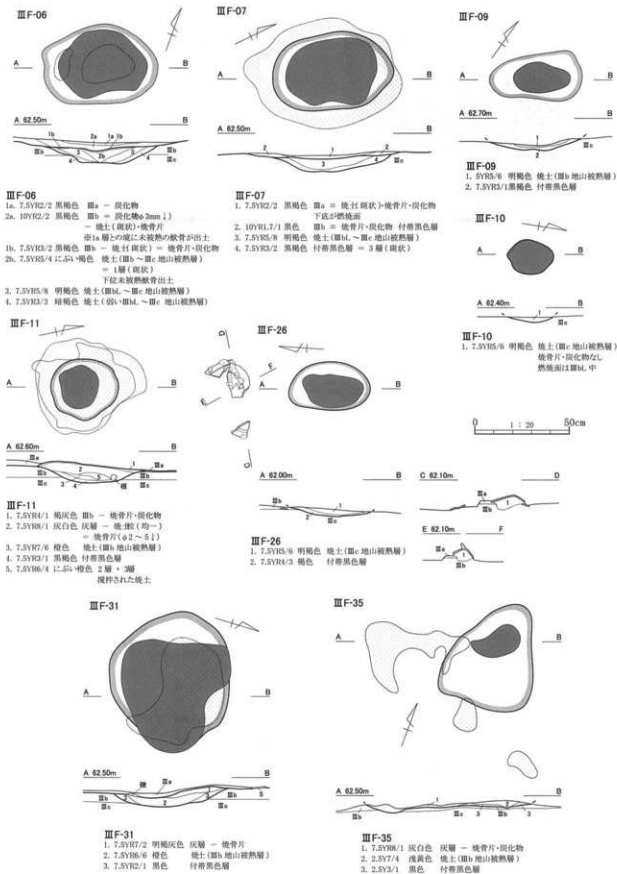


図 II-51 アイヌ文化期焼土(1)

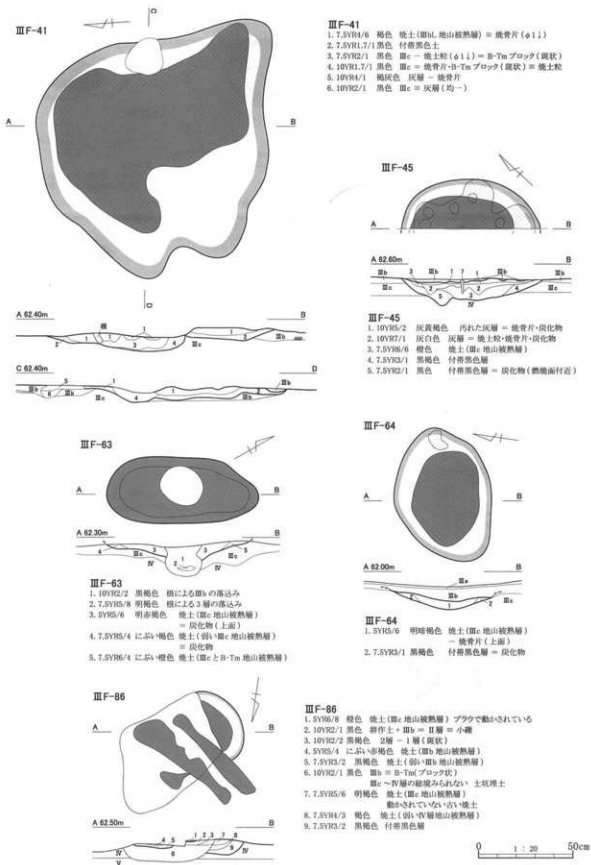


図 II-52 アイヌ文化期焼土(2)

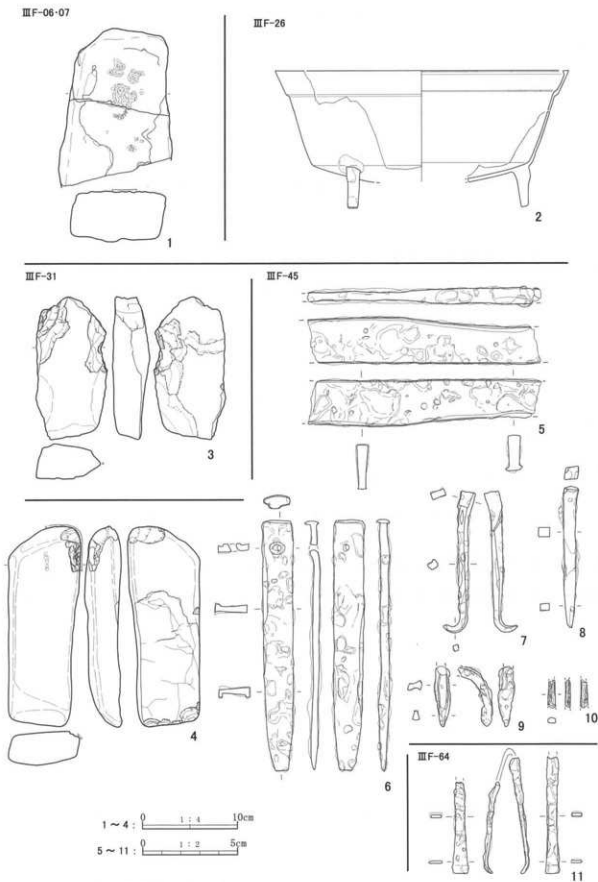


図 II-53 アイヌ文化期焼土出土遺物

あつたと考えられる。周囲で出土した遺物は礫が主体を占めるが、鉄製の毛抜が1点含まれていた(図Ⅱ-53-11)。フローテーションの結果、サケ科、ウグイ、イトウを含む多量の魚骨と、炭化種子ではブドウ科、キハダ属、クルミ属、コナラ属とキビを得ている。

### ⅢF-86(図Ⅱ-52)

I-31・32 区で検出した。周囲は耕作により広範囲に削平され、IV層中に焼土層のみを確認した。焼土形成面は残されていなかったが、IV層にまで焼土層が及ぶのは、掘り窪めて焼土を構築するアイヌ文化期の特徴により時期を判断した。なお焼土を切るかたちの土坑も検出しており、その土坑上位にも焼土が形成されている。土坑内にはB-Tmブロックを含むⅢb層主体土が埋め戻されており、B-Tm降下以後の形成であることは間違いない。(小野)

表Ⅱ-70 アイヌ文化期焼土属性表

挿図番号	図版番号	遺構名	グリッド	層位	平面形	規模(cm)			灰・骨片の有無	備考
						長軸	短軸	厚さ		
Ⅱ-51	23-1	ⅢF-06	U-20	ⅢbU	楕円形	60	40	10	骨	
Ⅱ-51	23-3	ⅢF-07	T-20	ⅢbU	楕円形	64	40	8	骨	
Ⅱ-51	23-7	ⅢF-09	R-S-17・18	Ⅲbl	長楕円形	50	26	3	-	
Ⅱ-51	23-8	ⅢF-10	V-18	Ⅲcl	楕円形	25	18	3	-	
Ⅱ-51	24-2	ⅢF-11	R-19	ⅢbU	円形	36	32	10	灰・骨	
Ⅱ-51	24-5	ⅢF-26	L-30	ⅢcU	楕円形	44	26	4	-	鉄鍋ともなう
Ⅱ-51	24-7	ⅢF-31	M-23	ⅢbU	円形	74	64	7	灰・骨	
Ⅱ-51	25-7	ⅢF-35	O-24	ⅢbU	不整形	63	52	4	灰・骨	
Ⅱ-52	26-1	ⅢF-41	P-24	ⅢbU	不整形	146	130	8	骨	
Ⅱ-52	26-3	ⅢF-45	O-21	ⅢbM	-	74	(26)	12	灰・骨	
Ⅱ-52	26-5	ⅢF-63	E-33	ⅢbM	長楕円形	80	34	8	-	
Ⅱ-52	-	ⅢF-64	M-30	Ⅲbl	楕円形	72	54	4	骨	
Ⅱ-52	26-7	ⅢF-86	I-31・32	Ta-cl	-	64	52	12	-	攪乱受ける

表Ⅱ-71 アイヌ文化期焼土出土遺物属性表

挿図番号	図版番号	個体名称	遺物番号	遺物名	分類	層位	遺構名	グリッド	計測値(mm)			重量(g)	材質	備考	
									長軸	短軸	厚さ				
Ⅱ-53-1	89-1	3ST0032	1009	台石	-	-	ⅢbU	ⅢF-07	T-20	(189.0)	142.0	53.0	1,682.0	Sa.	被熱
			1016												
Ⅱ-53-2	89-2	-	20201	鉄鍋	-	-	ⅢbU	ⅢF-26	L-30	310.0	144.0	3.2	435.0	Fe	
			20202												
Ⅱ-53-3	82-3	-	22219	加工痕のある礫	-	-	ⅢbU	ⅢF-31	M-23	147.0	75.0	39.0	475.0	Mud.	
Ⅱ-53-4	89-4	-	25000	たつき石	I A3	-	Ⅲbl	ⅢF-45	O-21	210.0	76.0	37.0	835.0	Sa.	
Ⅱ-53-5	89-6	-	24218	板状製品	-	-	Ⅲbl	ⅢF-45	O-21	(123.0)	26.0	8.9	103.1	Fe	
Ⅱ-53-6	89-5	-	24215	壺	-	-	Ⅲbl	ⅢF-45	N-21	132.0	17.0	6.5	43.0	Fe	
Ⅱ-53-7	89-7	-	24217	鉤状製品	-	-	Ⅲbl	ⅢF-45	O-21	75.0	17.0	9.0	8.2	Fe	
Ⅱ-53-8	89-8	-	30720	釘	-	-	ⅢbM	ⅢF-45	O-21	75.0	10.8	7.0	12.6	Fe	
Ⅱ-53-9	89-9	-	24216	鉤状製品先端	-	-	Ⅲbl	ⅢF-45	N-21	(32.0)	8.8	18.0	5.3	Fe	
Ⅱ-53-10	89-10	-	51333	骨角部未製品?	-	-	-	ⅢF-45	-	(15.0)	4.5	4.0	0.2	B	FLT
Ⅱ-53-11	89-11	-	20924	毛抜	-	-	Ⅲbl	ⅢF-64	M-30	(61.5)	(24.5)	8.8	3.9	Fe	

## 第7節 灰集中

焼土を伴わない灰層の集積地点を「灰集中」とした。平地式住居址等に伴わない単独のものとして、以下の3カ所がある。

## 灰集中4〔ⅢAS-04〕 (図Ⅱ-54 図版28-4)

位置：P-23区 層位：Ⅲb層上位

規模：58×26×3cm

確認・調査：Ⅲa層除去中に灰層を確認した。ⅢAS-04はⅢBB-09の分布範囲と重なり、北西側にはⅢF-35を検出している。平面は不整形な形状を呈し、灰層及び焼土粒を含む範囲の記録を行い、長軸にセクションラインを設定した。フローテーションサンプルを採取後、セクションの記録をとり残りの灰層も採取して調査終了とした。

堆積状態：上位は削平されているため検出層位は不明。灰層を主体とし1は焼土粒を斑状に含み、2層からは未被熱の獣骨が出土している。被熱層はなく灰のみを投棄したものである。(奈良)

## 灰集中5〔ⅢAS-05〕 (図Ⅱ-54～55 図版90-22～26)

位置：Q-22・23区 層位：Ⅲb層中位～下位

規模：A 52×40×8cm B 27×12×2cm C 58×40×5cm

確認・調査：Q-23区周辺のⅢb層中位調査中に、暗灰黄色などの不明瞭な灰層を検出した。明瞭な灰ブロックとして認められたものは小規模な3ブロックで、A～Cのアルファベットを付した。Ⅲb層上位を被覆することから古い時期の灰集中で、調査段階において帰属時期を擦文文化期とするか検討した。しかし、周囲での擦文土器片の出土はより下層からであったため、古い段階のアイヌ文化期の灰集中と判断した。調査では、周辺からは礫やたき石(1～3)、ガラス玉(5)のほか、未被熱の獣骨や炭化クルミ殻が比較的多く出土している。周囲のⅢb層も粘性があり土壌化した灰層と思われ、薄い灰層がより広範囲に広がりついていたものと考えられる。

堆積状態：比較的明瞭なブロックのA・Cは中央部が落ち込む状態で、根による影響の可能性が高い。基本的には、ⅢAS-05Bと同様に平坦面に廃棄されたものと思われる。灰層は哺乳綱などの被熱白色化した獣骨や魚骨をやや多く含み、炭化物も少量含んでいるが、焼土粒は確認できなかった。灰層及び周辺土壌サンプルのフローテーションの試料ではクルミ属とブドウ科が主体を占め、ヒユ属とキビも僅かに出土している。

出土遺物(図Ⅱ-55)：1～3はたき石で、1は強く被熱しており赤褐色を呈している。敲打痕は木目細かく敲打部分は浅い。2はほぼ全面が使用され、荒い敲打痕が見られる。表面中央部は敲打の結果、やや深く窪んでいる。3は重量が1,120gのやや大型の楕円形礫を素材とし、礫の長軸端部には剥離を伴う敲打痕を有するものである。強い振り下ろしの使用の結果、生じた剥離と思われる。4は刀子で、研ぎ直しの結果、刃部が湾入している。区は不明瞭で、折り返しが観察できることから、欠損品の再加工品と思われる。5はガラス玉で房蜜柑玉と称されるものである。色調は乳白色の半透明で、微細な気泡が多く見られる。遺跡内からは数点のガラス玉が出土しているが、本タイプのもは図示した1点のみである。

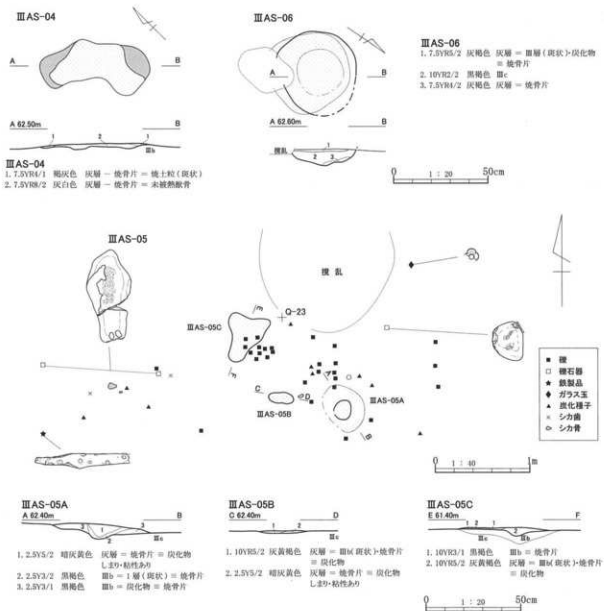


図 II-54 灰集中4・5・6(IIIAS-04・05・06)平面図

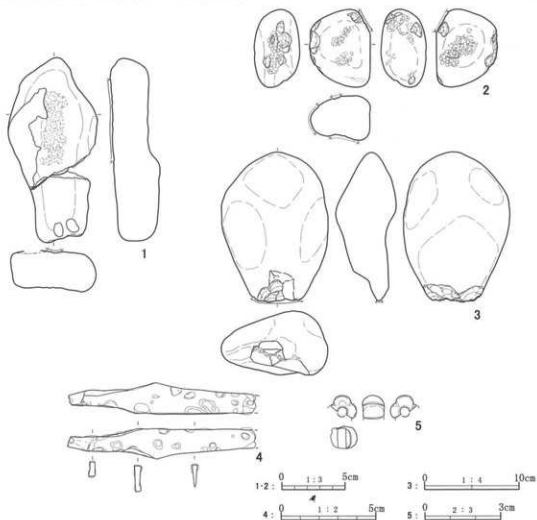
表 II-72 灰集中属性表

挿図番号	図版番号	遺構名	グリッド	層位	平面形	規模(cm)			灰・骨片の有無	備考
						長軸	短軸	厚さ		
II-54	28-4	IIIAS-04	P-23	IIIbU	不整形	58	26	3	灰・骨	III BB-09内
II-54	-	IIIAS-05A	P・Q-23	IIIbM	不整形	52	40	8	灰・骨	
II-54	-	IIIAS-05B	Q-22・23	IIIbM	楕円形	27	12	2	灰・骨	
II-54	-	IIIAS-05C	Q-22	IIIbM	楕円形	58	40	5	灰・骨	
II-54	-	IIIAS-06	P・Q-23	IIIcU	円形	46	42	9	灰・骨	

## 灰集中6〔ⅢAS-06〕 (図Ⅱ-54)

位置：P・Q-23区 層位：ⅢcU 規模：46×42cm

柱穴確認のためH-31区のⅢc層をジョレン精査中、灰集中を検出した。隣接して現代の攪乱杭が打ち込まれていたことから、灰層も現代のものである可能性が想定された。しかしⅢAS-01等、他の灰集中と同様に灰の土壌化が認められたことから、Ⅲ層中の遺構と判断し、ⅢAS-06として設定した。ⅢAS-06は径45cm前後ある円形土坑の坑底と、上位にそれぞれ2cm前後の厚さで堆積し、焼骨片を少量含んでいた。土坑は壁面がなだらかに立ち上がり、底面に凹凸をもつ。遺構形成時期の判断は難しく、アイヌ文化期として扱ったが、土坑に灰を埋める特徴は擦文文化期の遺構に多く認められるため、擦文文化期の可能性もある。(小野)



図Ⅱ-55 灰集中5出土遺物

表Ⅱ-73 ⅢAS-05出土遺物属性表

挿図 番号	図版 番号	個体 名称	遺物 番号	遺物名	分類	層位	遺構名	グリッド	計測値(mm)			重量(g)	材質	備考
									長軸	短軸	厚さ			
Ⅱ-55-1	90-24	3ST0030	31659	たたき石	I A1	ⅢbL	ⅢAS-05	Q-23	146.0	70.0	37.0	298.0	Sa.	
			31636					Q-23						
Ⅱ-55-2	90-23	-	31974	たたき石	ⅢB3	ⅢbM	ⅢAS-05	Q-22	62.0	50.0	36.0	134.0	Sa.	
Ⅱ-55-3	90-25	-	34667	たたき石	ⅡB2	ⅢbL	ⅢAS-05	Q-23	157.0	112.0	64.0	1,120.0	Sa.	
Ⅱ-55-4	90-26	-	24223	刀子	-	ⅢbM	-	Q-23	(99.0)	17.0	3.5	17.7	Fe	
Ⅱ-55-5	90-22	-	33655	ガラス玉	-	ⅢbM	-	P-23	(10.5)	(9.0)	9.0	1.1	G.	

## 第8節 獣骨集中

本節では、包含層調査中に平地式住居址から距離をおき、スポット的に検出した未被熱の獣骨群を「獣骨集中」として報告する。なお、調査時点での微細図は記録せず、1破片毎にNo.を付し、手簿に層位や推定部位などを手簿に記入し、光波式トータルステーションで位置記録のうえ取上げた

表Ⅱ-74 獣骨集中属性表

挿図 番号	図版 番号	遺構名	グリッド	層位	平面形	規模(cm)		主体部位	被熱の有無	関連 遺構	備考
						長軸	短軸				
Ⅱ-56	30-7	ⅢBB-05	O-P-25-26	Ⅲa~ⅢbL	不整形	544	336	頭蓋骨・四肢骨	未被熱	-	
Ⅱ-56	-	ⅢBB-08	O-N-26	Ⅲa~ⅢbU	楕円形	340	190	頭蓋骨・四肢骨?	未被熱	-	
Ⅱ-57	29-1	ⅢBB-02	V-19	IV※	帯状	144	52	頭蓋骨・四肢骨?	未被熱	ⅢH-01	
Ⅱ-57	31-4	ⅢBB-06	L-M-34-35	ⅢaL・ⅢbU	不整形	468	248	頭蓋骨・四肢骨	未被熱	-	
Ⅱ-57	-	ⅢBB-07	N-34・35 O-35	ⅢbU	鼓形	332	196	頭蓋骨	未被熱	-	
Ⅱ-57	32-1	ⅢBB-09	P-23・24 Q-23	ⅢbU・ⅢbM	帯状	976	360	頭蓋骨	未被熱	-	
Ⅱ-57	33-4	ⅢBB-13	Q-R-25-26	ⅢbU・ⅢbM	不整形	732	440	四肢骨	未被熱	-	

## 獣骨集中2〔ⅢBB-02〕 (図Ⅱ-57 図版29-1)

位置：V-19区 主体検出層位：Ⅳ層中位（帰属層位はⅢb層上位）

規模：144×52cm 平面形：帯状

主体動物/部位：シカ/頭蓋骨・不明部位（四肢骨?）

確認・調査：関連遺構：ⅢBB-02はⅢH-01の北側柱穴列から北へ約1mの距離に位置している。ジョレンによるⅣ層除去中に検出したが、保存状況からⅢb層に帰属する資料と思われる。検出平面形は帯状で、当初は根穴への落ち込みと判断したが、V層上面を坑底とする掘り込みに廃棄されたものと思われる。破碎された四肢骨を主体に構成されており、ⅢBB-14(図Ⅱ-33)や厚膜1遺跡の獣骨集中06-07と同じタイプと思われる。

獣骨の特徴：四肢骨のみで構成され、距骨以外は全て破碎されている。(乾)

## 獣骨集中5〔ⅢBB-05〕 (図Ⅱ-56・58-1~3 図版30-7・8, 図版31-1~3)

位置：O-P-25-26区 主体検出層位：Ⅲa層下位~Ⅲb層上位

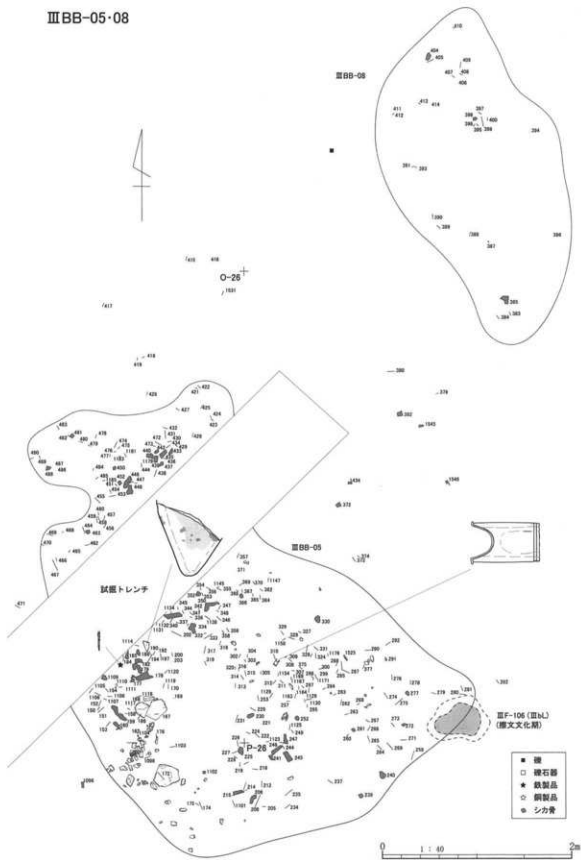
規模：544×392cm 平面形：不整形

主体動物/部位：シカ・頭蓋骨および四肢骨

確認・調査：火山灰除去中及び試掘トレンチ清掃中に確認した。トレンチ壁面においてもⅢa層とⅢb層の境界に遺存体がバックされている状態が確認できたことから、Ⅲa層を除去する検出作業を行い殆どの遺存体を検出できた。取り上げは微細図の記録をとらず、1資料毎、手簿に層位等



III BB-05-08



図Ⅱ-56 獣骨集中5・8(ⅢBB-05-08)

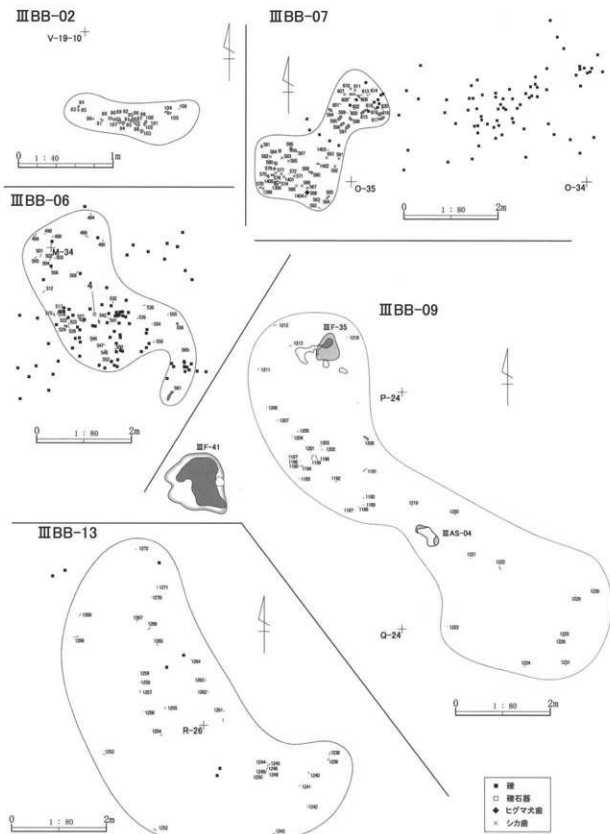


図 II-57 獣骨集中2・6・7・9・13(III BB-02・06・07・09・13)

を記入し、光波式トータルステーションで位置を記録したうえで行った。なお、集中区の北側に擦文土器集中個体(集中区12・ⅢPB-12)が樹根による吸い上げでⅢ層上面まで出土していたが、獣骨検出面では、擦文文化期の他の遺物は出土せず、明瞭な間層をもって生活面が区分できる範囲でもある。また、本獣骨集中北北西約3.2mの同一面に集積度の低い獣骨集中8が存在している。

分布・出土状態: 集積度合いは高く、密集した状態で出土している。ほぼ面的に出土し、獣骨間の重複は見られない。トレンチの南側には140×100cmの楕円形を呈する無遺物範囲がある。隣接する東側には、Ⅲ層上面での窪みがあり、大型の板状礫などが落ち込み、密集している(図版31-1)ことから、無遺物範囲は古い風倒木痕揚土の範囲と思われ、火山灰除去段階で削平、遺失した可能性が高い。これらの板状礫は下層に形成されている擦文文化期の集中区12(ⅢF-106周辺)に帰属する遺物や一部Ⅴ層の遺物が混在している可能性もある。この集中区では獣骨の他、滑沢面を有する板状礫(1)や縫い針(2)や鞘口(3)が獣骨間の同一面より出土している。

獣骨の特徴: 同定結果では、上顎・下顎歯などの頭蓋骨に由来する部位が多いが、取り上げ時点やクリーニング段階での損壊のため「不明」骨も多い。これらの多くは、調査時点では、破損した長管骨等の四肢骨として確認できたものが多い。

出土遺物(図Ⅱ-58): 1は、滑沢面を有する板状礫で、硬質な閃緑岩を石材としている。緻密な滑沢面を形成し、面の一部に滴状の黒色付着物が見られる。2は銅製の鞘口で、筒状の開口部の観察から実測図右側が刀身部で、左側が柄側となる。柄側は半円状に大きく湾曲し、口唇部は幅3-7mm程度に肥厚する銜受け部分がある。開口部から推定できる刀身の形態から、本資料は日本刀の鞘口の可能性もある。刀身部側の開口部側面には3条1対の浅い刻線が施されている。体部の柄側端部への厚さは漸移的に減じ、風化のため端部の刻線部分は一部のみに残存している。本資料の筒状体部は一枚の銅版から作製されたもので、下面観右側端部には留め板がある。また、銜との受け口部分の肥厚部分も組合せによるもので、筒状の体部との僅かな隙間を観察できる部分がある。3は針の胴部で、実測図下部の断面形は円形、上部は板状となっていることから、頭部に近い部位と思われる。直径から縫い針と思われる。

#### 獣骨集中6〔ⅢBB-06〕(図Ⅱ-57・58 図版31-4・5)

位置: L・M-34・35区 主体検出層位: Ⅲa層下位~Ⅲb層上位

規模: 468×248cm 平面形: 不整形 主体動物/部位: シカ/四肢骨

確認・調査等: Ⅲ層上面から良好な堆積状態である沢状地形の緩い斜面から底面付近にかけて、礫と共に面的に検出した。集積度合いは沢状地形底面側で高く、礫と共にやや密集した状態で出土している。

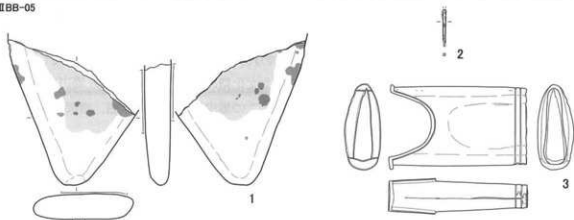
獣骨の特徴: 破碎された長管骨が多く、四肢骨で構成されている。

出土遺物(図Ⅱ-58): 4はたたき石で長軸端部と表面に比較的確な敲痕が見られる。また、砥石としても利用され、弱く湾曲する平滑な研ぎ面も形成されている。中粒の砂岩であることや研ぎ面の規模から、一時的な粗砥石として使用されていたものと思われる。

表Ⅱ-75 ⅢBB-05・06出土遺物属性表

押図 番号	図版 番号	個体 名称	遺物 番号	遺物名	分類	層位	遺構名	グリッド	計測値(mm)			重量(g)	材質	備考
									長軸	短軸	厚さ			
Ⅱ-58-1	91-5	-	23231	神代画のある鏡	-	ⅢbU	ⅢBB-05	O-26	100.0	96.0	20.0	290.0	Dio.	
Ⅱ-58-2	91-6	-	20470	針基部	-	ⅢaL	ⅢBB-05	O-26	18.0	2.0	1.0	0.1	Fe	
Ⅱ-58-3	91-7	-	22223	箱口	-	ⅢbU	ⅢBB-05	O-25	73.0	44.5	19.0	35.4	Fe	
Ⅱ-58-4	91-8	-	20396	たたき石	ⅡA1	ⅢbU	ⅢBB-06	M-33	80.0	60.0	27.0	200.0	Sa.	

## ⅢBB-05



## ⅢBB-06



## 図Ⅱ-58 獣骨集中出土遺物

## 獣骨集中7〔ⅢBB-07〕 (図Ⅱ-57)

位置：O-24, P-23・24, Q-23区 主体検出層位：Ⅲb層上位

規模：298×176cm 平面形：鼓形 主体動物/部位：シカ/頭蓋骨

確認・調査等：沢状地形において緩い斜面のⅢ層調査中に検出し、周辺の調査区では獣骨の検出が無く、スポット的に検出したことから、獣骨集中7を設定した。やや離れた斜面の高位(東)側のほぼ同一面で散逸した状態の礫群が出土している。調査時点では部位の偏りを認識していなかったことから、小柱穴等の精査は行っていない。

獣骨の特徴：同定の結果から、主体となる部位は、シカの頭蓋骨や由来する角や上下顎臼歯が出土している。また、保存状態不良のヒグマ犬歯(B.566)1点が南端部より出土している。本集中の性格を考慮するうえでも重要な資料と思われる。

## 獣骨集中8〔ⅢBB-08〕 (図Ⅱ-56)

位置：0-N-26区 主体検出層位：Ⅲa層下位～Ⅲb層上位

規模：340×170cm 平面形：楕円形

主体動物/部位：シカ/頭蓋骨・不明部位（四肢骨？）

確認・調査：ⅢBB-05 調査段階で、集中範囲縁辺部の確認作業の延長同一面で検出した。集積度合いが低い、05との不連続性を考慮してⅢBB-08を設定した。

獣骨の特徴：不明骨以外の同定されたものは、シカ上腕骨1点以外の頭蓋骨に由来する臼歯等で、25点と多い。

#### 獣骨集中9〔ⅢBB-09〕（図Ⅱ-57 図版32-1～4）

位置：0-24, P-23・24, Q-23区 主体検出層位：Ⅲb層上位

規模：976×360cm 平面形：帯状 主体動物/部位：シカ/頭蓋骨

確認・調査等：P-24区周辺のⅢ層上位調査中に未被熟獣骨を検出したことから設定した。出土層位はⅢa層～Ⅲb層上位にかけてで、遺存体検出作業中にⅢF-35とⅢAS-04を検出している。図中から外れるが、東側の比較的近位置にⅢAS-05も検出されている。全体としてはやや広域に分布し、散逸した状態であるが、両遺構の中間部付近にやや集中する傾向にある。ⅢAS-04の調査では、灰層下から未被熟の獣骨が出土していることから、これらの遺構と同時期の可能性がある。

獣骨の特徴：エゾシカの頭蓋骨や由来する上・下顎骨が多く、四肢骨は殆ど出土していない。

#### 獣骨集中13〔ⅢBB-09〕（図Ⅱ-57 図版33-4）

位置：Q-R-25・26区 主体検出層位：Ⅲb層上位

規模：720×504cm 平面形：不整形

主体動物/部位：シカ/四肢骨

確認・調査等：ⅢBB-05 検出とほぼ同時に検出した。周辺調査区と比較してスポット的な一群と認められたことから獣骨集中13とした。広域に範囲を設定したが、集積度合いが比較的高い範囲は帯状となって分布している。

獣骨の特徴：四肢骨である距骨や破砕された中手・中足骨で構成されている。（乾）

#### 第9節 集中遺物（図Ⅱ-59・60 図版35-1～4, 89-2, 91-2）

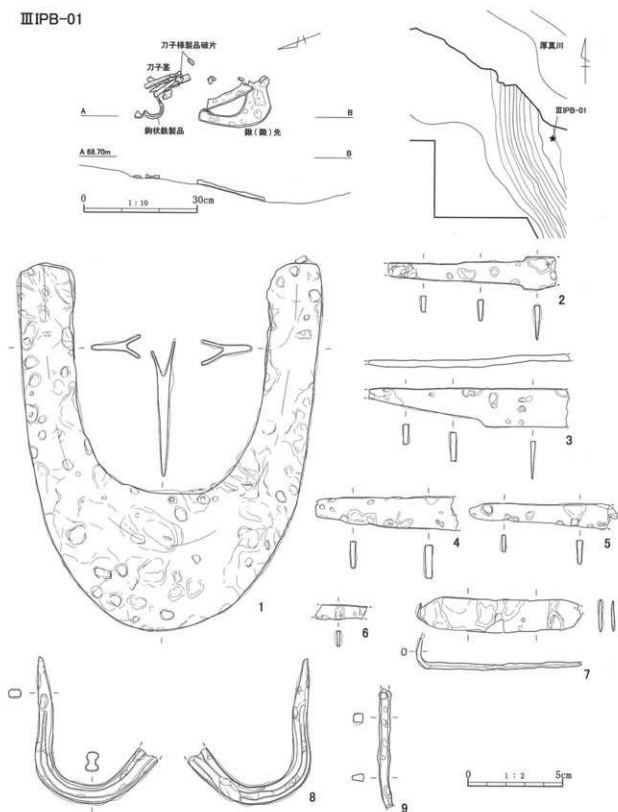
調査区内で他の遺構と関連することなく、単体で出土した集中遺物は、ⅢIPB-01とⅢSB-04の2カ所である。

#### 鉄器集中（図Ⅱ-59 図版35-2～4, 91-2）

位置：R-13区 層位：Ⅲb層中～下位 規模：35×15cm

確認・調査：擦文・アイヌ文化期の主体検出面であるT<sub>2</sub>よりも一段高い、T<sub>3</sub>のR-13区においてⅢb層調査中、鉞(鋤)先(1)の一部を確認した。破片は土中に刺さるように深く潜り込んでいたことから、Ⅲb層を掘削し、資料全体の検出に努めた。結果、周囲からさらに複数の鉄製品がまとまって出土したことから、鉄器集中1として設定し、平面、及びエレベーションを記録した上で取上げた。出土時、鉄製品は全て折損した状態であり、刀子茎は長軸を揃えて重なる状態で出土した。また鉄

ⅢIPB-01



図Ⅱ-59 鉄器集中1(ⅢIPB-01)

製品下底面のエレベーションを観察したところ、緩やかな窪地となっていた。掘り込みは確認できなかったが、浅い土坑の中に埋納されていた可能性がある。周囲からは他に関連する遺物は出土しておらず、また杭跡の精査も行ったが、確認できなかった。

出土遺物：1はU字形の鋏(鋏)先で、基部端が内側に若干張出し、刃部は4.5cmの幅をもつ。出土時は折損し、2片に分れていたが、出土した2片だけでは破片が足りず接合できなかったため、別地点で折損し持ち込まれた可能性がある。資料は保存処理の際に復元接合を行っている。2~5は刀子茎で、いずれも刀身部を欠く。遺跡内で出土している他の刀子にみられるような潰れは確認できない。6も断面方形で、刀子茎と思われるが、2~5とは接合しなかったため別個体と考えられる。7は筥状の製品で、幅1.8cmある機能部の両側縁に刃部を形成し、茎は機能部との境で屈曲している。機能部には湾曲も厚味もないため、ヤリガンナとして使用した可能性は低く、本遺跡の性格を考慮すると、皮なめし具として利用されたものかもしれない。8は鉤状製品で、2面に溝が入る。9は断面方形の棒状製品である。

鉄器集中はT<sub>3</sub>で出土した唯一の資料であり、擦文・アイヌ期双方の資料中特異な出土位置を示している。また全ての製品が折損した状態であったことや、安置された状態で出土した点を考慮すると、鉄製品に対する「送り」的な儀礼行為によって残された可能性が高い。また検出時、鉄製品はIII b層を被覆していたことから、アイヌ文化期の中でも古い時期のものと考えられる。(小野)

表Ⅱ-76 III IPB-01出土遺物属性表

挿図 番号	図版 番号	個体 名称	遺物 番号	遺物名	分類	層位	遺構名	グリッド	計測値(mm)			重量(g)	材質	備考
									長軸	短軸	厚さ			
II-59-1	91-11	-	195	鋏(鋏)先	-	IIIbL	III IPB-01	S-13	194.0	162.0	13.0	378.2	Fe	無1点
II-59-2	91-12	-	197	刀子茎	-	IIIbL	III IPB-01	S-13	89.0	18.0	2.0	10.7	Fe	
II-59-3	91-13	-	242	刀子茎	-	IIIbL	III IPB-01	S-13	106.0	20.0	3.0	24.1	Fe	
II-59-4	91-14	-	244	刀子茎	-	IIIbL	III IPB-01	S-13	75.0	18.0	4.0	10.7	Fe	
II-59-5	91-15	-	196	刀子茎	-	IIIbL	III IPB-01	S-13	78.5	13.5	3.0	9.0	Fe	
II-59-6	91-16	-	192-2	刀子茎片?	-	IIIbL	III IPB-01	S-13	28.0	8.0	2.0	1.3	Fe	
II-59-7	91-17	-	170	筥状製品	-	IIIbL	III IPB-01	S-13	86.0	18.5	17.5	7.6	Fe	無2点
II-59-8	91-18	-	245	鉤状製品	-	IIIbL	III IPB-01	S-13	77.0	65.0	12.5	31.5	Fe	
II-59-9	91-19	-	243	棒状製品	-	IIIbL	III IPB-01	S-13	63.0	8.5	6.0	6.6	Fe	

#### 礫集中4 [III SB-04] (図Ⅱ-60 図版35-1)

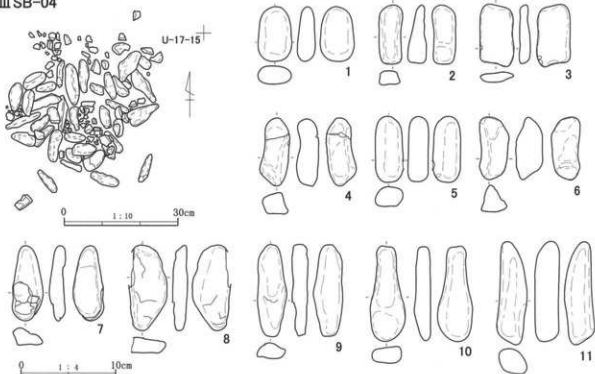
位置：V-18区 層位：III b層上位

平面形：方形 規模：47×46cm 構成礫：完形29点

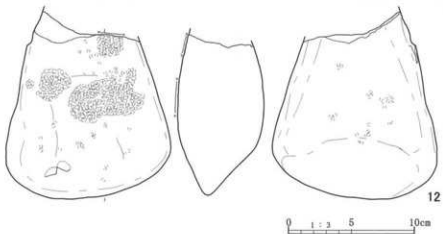
確認調査：III b層調査中に検出した単独の礫集中である。周辺の包含層から同一層面で礫が散在し、台石(12)も出土している。礫の集積度合いが高く、中央部ではややマウンド状に2~3段に重複している。構成礫は長軸平均72.5mmとやや大型であるが、長軸7cm前後(1~6)のものと9cm前後(7~11)の大きく2つの規模に分けられる。形態は棒状で、長短比平均値が2.3である。被熱礫は含まれない。

出土遺物：1~11は、III SB-04の構成礫、12は約15cm北西方向の同一面で出土した台石である。敲打痕はやや不明瞭である。(乾)

ⅢSB-04



ⅢSB-04 周辺出土遺物



図Ⅱ-60 礫集中4(ⅢSB-04)

表Ⅱ-77 ⅢSB-04出土土礫石器属性表

挿図 番号	図版 番号	個体 名称	遺物 番号	遺物名	分類	層位	遺構名	グリッド	計測値(mm)			重量(g)	材質	備考
									長軸	短軸	厚さ			
Ⅱ-60-12	89-12	-	1430	台石	ⅡB	ⅢbL	ⅢSB-04	V-18	(155.0)	141.0	68.0	1,520.0	Sa.	



表Ⅱ-78 ⅢSB-04磔属性表

標本 番号	図版 番号	個体 名称	遺物 番号	層位	状態	計測値(mm)					長短比 標準 偏差	重量(g)	被熱	材質	備考			
						長軸	標準 偏差	短軸	標準 偏差	厚さ						標準 偏差		
Ⅲ-00-1	89-13	-	1280	ⅢbU	完形	57.8	-14.7	35.8	5.4	19.5	1.0	1.6	-0.7	53.4	-	Sa.		
Ⅲ-00-2	89-13	-	1281	ⅢbU	完形	62.3	-10.2	24.7	-5.7	20.7	2.2	2.5	0.2	41.5	-	Sa.		
Ⅲ-00-3	89-13	-	1291	ⅢbU	完形	62.4	-10.1	35.6	5.2	10.9	-7.6	1.8	-0.6	34.0	-	Mud.		
Ⅲ-00-4	89-13	3S0233	1370	ⅢbU	完形	71.4	-1.1	31.7	1.3	24.2	5.7	2.3	0.0	62.9	-	Sa.	植1点	
Ⅲ-00-5	89-13	-	1343	ⅢbU	完形	69.7	-2.8	29.6	-0.8	20.7	2.2	2.4	0.1	64.3	-	Sa.		
Ⅲ-00-6	89-13	-	1390	ⅢbU	完形	66.3	-6.2	30.1	-0.3	29.4	10.9	2.2	-0.1	64.5	-	Sa.		
Ⅲ-00-7	89-13	3S0067	1359	ⅢbU	完形	79.7	7.2	31.8	1.4	18.7	0.2	2.5	0.2	41.5	-	Sa.	植1点	
Ⅲ-00-8	89-13	-	1307	ⅢbU	完形	90.3	17.8	40.0	9.6	17.0	-1.5	2.3	0.0	84.1	-	Sa.		
Ⅲ-00-9	89-13	-	1357	ⅢbU	完形	96.8	24.3	30.7	0.3	16.0	-2.5	3.2	0.9	60.8	-	Sa.		
Ⅲ-00-10	89-13	-	1305	ⅢbU	完形	100.5	28.0	36.6	6.2	19.8	1.3	2.8	0.5	81.5	-	Mud.		
Ⅲ-00-11	89-13	-	1326	ⅢbU	完形	105.4	32.9	29.0	-1.4	26.8	8.3	3.6	1.3	120.7	-	Sa.		
完形合計						2101.5	399.9	880.8	134.2	536.2	149.2	70.08	11.66	1849.5				
完形平均値						72.5	13.8	30.4	4.6	18.5	5.1	2.30	0.40	63.8				
遺物総重量																2720.3		

※完形 29点

## 第10節 包含層出土遺物(アイヌ文化期)

## 剥片石器 (図Ⅱ-61-1 図版92-1)

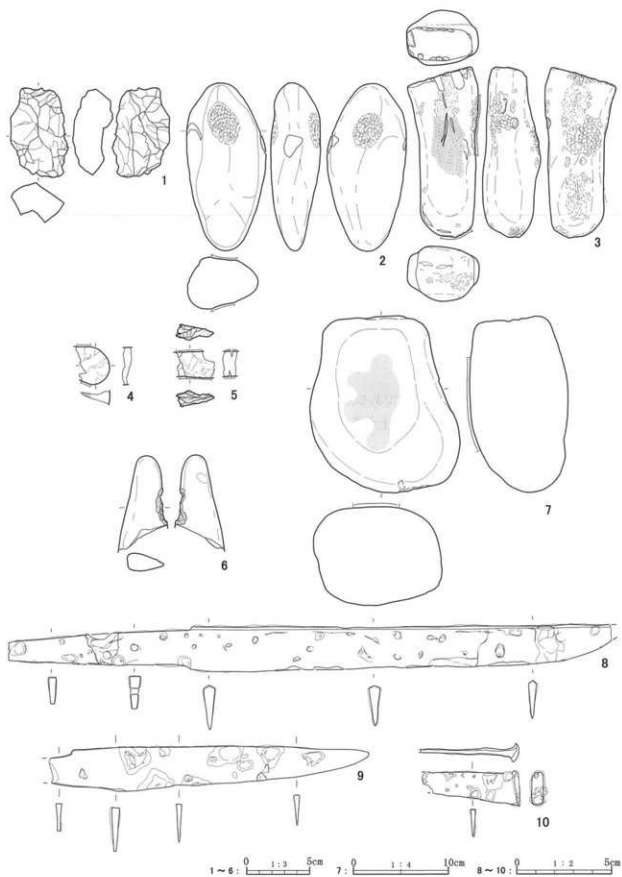
1 は石英結晶を素材とした火打石である。明瞭な使用痕は認められないが、稜部が僅かに潰れていること、中・近世アイヌ文化期で出土する「塊状」または「サイコロ状」に形状が類似することから火打石として掲載した。(奈良)

## 礫石器 (図Ⅱ-61-2~7 図版92-2~7)

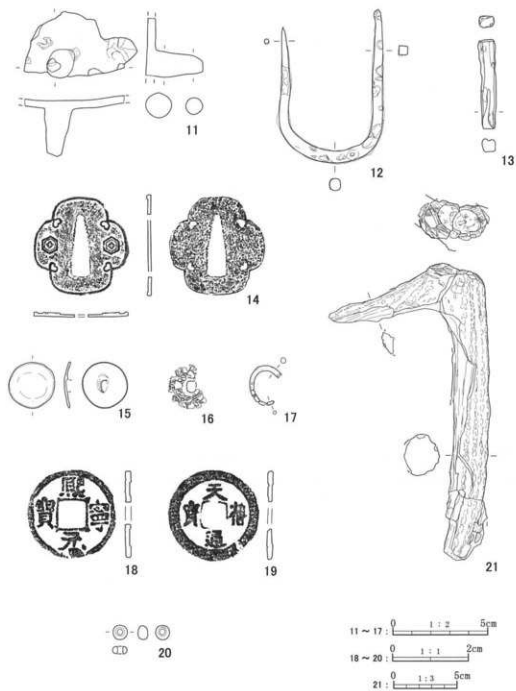
2・3 はたたき石で、棒状礫を素材とするものである。共に礫の表裏面長軸一端に、楕円形に窪む敲打痕がある。これらの敲打痕はきめが細かく、敲打痕の単位を観察することはできない。3 は、端部や側面も使用され、表面中央部には敲打痕を切る刻線と滑沢面もある。砥面には3本の刻線も観察できる。が使用後、被熱している。4・5 は凝灰岩を石材とする同一個体の砥石片で、被熱により破砕している。4 は砥石中央部で両面が使用されている。5 は縁辺部資料で、楕円形の扁平礫を素材としていることが分かる。肉眼観察では、いずれも研ぎ面に擦痕等が見られず、いわゆる「仕上げ砥石」として使用されたものと思われる。出土状態は、K-23 区の1m四方内から図示した2点を含め、同一個体片6点が出土しており、被熱破砕後に廃棄されたものと思われる。6 は加工痕のある礫で扁平な棒状礫の右側縁に表裏面への剝離加工が施されている。側面観は稜線状となり、敲き潰れの面はない。7 は、滑沢面のある礫で、素材礫中央部平坦面に使用痕が認められる。擦痕などは観察できないが、他の礫皮面と明らかに異なっている。(乾)

## 金属製品 (図Ⅱ-61-8~10, Ⅱ-62-11~19 図版92)

8~13 は鉄製品、14~19 は銅、及び錫製品である。8 は刀身長約22cmで庵棟平造の短刀。9 は刀子で、棟側に明瞭な区が形成されているが刃区は不明瞭であり、茎は刀身と同じく刃部側が薄くなっている。10 も断面の形状から刀子と考えられるが、潰れて変形している。11 は鉄錐の脚部であり、形状から遺跡内で出土した他の鉄錐とは別個体である。12 は鉤状製品で、基部は断面方形、



図Ⅱ-61 アイヌ文化期包含層(Ⅲ層上～中位)出土遺物(1)



図II-62 アイヌ文化期包含層(Ⅲ層上～中位)出土遺物(2)

機能部は断面円形であり、遺跡内で出土している他の鉤状製品に認められる溝は入っていない。13は棒状製品で1面に浅い溝が入る。14は猪目透と六角形の紋が入った鏝。15・16は刀装具で、16はⅢBB-03出土資料と対になると考えられる目貫である。17は錫製のニンカリ端部。18は「熙寧元寶」(北宋 初鋳年1068年)の真書体。19は天禧通寶(北宋 初鋳年1017年)の真書体。(小野)

#### その他の遺物(図Ⅱ-62-20・21 図版92-20・21)

20はコバルトブルーのガラス玉で、直径4mm。断面形はやや平坦面を形成している。当初、擦文土器個体片集中(ⅢPB-06)と同時に検出し、所属年代を不明とした。しかし、同形態のガラス玉が、ⅢH-07の付属炉であるⅢF-25(Ⅱ-28-15・16)とⅢAS-01(Ⅱ-30-20・21)のフローテーション資料から回収されたことから、本資料もアイヌ文化期に帰属するものと考えられる。21は、鹿角製の土掘り具で、鹿角分岐部分に複数のカット面を伴う抉りからの折損面がある。遺存状態は悪く、先端部の磨耗等は観察できない。出土位置は擦文文化期の集中区3より出土しているが、礫群面より黒色土を挟んだⅢb層上位より出土していることから、アイヌ文化期に所属するものと判断した。(乾)

表Ⅱ-79 包含層出土遺物属性表

挿入 番号	図版 番号	個体 名称	遺物 番号	遺物名	分類	層位	遺構名	グリッド	計測値(mm)			重量(g)	材質	備考
									長軸	短軸	厚さ			
Ⅱ-61-1	92-1	-	1015	火打石	-	ⅢbU	-	U-20	47.5	30.0	21.0	23.8	Qu.	-
Ⅱ-61-2	92-2	-	3571	たたき石	I B3	ⅢbU	-	R-19	133.0	62.0	39.0	340.0	Sa.	-
Ⅱ-61-3	92-3	-	20197	たたき石	I B3	ⅢbU	-	M-26	134.0	56.0	44.0	420.0	Sa.	被熱
Ⅱ-61-4	92-5	3570090A	23181	砥石片	-	ⅢbU	-	K-23	24.0	9.0	8.0	5.0	Tu.	被熱
Ⅱ-61-5	92-4	3570090B	31343	砥石片	-	ⅢbM	-	K-23	30.0	13.0	11.0	8.0	Tu.	被熱
Ⅱ-61-6	92-6	-	1480	加工痕のある礫	-	ⅢbU	-	U-17	(76.0)	35.0	15.0	32.0	Mud.	-
Ⅱ-61-7	92-7	-	26355	滑沢面のある礫	-	ⅢbU	-	P-33	204.0	166.0	104.0	4,620.0	Gra.	-
Ⅱ-61-8	92-13	-	33986	短刀	-	KR	-	J-32	317.5	25.0	6.0	127.3	Fe	-
Ⅱ-61-9	92-8	-	171	刀子	-	ⅢbU	-	Q-14	168.0	23.0	5.0	45.9	Fe	-
Ⅱ-61-10	92-9	-	1001	刀子再利用品	-	ⅢbU	-	T-20	51.8	19.0	10.0	9.7	Fe	-
Ⅱ-62-11	92-11	-	20925	鉄鍋脚部	-	ⅢbM	-	L-32	60.0	35.0	32.0	43.2	Fe	-
Ⅱ-62-12	92-12	-	17218	鉤状製品	-	ⅢbU	-	N-17	81.0	56.0	7.0	24.8	Fe	-
Ⅱ-62-13	92-10	-	24255	棒状製品	-	ⅢbU	-	L-31	47.0	9.2	7.0	11.6	Fe	-
Ⅱ-62-14	92-14	-	3077	鏝	-	ⅢbU	-	S-19	27.0	25.0	2.2	20.7	Sn	-
Ⅱ-62-15	92-15	-	20926	象嵌裝飾部?	-	ⅢbU	-	L-33	24.0	24.0	3.1	4.6	Fe	-
Ⅱ-62-16	92-16	-	30617	刀装具	-	ⅢbL	-	P-27	23.0	21.0	2.0	1.0	Fe	-
Ⅱ-62-17	92-17	-	931	ニンカリ	-	ⅢbU	-	R-18	20.1	16.0	3.0	1.2	Sn	-
Ⅱ-62-18	92-18	-	28022	古銭(熙寧元寶)	-	ⅢbM	-	K-30	24.5	24.0	1.2	2.6	Fe	-
Ⅱ-62-19	92-19	-	28131	古銭(天禧通寶)	-	ⅢbU	-	J-35	24.5	24.0	1.2	2.5	Fe	-
Ⅱ-62-20	92-20	-	3415	ガラス玉	-	ⅢbU	-	R-18	4.0	4.0	3.8	0.1	G.	-
Ⅱ-62-21	92-21	-	1474他	土掘り具	-	ⅢbU	-	R-35	230.8	130.0	20.8	117.1	B	-

## 第三章 擦文文化期の調査

擦文文化期の調査では、円形周溝遺構や堅穴様遺構などの殆ど類例の無い遺構のほか、焼土や土坑などの多数の遺構・遺物を検出したにも係らず、堅穴住居跡の検出には至らなかった。しかし遺構群の「集中区」を16カ所ほどとらえることができた。これらにも時間幅や性格の違いが想定されるものの、今回の報告では、平面的な集中範囲としての認識に留め、性格についても集中区1～3、18以外のものについては積極的な記載まで行っていない。調査・整理で得た多くの情報について報告することを、最大の目的として、遺構、遺物を掲載している。(乾)

表Ⅲ-I 擦文文化期 遺構群一覧表

遺構名	規模		グリッド	層位	関連遺構						備考	
	長軸	短軸			焼土等	土坑	土器集中	礎集中	FC集中	炭化物集中		獣骨集中
集中区1	850	750	M・N-20・21	Ⅲbl.	ⅢF-20,50		ⅢPB-02,03	ⅢSB-02,06,14	ⅢFCB-01	ⅢCB-61,72		須恵器・炭化キビ塊・銅鏡
集中区2	600	400	O-17・18	Ⅲbl.	ⅢF-14,15			ⅢSB-05		ⅢCB-40,53	ⅢBB-01	炭化キビ塊・銅鏡・獣骨
集中区3	1,200	1,100	P-34, Q-R-34～36	Ⅲbl.	ⅢF-47,76, 80,82	ⅢP-03 ～06,13		ⅢSB-13				土坑群
集中区5	630	310	N-O-18	Ⅲbl.	ⅢF-13,16 17,18							
集中区6	1,120	600	M-22,L・M- 23,K・L-24	Ⅲbl.	ⅢF-28,32 93,97,113, 115～117, 119～123	ⅢP-07						
集中区7	450	350	L-21・22	Ⅲbl.	ⅢF-38,49 53,54		ⅢPB-08					
集中区8	1,500	700	P-24 Q-21・22 Q-23・24	Ⅲbl.	ⅢF-42,91 92,100, 109	ⅢP-08, 09,11	ⅢPB-13,16	ⅢSB-22				
集中区9	700	550	J-28・29 K-28	Ⅲbl.	ⅢF-60,62 65,70,73, 74,137		ⅢPB-09	ⅢSB-16,20				
集中区10	300	250	Q-28	Ⅲbl.	ⅢF-68		ⅢPB-10	ⅢSB-18				
集中区11	740	730	O-32,M・N- 32・33	Ⅲbl.	ⅢF-77, 78,125, 139,141				ⅢCB-63,75			
集中区12	750	600	O-24・25	Ⅲbl.	ⅢF- 106,129		ⅢPB-12					
集中区13	700	550	N-23, O-22・23・24 P-23・24	Ⅲbl.	ⅢF-101, 102,105	ⅢP-10, 15,48	ⅢPB-15	ⅢSB-21, 23,24		ⅢCB-60,71		
集中区15	810	560	M-30・31, N-31	Ⅲbl.	ⅢF- 130,134			ⅢSB-59				
集中区16	700	600	P-37・38	Ⅲbl.	ⅢF-132, 133,135		ⅢPB-07			ⅢCB-76		
集中区17	1,050	750	O・P-31・32	Ⅲbl.	ⅢF-136	ⅢP-21		ⅢSB-19		ⅢCB-77		
集中区18	700	550	S・T・U-19 T-20	Ⅲbl.	ⅢF-08		ⅢPB-01,05			ⅢCB-32		作業場

## 第1節 円形周溝遺構

円形周溝遺構〔ⅢX-01〕 (図Ⅲ-2・3 図版 36～38-1・2)

位置：G・H-28・29区

規模：〔全体〕987×(786) cm 〔内郭〕630×(618) cm

〔周溝〕231×168cm 〔内郭周溝〕36×18cm

付属遺構：ⅢF-48 44×35×5.5cm

遺構の用語：〔円形周溝遺構〕 本遺構全ての総称。

〔周溝〕 本遺構の外周溝。

〔内郭〕 周溝より中心部全城。

〔内郭周溝〕 内郭に構築された周溝。

〔盛土〕 内郭にリング状に形成された、周溝掘削土の切返し土。

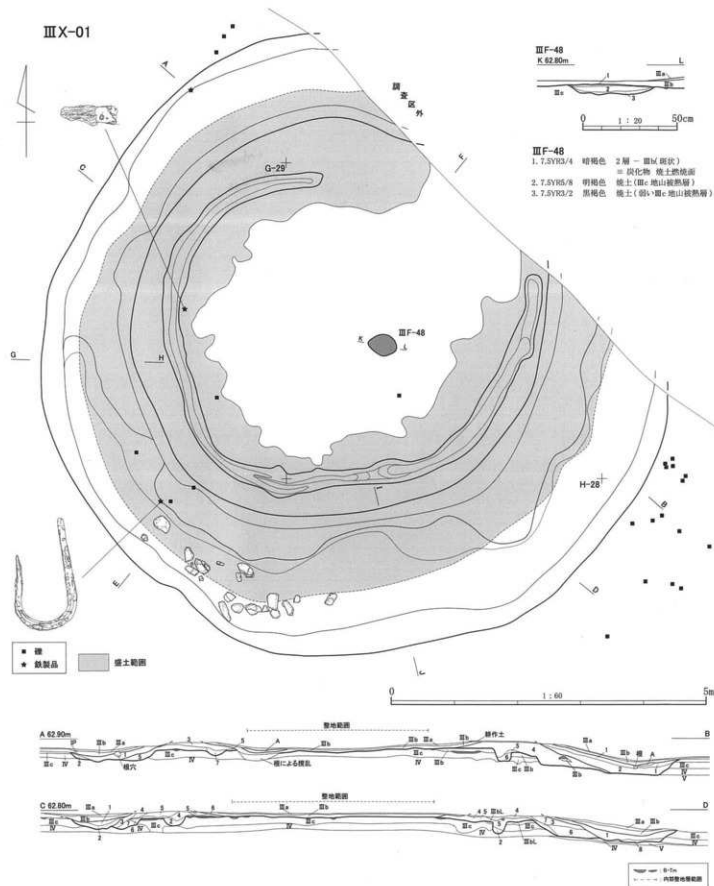
〔整地範囲〕 内郭内のⅢb層下位の削平範囲。

立地：段丘面T<sub>2</sub>の縁辺部で、調査区内を北東から南西方向に形成されている沢状地形の西側に位置する。視的には、厚真川を見下ろし、ショロマ川との合流点北側にある無名峰が眺望できる地点に立地している。

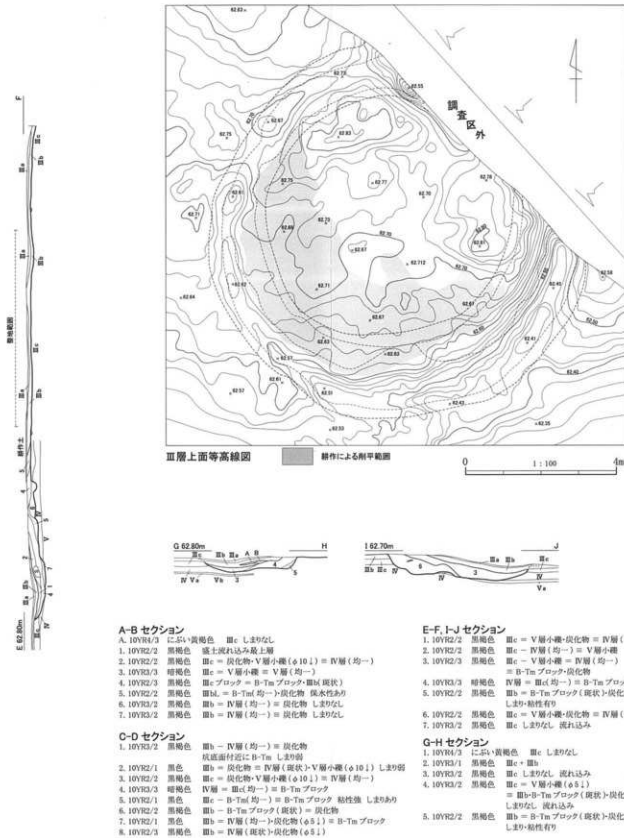
確認：平成17年度の火山灰除去段階でⅢ層上面にて確認した。北西側の一部は調査区外に続くが、浸食崖に隣接していることから安全面を考慮し遺構全体を調査することはできなかった。確認状態は、溝幅50～100cm、深さが4～10cmの溝状の落ち込みが直径約9mの円形に回っており、遺構の存在が判明した。段丘縁辺部から3m前後の幅で耕作の影響を受けておらず、検出した溝の内側2ヵ所に高さ10cm程度のマウンド状の高まりを検出している(図Ⅲ-2右上参照)。マウンド状の高まりは後の調査の結果、周溝掘り返しの盛土であったことが判明している。周溝内部は、小規模な風倒木痕があるのみで、概ね水平な地形面であった。

調査：検出段階での円形に回る溝の規模や構築面層位を把握することを目的に遺構全体を通す3本のトレンチとベルトを設定した。設定位置は、調査区縁辺に対し直行するE-Fラインと、これに直行し溝の直径部分を通すC-Dライン、内側のマウンドにかかるA-Bラインである。C-Dラインは当初よりV層上面まで掘開し、他2本は構築面で留めた。この他、溝のみを切るG-HとI-Jラインの2本と西側の陸橋状に溝が途切れる箇所にもベルトを追加し、合計6本のトレンチおよびベルトを設定している。トレンチ調査で溝の規模が判明し、おおよその遺構全体像を把握したことから、「円形周溝遺構」と認定した。なお、この時点では所属時期は不確定で、周溝の埋積状態から擦文文化期～アイヌ文化期との認識であった。周溝内と内郭に被覆する自然堆積のⅢ層上位の除去後、周溝の調査を行った。周溝の覆土は内郭に形成された盛土の流れ込み層で、盛土本体層に連続している。周溝壁面の立ち上げは内郭側壁面にみられるⅣ層や盛土下の薄いⅢb層下位とB-Tmの検出で立ち上げ、内郭側の先端とした。また、周溝内に円形の覆土落ち込みを10ヵ所以上検出したが、柱穴を認定できたものは無かった。この他、周溝調査中に南側の周溝覆土上位で人頭大前後の亜角礫群を検出し、出土状態の図化・撮影を行った。内郭の調査は、耕作土の除去を行い、盛土残存範囲の検出・記録を行った。内郭に形成・残存している盛土調査は、内郭側の縁辺部に注意し、検出作業を行った。内郭平坦面は、トレンチの堆積状態観察から整地面範囲が判明し、この直上層までのⅢb層上位を除去した。この時点で周溝および整地範囲の完掘と盛土の検出作業を終了し、遺構全





図Ⅱ-2 円形周溝遺構(ⅢX-01)



A-B セクション

- 10YR3/2 にかい・黄褐色 Ⅱc しまりなし
- 10YR2/2 黒褐色 Ⅱc 焼土流れ込み最上層
- 10YR2/2 黒褐色 Ⅱc = 炭化物-V層小礫(φ10) = IV層(均一)
- 10YR3/2 暗褐色 Ⅱc = V層小礫-V層(均一)
- 10YR2/3 暗褐色 Ⅱc = ブロック = B-Tmブロック(痕状)
- 10YR2/2 黒褐色 Ⅱc = B-Tm(均一)炭化物 塊水化劣り
- 10YR2/2 黒褐色 Ⅱc = IV層(均一) = 炭化物 しまりなし
- 10YR3/2 暗褐色 Ⅱc = IV層(均一) = 炭化物 しまりなし

C-D セクション

- 10YR3/2 暗褐色 Ⅱb - IV層(均一) = 炭化物  
状況面付近に B-Tm L上部層
- 10YR2/1 黒色 Ⅱc = 炭化物-V層小礫(φ10) = IV層(均一)
- 10YR2/2 暗褐色 Ⅱc = 炭化物-V層小礫(φ10) = IV層(均一)
- 10YR3/3 暗褐色 IV層 = Ⅱc(均一) = B-Tmブロック
- 10YR2/1 黒色 Ⅱc = B-Tm(均一) = B-Tmブロック 粘性強しまりあり
- 10YR2/2 暗褐色 Ⅱc = B-Tmブロック(痕状) = 炭化物
- 10YR2/1 暗褐色 Ⅱc = IV層(均一)炭化物(φ11) = B-Tmブロック
- 10YR2/3 暗褐色 Ⅱc = IV層(均一)炭化物(φ11)

E-F ト-J セクション

- 10YR3/2 暗褐色 Ⅱc = V層小礫-炭化物 = IV層(均一)
- 10YR2/2 暗褐色 Ⅱc - IV層(均一) = V層小礫
- 10YR2/2 暗褐色 Ⅱc - V層小礫 - Ⅱ層(均一) = B-Tmブロック-炭化物
- 10YR3/3 暗褐色 IV層 = Ⅱc(均一) = B-Tmブロック
- 10YR2/2 暗褐色 Ⅱc = B-Tmブロック(痕状)炭化物 しまり・粘性有り
- 10YR2/2 暗褐色 Ⅱc = V層小礫-炭化物 = IV層(均一)
- 10YR3/2 暗褐色 Ⅱc しまりなし 流れ込み

G-H セクション

- 10YR3/2 暗褐色 Ⅱc しまりなし
- 10YR3/1 暗褐色 Ⅱc = Ⅱb
- 10YR2/1 暗褐色 Ⅱc しまりなし 流れ込み
- 10YR3/2 暗褐色 Ⅱc = V層小礫(φ11) = Ⅱc-B-Tmブロック(痕状)炭化物 しまりなし 流れ込み  
Ⅱc = B-Tmブロック(痕状)炭化物 しまり・粘性有り
- 10YR2/2 暗褐色 Ⅱc = B-Tmブロック(痕状)炭化物 しまり・粘性有り



体の撮影を行った。撮影後、盛土の除去作業を行い、B-Tm 面で調査面を揃えた。盛土範囲は B-Tm が斑状に検出された。B-Tm 検出状態はほぼ同じ時期の平取町カンカン 2 遺跡 X-01 (森岡 1996) と類似する。この面で B-Tm を切る盛土の落ち込みを検出した。検出状態の撮影後、基本トレンチ等で再確認し、土層断面との整合性がとれたことから、「内郭周溝」として調査した。また、内郭中心地点のやや東よりから焼土 1 ヲ所 (III F-48) を検出し、諸記録を行った。最終面は、円形周溝遺構の周辺域も含めた範囲を III c 層下位まで除去し、柱穴の精査確認作業を行ったが、明確に認定できるものは 1 本も無かった。

周溝 (図 III-2) : 外側上端線 (外周) で直径 987cm に回る。周溝の規模は上端幅で約 110~230cm、坑底面で約 90~160cm、外側の III b 層下位からの深さが 10~20cm 前後で、計測値に幅がある。大きく東西南北に 4 分割した場合、北西部は幅や深さが小規模で、南部から東部にかけて幅広である。坑底面は北西部で IV 層下位、南東部では V 層上位となっている。坑底面は西側水平で、南西部から東側にかけては段状の構造をもつ。立ち上がりは、西側は緩く、東側では明瞭な屈曲をもつ。周溝の堆積状態は東西軸セクション A-B と C-D は共通した土層解釈で 1・2 層が盛土流出層、3~7 は盛土本体層と思われる。流出層の 1・2 層にはしまりが弱く均質な土壌で構成されている。盛土本体層は内郭部分から連続的に周溝内に堆積しており、A-B ラインでは III b 層と B-Tm が 1 つのブロックとして堆積し、南東部周溝坑底面の段状構造と概ね一致する範囲まで縁辺部が広がる。

内郭周溝 (図 III-2) : 平面形は北東部が開く円形で、周溝上端と 6~60cm の間隔をもって回っていた。上端幅 25~30cm、残存している盛土上面からの深さはセクション面での計測で、西側で約 20cm、南東部で約 25cm、断面形は「U」字状となっている。堆積状態は、盛土が落ち込み、一部は坑底面により黒色の強い土壌 (C-D・2 層) が堆積している。盛土の落ち込み状態から、内郭周溝内に有機質が存在し、腐植・空洞化により落ち込んだものと思われる。

盛土 (図 III-2) : 周溝幅の約半分から内郭周溝の中心部側に堆積し、北東部が開く。周溝内から内郭への基底面幅が約 260cm、残存する北東部のセクションでは基底面からの高さが 10cm の規模で確認できた。周溝内に流出した盛土の土量を考慮すると、より高い盛土であったと考えられる。また、内郭周溝より中心部側への流出は殆ど見られない。盛土の基底面層位は B-Tm より黒色土 (III b 層下位) を 1~2cm 程度挟在する。盛土分布範囲と一致する範囲において、内郭整地範囲や周溝外包含層よりも B-Tm が明瞭に堆積していた。

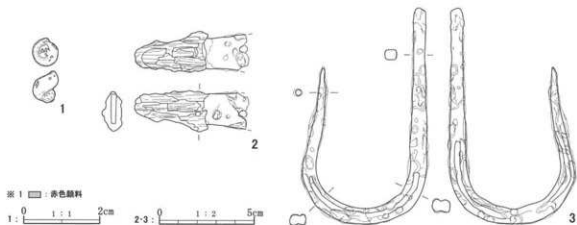
整地範囲 (図 III-2) : 内郭を横断するトレンチの土層断面の観察より認識した。整地範囲はほぼ水平で III c 層まで削平され、B-Tm は殆ど堆積していない。また、III c 層と III b 層の層界線は明瞭で、漸移的な変化が認められないことから認定した。整地範囲床面では、炭化物集中区は認識できなかったものの、炭化物や焼骨片が散在していたことからフローテーションサンプルを回収した。結果、クルミ属やブドウ科、キビなど多種類にわたって相当量の炭化種子が回収されている (第 V 章第 4 節)。

III F-48 (図 III-2) : 内郭中央部の東側で検出した小規模な焼土で、燃焼面層位より判断して整地面に伴う。燃焼面に微量の炭化物が含まれ、キビやブドウ科などの炭化種子が回収されている。

遺物出土状態 (図 III-3) : 遺構全体からの出土遺物は極少数で、盛土中や上下層から礫が出土しているが、確実な伴伴遺物は出土していない。ただし、原位置からは移動しているものの、伴伴の可能性のある遺物として巻貝化石 (I) や周溝南部で出土した礫群がある。巻貝化石は、セクションライン I-J のペルトセクション 3 層下位 (盛土流出層) の土壌サンプルから回収されている。周溝内の礫

群は盛土流出層の上位から出土しており、流出層の傾斜面に沿う。これらの遺物は構築時ないしは廃絶時に盛土上面に位置していた可能性がある。他に刀子茎(2)は内郭周溝の中心部側より出土し、層位は盛土本体層とした3層下位からである。鉤(3)は盛土流出層である1層上面からの出土で、隣群より上層面から出土しており、古い段階のアイヌ文化期または擦文文化期でも本遺構より新しい時期のものと思われる。

出土遺物(図Ⅲ-3): 1は、フローテーション回収遺物で、巻貝化石の螺塔内部にあたる。殻頂部側は白色のメノウまたは石英質でこの部分に赤色顔料が付着している。2は目釘穴部分から折損している小刀子茎で、柄頭側の1/2に木質残存している。木質の縁辺部は裁断痕など観察できないが、茎表面に木質の痕跡が皆無であることから別材質の部品が組み合わさっていた可能性がある。盛土本体層の下位出土で、本遺構構築以前に帰属する資料と思われる。また木質の残存は、盛土にバックされたためと思われる。3は完形の鉤状鉄製品で先端部へは軸側へ湾入し、先端はやや反り返り、かえしが無く断面形が円形に作り出されている。「U」字状の折り返し部分は、断面形が長方形となり表裏面に浅い溝が観察できる。基軸は直線的で先端部へ漸的に細くなり、部分的に溝が観察できる。断面形は方形状で、基軸端部は丸みを帯びている。本遺構廃絶後の資料である。(乾)



図Ⅲ-3 円形周溝遺構出土遺物

表Ⅲ-2 ⅢX-01属性表

挿図 番号	図版 番号	層位	平面形	グリッド	調査面規模(cm)		外周溝幅 調査面	外周溝幅 溝底面	深さ (cm)	内周溝幅 調査面	内周溝幅 溝底面	深さ (cm)	備考
					長軸	短軸							
Ⅲ-2・3	36-37- 38-1・2	ⅢbL	円形	G-H- 28・29	987	(780)	231	168	48	36	18	21	

表Ⅲ-3 ⅢX-01付属遺構属性表

挿図番号	図版番号	遺構名	グリッド	層位	平面形	規模(cm)			灰・骨片 の有無	備考
						長軸	短軸	厚さ		
Ⅲ-2	38-3・4	ⅢF-48	G-28	ⅢbL	楕円形	48	36	6	-	

表Ⅲ-4 ⅢX-01出土遺物属性表

挿図 番号	図版 番号	個体 名称	遺物 番号	遺物名	分類	層位	遺構名	グリッド	計測値(mm)			重量(g)	材質	備考
									長軸	短軸	厚さ			
Ⅲ-3-1	93-3	-	101391	巻貝化石 (赤色顔料)	-	-	-	-	9.0	7.0	7.0	0.4	Shell	FLT 1069
Ⅲ-3-2	93-2	-	24619	小刀	-	3L	-	G-29	(60.0)	22.0	11.5	10.0	Fe	
Ⅲ-3-3	93-1	-	20467	鉤状製品	-	1T	-	H-29	115.0	68.0	9.0	58.0	Fe	

## 第2節 竪穴様遺構

## 竪穴様遺構〔ⅢX-02〕(図Ⅲ-4 図版38-5・39)

位置：R-37・38区 規模：648×591×30cm 平面形：円形

確認・調査：火山灰除去後、Ⅲa層において円形のプランを確認した。すり鉢状に窪むことから竪穴住居址と想定し、十字ベルトを設定してV層上面までトレンチ調査を行った。断面観察をした結果、IV層が動いており焼骨片も含むことから人的行為によって竪穴状の窪みが形成された遺構であると判断した。調査はベルトを残した状態で進め、プライマリーなⅢb層および遺構覆土の黒色土を除去すると幅約50cmの浅い周溝が馬蹄形に巡った(図Ⅲ-4 トーンの外側)。断面の記録をした後、ベルトを除去して全体のプランを確認した。断面観察で中心部に焼土(ⅢF-56)を確認したが、床面等の把握はできなかった。壁面立ち上がりは不明瞭なため必要に応じてサブトレンチを設定し遺構形状の確認に努めた。この結果、図Ⅲ-4のトーン部分が盛り上がっていることがわかり、範囲を記録した後完掘調査を行った。完掘するにあたっては明瞭な立ち上がりがなく焼骨片を含む層を全て除去して完掘とした。写真・図等の記録後にジョレンによって遺構内・外の柱穴確認を行った。黒色プランは全て半截したが検出していない。

堆積状態(図Ⅲ-4)：竪穴様遺構の溝は意図的に掘り巡らせたものではなく、結果的に溝状になった部分に黒色土が溜まったものである。図中にトーンで示した部分(10・11層主体)は明瞭に分けることは難しいが焼骨片を含むIV層が馬蹄形に巡る。焼骨片は遺構中央部ⅢF-56の焼土が起源で、この周辺の灰層を数回にわたって外方向へ掻き出した結果、馬蹄形の盛り上がりを形成したと思われる。また掻き出しも一定量ではなく一方のみ高く、殆ど盛り上がりがない地点(セクションラインC側)もある。1~3層は盛り上がりの内側へ、6~8層は外側へ流れ込む層でⅢ層を基層とする。4層は基本的に10・11層と同一層と考えられる。5・9層は東側の10層上位に堆積しているが、盛り上がり低かったために遺構中央部まで流れ込んできたⅢ層主体層である。12・13層は西側不明瞭な立ち上がりに堆積する。14層はⅢF-56周辺の焼骨片含むIV層。15は焼土(ⅢF-56)で焼骨片多量を含むIV層~V層上面の地山被熱層である。

遺物出土状態(図Ⅲ-4)：遺構内に遺物は散漫に広がるが、中でも西側に土器・礫がまとまって出土している。ⅢX-02の性格上、出土遺物が遺構に伴うかどうか不明である。

出土遺物(図Ⅲ-4)：遺物は土器13点、礫石器1点、礫81点、漆塗膜片1点の96点出土している。1はⅤBの甕底部で内、外面ともにハケメ、ミガキ調整され、内面黒色処理が施される。2はたたき石で側縁稜に敲打痕が認められる。フローテーションからは漆塗膜片を1点回収した。動物遺存体は魚骨中心でサケ属の椎骨が多く、ウグイ・コイ科の椎骨も各1点、陸産貝類(ヒラマキガイ)2点が出土している。

(奈良)

表Ⅲ-5 ⅢX-02属性表

棟図 番号	図版 番号	層位	平面形		グリッド*	調査面規模(cm)		坑底面規模(cm)		深さ (cm)	調査面 長短比	坑底面 長短比	備考
			調査面/坑底面	形状		長軸	短軸	長軸	短軸				
Ⅲ-4	38-5,39-1 ~4,7	ⅢbL	円形/不整形		R-37・38	648	591	345	(342)	30	1.87	(1.72)	明確な掘り込み ない

表Ⅲ-6 ⅢX-02付属遺構属性表

棟図番号	図版番号	遺構名	グリッド	層位	平面形	規模(cm)			灰・骨片 の有無	備考
						長軸	短軸	厚さ		
Ⅲ-4	39-5・6	ⅢF-56	R-37	ⅢbL	楕円形	120	(80)	6	骨片	



表Ⅲ-7 ⅢX-02出土土器属性表

棟号 番号	図版 番号	遺構名	個体名 称	分類	遺物番号	グリッド	層位	器種	部位	器面調整		点数	備考
										内側	外側		
Ⅲ-4-1	93-4	ⅢX-02	SP072A	VIB	25051,27511	-	9	壺	底部	ハナメ ミヤネ 内面黒色処理	ハナメ ミヤネ	2	

表Ⅲ-8 ⅢX-02出土礫石器属性表

棟号 番号	図版 番号	個体名 称	遺物 番号	遺物名	分類	層位	遺構名	グリッド	計測値(mm)			重量(g)	材質	備考
									長軸	短軸	厚さ			
Ⅲ-4-2	93-5	-	27517	たつき石	1B2	9	ⅢX-02	Q-35	107.0	70.0	37.0	376.0	Sa.	

### 第3節 集中区 (図Ⅲ-5～58 図版45～57)

擦文文化期の遺構・遺物検出面であるⅢb層下位からは、多数の資料を検出しているが、その分布をみると、調査区各所である程度まとまりを持つ状態で出土している。現場段階においても3カ所の集中区を認識していたが、報告に際し、遺構・遺物の分布傾向を検討した結果、擦文文化期の資料に対して新たに13カ所の集中区を設定した。設定にあたっては、①遺構密度が高いこと、②遺物密度が高いこと、③遺構と集中遺物とが共伴すると考えられる出土状態で検出されていること、の3点を考慮した。(小野)

#### 集中区1 (図Ⅲ-5～12・図版Ⅲ-45～47・94～97)

位置：M・N-21・22区 規模：850×750cm

関連遺構：焼土 ⅢF-20・50N・50S 炭化物集中 ⅢCB-61・72 土器集中 ⅢPB-02・03  
礫集中 ⅢSB-02・06・14 フレイク・チップ集中 ⅢFCB-01

確認・調査：平成16・17年度の調査区をまったく状態で検出した4区に及ぶ集中区である。平成16年度調査の際、火山灰除去終了の段階で、Ⅲ層上面に露出した板状礫を確認した。礫はまだ埋もれた状態であったことから、調査開始後、礫下底面までのⅢ層掘削を行った。結果大型礫で構成される礫集中(ⅢSB-02)の他、須恵器壺1個体分の土器集中(ⅢPB-02)、5個体分の擦文土器片集中(ⅢPB-03)、棒状礫で構成される礫集中(ⅢSB-06)を検出した。検出途中、ⅢPB-02の土器片間から銅鍍片と炭化キビ塊の出土を確認したことから、集中区全体に中グリッドを基準とした100cm間隔のメッシュを設定し、メッシュ単位で土壌サンプルを採取しながら調査を進めた。集中遺物の検出終了後、出土状態の記録を行い取上げた。取上げ中、周囲に残されたⅢb層を掘削したところ、焼土を1カ所検出したため(ⅢF-20)、並行して焼土の調査も進めた。遺物の出土状態から平成17年度調査予定範囲にまで及ぶことが明確であったが、調査区拡張はせず、平成16年度の調査を終了した。平成17年度の調査では、ⅢPB-02の続きと、新たに焼土2カ所(ⅢF-50N・50S)、炭化物集中(ⅢCB-61・72)、礫集中(ⅢSB-14)、黒曜石集中(ⅢFCB-01)を検出した。焼土は当初1カ所と考えていたが、調査進行に伴い2カ所あることが判明したため、同一番号の北側(N)、南側(S)として名称を分けた。平成16年度と同様に出土状態の記録を行った上で遺物を取上げ、検出した焼土・炭化物集中については土壌サンプルを回収した。なお平成17年度の調査時にはメッシュによるサンプル回収は行っていない。

遺構配置(図Ⅲ-5)：ⅢF-20・50N・50Sと2カ所の炭化物集中を中心とし、周囲を集中遺物を取り囲む配置で検出した。焼土からみて南東にⅢPB-02、東にⅢPB-03とⅢSB-02、北東にⅢSB-06、北にⅢFCB-01、北西にⅢSB-14が位置する。焼土の南西側に遺物分布密度の希薄な範囲が認められた。

焼土(図Ⅲ-5・6)：ⅢF-20・50N・50Sはいずれも長軸100cm以上、層厚10cm前後で、良好な焼土層を形成している。燃焼面も捉えることができたが、いずれも焼骨片はほとんど含まれていない。フローテーションの結果キビを主体とする炭化種子を得ている。

炭化物集中(図Ⅲ-5・6)：ⅢCB-61はⅢF-50Nと50Sの間に位置し(図Ⅱ-5・6)する。Ⅲb層の浅い落込み中から炭化キビ塊数個体が出土した。3点を図示したが(Ⅱ-5-SD.156・158・159)、この場所で出土した炭化キビ塊は、長軸2~3cmの板状に近い形状で、SD.156のように一面に擠ままれてきたような稜線をもつ例もあった。キビ1粒の形が比較的明瞭にみえる状態でまとまっている。ⅢCB-72はⅢF-50Nの北側で検出したもので、極少数だが炭化キビ塊が出土している。

土器集中(図Ⅲ-5)：ⅢPB-02は須恵器長頸壺1個体分の破片が200×100cmの範囲で散在した土器集中で、土器片間からは数点の炭化キビ塊と被熱し溶解した銅鉋片や湯玉が出土している。ⅢPB-03は200×100cm程の範囲に5個体分の擦文土器片が集積した土器集中である。破片は細片化が著しく、いずれも被熱している。個別別の口縁部・底部破片出土位置を図Ⅲ-11・12に示したが、個体毎に分布の偏りは認められず、全ての個体片がほぼ同じ範囲内で密集して出土していることから、この場に完形の状態でおかれたものが後から割れたのではなく、既に破片化した状態で5個体分まとめて置かれたと考えられる。ⅢPB-03の北半は主に棒状礫が集中しており、礫個体総数184点中、完形個体は48点であり、大半が被熱していた。また周囲からは土器片・礫と同様、被熱した黒曜石フレイクも数多く出土している。ⅢPB-02から03にかけての範囲には炭化物の分布が認められ、土壌サンプル名ⅢPB-02.Cとして採取し、微細遺物の回収を行っている。結果、焼土サンプルと同様、キビを主体とする炭化種子を得ている。

礫集中(図Ⅲ-5)：ⅢSB-02は平均長軸100mmのやや大き目の棒状礫と、最大約400mmの大型板状礫で構成される礫集中である。礫個体総数44点中、完形個体は24点であった。ⅢSB-06は棒状礫を中心とする礫集中で礫個体総数68点中、完形個体は12点であり欠損率が高い。ⅢSB-14も棒状礫で構成され、礫個体総数310点中、完形個体は38点であり、同じく欠損率が高い。これら礫集中の周囲ではそれぞれたき石を中心とした礫石器も少数出土しているが、ⅢSB-14の周囲が最も多い。

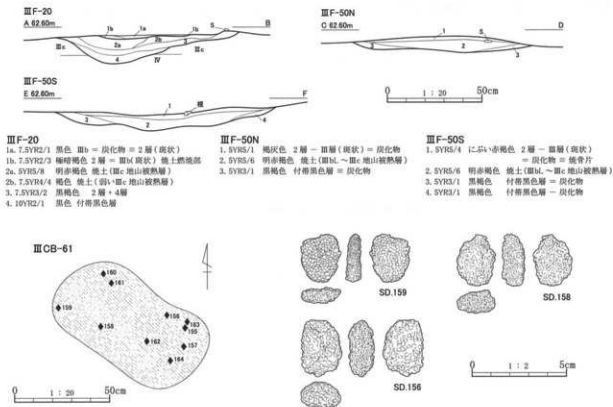
フレイク・チップ集中(図Ⅲ-5)：ⅢPB-03周辺においても、黒曜石フレイクの分布が認められたが、ⅢF-20を挟んだ北側において、密集した状態でフレイク・チップの出土を確認したことから、ⅢFCB-01として設定した。大半が被熱しており、ⅢPB-03周辺出土のフレイク・チップと同一母岩の可能性が高い(黒曜石に関する所見は北海道大学大学院 赤井文人氏からご教示を得た)。

出土遺物(図Ⅲ-7~10)：1~4・6・7はⅢPB-03でまとまって出土した土器である。いずれも被熱し、器表面に焼けはじけによる剥落が認められる。1はⅤB4aの甕で、胴部文様帯は2段に分れ、下段は横走沈線を廻らせた上に樹枝状文を重ね、上段は横走する綾杉文を施文している。口縁部文様帯と貼付圍繞帯には、ハケメ調整に用いた工具の木口面を押し当て、縦・横・矢羽状の刻みを入れている。2はⅤB3の甕で、口縁部文様帯に横走沈線、胴部文様帯に横走綾杉文、貼付圍繞帯は縦位の刻みを入れた後、横走沈線を廻らせている。3は2と同一個体の底部。4は口縁部文様帯に木口面を押し当てて斜位の刻みを3段に廻らし、胴上半部には樹枝状文を施している。5~7は高台の付く坏で、6

集中区 1



図III-5 集中区1及び土器集中2・3(III PB-02-03)平面図



図Ⅲ-6 III F-20・50N・S断面, III CB-61平面図及び出土炭化キビ塊

表Ⅲ-9 集中区1焼土属性表

挿図番号	図版番号	遺構名	グリッド	層位	平面形	規模 (cm)			灰・骨片の有無	備考
						長軸	短軸	厚さ		
III-6	46-2-3	III F-20	M・N-20	IIIbL	楕円形	100	72	15	-	
III-6	46-4	III F-50S	N-21	IIIbL	楕円形	104	72	8	-	
III-6	46-4	III F-50N	N-21	IIIbL	楕円形	120	80	8	-	

表Ⅲ-10 集中区1炭化物集中属性表

挿図番号	図版番号	遺構名	グリッド	層位	平面形	規模 (cm)		備考
						長軸	短軸	
III-5	-	III CB-61	N-21	IIIbL	楕円形	84	42	炭化キビ塊集中
III-5	-	III CB-72	M・N-21	IIIbL	楕円形	56	40	

はVIC4bの环で、体部に横走綾杉文を施文しており、7はVIC4aで、外面にハケメ調整痕が明瞭に残る。8はIII PB-02で出土した須恵器の長頸壺である。胴部最大径26cmの肩が張る器形で、外面頸部には隅丸六角形のヘラ記号が描かれている。外面調整は、胴部下半はケズリ調整が行われたと思われるが、磨耗し不明瞭で、胴部上半には工具をあてつけた痕跡が数箇所認められた。内面調整は胴下半と胴部から頸部への境にヘラ状工具によるナデ調整の痕跡を残す。口縁部は出土しておらず、割れ口が磨耗していることから、遺跡内に持ち込まれた時点で口縁部を欠損していた可能性がある。内面に炭化物が付着しており、中身が入った状態で被熱したと考えられる。9~12は破片資料として集中区内で出土したもので、9・10はVII B3の口縁、11・12はVIC4aの口縁である。13は集中区内での柱穴確認目的でジョレン精査中、IIIc層で出土した板状の土製品である。6面全体に沈線と刻みに

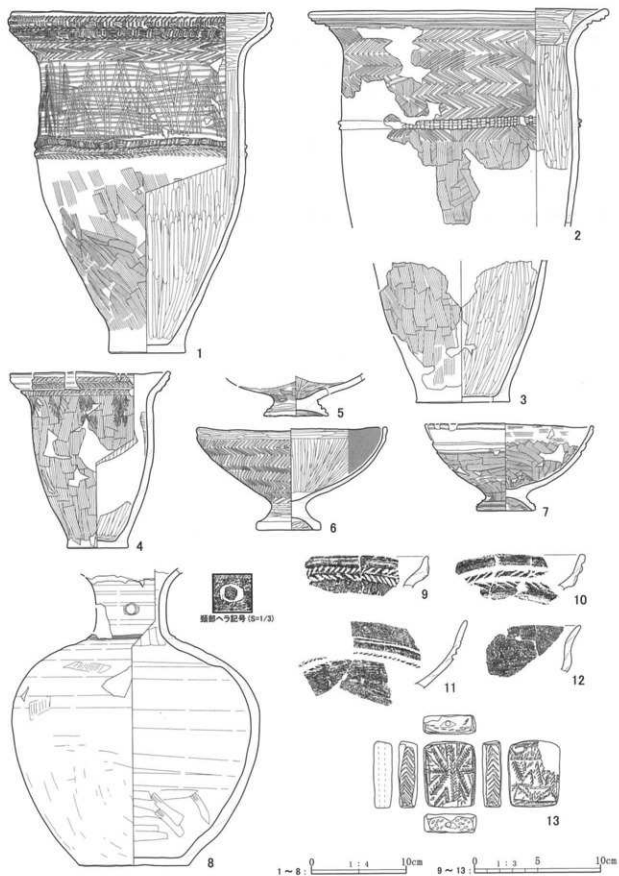


表Ⅲ-11 集中区1出土土器属性表

神岡 番号	図版 番号	遺構名	個体 名称	分類	遺物番号	グリッド	層位	器種	部位	器面調整		点数	備考
										内側	外側		
Ⅲ-7-1	94-1	ⅢPB-03	SP002A	ⅤB3a	2445, 2535, 2752他	M-20	Ⅲb	甕	口縁～ 底部	ハケ シキ	ハケ ナデ	39	二次被熱
					2504, 2606, 2765他	N-20	Ⅲb					95	
					2809, 4703	不明	Ⅲb					2	
					40502	N-20	Ⅲb					1	
					18301	不明	Ⅲb					1	
Ⅲ-7-2	94-2	ⅢPB-03	SP003A	ⅤB3b	2404, 2464, 2969他	M-20	Ⅲb	甕	口縁～ 胴部上平	ハケ シキ	ハケ ナデ	12	被熱
					2339, 2368, 2499他	N-20	Ⅲb					156	
Ⅲ-7-3	94-5	ⅢPB-03 U-14	SP003B	ⅤB3b	2330, 2522, 2649他	N-20	Ⅲb	甕	胴部下平 ～底部	ハケ シキ	ハケ ナデ	30	二次被熱
					4968	不明	Ⅲc					7	
Ⅲ-7-4	94-3	ⅢPB-03	SP004A	ⅤB3c	2553, 4153, 4160他	M-20	Ⅲb	甕	口縁～ 底部	ハケ シキ	ハケ ナデ	47	1
					2552, 2612, 2779他	N-20	Ⅲb					1	
					4480	N-20	Ⅲb					1	
Ⅲ-7-5	94-7	ⅢPB-02 ⅢCB-72	SP534A	ⅤC4	24985, 24987	N-21	Ⅲb	坏	体部～ 台部	ハケ ナデ	(ハケ) シキ	2	1
					34675	M-21	Ⅲb					1	
Ⅲ-7-6	94-6	ⅢPB-03	SP501A	ⅤC4b	2081, 2409, 2750他	M-20	Ⅲb	坏	口縁～ 台部	(ハケ) シキ	ハケ ナデ	32	1
					2500, 2702, 2819他	N-20	Ⅲb					38	
Ⅲ-7-7	94-8	ⅢPB-03	SP502A	ⅤC4c	4343	M-20	Ⅲb	坏	口縁～ 台部	ハケ ナデ	ハケ ナデ	1	1
					2595, 2821, 4136他	N-20	Ⅲb					55	
Ⅲ-7-8	94-4	ⅢPB-02 ⅢPB-03 R-18	SP901A	ⅤE2	943, 2144, 2554, 3001他	N-20	Ⅲb	索	頸部～ 底部	ロコナデ ヘナナデ	ロコナデ ヘナナデ	96	口縁部欠 損傷に對 目摩盤
					998, 2498他	N-21	Ⅲb					8	
					2008, 276	M-20	Ⅲb					1	
					3068	R-18	Ⅲb					1	
Ⅲ-7-9	94-10	ⅢPB-02	SP024A	ⅤB3c	3945	N-19	Ⅲb	甕	口縁	内面黒色処理 シキ	シキ	1	1
					24995	N-21	Ⅲb					1	
Ⅲ-7-10	94-9	ⅢPB-03	SP025A	ⅤB3c	2802, 4310, 4312, 4692	N-20	Ⅲb	甕	口縁	内面黒色処理 シキ	シキ	4	1
					2103	M-20	Ⅲb					1	
Ⅲ-7-11	94-11	ⅢPB-03	SP508A	ⅤC4a	2609, 4068	N-20	Ⅲb	坏	口縁～ 体部	内面黒色処理 シキ	シキ	2	1
					18298	-	-					1	
Ⅲ-7-12	94-12	ⅢPB-03	SP518A	ⅤC4	18305, 18306, 18307	-	-	坏	口縁～ 体部	内面黒色処理 シキ	シキ	3	1
					2874, 4206	N-20	Ⅲb					2	

より精緻な文様が描かれ、長軸方向に貫通する穿孔が認められる。他の遺物と比べ層位的に低い位置で出土したが、周囲に他時期の資料が出土していないことや、文様要素が擦文土器と共通することから集中区1に伴う遺物と考えた。14は黒曜石転礫で、22点の破片が接合した。フィッシャーが原石中心から放射状に入っていることから打撃により割られたのではなく、被熱により焼け割れたと考えられる。15は14と母岩を異にする黒曜石フレイク。16～23はたたき石で16～18は棒状、19～23は不整形な礫を素材とし、17～20は面を、16・21・22は縁辺部を使用部位とし、23は面と縁辺の双方を使用している。他の遺物と同様被熱資料が多い。また21には黒色付着物が認められた。24・25は板状礫で、24には黒色付着物、25の表面には滑沢面が認められる。26・27は犬歯状の形をした自然礫で、材質は凝灰岩である。28～31は帯金具で、刀もしくは小刀の踵部分と思われる。32・33は銅鈍片で、いずれも被熱し変形している。原形とどれ程差があるか明確ではないが、現状、口縁部は比較的肉厚で、口縁下位に沈線は認められない。集中区2出土資料と区別しDタイプとした。成分分析の結果、本遺跡出土資料中では最も低い錫含有量を示していた。34・35は銅鈍が溶解した際に生成されたと考えられる銅塊である。こうした湯玉はフローテーションを行った土壌サンプル中からも多数得ている。36～47はⅢPB-03北半で出土した棒状礫で、いずれも被熱している。43・44は礫中程で短軸に沿って被熱の度合いが異なり、紐を結びつけた痕跡の可能性がある。44～47のように折損した礫が多く出土しているが、破断面は磨耗しており、集中区内に持ち込まれる以前に割れていたと考えられる。48～57はⅢPB-02、58～64はⅢSB-06、65～72はⅢSB-14の出土礫である。

性格：遺物の大半が被熱していること、炭化キビ塊・銅鈍といった特殊な遺物が出土していること、5個体分の土器を細片化した上で投棄していること、焼土に骨片が含まれず日常作業に利用された様相を呈していないこと、といった要素により、本集中区は儀礼的行為を行った場所である可能性が高い。(小野)



図Ⅲ-7 集中区1出土遺物(1)

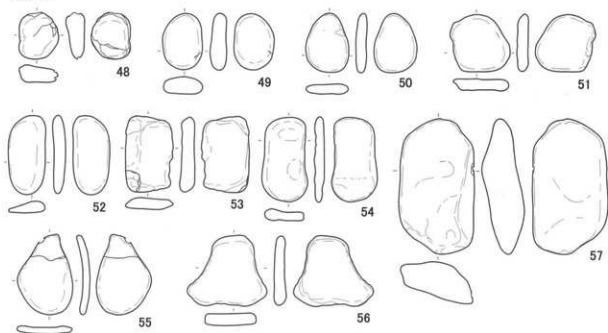


図Ⅲ-8 集中区1出土遺物(2)

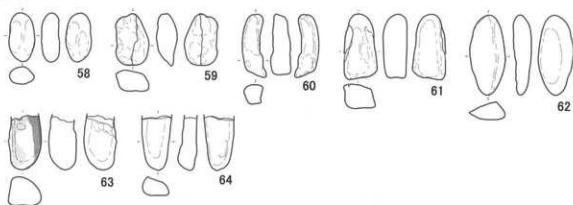


図Ⅲ-9 集中区1出土遺物(3)

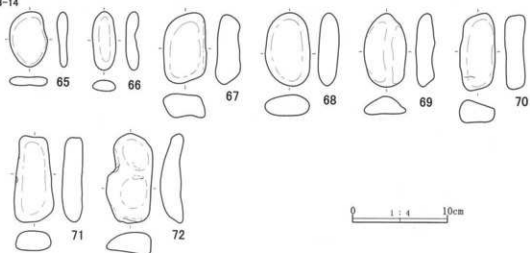
ⅢSB-02



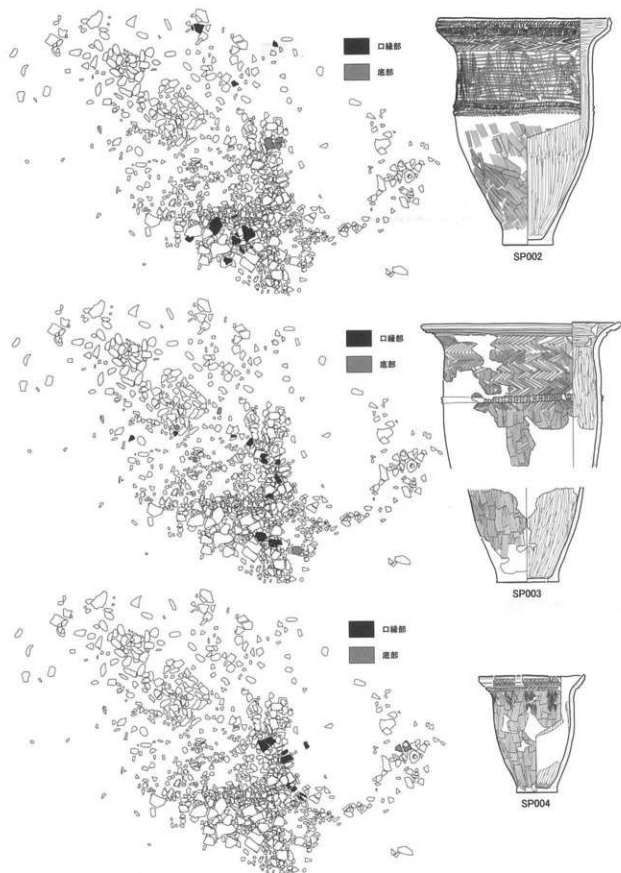
ⅢSB-06



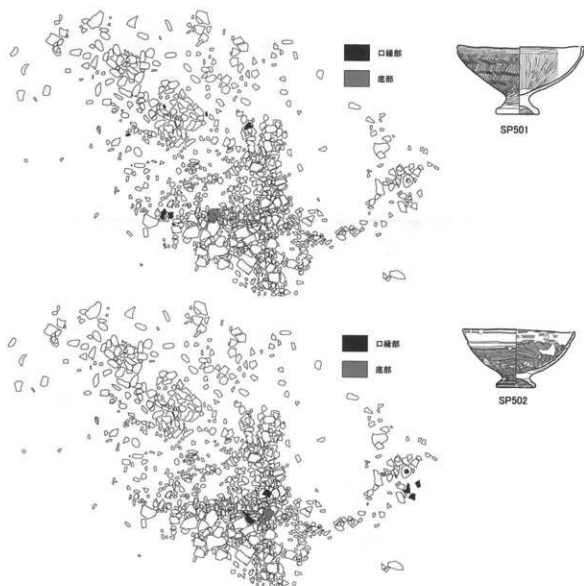
ⅢSB-14



図Ⅲ-10 集中区1出土遺物(4)



図Ⅲ-11 ⅢPB-03個体別出土位置(1)



図Ⅲ-12 ⅢPB-03個体別出土位置(2)

表Ⅲ-12 集中区1出土遺物属性表

神岡 番号	図版 番号	個体 名称	遺物 番号	遺物名	分類	層位	遺構名	グリッド	計測値(mm)			重量(g)	材質	備考
									長軸	短軸	厚さ			
Ⅲ-6	95-37	SD.159	-	炭化キビ塊	-	Ⅲbl.	ⅢCB-61	N-21	26.0	22.0	8.0	1.12	SD.	
Ⅲ-6	95-38	SD.158	-	炭化キビ塊	-	Ⅲbl.	ⅢCB-61	N-21	27.0	18.0	12.0	1.39	SD.	
Ⅲ-6	95-36	SD.156	-	炭化キビ塊	-	Ⅲbl.	ⅢCB-61	N-21	30.0	22.0	14.0	1.99	SD.	
Ⅲ-7-13	95-13	-	31834	板状土製品	-	ⅢcU	-	M-21	52.5	41.5	15.0	38.3	Cray.	
Ⅲ-8-14	95-14	3FT001	2371他	黒曜石原石	-	Ⅲbl.	ⅢPB-03	M-20	80.0	56.0	45.0	164.3	Obs.	他21点
Ⅲ-8-15	95-15	3FT002	2893 2139	黒曜石剥片	-	Ⅲbl.	ⅢPB-03	N-20	17.5	17.0	6.0	1.2	Obs.	
Ⅲ-8-16	95-16	-	2121	たたき石	I A2	Ⅲbl.	ⅢSB-02	M-20	45.0	38.0	10.8	11.5	Obs.	
Ⅲ-8-17	95-17	-	2204	たたき石	I B1	Ⅲbl.	ⅢSB-14	M-20	104.0	31.0	16.0	73.0	Mud.	
Ⅲ-8-18	95-18	3ST0034	2896他	たたき石	I B1	Ⅲbl.	ⅢF-20	M-20	106.0	51.0	32.0	220.0	Sa.	被熱
Ⅲ-8-19	95-19	3ST0051	2142他	たたき石	ⅡA1	Ⅲbl.	ⅢSB-02	N-20	155.0	102.0	40.0	678.0	Sa.	被熱 他3点
Ⅲ-8-20	95-20	-	24325	たたき石	ⅡA1	Ⅲbl.	ⅢSB-14	N-21	103.0	71.0	33.0	290.0	Sa.	
Ⅲ-8-21	95-22	-	4721	たたき石	ⅡA2	Ⅲbl.	ⅢPB-03	N-20	6.0	42.0	22.0	68.0	Sa.	被熱
Ⅲ-8-22	95-21	-	4723	たたき石	ⅡA3	Ⅲbl.	ⅢPB-03	N-20	(107.0)	(96.0)	58.0	520.0	Mud.	被熱
Ⅲ-8-23	95-23	-	24813	たたき石	ⅡA3	Ⅲbl.	ⅢSB-14	M-21	125.0	86.0	44.0	508.0	Sa.	
Ⅲ-9-24	95-24	3ST0007	24821他	自然礫	ⅡA	Ⅲbl.	ⅢSB-14	N-21	130.0	(108.0)	27.0	440.0	Sh.	被熱 他1点
Ⅲ-9-25	95-25	-	24844	溝底面のある礫	-	Ⅲbl.	ⅢSB-14	O-21	230.0	182.0	45.0	1785.0	Sa.	
Ⅲ-9-26	95-26	-	2227	大歯状礫	-	Ⅲbl.	-	N-20	41.0	18.0	9.0	5.0	Tu.	自然礫
Ⅲ-9-27	95-27	-	2228	大歯状礫	-	Ⅲbl.	-	N-20	74.0	28.0	9.0	17.0	Tu.	自然礫
Ⅲ-9-28	95-28	-	24212	帯金具	-	Ⅲbl.	-	N-21	20.0	8.0	10.0	2.1	Fe	
Ⅲ-9-29	95-29	-	24211	帯金具	-	Ⅲbl.	-	N-21	24.0	12.0	12.0	3.9	Fe	
Ⅲ-9-30	95-30	-	24213	帯金具	-	Ⅲbl.	-	N-21	27.0	11.0	21.0	2.3	Fe	
Ⅲ-9-31	95-31	-	24214	帯金具	-	Ⅲbl.	-	N-21	36.5	33.0	19.0	26.8	Fe	
Ⅲ-9-32	95-32	-	547	銅胸片	-	Ⅲbl.	ⅢPB-02	N-20	34.0	14.0	5.5	5.4	Cu	
Ⅲ-9-33	95-33	-	2431	銅胸片	-	Ⅲbl.	ⅢPB-02	N-20	36.0	16.5	1.3	9.8	Cu	
Ⅲ-9-34	95-34	-	2430	銅塊	-	Ⅲbl.	ⅢPB-02	N-20	12.0	6.0	6.0	2.7	Cu	
Ⅲ-9-35	95-35	-	2428	銅塊	-	Ⅲbl.	ⅢPB-02	N-20	13.5	9.0	7.5	4.0	Cu	

表Ⅲ-13 ⅢPB-03礫属性表

神岡 番号	図版 番号	個体 名称	遺物 番号	層位	状態	計測値(mm)						重量(g)	被熱	材質	備考		
						長軸	標準偏差	短軸	標準偏差	厚さ	標準偏差					長短比	標準偏差
-	96-40	3S0089	1997他	Ⅲbl.	完形	49.3	-9.6	38.5	4.3	31.9	10.8	1.28	-0.47	60.4	被熱	And.	他3点
Ⅲ-9-36	96-40	-	4044	Ⅲbl.	完形	46.5	-12.4	35.8	1.6	12.8	-8.3	1.29	-0.46	35.6	被熱	Sa.	
Ⅲ-9-37	96-40	-	2015	Ⅲbl.	完形	55.2	-3.7	34.7	0.5	33.3	12.2	1.59	-0.16	80.4	被熱	Sa.	
Ⅲ-9-38	96-40	3S0127	2386	Ⅲbl.	完形	55.2	-3.7	39.1	4.9	24.8	3.7	1.41	-0.34	65.4	被熱	Mud.	他2点
Ⅲ-9-39	96-40	3S0100	2094他	Ⅲbl.	完形	58.7	-0.2	38.7	4.5	17.9	-3.2	1.52	-0.23	45.9	被熱	Sa.	他2点
Ⅲ-9-40	96-40	3S0115	2490他	Ⅲbl.	完形	60.6	1.7	32.0	-2.2	22.1	1.0	1.89	0.14	40.7	被熱	Con.	他1点
Ⅲ-9-41	96-40	-	2987	Ⅲbl.	完形	63.2	4.3	37.1	2.9	16.1	-5.0	1.70	-0.05	46.9	被熱	Mud.	
Ⅲ-9-42	96-40	3S0305	2047他	Ⅲbl.	完形	68.2	9.3	36.5	2.3	31.3	10.2	1.87	0.12	85.2	被熱	Con.	他1点
Ⅲ-9-43	96-40	-	2390	Ⅲbl.	完形	78.1	19.2	37.5	3.3	22.4	1.3	2.08	0.33	83.2	被熱	Sa.	※1
Ⅲ-9-44	96-40	-	2104	Ⅲbl.	欠損	(43.3)	-	(38.1)	-	16.9	-	-	-	(38.5)	被熱	Sa.	※2
Ⅲ-9-45	96-40	-	2039	Ⅲbl.	欠損	(55.5)	-	(36.4)	-	20.7	-	-	-	(57.6)	被熱	Mud.	※2
Ⅲ-9-46	96-40	-	2061	Ⅲbl.	欠損	(55.1)	-	(39.4)	-	25.5	-	-	-	(75.5)	被熱	Mud.	※2
Ⅲ-9-47	96-40	-	2065	Ⅲbl.	欠損	(53.1)	-	(44.5)	-	21.8	-	-	-	(71.9)	被熱	Sa.	※2
完形合計						2826.9	456.8	1643.9	205.0	1014.3	202.9	84.22	13.90	2573.3			
完形平均値						58.9	9.3	34.2	4.2	21.1	4.1	1.75	0.28	53.6			
遺物総重量														5001.8			

※完形 48点

※1 結縛直?

※2 欠損後結縛直



表Ⅲ-14 ⅢSB-02礫層性表

補図 番号	図版 番号	個体 名称	遺物 番号	層位	状態	計測値(mm)						長短比 標準 偏差	重量(g)	被熱	材質	備考	
						長軸		短軸		厚さ							長短比
						標準 偏差	標準 偏差	標準 偏差	標準 偏差	標準 偏差	標準 偏差						
Ⅲ-10-48	96-39	3S0137	3072地	Ⅲbl.	完形	48.9	-53.2	41.3	-21.5	18.9	-4.9	1.18	-0.39	47.4	-	Sa.	他1点
Ⅲ-10-49	96-39	-	3043	Ⅲbl.	完形	59.3	-42.8	42.8	-20.0	18.2	-5.6	1.39	-0.18	59.3	-	Sa.	-
Ⅲ-10-50	96-39	-	2129	Ⅲbl.	完形	62.4	-56.0	29.5	-33.3	31.0	7.3	1.56	-0.01	45.4	-	Sa.	-
Ⅲ-10-51	96-39	-	2124	Ⅲbl.	完形	63.5	-38.6	60.8	-2.0	12.4	-11.4	1.04	-0.53	70.4	-	Sa.	-
Ⅲ-10-52	96-39	-	2117	Ⅲbl.	完形	83.7	-18.4	39.3	-23.5	13.3	-10.5	2.13	0.56	56.9	-	Sa.	-
Ⅲ-10-53	96-39	3S0136	3067地	Ⅲbl.	完形	80.3	-21.8	50.5	-12.3	13.8	-10.0	1.59	0.02	83.8	-	Sa.	他1点
Ⅲ-10-54	96-39	-	3057-1	Ⅲbl.	完形	89.1	-13.0	48.1	-14.7	13.4	-10.4	1.85	0.28	78.5	-	Sa.	被熱
Ⅲ-10-55	96-39	3S0102	2122地	Ⅲbl.	完形	83.7	-18.4	58.0	-4.8	10.7	-13.1	1.44	-0.13	49.7	-	Sa.	他1点
Ⅲ-10-56	96-39	-	3066	Ⅲbl.	完形	83.9	-18.2	74.4	11.6	14.8	-9.0	1.13	-0.44	106.1	-	Sa.	被熱
Ⅲ-10-57	96-39	-	3042	Ⅲbl.	完形	143.2	41.1	77.8	15.0	44.4	20.7	1.84	0.27	573.0	-	Sa.	-
完形合計						2470.6	1410.6	1519.5	681.7	569.9	373.9	48.50	11.63	14337.0			
完形平均値						102.9	58.8	63.3	28.4	23.7	15.6	2.02	0.48	597.4			
遺物総重量												38002.4					

※完形 24点

表Ⅲ-15 ⅢSB-06礫層性表

補図 番号	図版 番号	個体 名称	遺物 番号	層位	状態	計測値(mm)						長短比 標準 偏差	重量(g)	被熱	材質	備考	
						長軸		短軸		厚さ							長短比
						標準 偏差	標準 偏差	標準 偏差	標準 偏差	標準 偏差	標準 偏差						
Ⅲ-10-58	97-41	-	4199	Ⅲbl.	完形	50.9	-14.0	27.1	-3.6	19.4	-0.3	1.88	-0.23	31.3	-	Con.	-
Ⅲ-10-59	97-41	-	2908	Ⅲbl.	完形	54.5	-10.4	33.7	3.0	22.5	2.8	1.62	-0.49	52.2	-	Sa.	-
Ⅲ-10-60	97-41	-	2949	Ⅲbl.	完形	64.6	-0.3	20.3	-10.4	20.4	0.7	3.18	1.07	38.3	-	Mud.	被熱
Ⅲ-10-61	97-41	-	2952	Ⅲbl.	完形	67.5	2.6	35.0	4.3	26.6	6.9	2.28	0.17	87.4	-	Sa.	被熱
Ⅲ-10-62	97-41	-	2951	Ⅲbl.	完形	84.7	19.8	37.1	6.4	19.1	-0.6	2.28	0.17	57.7	-	Mud.	被熱
Ⅲ-10-63	97-41	-	2901	Ⅲbl.	欠損 (57.1)	-	-	(34.2)	-	30.3	-	-	-	(62.0)	-	Sa.	被熱
Ⅲ-10-64	97-41	-	2929	Ⅲbl.	欠損 (57.0)	-	-	(30.8)	-	20.3	-	-	-	(44.0)	-	Sa.	被熱
-	97-41	3S0121	2920地 2921	Ⅲbl.	完形	106.5	41.6	37.0	6.3	20.5	0.8	2.88	0.77	87.5	-	Mud.	他1点
-	97-41	3S0122	2922地	Ⅲbl.	完形	43.4	-21.5	22.7	-8.0	21.1	1.4	1.91	-0.20	18.7	-	Mud.	他1点
完形合計						778.9	204.3	368.7	74.9	236.5	35.3	25.26	5.34	650.4			
完形平均値						64.9	17.0	30.7	6.2	19.7	2.9	2.11	0.45	54.2			
遺物総重量												1937.8					

※完形 12点

表Ⅲ-16 ⅢSB-14礫層性表

補図 番号	図版 番号	個体 名称	遺物 番号	層位	状態	計測値(mm)						長短比 標準 偏差	重量(g)	被熱	材質	備考	
						長軸		短軸		厚さ							長短比
						標準 偏差	標準 偏差	標準 偏差	標準 偏差	標準 偏差	標準 偏差						
Ⅲ-10-65	97-42	-	24768	Ⅲbl.	完形	58.0	0.0	40.0	6.0	11.0	-8.2	1.45	-0.27	31.5	-	Sa.	-
Ⅲ-10-66	97-42	-	24805	Ⅲbl.	完形	61.0	3.1	25.0	-9.0	13.0	-6.2	2.44	0.72	20.1	-	Sa.	被熱
Ⅲ-10-67	97-42	-	24677	Ⅲbl.	完形	75.0	17.1	45.0	11.0	25.0	5.9	1.67	-0.05	125.9	-	Sa.	-
Ⅲ-10-68	97-42	-	24704	Ⅲbl.	完形	77.0	19.1	47.0	13.0	21.0	1.9	1.64	-0.08	107.4	-	Sa.	-
Ⅲ-10-69	97-42	-	24733	Ⅲbl.	完形	77.0	19.1	44.0	10.0	12.0	-7.2	1.75	0.03	76.8	-	Sa.	-
Ⅲ-10-70	97-42	-	24707	Ⅲbl.	完形	81.0	23.1	37.0	3.0	21.0	1.9	2.19	0.47	104.2	-	Sa.	-
Ⅲ-10-71	97-42	-	24716	Ⅲbl.	完形	91.0	33.1	42.0	8.0	22.0	2.9	2.17	0.45	119.1	-	Sa.	-
Ⅲ-10-72	97-42	-	24765	Ⅲbl.	完形	95.0	37.1	48.0	14.0	24.0	4.9	1.98	0.26	126.1	-	Sa.	-
完形合計						2202.3	845.0	1292.9	425.6	727.7	315.6	65.18	13.18	2485.6			
完形平均値						58.0	22.2	34.0	11.2	19.2	8.3	1.72	0.35	65.4			
遺物総重量												29936.6					

※完形 38点

## 集中区2 (図Ⅲ-13~18・図版 47・98~100)

位置：0-17・18区 規模：600×400cm

関連遺構：焼土 ⅢF-14・15 炭化物集中 ⅢCB-40・53 礫集中 ⅢSB-05 獣骨集中 ⅢBB-01

確認・調査：0-17区のⅢb層調査中、棒状礫で構成される礫集中(ⅢSB-05)と炭化クルミ殻の集中(ⅢCB-40)を検出した。周囲を同一面まで掘削したところ、さらに多数の銅鏡片や、鉄鏝が出土したことから、出土状態を記録し、取上げた。さらに掘削を進めたところ、被熱した獣骨集中(ⅢBB-01)と、大小規模の異なる2ヵ所の焼土(ⅢF-14・15)を確認した。また焼土から東に200cmの場所では多数の炭化キビ塊がまとめて出土した(ⅢCB-53)。これらも出土状態を記録し、獣骨集中については骨番号、炭化キビ塊については種子番号を付番した上で取上げた。取上げ後、焼土の平面・断面の記録を行い、土壌サンプルを回収し調査を終えた。

遺構配置(図Ⅲ-13)：ⅢF-14を中心とし、他の遺構・遺物がその周囲に位置している。1つの集中区として扱ったが、検出面に僅かな違いがあった。ⅢSB-05、ⅢCB-40と銅鏡片は検出面が上位にあたり、ⅢF-14・15、ⅢCB-53、ⅢBB-01は下位での検出である。若干の時間差があるかもしれない。

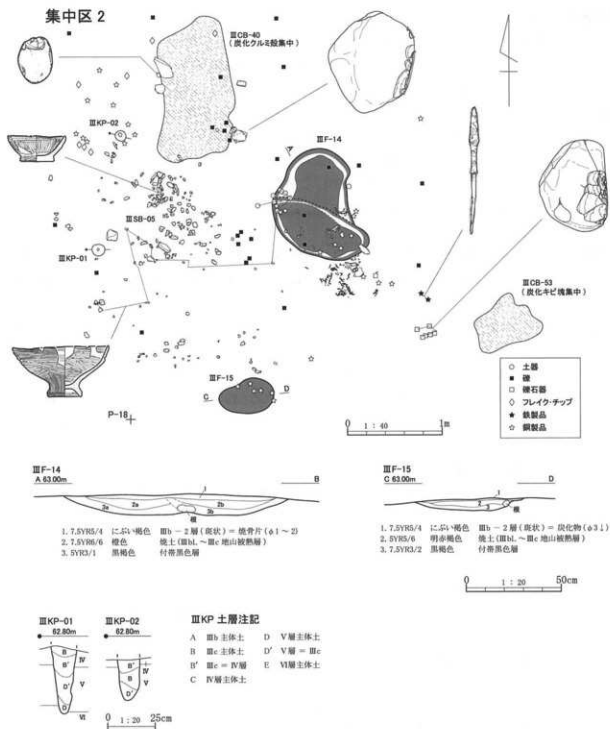
焼土(図Ⅲ-13)：ⅢF-14は長軸が112cmある焼土で、検出時1つの焼土と捉えていたが、断面観察の結果、南北2つの焼土が重なっていることが判明した。南側においてⅢBB-01起源の獣骨が焼土層(2b層)中に多く混入していたことから、ⅢBB-01は南側焼土形成以前に存在していたと考えられる。従ってⅢF-14は北側が古く、南側が新しいと考えられる。回収した土壌サンプルからはⅢBB-01に関連するシカの骨の他、魚骨も含まれていた。炭化種子では多量のキビを得ている。ⅢF-15は小規模な焼土で、上面で銅鏡が数点出土した他、土壌サンプルからは少量の魚骨とキビを得ている。

炭化物集中(図Ⅲ-13)：ⅢCB-40は炭化クルミ殻が密集して出土した炭化物集中で、大半が割れた状態であったが、完形のクルミも僅かに出土している。ⅢCB-53は炭化キビ塊の集中で、83点の塊が出土した。出土した炭化キビ塊は、長軸20mm前後の比較的丸みを帯びた形状で、平滑な面を2面以上もつものが多いことから、大きい塊が崩れてきたものではないと考えられる。表面にみえる粒の形状は集中区1出土資料と比べると不明瞭である。

礫集中(図Ⅲ-13・17)：ⅢSB-05は棒状礫を主体に構成される礫集中で、礫個体総数164点中、完形個体48点であった。大半が被熱しており、25・30・33・35には礫中央に短軸方向に並行する被熱度合いの異なる範囲がみられ、結縛痕の可能性が想定された。

獣骨集中(図Ⅲ-13・18)：ⅢBB-01はⅢF-14の南に隣接して40×25cmの範囲で出土した。出土した骨は全て被熱し、中柄の素材となるシカの中手・中足骨背面側の破片のみで構成され、刃物でスリットを入れたものもある(B.65・70・71・72・81)。遺跡内で検出した他の獣骨集中とは様相が異なる。

出土遺物(図Ⅲ-14~16)：1はVIC4a、2はVIC3の坏でいずれも内外面共にミガキ調整が施されている。3・4は黒曜石フレイクで、3は6点が接合し、4は転礫面を残す。5は黒曜石転礫で一端が打ち割られている。6~8はⅢSB-05出土遺物と同様に被熱した礫石器・礫である。6・7は不整形礫の側縁を使用したたき石で、6は砂岩、7は泥岩を素材としている。8は自然礫で、5点が接合しているが、破片間で被熱の度合いに違いが認められる。被熱度合いの異なる破片間の接合部分は剥離・磨耗による間隙が目立ち、本集中区内に持ち込まれた段階で既に割れていた可能性がある。一方、被熱度合いが同じ破片は10~15m離れた位置で出土し、接合部分に間隙をもたないことから、集中区内で被熱した後、持ち出されたと考えられる。9~13は鉄製品で、9は刀子の切先、10は残存長



図Ⅲ-13 集中区2及び関連遺構断面

表Ⅲ-17 集中区2焼土属性表

挿図番号	図版番号	遺構名	グリッド	層位	平面形	規模(cm)			灰・骨片の有無	備考
						長軸	短軸	厚さ		
III-13	47-6	III F-14A	O-17	III bl.	長楕円	112	52	10	骨	
III-13	47-6	III F-14B	O-17	III bl.	-	(58)	80	10	骨	
III-13	48-1	III F-15	O-17	III bl.	楕円形	60	40	6	-	

表Ⅲ-18 III CB-40-53属性表

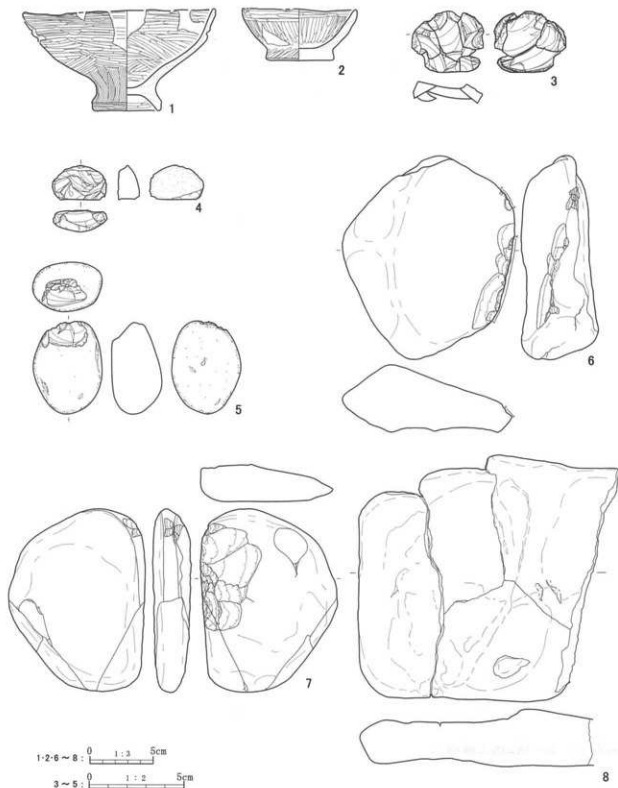
挿図番号	図版番号	遺構名	グリッド	層位	平面形	規模(cm)		備考
						長軸	短軸	
III-13	-	III CB-40	O-17	III bl.	不整形	152	86	炭化クルミ殻集中
III-13	48-5	III CB-53	O-17	III cU	不整形	68	54	炭化キビ塊集中

表Ⅲ-19 ⅢBB-01属性表

神岡 番号	図版 番号	遺構名	グリッド	層位	平面形	規模(cm)		主体部位	被熱の 有無	関連遺構	備考
						長軸	短軸				
Ⅲ-18	47-5	ⅢBB-01	O-17	Ⅲbl.	不整形	42	28	中手・中足骨 背面側	被熱	ⅢF-14	

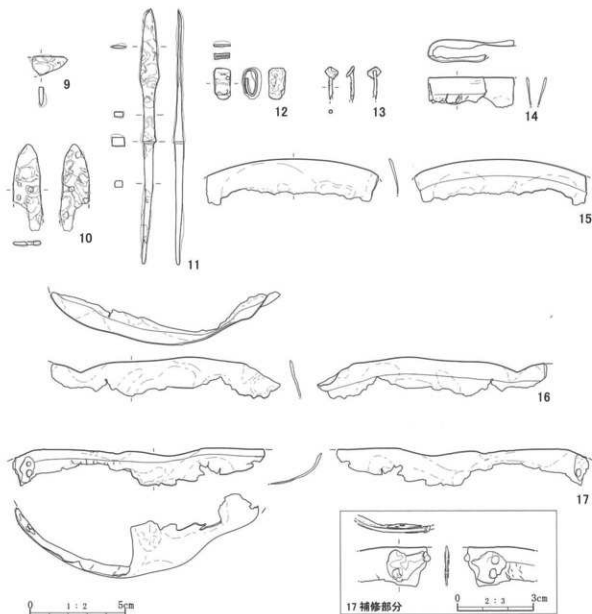
表Ⅲ-20 集中区2ⅢKP属性表

神岡 番号	図版 番号	遺構名	規模(cm)		深さ	傾き (度)	タイプ	備考
			上端	下端				
Ⅲ-13	-	ⅢKP-01	14	3	36	0.5°	打込み	
Ⅲ-13	-	ⅢKP-02	12	3	22	3°	打込み	

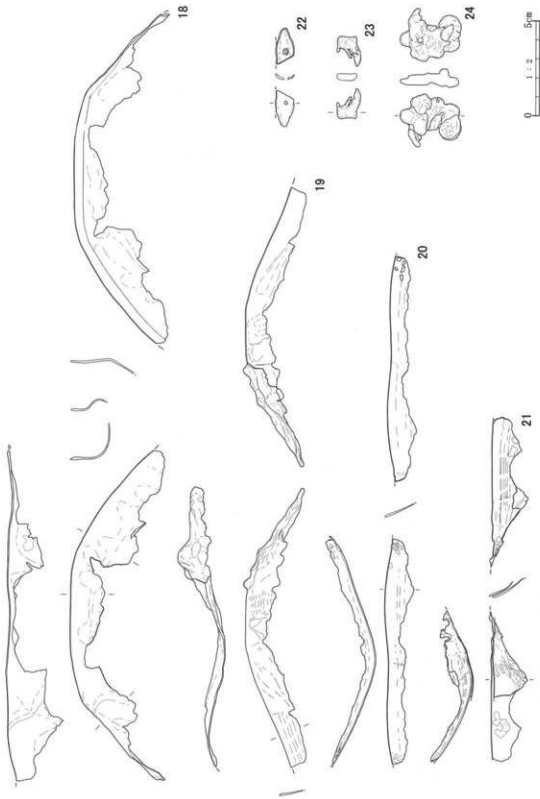


図Ⅲ-14 集中区2出土遺物(1)

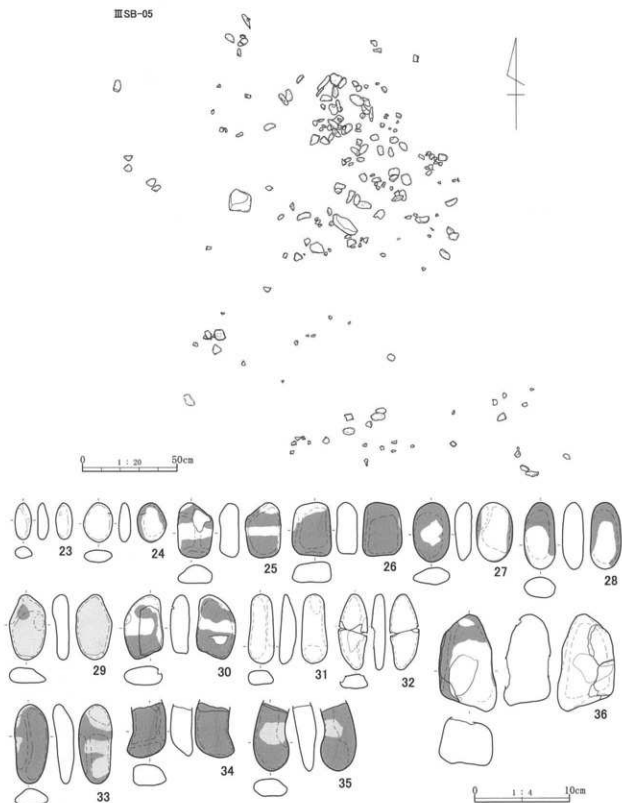
軸 46mm の板状鉄片で、中央に穿孔が認められる。銚頭をはじめとする骨角器等と組み合わせて使うタイプの鉄鏃の可能性がある。11 は約 13cm の長さの有茎鉄鏃で、柳葉形の鏃と、台状の区が形成されている。12 は帯金具、13 は鉾で、12・13 共に刀装具の一部と思われる。14~22 は銅鍔口縁部の破片で、全て被熱し変形が著しい。口縁の特徴により少なくとも 3 個体分が出土していると考えられる。1 つは内面口縁下に沈線が入るもので、このタイプはさらに口唇部から沈線までの幅が広い A タイプ(14~16)と狭い B タイプ(17-18)の 2 種類に分けられる。残る 1 つのタイプは、口縁下に沈線を伴わない C タイプであり(19~21)、このタイプには比較的明瞭なロクロ挽きの跡が認められる。こうした形態的特徴からみた個体識別の所見は、V 章 7 節の成分分析結果からも肯定できる。17 は補修の痕跡が認められ、内外両面に薄い銅板をあて、少なくとも 3 本の鉾を打ち込み補強されている。21 は 2 枚の銅鍔片が重なった状態で溶解・結合している。22 には穿孔が認められる。23・24 は銅鍔の溶解・固結によってできたと考えられる銅塊である。(小野)



図Ⅲ-15 集中区2出土遺物(2)

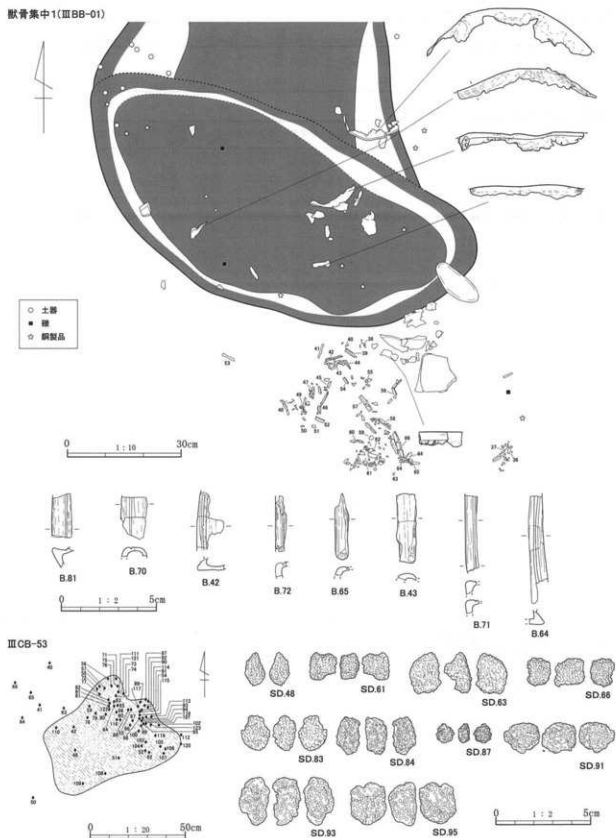


図Ⅲ-16 集中区2出土遺物(3)



図Ⅲ-17 ⅢSB-05平面図及び出土遺物(4)

獣骨集中1(ⅢBB-01)



図Ⅲ-18 獣骨集中1(ⅢBB-01)・銅鏡出土状態及びⅢCB-53と出土炭化キビ塊



表Ⅲ-21 集中区2出土土器属性表

種図番号	図版番号	遺構名	個体名称	分類	遺物番号	グリッド	層位	器種	部位	器面調整			点数	備考
										内側	外側			
Ⅲ-14-1	98-1	ⅢSB-05	SP503A	ⅣC4a	3703.4453他	O-17-18	Ⅲbl.	坪	口縁へ上部	ハケミ	ハケミ	25		
			ⅢF-14	ⅣC4a	4490.4495,4650他					ミガキ	ミガキ			
Ⅲ-14-2	98-2	ⅢSB-05	SP504A	ⅣC3	3715.3717,4552	O-17	Ⅲbl.	坪	口縁へ上部	ハケミ	ハケミ	3		

表Ⅲ-22 集中区2出土遺物属性表

種図番号	図版番号	個体名称	遺物番号	遺物名	分類	層位	遺構名	グリッド	計測値(mm)			重量(g)	材質	備考
									長軸	短軸	厚さ			
Ⅲ-14-3	98-3	3ST003	3457他	黒曜石剥片	-	Ⅲbl.	ⅢSB-05	O-18	38.0	32.0	11.0	9.7	Obs.	他5点
Ⅲ-14-4	98-4	-	4541	黒曜石剥片	-	Ⅲbl.	ⅢSB-05	O-18	28.5	18.0	11.5	6.3	Obs.	他2
Ⅲ-14-5	98-5	-	4573	黒曜石原石	-	Ⅲbl.	ⅢSB-05	O-17	49.0	37.0	27.0	52.8	Obs.	他1
Ⅲ-14-6	98-6	3ST0033	3688他	たたき石	ⅡA2	Ⅲbl.	-	O-17	144.0	108.0	30.0	720.0	Mud.	他5点
Ⅲ-14-7	98-7	-	3802	たたき石	ⅡA2	Ⅲbl.	ⅢSB-05	O-17	162.0	134.0	61.0	1160.0	Sa.	他2点
Ⅲ-14-8	98-8	3ST0017	3745	自然礫	ⅡA	Ⅲbl.	-	O-17	(259.0)	214.0	45.0	2460.0	Sa.	他2点
Ⅲ-15-9	98-10	-	3173	刀子先端	-	Ⅲal.	-	F-17	(18.0)	(11.0)	3.0	0.8	Fe	
Ⅲ-15-10	98-11	-	17216	鉄鏝?	-	Ⅲbl.	-	O-17	(46.0)	15.5	2.0	2.9	Fe	
Ⅲ-15-11	98-9	-	3400他	鉄鏝	-	Ⅲbl.	ⅢF-14	O-17	134.2	10.0	4.5	11.0	Fe	他1点
Ⅲ-15-12	98-12	-	18694	帯金具	-	Ⅲbl.	-	O-17	17.0	9.0	10.5	2.2	Fe	
Ⅲ-15-13	98-13	-	18573	鏝	-	Ⅲbl.	ⅢSB-05	O-17	(18.0)	7.5	4.0	1.8	Fe	
Ⅲ-15-14	99-17	-	4631他	銅鈎片	-	Ⅲbl.	ⅢF-14	O-17	(30.5)	(10.5)	1.2	5.1	Cu	他1点
Ⅲ-15-15	99-16	-	1991	銅鈎片	-	Ⅲbl.	-	O-17	(61.0)	(16.5)	1.2	7.9	Cu	
Ⅲ-15-16	98-15	-	4648	銅鈎片	-	Ⅲbl.	ⅢF-14	O-17	(91.0)	(15.0)	1.5	10.6	Cu	
Ⅲ-15-17	99-23	-	1977	銅鈎片	-	Ⅲbl.	-	O-17	(99.0)	(14.0)	1.2	15.5	Cu	
Ⅲ-16-18	98-14	-	1977	銅鈎片	-	Ⅲbl.	-	O-17	(116.0)	(22.0)	1.0	20.7	Cu	
Ⅲ-16-19	99-24	-	1982他	銅鈎片	-	Ⅲbl.	-	O-17	(98.0)	(19.0)	1.0	19.6	Cu	
Ⅲ-16-20	99-22	-	4565他	銅鈎片	-	Ⅲbl.	-	O-18	(79.0)	(10.5)	1.0	6.8	Cu	他2点
Ⅲ-16-21	99-19	-	4559	銅鈎片	-	Ⅲbl.	-	O-18	(79.5)	(20.0)	1.0	6.4	Cu	他2点
Ⅲ-16-22	99-20	-	4642	銅鈎片	-	Ⅲbl.	-	O-17	(14.5)	(12.0)	3.0	0.8	Cu	
Ⅲ-16-23	99-18	-	4635	銅塊	-	Ⅲbl.	ⅢF-14	O-17	11.0	8.5	3.8	1.7	Cu	
Ⅲ-16-24	99-21	-	3406	銅塊	-	Ⅲbl.	-	O-17	22.0	(19.0)	10.0	18.6	Cu	
Ⅲ-18	99-26	SD.48	-	炭化キビ塊	-	Ⅲbl.	ⅢCB-53	-	17.0	11.0	-	-	SD.	
Ⅲ-18	99-28	SD.61	-	炭化キビ塊	-	Ⅲbl.	ⅢCB-53	-	14.0	14.0	10.0	0.35	SD.	
Ⅲ-18	99-32	SD.63	-	炭化キビ塊	-	Ⅲbl.	ⅢCB-53	-	22.0	15.0	12.0	0.5	SD.	
Ⅲ-18	99-27	SD.66	-	炭化キビ塊	-	Ⅲbl.	ⅢCB-53	-	15.0	12.0	16.0	0.75	SD.	
Ⅲ-18	99-29	SD.83	-	炭化キビ塊	-	Ⅲbl.	ⅢCB-53	-	18.0	14.0	12.0	-	SD.	
Ⅲ-18	99-30	SD.84	-	炭化キビ塊	-	Ⅲbl.	ⅢCB-53	-	20.0	12.0	11.0	0.63	SD.	
Ⅲ-18	99-25	SD.87	-	炭化キビ塊	-	Ⅲbl.	ⅢCB-53	-	10.0	9.0	6.0	-	SD.	
Ⅲ-18	99-31	SD.91	-	炭化キビ塊	-	Ⅲbl.	ⅢCB-53	-	16.0	18.0	17.0	-	SD.	
Ⅲ-18	99-33	SD.93	-	炭化キビ塊	-	Ⅲbl.	ⅢCB-53	-	25.0	14.0	17.0	0.8	SD.	
Ⅲ-18	99-34	SD.95	-	炭化キビ塊	-	Ⅲbl.	ⅢCB-53	-	22.0	18.0	14.0	1.38	SD.	
Ⅲ-18	99	B.42	-	シカ骨	-	Ⅲbl.	ⅢBF-01	-	30.0	14.0	6.0	1.65	B	
Ⅲ-18	99	B.43	-	シカ骨	-	Ⅲbl.	ⅢBF-01	-	36.0	10.0	4.0	1.68	B	
Ⅲ-18	99	B.64	-	シカ骨	-	Ⅲbl.	ⅢBF-01	-	56.0	8.0	6.0	3.21	B	
Ⅲ-18	99	B.65	-	シカ骨	-	Ⅲbl.	ⅢBF-01	-	34.0	7.0	6.6	1.01	B	
Ⅲ-18	99	B.70	-	シカ骨	-	Ⅲbl.	ⅢBF-01	-	21.0	24.0	4.0	1.13	B	
Ⅲ-18	99	B.71	-	シカ骨	-	Ⅲbl.	ⅢBF-01	-	40.0	8.0	7.0	2.49	B	
Ⅲ-18	99	B.72	-	シカ骨	-	Ⅲbl.	ⅢBF-01	-	30.0	6.0	8.0	1.47	B	
Ⅲ-18	99	B.81	-	シカ骨	-	Ⅲbl.	ⅢBF-01	-	23.0	11.0	11.0	1.17	B	

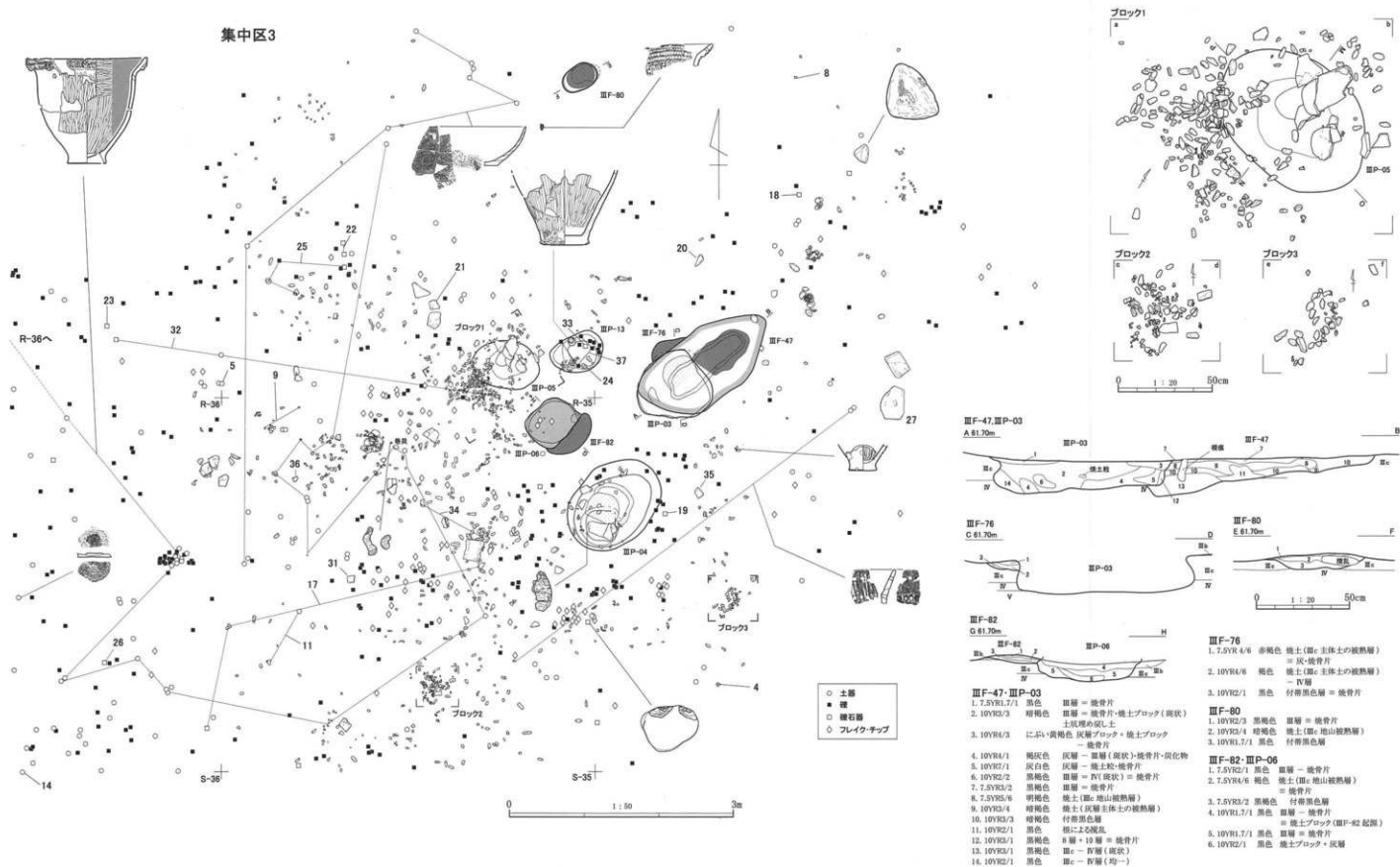
※1 原産地分析5 ※2 原産地分析6

表Ⅲ-23 ⅢSB-05燻属属性表

種図番号	図版番号	個体名称	遺物番号	層位	状態	計測値(mm)					長短比標準偏差	重量(g)	被材	材質	備考		
						長軸	標準偏差	短軸	標準偏差	厚さ						標準偏差	
Ⅲ-17-20	100-35	-	3749	Ⅲbl.	完形	38.5	-27.4	19.1	-24.0	12.9	-9.7	2.02	0.27	11.5	-	Sa.	
Ⅲ-17-21	100-35	-	3724	Ⅲbl.	完形	40.9	-25.0	33.6	-9.5	13.8	-8.8	1.22	-0.53	22.1	-	Sa.	
Ⅲ-17-22	100-35	-	4532	Ⅲbl.	完形	57.9	-8.0	37.7	-5.4	20.4	-2.2	1.54	-0.21	57.3	被熱	Sa.	
Ⅲ-17-26	100-35	-	3766	Ⅲbl.	完形	56.3	-9.6	41.4	-1.7	22.2	-0.4	1.36	-0.39	80.1	被熱	Sa.	
Ⅲ-17-27	100-35	-	4502	Ⅲbl.	完形	62.5	-3.4	38.0	-5.1	19.5	-3.1	1.64	-0.11	57.1	被熱	Sa.	
Ⅲ-17-28	100-35	-	3819	Ⅲbl.	完形	70.4	4.5	32.3	-10.8	22.4	-0.2	2.18	0.43	69.6	被熱	Sa.	
Ⅲ-17-29	100-35	-	3789	Ⅲbl.	完形	68.7	2.8	42.3	-0.8	18.5	-4.1	1.62	-0.13	64.8	被熱	Sa.	
Ⅲ-17-30	100-35	-	4530	Ⅲbl.	完形	64.6	-1.3	39.1	-4.0	20.1	-2.5	1.65	-0.10	66.4	被熱	Sa.	
Ⅲ-17-31	100-35	-	3816	Ⅲbl.	完形	73.0	7.1	27.2	-15.9	17.7	-4.9	2.68	0.93	41.3	-	Sa.	
Ⅲ-17-32	100-35	3S0238	3797他	Ⅲbl.	完形	79.8	13.9	32.6	-10.5	15.8	-6.8	2.45	0.70	45.4	被熱	Sa.	他1点
Ⅲ-17-33	100-35	-	4520	Ⅲbl.	完形	83.8	17.9	35.0	-8.1	19.4	-3.2	2.39	0.64	65.8	被熱	Sa.	他2点
Ⅲ-17-34	100-35	-	3308	Ⅲbl.	欠損	(52.8)	-	37.4	-	22.1	-	1.41	-	62.6	被熱	Sa.	
Ⅲ-17-35	100-35	-	3822	Ⅲbl.	完形	69.2	3.3	37.1	-6.0	21.8	-0.8	1.87	0.12	64.6	被熱	Sa.	他2点
Ⅲ-17-36	100-35	3S0230	4568他 4200	Ⅲbl.	完形	58.4	-7.5	35.9	-7.2	19.8	-2.8	1.63	-0.12	390.0	被熱	Sa.	他2点 他3点

完形合計						3207.3	818.3	2093.0	832.4	1115.9	311.8	83.79	14.57	8052.9			
完形平均値						66.8	17.0	43.6	17.3	23.2	6.5	1.75	0.30	167.8			
遺物総重量														9280.4			

※完形 48点



図III-19 集中区3平面図及び関連遺構断面

## 集中区3 (図Ⅲ19~25 図版49~52)

位置: Q-R-33~36区 規模: 1,200×1,100cm 平面形: 楕円形

関連遺構: 土坑 ⅢP-03・04・05・06・13 焼土 ⅢF-47・80・82 礫集中 ⅢSB-13

確認・調査: 集中区3は河岸段丘面T<sub>2</sub>の西側に位置し、約1,200×1,100cmの範囲に礫石器・礫が広がる地点である。遺構は礫集中が分布する範囲内に土坑5基、焼土4ヶ所検出している。遺物は総数で2,117点出土し、うち土器192点、剥片石器1点、礫石器26点、フレイク・チップ210点、礫1,687点、樹皮1点、巻貝2点が出土している。検出層位はⅢb層下位で、上層のアイヌ文化期の遺物は殆ど出土していない。土坑は2ヶ所において焼土の一部を掘り込み灰層の埋め戻しをしている。このような土坑は他の遺跡に報告例がなく擦文文化期の性格を知る上で貴重な発見である。礫集中内には明瞭な柱穴がなく、土坑群や焼土の周辺に礫石器が出土していることから屋外での作業空間であったと考えられる。また、遺物では「円柱づくり」の土師器や火打石、焚付け、海産の巻貝といった特殊な遺物が出土している。周辺には西側約5m地点に竪穴様遺構(ⅢX-02)を検出しているが、本集中区との時間関係は不明である。(奈良)

## 土坑・焼土

## ⅢP-03 ⅢF-47 ⅢF-76 (図Ⅲ-19 図版49-2~5 50-1)

位置: Q-34・35区

規模: ⅢP-03 98×90×20cm ⅢF-47 208×92×12cm ⅢF-76 (24)×(16)×6cm

確認・調査: ⅢSB-13を調査するにあたりⅢb層下位で焼骨片・灰層を確認した。長軸上にベルトを設定し、灰層範囲を確認した後平面形の記録を行った。断面記録はベルト部分を残した状態で一度被熱層まで掘り下げた。南西側は被熱層がなくⅢ層に灰層ブロック、焼土粒を多量に含んでいたために燃焼面の攪拌等を行っていたと想定し調査を行った。ベルト南東側の灰層ブロック・焼土粒を含むⅢ層を半掘した際、覆土下位に灰白色の灰層を確認した。断面観察により坑底面が水平であること、壁面が立ち上がることからⅢF-47を掘り込んだ土坑であると判断した。また、ⅢF-76はⅢP-03の完掘時に検出したためⅢF-47との新旧関係は不明である。

堆積状態(図Ⅲ-19): 1~6・12・14層はⅢP-03、7~11・13層がⅢF-47の土層説明である。ⅢP-03はⅢF-47の南東側を掘り込んで構築した土坑である。埋土上位の1・3層はⅢ主体に焼骨片が混入する灰及び焼土粒ブロック。2層はⅢ層主体とした灰・焼土ブロックで土坑全体に埋積し、6層もブロック状に含まれている。4・5層は灰層で、坑底面に堆積しているため土坑を掘ってからすぐに灰層を埋め戻したことがわかる。14層はオーバーハング部分の崩落で壁面に堆積している。7層は焼骨片を含む8層の地山被熱層の下位は根穴による攪乱を受ける。断面観察では被熱層に窪みなど認められていないためⅢP-03に溜まる灰・焼土粒は南西側起源であると考えられる。

遺物出土状態(図Ⅲ-19): ⅢF-47からフレイク・チップ2点、礫2点が出土し、フローテーションからチャート砕片0.19g、石英砕片0.12g、骨角器1点、漆塗染片1点回収した。動物遺存体は灰層、および土坑内部は魚中心で中でもサケ属の出土量が多い。また、焼土周辺は哺乳綱が多く出土している。図示していないが金属器の加工痕ある哺乳綱破片も出土している。炭化種子はブドウ科が多く、キハダ属、キビ、コムギ、クルマギが少量出土している(第V章第3・4節)。(奈良)

## ⅢP-04 (図Ⅲ-19-20 図版 50-2~4)

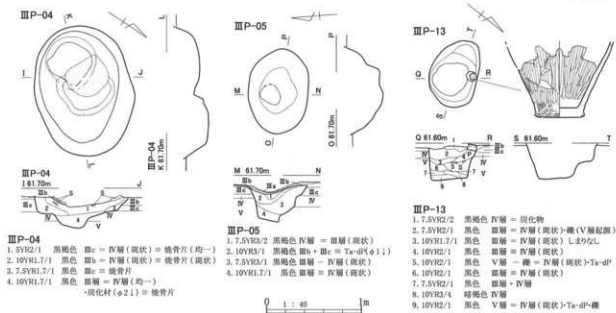
位置: R-34・35区 規模: 140×104×28cm

確認調査: ⅢSB-13を調査するにあたり板状礫が流れ込む窪みを確認した。トレンチを設定し黒色土を掘り下げると焼骨片を確認した。当初は掘り込みのある焼土を想定した調査を行ったが半截した結果、被熱層はなく土坑に堆積する覆土であった。坑底面の形状から重複の可能性あるが断面観察では認められなかった。

堆積状態 (図Ⅲ-20): 1~5層はⅢ層主体で焼骨片を均一または斑状に含んでいる。覆土は流れ込みによる堆積で、焼骨の起源は北側に位置するⅢF-47・82と考えられる。

遺物出土状態 (図Ⅲ-19): 礫石器3点、礫146点、フレイク・チップ53点、カバノキ属の樹皮1点が出土している。出土層位は殆どが覆土上位1層で出土し、樹皮は土坑覆土上位の黒色土より出土した (図版 50-4)。土坑の南西側は遺物が集中し、土坑内にはフレイク・チップが多量に流れ込んでいる。フローテーションからチップ1.02g回収した。動物遺存体は魚骨、哺乳綱が出土し、サケ属多い。炭化種子はブドウ科が多く、キビ、キハダ属、クルミが出土している (第V章第3・4節)。

(奈良)



図Ⅲ-20 集中区3関連遺構

表Ⅲ-24 集中区3土坑属性表

挿図番号	図版番号	遺構名	グリッド	層位	平面形		調査面規模(cm)		坑底面規模(cm)		長さ方向	調査面長短比	坑底面長短比	出土遺物	備考	
					調査面/坑底面	形状	長軸	短軸	長軸	短軸						
Ⅲ-19	49-3-4	ⅢP-03	Q-R-34	ⅢbL	不整形円形/不整形円形		98	90	92	88	20	N-57° E	1.08	1.04	-	
Ⅲ-19	50-2	ⅢP-04	R-34-35	ⅢbL	不整形円形/不整形円形		140	104	116	80	28	N-50° E	1.34	1.45	-	
Ⅲ-19	50-5-7	ⅢP-05	Q-35	ⅢbL	楕円形/円形		88	64	22	22	36	N-85° W	1.37	1.00	-	
Ⅲ-19	51-1-2	ⅢP-06	R-35	ⅢbL	楕円形/楕円形		70	52	64	48	8	N-45° E	1.34	1.33	-	
Ⅲ-19	51-4-6	ⅢP-13	Q-34-35	ⅢbL	楕円形/円形		76	52	36	36	34	N-71° E	1.46	1.00	-	

## ⅢP-05 (図Ⅲ-19, 20 図版 50-5~7)

位置: Q-35区 規模: 88×64×36cm

確認・調査: ⅢSB-13を調査するにあたりQ-35区の窪みに礫が流れ込んでいるのを確認した。(図版50-5) 調査はⅢP-05の上位に出土するⅢSB-13の微細図をとった後、窪みの短軸にベルトを設定して半掘した。西側半分の観察では底面に段差があり覆土に締まりがないことから木根などと考え、調査を先送りしていた。しかし、周辺の土坑形態から本遺構は土坑であると判断し、調査を行った。

堆積状態(図Ⅲ-20): 1層はⅣ層主体。2~4層はⅢ層主体でⅣ層および少量のTa-dPが含まれる。2層Ta-dPの起源はⅤ層に含まれるもので、掘り上げ土の再流入と考えられる。

遺物出土状態(図Ⅲ-19): ⅢSB-13の礫が覆土上位および壁面に流れ込む形で出土している。土坑南西側は棒状礫が主体を占め(①ブロック)、北東側は28×14×27cmの板状礫をはじめ大型の礫が多く出土する。(奈良)

## ⅢP-06 ⅢF-82 (図Ⅲ-19 図版 51-1~3)

位置: R-35区 規模: ⅢP-06 70×52×8cm ⅢF-82 90×(24)×8cm

確認・調査: Ⅲb層上位で焼骨片を少量伴う焼土を確認した。焼土北西側には焼土ブロック・焼骨片が斑状に分布しており、ⅢP-03・ⅢF-47のように焼土を掘り込んだ土坑を想定して調査を行った。焼土短軸方向にトレンチを設定し、焼土を半載したところ北西側に焼土粒を含む楕円形プランを確認した。焼土粒プランを半掘すると、坑底面はほぼ水平で立ち上がりが明瞭であった。土坑はⅢP-03のように焼土を切る形で構築している。

堆積状態(図Ⅲ-19): 1~3層はⅢP-06、4~6層はⅢF-82の土層説明である。1はⅢ層主体に焼骨片・焼土ブロックを多量に含む。2は焼骨片主体で、焼土側にややオーバークラッピングしている。3は焼土ブロックと灰の集積である。覆土は全て埋め戻しによるもので、燃焼面の「掘り返し」等を行っていたと考えられる。ⅢF-82は4が焼骨片を少量含む、5は地山被熱層、6は付帯黒色土で焼土は北西側をⅢP-06に切られる。

遺物出土状態(図Ⅲ-19): 遺物は土坑覆土から礫12点、フローテーションからチップ0.18g出土している。動物遺存体は魚骨中心でサケ属が多く出土し、炭化種子はキビ・ブドウ科が少量出土している。(第Ⅴ章第3・4節)。(奈良)

## ⅢP-13 (図Ⅲ-19 図版 51-5・6)

位置: Q-34・35区 規模: 76×52×34cm

確認・調査: Q-35区のⅢb層上位で擦文甕底部が出土した。土器にかかるようセクションラインを設定し掘り下げた結果Ⅲc層上位で黒褐色プランを確認した。土器の出土状態から土坑を想定し、半掘して断面を観察した。セクション記録後に残り半分を完掘して写真・平面形の範囲記録を行い調査終了とした。

堆積状態(図Ⅲ-20): 1はⅣ層主体で炭化物を含み、2~4層はⅢ層主体でⅣ層を斑状に含む。5層はⅤ層起源で礫を多く含む。礫はⅤ層に見られる段丘堆積物である。6・7層はⅢ層主体でⅣ層を含み、8層はⅣ層主体、9層はⅤ層主体にⅣ層、Ta-dP、礫を含む。いずれも自然堆積である。

遺物出土状態 (図Ⅲ-19) : 覆土上位に擦文土器底部を検出した。出土状態から埋設土器が予想され、断面を残して掘り下げたところ甕胴部下半1/3が残存していた。同一面には礫石器1点出土している。自然堆積であるため土器は土坑が埋まりきらないうちに流れ込んだものと考えられる。

(奈良)

## ⅢF-80 (図Ⅲ-19 図版51-7・8)

位置: Q-34・35区 規模: 50×32×8 cm

確認・調査: ⅢSB-13の調査中Ⅲb層下位で焼骨片を伴う焼土を確認した。長軸上にセクションを設定し、フローテーション法による微細遺物回収のためのサンプル採取を行いながら半截してセクションの記録をとった。その後残りの焼骨片サンプルを回収し調査終了とした。

堆積状態: 1層は焼骨片を含むⅢ層、2層は地山被熱層、3層は付帯黒色土である。1・2層ともに薄く南西側は攪乱を受ける。

遺物出土状態 (図Ⅲ-19) : 周辺にはⅢSB-13の礫が分布している。動物遺存体は哺乳綱のみ多量に出土している。

(奈良)

## ⅢSB-13 (図Ⅲ-19 図版49-1)

位置: Q-R-33~36区 規模: 1,200×1,100cm

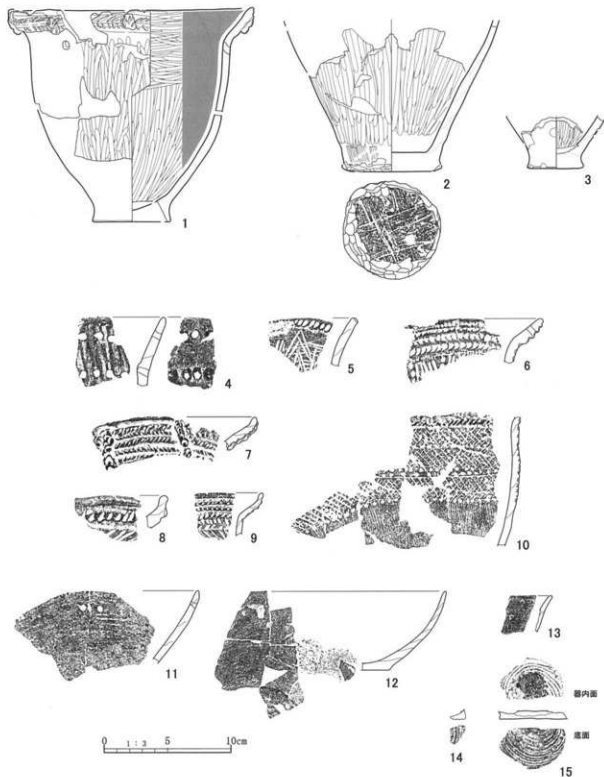
確認・調査: Q-R-33~36区を調査するにあたり礫石器・礫・フレイク・チップが4グリッドにわたり煩雑に分布していた。礫の総重量84872.1g、完形礫347点で、礫集中の中でもより密集している地点を①~③ブロックとして個別に掲載した。完形礫は①120点②16点③4点でブロック別の標準偏差の計測したところ、長軸①13.7②10.5③10.7で特に長さが不揃いである。調査はⅢb層まで掘り下げ遺物の広がりを確認した。結果、遺物がより集中する地点にはⅢP-03~06・13、ⅢF-47・76・82の遺構が検出され関連あるものと捉えて調査を進めた。礫石器・礫は基本的に微細図を記録し、土坑・焼土に絡む遺物は各遺構調査終了後に取り上げを行い調査終了とした。調査終了した後、Ⅲc層上面からジョレンによる柱穴確認を行ったが明瞭な柱穴は検出していない。

(奈良)

出土遺物 (図Ⅲ21~25) : 1はⅢSB-13の西側を中心にまとまって出土したⅧB3eの甕である。口縁部文様帯に刻文と数ヶ所に粘土溜が施され補修口が穿孔される。胴部から下半は無文である。2・3はⅧBの甕底部で、2はⅢP-13覆土上位より出土し内面黒色処理を施している。出土状態が倒立した状態であったためか底部縁辺は剝離されている。4はⅧAの北大Ⅲ式相当の土器で口縁部に2段の円形刺突列が施される。5はⅧB2a、7・8はⅧB3、6・9・10はⅧB3cの口縁部で10は同部上半に円形刺突列を2段施している。11、12はⅧC3の杯である。口縁部・口縁部~台部で12は内側黒色処理を施している。13~15はⅧE3bの土師器杯である。13は口唇部、14・15は台部で色調は橙色を呈している (巻頭カラー4-4)。15はロクロ成形による糸切り跡が底面と器内面側の破断面の両面に確認できる。これは「円柱づくり」と呼ばれ、坯を大量生産する際にしばしば見られる技法である。製作工

表Ⅲ-25 集中区3焼土属性表

挿図番号	図版番号	遺構名	グリッド	層位	平面形	規模 (cm)			灰・骨片の有無	備考
						長軸	短軸	厚さ		
Ⅲ-19	49-3	ⅢF-47	Q-R-34	ⅢbL	長槽円形	208	92	12	骨片	ⅢP-03に切られる
Ⅲ-19	50-1	ⅢF-76	Q-34	ⅢbL	-	(24)	(16)	6	灰・骨片	ⅢP-03に切られる
Ⅲ-19	51-7	ⅢF-80	Q-34・35	ⅢbL	-	50	32	8	骨片	
Ⅲ-19	50・8.51・3	ⅢF-82	R-35	ⅢbL	楕円形	90	(24)	8	骨片	ⅢP-06に切られる

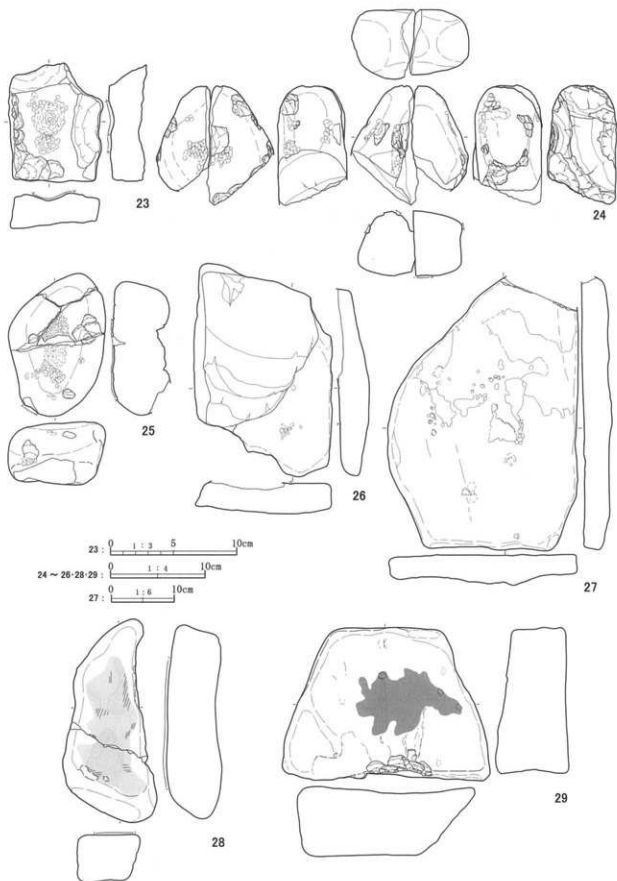


図Ⅲ-21 集中区3出土遺物(1)

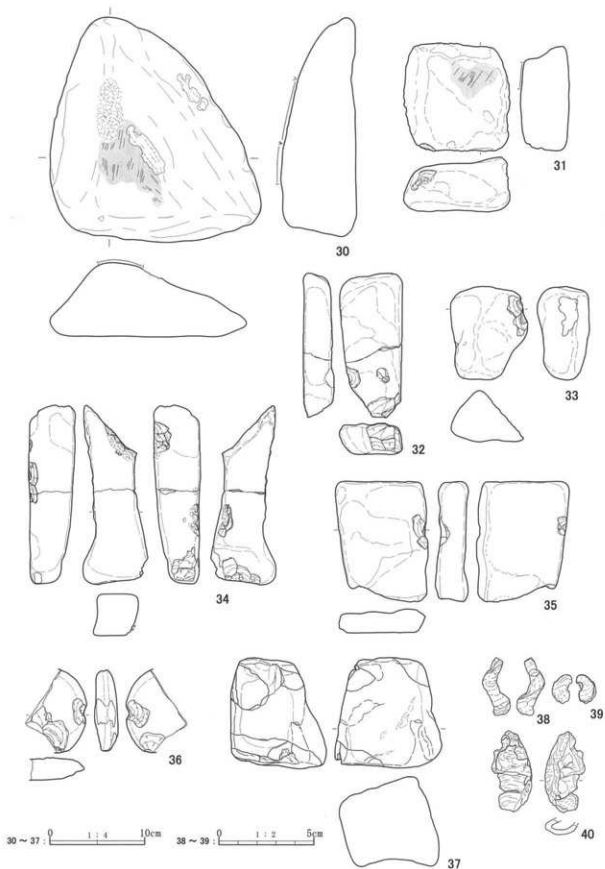


图Ⅲ-22 集中区3出土遺物(2)

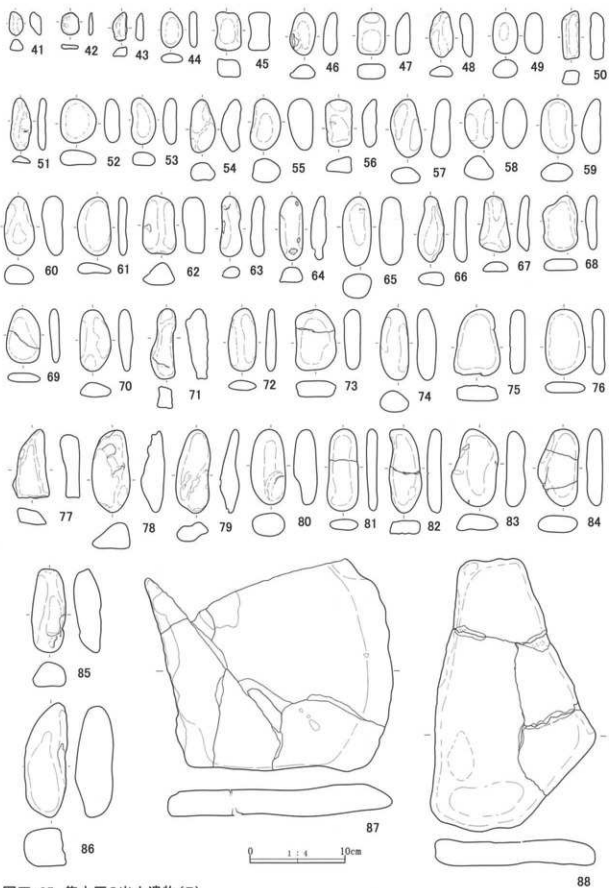




図Ⅲ-23 集中区3出土遺物(3)



図Ⅲ-24 集中区3出土遺物(4)



図Ⅲ-25 集中区3出土遺物(5)

表Ⅲ-26 集中区3出土土器属性表

神岡 番号	図版 番号	遺構名	個体 名称	分類	遺物番号	グリッド	層位	器種	部位	器面調整		点数	備考
										内側	外側		
Ⅲ-21-1	101-1	ⅢSB-13	SP086A	ⅤB3c	39966	Q-35	Ⅲbl.	甕	口縁～ 底部	ハナ シキ	ハナメ シキ	1	
					25333他	R-35	Ⅲbl.					18	
					27230,27245他	R-36	Ⅲbl.					10	
					27559	Q-37	Ⅲbl.					1	
					29913,29914	R-35	Ⅲbl.					2	
			23000,24638他	R-36	Ⅲbl.	4							
Ⅲ-21-2	101-2	ⅢSB-13	SP089A	ⅤB3	24626-24628他	Q-36	Ⅲbl.	甕	底部	ハナメ シキ	ハナメ シキ	5	底部縁 辺剥離
					27347	Q-35	Ⅲbl.					1	
					34290	Q-35	Ⅲ					1	
Ⅲ-21-3	101-3	ⅢSB-13	SP069A	ⅤB3	28202,29350,30599他	R-34	Ⅲbl.	甕	底部	シキ	ナナ	4	
Ⅲ-21-4	101-4	-	SP087	ⅤA	22975,25325	R-34	Ⅲbl.	甕	口縁	ナナ	シキ	2	摩滅強
Ⅲ-21-5	101-5	ⅢSB-13	SP032A	ⅤB2a	27384,27385	Q-35	Ⅲbl.	甕	口縁	シキ	ナナ	2	
Ⅲ-21-6	101-6	ⅢSB-13	SP030A	ⅤB3c	27287,27288	Q-35	Ⅲbl.	甕	口縁	シキ	ナナ	2	
Ⅲ-21-7	101-7	ⅢSB-13	SP026	ⅤB3	27356	R-35	Ⅲbl.	甕	口縁	シキ	ナナ	1	
					30214,30215	Q-36	Ⅲbl.					2	
Ⅲ-21-8	101-8	ⅢSB-13	SP034A	ⅤB3	25329	R-35	Ⅲbl.	甕	口縁	シキ	ナナ	1	
Ⅲ-21-9	101-9	ⅢSB-13	SP046A	ⅤB3c	27486	Q-34	Ⅲbl.	甕	口縁	シキ	ナナ	1	
Ⅲ-21-10	101-10	ⅢSB-13	SP054A	ⅤB3c	27122-27126他	R-35	Ⅲbl.	甕	胴部	シキ	ハナメ	10	
Ⅲ-21-11	101-11	ⅢSB-13	SP039B	ⅤB3	25331,28361	R-35	Ⅲbl.	甕	口縁	ハナメ シキ	ハナメ シキ	2	
Ⅲ-21-12	101-12	ⅢSB-13	SP033A	ⅤB3	27279他	Q-35	Ⅲbl.	甕	口縁～ 上部	シキ	ハナメ ナナ	6	
					30027,30071	Q-35	Ⅲbl.					2	
Ⅲ-21-13	101-13	-	SP031B	ⅤB3b	30495	R-36	Ⅲbl.	甕	口縁	シキ	ナナナナ	1	
Ⅲ-21-14	101-14	-	SP031E	ⅤB3b	30203	S-36	Ⅲbl.	甕	台部			1	
Ⅲ-21-15	101-16	-	SP031C	ⅤB3b	27524	R-36	Ⅲbl.	甕	台部	ナナ	ナナナナ	1	円柱造

表Ⅲ-27 集中区3出土遺物属性表

神岡 番号	図版 番号	個体 名称	遺物 番号	遺物名	分類	層位	遺構名	グリッド	計測値(mm)			重量(g)	材質	備考
									長軸	短軸	厚さ			
Ⅲ-22-16	101-17	-	28262	火打石	-	Ⅲbl.	ⅢSB-13	R-34	93.0	74.5	26.5	234.0	Qu-Sch.	
Ⅲ-22-17	101-18	3ST0015	25300	たたく石	I A1	Ⅲbl.	ⅢSB-13	R-35	(156.0)	75.0	41.0	590.0	Sa.	
Ⅲ-22-18	101-19	3ST0026	23382他	たたく石	I A3	Ⅲbl.	ⅢSB-13	Q-33	164.0	65.0	33.0	410.0	Sa.	被熱 地1点
Ⅲ-22-19	101-20	-	29484	たたく石	I B2	Ⅲbl.	ⅢSB-13	R-34	(118.0)	54.0	34.0	220.0	Sa.	
Ⅲ-22-20	101-21	-	28244	たたく石	II A2	Ⅲbl.	ⅢSB-13	Q-34	173.0	78.0	53.0	780.0	Con.	被熱
Ⅲ-22-21	101-22	-	27304	たたく石	II A2	Ⅲbl.	ⅢSB-13	R-35	164.0	143.0	62.0	1572.0	Sa.	
Ⅲ-22-22	101-23	3ST0025	30072他	たたく石	ⅢA2	Ⅲbl.	-	Q-35	136.0	92.0	20.0	288.0	Sa.	地1点
Ⅲ-23-24	102-25	3ST0029	27334	たたく石	ⅢB2	Ⅲbl.	ⅢSB-13	Q-35	(126.0)	(123.0)	68.0	1140.0	Sa.	被熱 地1点
Ⅲ-23-25	102-26	3ST0049	27175他	台石	-	Ⅲbl.	ⅢSB-13	Q-35	154.0	102.0	61.0	1010.0	Sa.	被熱 地5点
Ⅲ-23-26	102-27	-	27221	台石	-	Ⅲbl.	ⅢF-46	R-35	248.0	167.0	33.0	1356.0	Sa.	
Ⅲ-23-27	102-28	-	27449	台石	-	Ⅲbl.	ⅢSB-13	R-34	436.0	335.0	46.0	8040.0	Sa.	
Ⅲ-23-28	102-29	3ST0024	29888他	滑沢面のある礎	-	Ⅲbl.	-	O-35	215.0	99.0	58.0	678.0	Sa.	地1点
Ⅲ-23-29	102-31	-	27492	加工痕のある礎	-	Ⅲbl.	ⅢSB-13	R-35	224.0	220.0	77.0	3090.0	And.	被熱
Ⅲ-23-30	102-30	-	27483	滑沢面と敲打 痕のある大型礎	II	Ⅲbl.	ⅢSB-13	R-34	271.0	206.0	80.0	4540.0	Con.	
Ⅲ-23-31	102-32	-	27148	滑沢面のある礎	-	Ⅲbl.	ⅢSB-13	R-35	141.0	128.0	56.0	1060.0	Con.	
Ⅲ-23-32	102-35	3ST0013	27807他	加工痕のある礎	-	Ⅲbl.	ⅢSB-13	R-35	151.0	66.0	32.0	460.0	Sa.	地1点
Ⅲ-23-33	102-33	-	34679	加工痕のある礎	-	Ⅲbl.	ⅢP-13	Q-35	98.0	(81.0)	55.0	484.0	Gra.	
Ⅲ-23-34	102-34	3ST0014	25378他	たたく石	I B2	Ⅲbl.	-	R-35	188.0	68.0	48.0	699.0	Sa.	地1点
Ⅲ-23-35	102-36	-	27441	加工痕のある礎	-	Ⅲbl.	ⅢSB-13	R-34	150.0	124.0	34.0	579.0	Sa.	
Ⅲ-23-36	102-37	-	27090	加工痕のある礎	-	Ⅲbl.	ⅢSB-13	R-35	(87.0)	(64.0)	24.0	120.0	Sa.	
Ⅲ-23-37	102-38	3S0886	27341他	自然礎	II B	Ⅲbl.	ⅢSB-13	Q-35	135.0	128.0	94.0	1949.0	Sa.	被熱 地5点
Ⅲ-23-38	102-40	-	27574-1	巻貝A	-	Ⅲbl.	ⅢSB-13	R-35	(9.0)	-	-	2.0	Shell.	奈
Ⅲ-23-39	102-41	-	27574-2	巻貝B	-	Ⅲbl.	ⅢSB-13	R-35	(3.1)	-	-	0.3	Shell.	奈
Ⅲ-23-40	102-42	-	27574	樹皮	-	Ⅲbl.	ⅢSB-13	R-35	32.0	9.0	13.0	1.6	Cw.	焚付

※ 薄底 同一個体

表Ⅲ-28 ⅢSB-13①ブロック礫属性表

挿入 番号	図版 番号	個体 名称	遺物 番号	層位	状態	計測値(mm)					長短比 標準 偏差	重量(g)	被熱	材質	備考		
						長軸	標準 偏差	短軸	標準 偏差	厚さ						標準 偏差	
Ⅲ-25-41	103-39	-	28408	Ⅲbl.	完形	25.0	-37.3	15.0	-18.1	12.0	-5.5	1.67	-0.24	4.4	-	Sa.	
Ⅲ-25-42	103-39	-	27771	Ⅲbl.	完形	30.0	-32.3	15.0	-18.1	13.0	-4.5	2.00	0.09	4.7	-	Mud.	
Ⅲ-25-44	103-39	-	28300	Ⅲbl.	完形	38.0	-24.3	23.0	-10.1	8.0	-9.5	1.65	-0.26	11.9	-	Sa.	
Ⅲ-25-45	103-39	-	28139	Ⅲbl.	完形	41.0	-21.3	28.0	-5.1	23.0	5.5	1.46	-0.45	39.1	-	Sa.	
Ⅲ-25-46	103-39	-	27819	Ⅲbl.	完形	45.0	-17.3	28.0	-5.1	15.0	-2.5	1.61	-0.30	19.4	-	Sa.	
Ⅲ-25-47	103-39	-	27796	Ⅲbl.	完形	44.0	-18.3	30.0	-3.1	11.0	-6.5	1.47	-0.44	31.8	-	Mud.	
Ⅲ-25-48	103-39	-	25439	Ⅲbl.	完形	48.0	-14.3	25.0	-8.1	14.0	-3.5	1.92	0.02	17.8	-	Sa.	
Ⅲ-25-49	103-39	-	27499	Ⅲbl.	完形	43.0	-19.3	27.0	-6.1	19.0	1.5	1.59	-0.32	28.7	-	Sa.	
Ⅲ-25-51	103-39	-	30585	Ⅲbl.	完形	56.0	-6.3	22.0	-11.1	9.0	-8.5	2.55	0.64	10.1	-	Sa.	
Ⅲ-25-52	103-39	-	27710	Ⅲbl.	完形	46.0	-16.3	38.0	4.9	16.0	-1.5	1.21	-0.70	38.3	-	Sa.	
Ⅲ-25-53	103-39	-	28403	Ⅲbl.	完形	50.0	-12.3	26.0	-7.1	14.0	-3.5	1.92	0.01	24.6	-	Sa.	
Ⅲ-25-55	103-39	-	27631	Ⅲbl.	完形	55.0	-7.3	32.0	-1.1	27.0	9.5	1.72	-0.19	52.9	-	Sa.	
Ⅲ-25-56	103-39	-	27739	Ⅲbl.	完形	50.0	-12.3	28.0	-5.1	15.0	-2.5	1.79	-0.12	33.7	-	Sa.	
Ⅲ-25-58	103-39	-	27811	Ⅲbl.	完形	52.0	-10.3	31.0	-2.1	25.0	7.5	1.68	-0.23	45.1	-	Sa.	
Ⅲ-25-59	103-39	-	27768	Ⅲbl.	完形	58.0	-4.3	36.0	2.9	20.0	2.5	1.61	-0.30	50.1	-	Sa.	
Ⅲ-25-60	103-39	-	28170	Ⅲbl.	完形	63.0	0.7	32.0	-1.1	22.0	4.5	1.97	0.06	46.1	-	Sa.	
Ⅲ-25-61	103-39	-	28321	Ⅲbl.	完形	62.0	-0.3	36.0	2.9	9.0	-8.5	1.72	-0.19	30.3	被熱	Sa.	
Ⅲ-25-62	103-39	-	27633	Ⅲbl.	完形	62.0	-0.2	35.0	1.9	24.0	6.5	1.77	-0.14	62.1	-	Sa.	
Ⅲ-25-63	103-39	-	27495	Ⅲbl.	完形	64.0	1.7	24.0	-9.1	15.0	-2.5	2.67	0.76	19.1	-	Tu.	
Ⅲ-25-64	103-39	-	27731	Ⅲbl.	完形	68.0	5.7	25.0	-8.1	16.0	-1.5	2.72	0.81	32.0	被熱	Sa.	
Ⅲ-25-65	103-39	-	27651	Ⅲbl.	完形	73.0	10.7	31.0	-2.1	25.0	7.5	2.35	0.44	74.1	被熱	Sa.	
Ⅲ-25-66	103-39	-	26979	Ⅲbl.	完形	70.0	7.7	28.0	-5.1	14.0	-3.5	2.50	0.59	35.4	-	Sa.	
Ⅲ-25-67	103-39	3S0832	28304	Ⅲbl.	完形	60.0	-2.3	33.0	-0.1	13.0	-4.5	1.82	-0.09	26.5	-	Mud.	
Ⅲ-25-68	103-39	-	28159	Ⅲbl.	完形	59.0	-3.3	38.0	4.9	13.0	-4.5	1.55	-0.36	37.1	-	Mud.	
Ⅲ-25-70	103-39	-	27708	Ⅲbl.	完形	66.0	3.7	33.0	-0.1	15.0	-2.5	2.00	0.09	33.4	-	Sa.	
Ⅲ-25-71	103-39	-	28162	Ⅲbl.	完形	74.5	12.2	27.0	-6.1	24.0	6.5	2.76	0.85	49.0	-	Sa.	
Ⅲ-25-72	103-39	-	28136	Ⅲbl.	完形	66.0	3.7	30.0	-3.1	11.0	-6.5	2.20	0.29	22.9	-	Tu.	
Ⅲ-25-73	103-39	3S0788	26969他	Ⅲbl.	完形	65.0	2.7	44.0	10.9	18.0	0.5	1.48	-0.43	76.6	被熱	Sa.	他3点
Ⅲ-25-74	103-39	-	27635	Ⅲbl.	完形	75.0	12.7	30.0	-3.1	20.0	2.5	2.50	0.59	56.7	被熱	Sa.	
Ⅲ-25-75	103-39	-	27498	Ⅲbl.	完形	70.0	7.7	49.0	15.9	16.0	-1.5	1.43	-0.48	79.1	-	Sa.	
Ⅲ-25-76	103-39	-	25440	Ⅲbl.	完形	69.0	6.7	48.0	14.9	13.0	-4.5	1.44	-0.47	52.8	-	Sa.	
Ⅲ-25-77	103-39	-	28148	Ⅲbl.	完形	73.0	10.7	39.0	5.9	20.0	2.5	1.87	-0.04	52.9	-	Sa.	
Ⅲ-25-78	103-39	-	27678	Ⅲbl.	完形	87.0	24.7	40.0	6.9	25.0	7.5	2.18	0.27	97.7	-	Sa.	
Ⅲ-25-79	103-39	-	25408	Ⅲbl.	完形	89.0	26.7	36.0	2.9	20.0	2.5	2.47	0.56	54.3	-	Mud.	
Ⅲ-25-80	103-39	-	27641	Ⅲbl.	完形	80.0	17.7	36.0	2.9	24.0	6.5	2.22	0.31	83.0	被熱	Sa.	
Ⅲ-25-81	103-39	3S0673	27719他	Ⅲbl.	完形	87.0	24.7	34.0	0.9	12.0	-5.5	2.55	0.64	45.1	-	Mud.	他1点
Ⅲ-25-82	103-39	3S0660	28188他	Ⅲbl.	完形	88.5	26.2	34.0	0.9	15.0	-2.5	2.60	0.69	62.6	-	Sa.	他1点
Ⅲ-25-83	103-39	-	25409	Ⅲbl.	完形	83.0	20.7	50.0	16.9	21.0	3.5	1.04	-0.87	94.7	被熱	Sa.	
Ⅲ-25-85	103-39	-	25436	Ⅲbl.	完形	89.0	26.7	36.0	2.9	30.0	12.5	2.47	0.56	114.7	-	Sa.	
Ⅲ-25-86	103-39	-	28328	Ⅲbl.	完形	121.0	58.7	45.0	11.9	40.0	22.5	2.69	0.78	270.0	被熱	Sa.	
Ⅲ-25-87	-	3S0819	27661他	Ⅲbl.	欠損	(230.0)	-	263.0	-	34.0	-	-	-	2320.0	-	Sa.	他6点
Ⅲ-25-88	103-39	3S0694	27673他	Ⅲbl.	完形	280.4	218.1	170.4	137.3	27.0	9.5	1.65	-0.26	1660.0	被熱	Sa.	他3点

完形合計 7476.1 1644.7 3977.5 827.7 2096.3 283.0 229.28 43.38 7097.6

完形平均値 62.3 13.7 33.1 6.9 17.5 2.4 1.91 0.4 59.1

遺物総重量 9843.1

※完形 120点

表Ⅲ-29 ⅢSB-13②ブロック礫属性表

挿入 番号	図版 番号	個体 名称	遺物 番号	層位	状態	計測値(mm)					長短比 標準 偏差	重量(g)	被熱	材質	備考		
						長軸	標準 偏差	短軸	標準 偏差	厚さ						標準 偏差	
Ⅲ-25-12	103-39	-	25103	Ⅲbl.	完形	24.0	-26.2	19.0	-7.5	4.0	-10.9	1.26	-0.66	2.4	-	Mud.	
Ⅲ-25-16	103-39	-	25063	Ⅲbl.	完形	52.0	1.8	19.0	-7.5	15.0	0.1	2.74	0.82	17.9	-	Tu.	
Ⅲ-25-54	103-39	-	25060	Ⅲbl.	完形	56.0	5.8	26.0	-0.5	26.0	11.1	2.15	0.23	33.8	-	Mud.	
Ⅲ-25-57	103-39	-	25157	Ⅲbl.	完形	62.0	11.8	33.0	6.5	20.0	5.1	1.88	-0.04	41.4	-	Sa.	
Ⅲ-25-84	103-39	3S0702	25137他	Ⅲbl.	完形	81.0	30.8	44.0	17.5	12.0	-2.9	1.84	-0.08	78.6	被熱	Sa.	他2点

完形合計 823.6 168.4 435.7 97.7 235.6 63.4 30.72 3.82 188.1

完形平均値 51.5 10.5 27.2 6.1 14.7 4.0 1.92 0.2 28.4

遺物総重量 1373.1

程はまず、坯を糸切りで円柱から切り離す。次に粘土をのせて坯を製作した後、前回切り離した部分より下位で糸切りを行ってしまう。そのため前回の底部が器内面になり台部が剥がれた状態が15になる。この様な痕跡はあまり注目されていないため報告例がない。16は石英片岩製の火打石である。縁部片側に2ヶ所の剥離痕が認められ、剥離周辺の稜部は潰れている。反対側の端部も剥離と潰れが認められる。剥離が片側のみに認められることから垂直方向への敲打ではなく、横もしくは斜め方向からの加撃であると思われる。17~24・34はたたき石である。17・18・23・24は平坦面に敲打痕が認められ、23は著しい使用によりに落ち窪む。24は全面に認められ特に両面は繰り返し使用されたため窪み部分で破損している。19は側縁稜の両端に敲打痕が認められる。20~22・34は端部または側縁稜が使用され、22は全周に敲打痕が認められる。25~27は台石で25は端部に敲打痕が認められる。28・30・31は滑沢面のある礫で、うち45は平坦面に敲打痕が認められ台石としても使用していたと思われる。29・32・33・35・36は加工痕ある礫で、29は平坦面の被熱痕が赤色化している。33はⅢP-13覆土上位から出土している。37は被熱した自然礫で8点接合している。38・39は海産の巻貝で軸唇及び螺塔部分と思われる。40はⅢP-04覆土上位より出土したカバノキ属の焚付けである。側縁は炭化が著しく一部発泡している。ⅢF-47の骨角器は2面に加工が施されているが図示していない。(奈良)

表Ⅲ-30 ⅢSB-13③ブロック礫属性表

種別 番号	図版 番号	個体 名称	遺物 番号	層位	状態	計測値(mm)						長短比 標準 偏差	重量(g)	被熱	材質	備考	
						長軸	標準 偏差	短軸	標準 偏差	厚さ	標準 偏差						
Ⅲ-25-09	103-39	3S0682	27419 27420	Ⅲbl. Ⅲbl.	完形	58.0	58.0	36.0	36.0	11.0	11.0	1.61	1.61	20.8	-	Tu.	
完形合計						265.3	42.6	21.7	24.3	20.5	19.6	2.44	2.43	37.4			
完形平均値						66.3	10.7	31.2	6.1	14.9	4.9	2.19	0.67	32.2			
遺物総重量												363.6					
						※完形 4点											
ⅢSB-13全体完形合計点						①ブロック120点		②ブロック16点		③ブロック3点		①~③以外208点				347点	
ⅢSB-13全体完形合計						22153.7		12886.8		6263.4		626.11		4413.7			
ⅢSB-13全体完形平均値						63.8		37.1		18.1		1.80		128.0			
ⅢSB-13遺物総重量												8487.1					

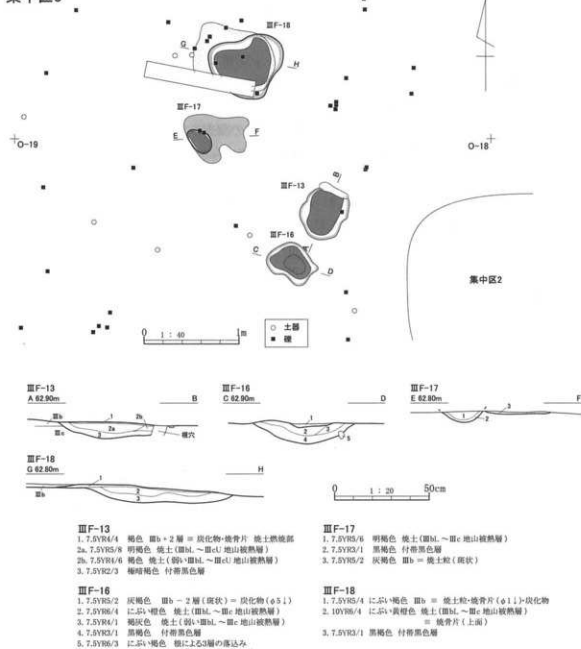
## 集中区5 (図Ⅲ-26)

位置：N・0-18区 規模：630×310cm 関連遺構：焼土 ⅢF-13・16・17・18

確認・調査：厚真川上流よりの段丘縁にあたるN-18区の調査中、Ⅲb層下位にて焼土1カ所(ⅢF-13)とⅢb層の落込みを確認した。落込み部分にトレンチを設定して断面の観察を行ったところ、落込み自体は自然の窪みであったが、トレンチにかかる形で1カ所、さらに周囲で2カ所の焼土を確認した(ⅢF-16・17・18)。周囲で出土した遺物は礫が少数散在したのみであったため、各焼土の記録を行い、土壌サンプルを回収して調査を終えた。

焼土(図Ⅲ-26)：検出した焼土はいずれも厚みのある焼土層が形成されており、骨片はほとんど伴わない。遺物はほとんど出土していないが、焼土自体の性格は集中区Iと似ている。フローテーションの結果、ⅢF-13においてブドウ科とクルミ属の種子を得ている。(小野)

## 集中区5



図Ⅲ-26 集中区5平面図及び関連遺構断面

表Ⅲ-31 集中区5焼土属性表

挿図番号	図版番号	遺構名	グリッド	層位	平面形	規模(cm)			灰・骨片の有無	備考
						長軸	短軸	厚さ		
Ⅲ-26	58-3-4	ⅢF-13	O-18	ⅢbL	楕円形	56	36	8	骨	
Ⅲ-26	58-3-5	ⅢF-16	O-18	ⅢbL	楕円形	50	48	8	-	
Ⅲ-26	58-6	ⅢF-17	O-18	ⅢbL	楕円形	30	20	6	-	
Ⅲ-26	59-1-2	ⅢF-18	N-18	ⅢbL	不整形	78	70	8	骨	

## 集中区 6 (図Ⅲ-27~29・図版 104)

位置: K~M-22~25 区 規模: 1, 120×600cm

関連遺構: 焼土 ⅢF-28・32・93・97・113・115~117・119~123

確認・調査: 平成 15 年度に行われた試掘調査時のトレンチ壁面で B-Tm 直上に形成された焼土を 1カ所確認した(ⅢF-28)。また L-24 区においてⅢa 層を除去した際、規模の大きい焼土を 1カ所確認した(ⅢF-33)。いずれも構築面がⅢb 層下位であることが予測されたことから、一端調査を止め、他地点のⅢb 層上~中位の調査を先行した。再びⅢb 層下位の調査のためこの地点の掘削を始めた際、新たに 6 基の焼土(ⅢF-93・97・113・115~117)と、Ⅲb 層の落込みを 1ヶ所検出した。Ⅲb 層落込みについて、堆積状態を観察するため半載したところ、落込み中より焼土を 1基、さらに周囲で 4 基の焼土を検出した(ⅢF-120・121・122・123)。これら焼土は平面・断面を記録し、土壌サンプルを採取した。ⅢF-119 検出位置のⅢb 層落込みは、さらに下位へと続いていたため、半載し、断面の観察を行った。結果、土坑であることが判明したことから(ⅢP-07)、断面の記録後完掘し、平面を記録した。焼土群の周囲では比較的多くの遺物が出土していたが、平面図は作成せず位置のみ記録し取上げた。

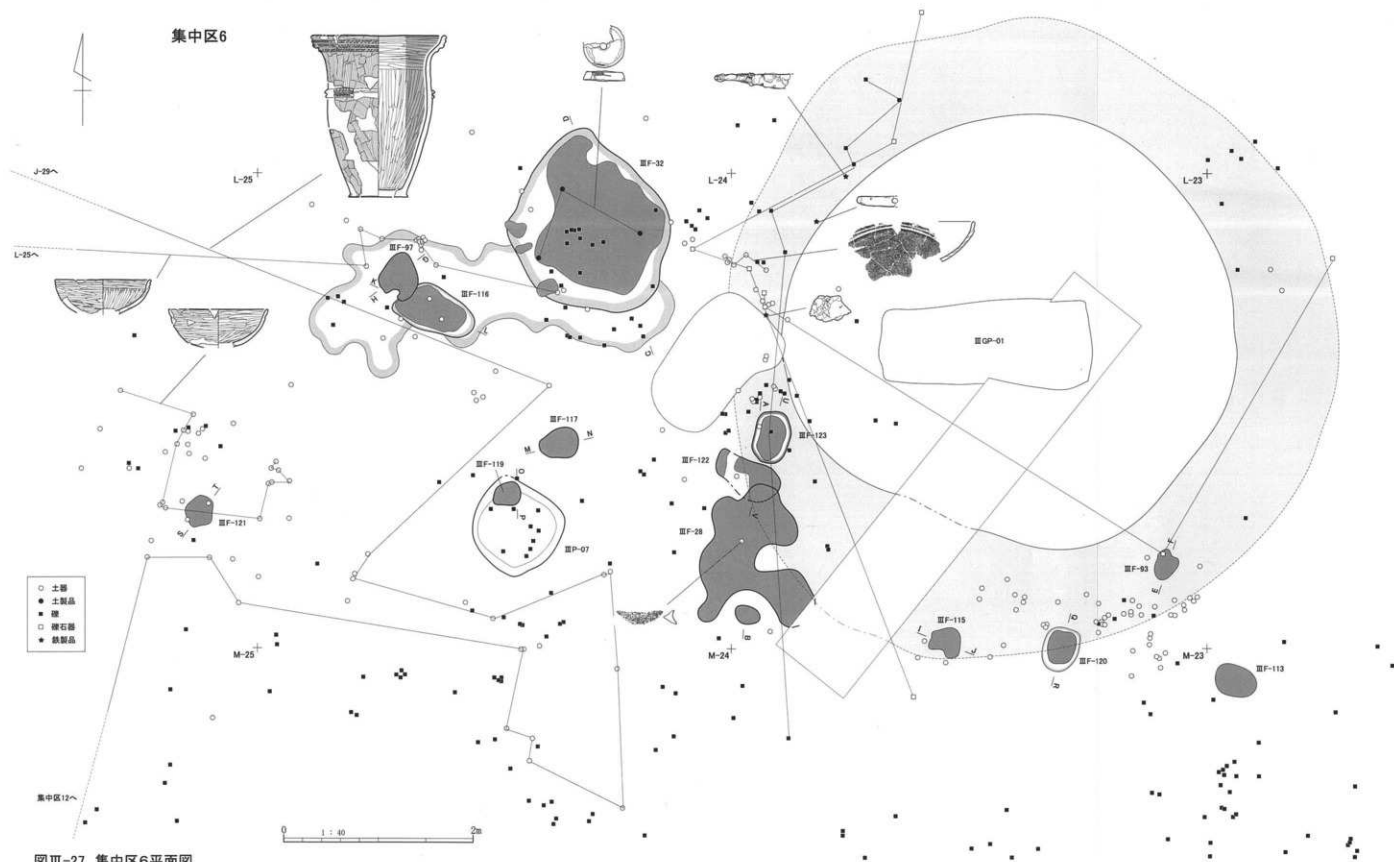
土坑(図Ⅲ-27・28): ⅢP-07 は確認面からの深さが 32cm で、隅丸方形に近い平面形の土坑である。掘り込みは V 層まで達し、壁の立ち上がりは中程まで垂直に立ち上がり、IV 層付近より上位で漏斗状に広がる。堆積土の状態を観察したところ、4~6 層に V 層主体土が堆積していることから、埋め戻しが行われている。上位のⅢF-119 との間には、壁面崩落土と考えられる 2・3 層の上にⅢb 主体の覆土 1 層が堆積していることから、時間差があると判断した。土坑中から遺物は出していない。

焼土(図Ⅲ-27・28): 検出した焼土は、焼土層の厚さが 5cm 前後と比較的良好であるが、ⅢF-97 で極微量の焼骨片を確認したのみで、いずれも焼骨片は伴わない。炭化種子もブドウ科とクルミ属が少量回収されたのみであることから、集中区 5 の焼土と様相を同じくする。

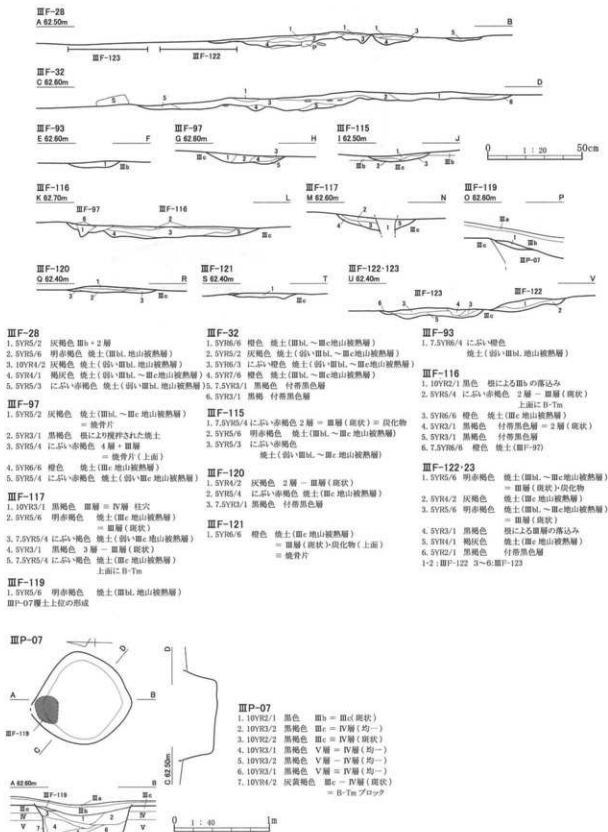
遺物出土状態(図Ⅲ-27): 遺物出土状態は明確なまとまりを示すものではなかったが、ⅢF-32 の東側、ⅢF-120 東側、ⅢF-121 北側に僅かに密度の高い地点がある。本集中区内東半分には、1号土壇墓が位置しているが、土壇墓堅穴部分構築時の掘り上げ土分布範囲で出土した遺物が、土壇墓を挟む形で接合している。土壇墓断面では堅穴部分の掘り上げ土を明確に認識することができず、Ⅲ層の僅かな盛り上がりとして確認したに過ぎなかったが、上記の接合状況は、土壇墓堅穴掘り上げ土の存在を間接的に示すものといえる。(小野)

出土物(図Ⅲ-29): 1 はⅧB3e の甕で、口縁部文様帯は木口面を押し当てて刻みを入れ、貼付囲繞帯は事前に横走沈線による位置決めを行ってから、貼付されている。外面は極めて明瞭なハケメ調整痕が全面に認められ、内面はミガキ調整の後、黒色処理が施されている。集中区 12 出土片と接合している。2~4 はⅧC4a の坏で、3 点とも内外面に精緻なミガキ調整が行われており、4 の内面は黒色処理が施されている。6 は推定径 65 mm の紡錘車で、側面に沈線により文様が描かれているが、ナデつけにより潰されている。ⅢF-32 の焼土中より出土した 3 点が接合しているが、破片毎に被熱度合が異なることから、ⅢF-32 形成時には破片化していたと考えられる。7 は不整形礫の稜線と面を使用したたたき石で、稜線上の使用部は敲打により著しく窪んでいる。8 は刀子茎で、ⅢGP-01 の堅穴部掘り上げ土に覆われていたためか、木質部を残す。9 は目釘穴をもつ小刀の茎、10 は厚さ 1.5mm の板状鉄製品である。(小野)

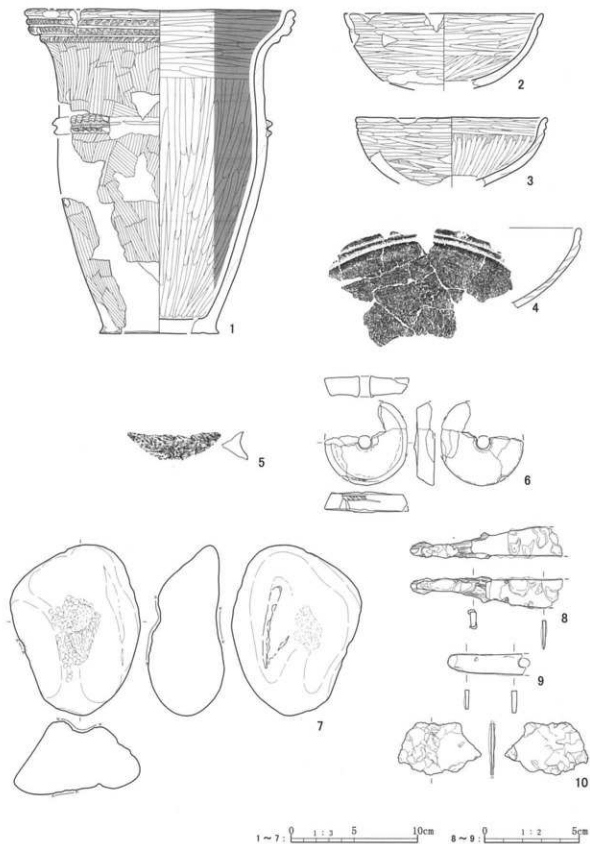




図Ⅲ-27 集中区6平面図



図III-28 集中区6関連遺構



图Ⅲ-29 集中区6出土遺物

表Ⅲ-32 集中区6焼土属性表

挿図番号	図版番号	遺構名	グリッド	層位	平面形	規模(cm)			灰・骨片の有無	備考
						長軸	短軸	厚さ		
Ⅲ-28	60-1	ⅢF-28	L-23	ⅢbL	不整形	158	118	6	-	
Ⅲ-28	60-3	ⅢF-32	K・L-24	ⅢbL	不整形	198	164	4	-	
Ⅲ-28	-	ⅢF-93	L-23	ⅢbL	長楕円形	34	14	4	-	
Ⅲ-28	60-5	ⅢF-97	L-24	ⅢbL	楕円形	48	40	4	骨	
Ⅲ-27	69-4	ⅢF-113	M-22	ⅢbL	楕円形	46	32	-	-	
Ⅲ-28	69-8	ⅢF-115	L・M-23	ⅢbL	不整形	36	30	4	-	
Ⅲ-28	60-7	ⅢF-116	L-24	ⅢbL	長楕円形	100	48	6	-	
Ⅲ-28	60-8	ⅢF-117	L-24	ⅢcU	楕円形	30	24	6	-	
Ⅲ-28	61-4	ⅢF-119	L-24	ⅢbL	楕円形	40	32	1	-	
Ⅲ-28	70-4	ⅢF-120	L・M-23	ⅢbL	楕円形	48	36	4	-	
Ⅲ-28	70-5	ⅢF-121	L-25	ⅢcU	円形	36	30	4	骨	
Ⅲ-28	61-5	ⅢF-122	I-23・24	ⅢbL	楕円形	74	42	4	-	
Ⅲ-28	61-5	ⅢF-123	L-23	ⅢbL	楕円形	58	40	6	-	

表Ⅲ-33 集中区6土坑属性表

挿図番号	図版番号	遺構名	グリッド	層位	平面形 調査面/ 坑底面	調査面規模(cm)		坑底面規模(cm)		深さ (cm)	長軸方向	調査面 長短比	坑底面 長短比	出土 遺物	備考
						長軸	短軸	長軸	短軸						
Ⅲ-28	40-3	ⅢP-07	L-24	Ⅲa	隅丸方形/ 隅丸方形	96	92	76	72	32	N-50° W	1.04	1.05	-	

表Ⅲ-34 集中区6出土土器属性表

挿図 番号	図版 番号	遺構名	個体 名称	分類	遺物番号	グリッド	層位	器種	部位	器面調整		点数	備考
										内面	外面		
Ⅲ-29-1	104-1	SP021A	ⅣB4c	ⅣB4c	28786	J-29	ⅢbL	甕	口縁〜 底部	ハナメ 19°	ハナメ	1	
					33351,34045他	O-25	ⅢbL					5	
					29130	K-29	ⅢbL					1	
					20292		ⅢbL					1	
					32847,32853他	L-24	ⅢbL					6	
					31447,31450		ⅢbL					2	
					32931	L-25	ⅢcU					1	
					24436,24439	M-21	ⅢbL					1	
					20651他		ⅢbL					3	
					32871,34708他	M-24	ⅢbL					6	
					32885,32886		ⅢcU					2	
					31488	M-25	ⅢbL					1	
					23224	N-24	ⅢbL					1	
					20165	O-24	ⅢbU					1	
					29304,29464他		ⅢbL					5	
					29447	O-25	ⅢbU					1	
					34881		ⅢbL					1	
31520,32671,33997他	P-24	ⅢbL	5										
32953	Q-23	ⅢbL	1										
34378	Q-26	ⅢcU	1										
30699他	R-25	ⅢbL	2										
Ⅲ-29-2	104-2	SP532A	ⅣC4a	ⅣC4a	20592	J-24	ⅢbL	坏	口縁〜 体部	19°	19°	1	
					23208,32850,33621他							9	
					34803							1	
					33620							1	
					32925,33611他							4	
Ⅲ-29-3	104-3	SP536A	ⅣC4a	ⅣC4a	31393	L-24	ⅢbL	坏	口縁〜 体部	ハナメ 19°	ハナメ 19°	1	
					20296							1	
					20263,20269他							13	
					34442							1	
Ⅲ-29-4	104-4	SP535A	ⅣC4a	ⅣC4a	31431	L-25	ⅢbL	坏	口縁〜 体部	19°	19°	1	
					33588,33593-33595							4	
					32810,33565,33594							3	
Ⅲ-29-5	104-5	ⅢF-28	SP528	ⅣC4	32830	L-23	ⅢbL	坏	台部	-	++	1	

表Ⅲ-35 集中区6出土遺物属性表

押 番号	図版 番号	個体 名称	遺物 番号	遺物名	分類	層位	遺構名	グリッド	計測値(mm)			重量(g)	材質	備考
									長軸	短軸	厚さ			
Ⅲ-29-6	104-6	3CP001	33561他	紡錘車	-	ⅢbL	ⅢF-32	L-24	(65.0)	(65.0)	16.0	42.4	Cray.	他2点
Ⅲ-29-7	104-7	-	20628	たたき石	ⅡB3	ⅢbU	ⅢF-32	L-25	135.0	104.0	60.0	824.0	Sa.	
Ⅲ-29-8	104-8	-	35002	刀子	-	ⅢcU	ⅢF-32	L-23	(80.0)	16.2	3.0	8.0	Fe	周辺
Ⅲ-29-9	104-9	-	33584	小刀茎	-	ⅢbL	ⅢF-32	L-23	(41.0)	11.5	2.5	4.5	Fe	周辺
Ⅲ-29-10	104-10	-	33596	板状製品	-	ⅢbL	ⅢF-32	L-23	43.5	28.0	1.5	4.9	Fe	周辺

## 集中区7 (図Ⅲ-30・31・図版104)

位置: L-21・22区 規模: 450×350cm

関連遺構: 焼土 ⅢF-38・49・53・54 土器集中 ⅢPB-08

確認・調査: 集中区1西側のⅢb層下位を調査中、土器の集中(ⅢPB-08)と焼土(ⅢF-38)を1基検出した。周囲を精査したところ、さらに3基の焼土を確認したことから、それぞれ平面、断面の記録を行った。ⅢPB-08については、擦文土器片の他、続縄文時代の土器も出土したことから、両者の上下関係を留意しながら、平面図を作成した上で取上げた。

焼土: 4基の焼土は層厚4cm前後のやや弱い焼土層形成であり、ⅢF-54を除き他は焼骨片をほとんど伴わないものであった。ⅢF-54の土壌サンプル中からは、サケ科と哺乳綱の骨、タデ科、ブドウ科、キハダ属の炭化種子を得ている。

土器集中: ⅢPB-08では、120×70cmの範囲で土器片が密集して出土した。この場所では擦文土器の他、IV章で扱う続縄文土器1個体分の破片も出土している。下位のⅢ層は根の影響で土器片共に深く引き込まれており、遺物の上下動が著しい。しかし出土状態を観察したところ、擦文土器片は上位に、続縄文土器片は下位に位置し、混在する状態ではなかったことから、偶然出土位置が重なったものと考えられる。

出土遺物: ⅢPB-08出土の擦文土器のみ記載する。1・2は同一個体で、ⅦB2aの甕で、胴部文様帯は横走沈線の地文の上を3条1対の縦位の沈線で区画し、間に2条1対の斜位の沈線で鋸歯状文を施文している。外面は細かい単位のミガキ調整を散漫に行い、内面はハケメ調整後、同じく散漫なミガキを加え、黒色処理を施している。(小野)

## 集中区8 (図Ⅲ-32 図版105-1~12)

位置: P-22・24 Q-21~24区 規模: 1,500×700cm 平面形: 楕円形

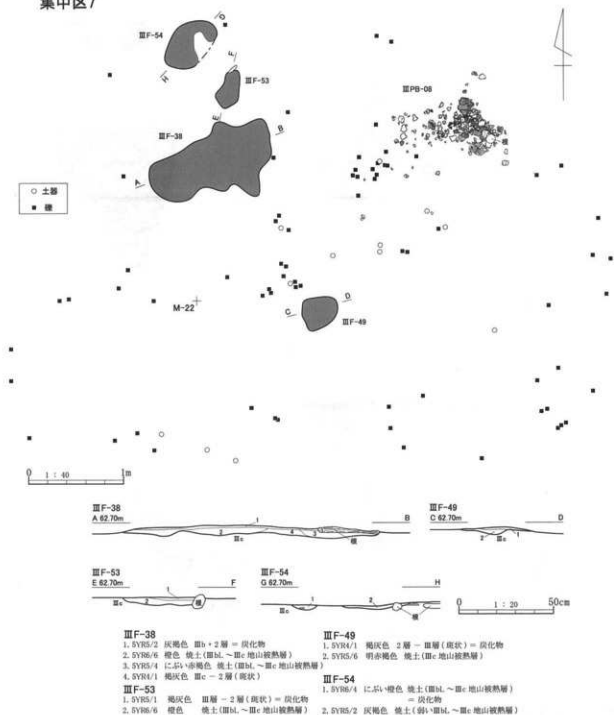
関連遺構: ⅢP-08・09・11 ⅢF-42・91・92・100・109 ⅢPB-13 ⅢSB-22

ⅢP-08 ⅢSB-22 (図Ⅲ-32・33 図版40-3~6) 位置: Q-24区 規模: 48×45×20cm

確認・調査: Ⅲc層上面36×31cmの範囲で黒色プランに埋まっている礫集中を検出した。(図版40-3・4) 礫周囲に黒色の不整なプランを確認したことから、土坑に埋設した礫集中を想定し、上面の微細図を記録した後に半掘して断面観察した。礫は2段に埋設されていた。ⅢP-08はⅢSB-22より一回り大きく掘り込まれ、土坑内に礫石器・礫が埋設されていた。性格は不明。

堆積状態(図Ⅲ-32): 1層はⅢb層主体でTa-dPを含み、台石をはじめ多量の棒状礫が埋設されている。2層はⅢb層主体にIV層斑状、3・4層はTa-dPを含み4層は礫が倒立した状態で埋設されている。礫の埋設状態や覆土にTa-dPを含むことから礫を埋め戻した土坑と考えられる。

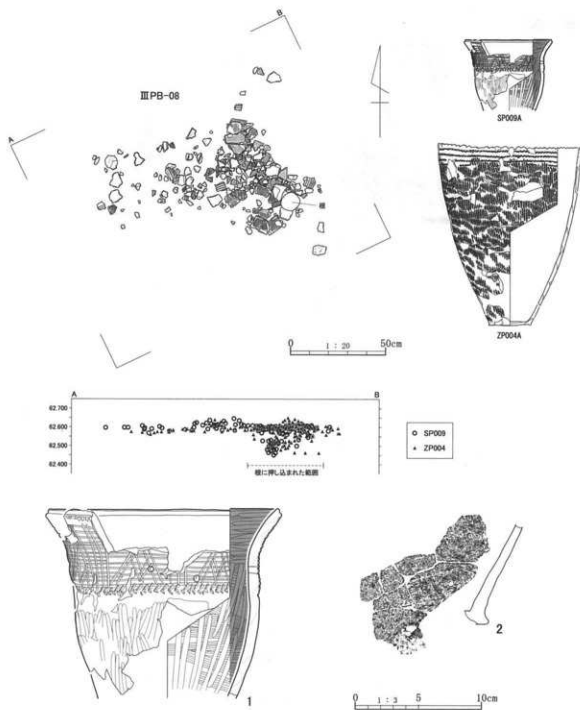
集中区7



図Ⅲ-30 集中区7平面図及び関連遺構断面

表Ⅲ-36 集中区7焼土属性表

採回番号	図版番号	遺構名	グリッド	層位	平面形	規模(cm)			灰・骨片の有無	備考
						長軸	短軸	厚さ		
Ⅲ-30	62-3	Ⅲ F-38	L-21・22	ⅢbL	不整形	136	88	5	-	
Ⅲ-30	62-4	Ⅲ F-49	L-21・22	ⅢbL	円形	40	34	4	-	
Ⅲ-30	62-7	Ⅲ F-53	L-21	ⅢbL	不整形	42	24	4	-	
Ⅲ-30	62-8	Ⅲ F-54	L-21・22	ⅢbL	楕円形	64	40	3	-	



図Ⅲ-31 III PB-08平面図・エレベーション及び出土遺物

表Ⅲ-37 集中区7出土土器属性表

採回 番号	図版 番号	遺構名	個体 名称	分類	遺物番号	グリッド	層位	器種	部位	器面調整		点数	備考
										内側	外側		
Ⅲ-31-1	104-11	ⅢPB-08	SP009A	VII2a	23717,26079他	L-21	Ⅲbl	甕	口縁～ 胴部	ハケメ	ハケメ	10	
					26168,26244他					Ⅲc	29キ	29キ	
		N-22	34723	N-22	Ⅲcl	内面黒色処理				1			
Ⅲ-31-2	104-12	ⅢPB-08	SP009F	VII2a	23710,23720,23787 26153,26154,26202 26710	L-21	Ⅲbl	甕	胴部～ 底部	ハケメ 29キ 内面黒色処理	ハケメ 29キ	7	

集中区8



図III-32 集中区8平面図



出土遺物(図Ⅲ-34):9は平坦面に敲打痕が認められる方形の台石である。敲打面の裏側縁辺部には剥離と一部敲打痕が認められる。12~20は完形の棒状礫で18、20は被熱している。標準偏差は長軸7.2、短軸5.8、厚さ6.9で弥生文化期の礫集中ではまとまった規格である。(表Ⅲ-42)

(奈良)

### ⅢP-09 (図Ⅲ-32・33 図版40-7・8)

位置:Q-24区 規模:156×108×36cm

確認・調査:Q-24区のⅢb層を掘り下げると黒色の不整形なプランを確認した。長軸上にセクションラインを設定し半掘をしたところ、坑底面が水平で、立ち上がりが明瞭なことから土坑であることが確認された。セクションラインは中心を外れたが土坑の堆積を確認できる程度であったため図と写真の記録後完掘して調査終了とした。

堆積状態:1~6・8層は覆土上位から中位にかけて堆積する流れ込み。7~11層は壁面から覆土下位に堆積する。12層は坑底面に堆積。いずれも自然堆積によるもので、6・7・11・12層に含まれるTa-dPはV層起源である。

出土遺物:4はⅧB1bの甕口縁部で文様帯には数条の浅い沈線文が施される。5はⅧB1bの甕胴部で上半に数条の浅い沈線文が施される。4・5は同一個体で内面黒色処理が施される。(奈良)

### ⅢP-11 (図Ⅲ-33 図版41-3・5) 位置:P-22区 規模:304×104×36cm

確認・調査:ⅢP-109調査終了後、周囲をⅢc層上面まで除去した段階で、長方形の黒色土落ち込みと長軸中央線上の北西側に小規模な焼土と弥生土器甕の底部(図Ⅱ-34-3)を検出した。焼土検出状態や土器出土状態の諸記録を行ってから、これらを切る長軸方向にセクションラインを設定し、半掘したところ、水平な坑底面とほぼ垂直に立ち上がる壁面を確認したことからⅢP-11とした。平面形から2基の土坑の切り合いを想定したが、堆積状態や土坑底レベルからは判断できず、1基の土坑として調査を進めた。整理段階にて再検討し、平面形と堆積図より土坑2基の切り合いと判断し、新しいと思われる南東側をⅢP-11A、古いものをⅢP-11Bとした。

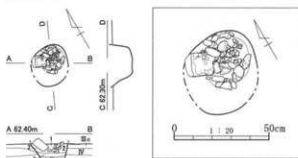
形態:2基の土坑ともⅢP-09と同タイプと思われる。平面形は隅丸方形と思われる。坑底面は水平でV層中位まで掘り込まれている。壁面へは明瞭な屈曲をもってほぼ垂直に立ち上がる。坑底面等で小ビット等の検出に注意したが認定できるものは検出していない。

堆積状態:2基とも人為堆積であり、共通する埋土があることから層名も通し番号で記す。埋土の判断基準の1つとして、2・5・6層中にB-Tmブロック(φ1cm前後)が混入している。V層を主体とする2~4層は、ⅢP-11Aの埋土の主体層として堆積する。ⅢP-11BはⅢc層主体の5層、Ⅲb層主体の6層が水平に、基本土層の上下層逆転した状態で堆積している。6層にはB-Tmの他、V層起源の小礫も含まれており、土坑構築後、間もなく埋め戻された可能性がある。焼土は2層ないしは5層上に形成されている。

焼土:土坑確認面に検出した焼土は炭化物を含む燃焼面が残り、明瞭な付帯黒色土も伴っていることから、土坑埋め戻しの後に形成されたものである。11A確認面では、形成位置や近位置から出土した土器(3)との関係からⅢP-11Bに伴うものと思われる。

遺物出土状態:伴う遺物としてⅢP-11Bの確認面で弥生土器甕の底部(3)が倒立した状態で出土している。他は、埋土中より出土した土坑構築以前の混入資料で、7は埋土3層からの出土で、V層

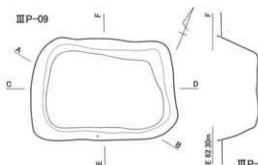
ⅢP-08.ⅢSB-22



ⅢP-08

1. 10YR2/1 黒色 Ⅲb = Ta-d(φ11)
2. 10YR2/2 黒褐色 Ⅲb = IV層(底状)
3. 7.5YR1.7/1 黒色 Ⅲ層 - Ta-d(φ11)
4. 10YR3/3 暗褐色 Ⅳ層 - Ta-d(φ11)

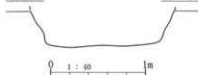
ⅢP-09



A 62.30m



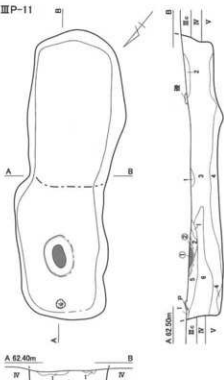
C 62.30m



ⅢP-09

1. 10YR2/1 黒色 Ⅲa = Ⅱ層(底状)
2. 10YR1.7/1 黒色 Ⅲb
3. 10YR1.7/1 黒色 Ⅲc = IV層(底状)
4. 10YR2/1 黒色 Ⅲc = IV層(底状)
5. 7.5YR3/3 暗褐色 Ⅲ層 - Ⅲc(底状)
6. 10YR2/1 黒色 Ⅲ層 = IV層  
= V層(底状)-Ta-d(φ21)
7. 10YR2/1 黒色 Ⅲ層 = IV層  
= V層(底状)-Ta-d(φ21)
8. 7.5YR2/2 暗褐色 Ⅳ層・Ⅲ層
9. 7.5YR3/3 暗褐色 Ⅲ層 - IV層(底状)
10. 7.5YR1.7/1 黒色 V層 = IV層(底状) 粘性強
11. 10YR2/1 黒色 V層 = IV層(底状)-Ta-d
12. 10YR2/1 黒色 V層 = IV層(底状)-Ta-d  
粘性強 坑底面に炭化物少量含む

ⅢP-11



ⅢP-11

1. 10YR2/3 黒褐色 Ⅲc-ブロック
2. 10YR3/1 黒褐色 Ⅲc = IV層・V層・砂利(均一)
3. 10YR2/2 黒褐色 V層 = Ⅲc(底状) = B-Tmブロック
4. 10YR2/1 黒色 V層 = Ⅲc(底状)
5. 10YR2/1 黒色 Ⅲc = V層(均一)-Ⅲb(底状)  
= B-Tmブロック
6. 10YR1.7/1 黒色 Ⅲc = V層・Ⅲc-B-Tm(底状)  
= 砂利

- ① 7.5YR4/4 褐色 焼土(ⅢP-11 2層 or 5層の被熱層)  
= 炭化物(上面燃焼面)
- ② 10YR1.7/1 黒色 付帯黒色層 = 炭化物(上面燃焼面)

ⅢF-91

A 62.50m



ⅢF-100

E 62.40m



ⅢF-91

1. 7.5YR5/2 灰褐色 2層・Ⅲ層 = 焼骨片
2. 5YR6/6 褐色 焼土(Ⅲc 地山被熱層)
3. 5YR3/1 黒褐色 付帯黒色層

ⅢF-100

1. 7.5YR2/1 黒色 Ⅲ層 = 焼骨片
2. 7.5YR4/6 褐色 焼土(Ⅲc 地山被熱層)  
= 焼骨片
3. 7.5YR1.7/1 黒色 付帯黒色層

ⅢF-92

C 62.40m



ⅢF-109A

G 62.40m



ⅢF-92

1. 5YR4/2 灰褐色 焼土(Ⅲb 地山被熱層) = 焼骨片

ⅢF-109

1. 5YR3/2 暗赤褐色 2層・Ⅲb = 焼骨片 = 炭化物
2. 5YR5/6 明赤褐色 焼土(Ⅲc 地山被熱層)
3. 7.5YR4/3 褐色 焼土(Ⅲb 地山被熱層)
4. 7.5YR2/1 黒色 付帯黒色層 = 炭化物(上位)

図Ⅲ-33 集中区8関連土坑及び焼土断面

の遺物と思われるフレイク・チップも出土している。

出土遺物(図Ⅲ-33):3は擦文土器甕の底部資料で、底面中央部が上げ底風で、笹葉痕が残る。底部側面稜は強いケズリの後、強いミガキが施され複数の面が観察でき、側面は丸みをもつ。器表面はハケメ調整が施されている。内面は、底部内面から2cmの高さまで水平に炭化物の付着が見られ、破断面には摩滅部分もあることから、底部片の再利用品の可能性がある。当資料は底部側縁の調整技法や再利用の可能性、出土状態から当遺跡内において、極めて異質な資料である。7はたたき石で埋土3層から出土したものである。土坑構築以前の資料と思われる。(乾)

ⅢF-42(図Ⅲ-32 図版62-5・6) 位置:P-24区 規模:60×40cm

確認・調査:Ⅲb層下位で確認した焼燬面の薄い焼土。被熱層が不整形で焼骨片も検出していないため平面範囲の記録をとって調査終了とした。(奈良)

ⅢF-91(図Ⅲ-33) 位置:Q-21区 規模:110×54×6cm

確認・調査:ⅢF-109と同様、Ⅲc層上面で検出した。焼燬面はさらに窪んでいることから、浅く掘り込まれた焼土と思われる。焼燬面からやや離れて掻き出し層と思われる焼土(ブロック状)の薄層も検出している。(乾)

ⅢF-92(図Ⅲ-32-33) 位置:Q-R-23区 規模:52×32×4cm

確認・調査:ⅢPB-13の南東側で焼土を確認し、平面・断面の記録をとり調査終了とした。

堆積状態:1層は地山被熱層のみで微量に焼骨片を含む。

出土遺物:動物遺存体は不明部位が多いが、同定した結果魚が中心である。(第V章第3・4節)。

(奈良)

ⅢF-100(図Ⅲ-32-33 図版66-8 67-1) 位置:Q-23-24区 規模:72×44×6cm

確認・調査:ⅢP-08・09東側で焼骨片を伴う焼土を確認し、平面・断面の記録をとり終了とした。

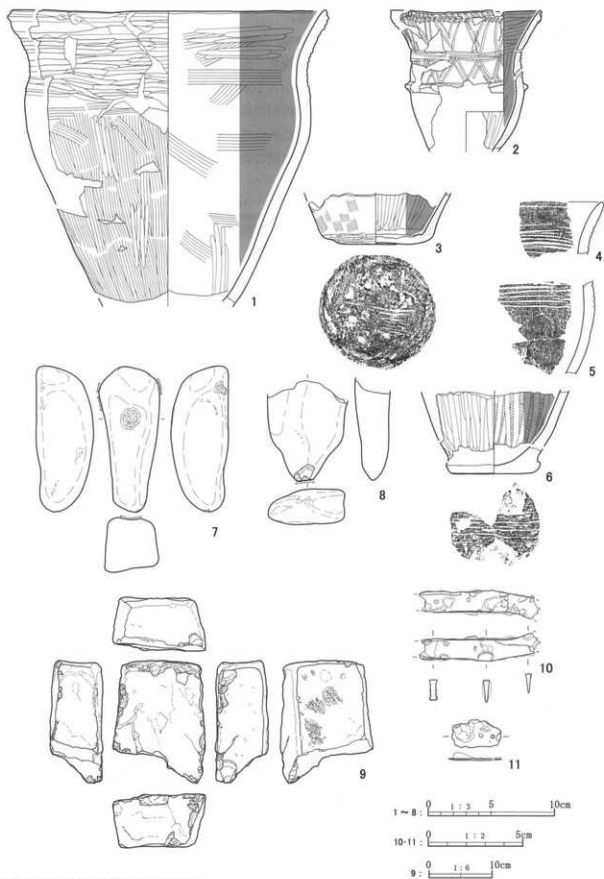
堆積状態:1層は焼骨片を微量に含み、2層は地山被熱層で微量に焼骨片を含む。3層は付帯黒色土である。

出土遺物:焼土北西側にはⅢPB-13の底部が出土しており、層的に同時期と判断される。動物遺存体は魚で、炭化種子はキビ・ドウ科が少量出土している。(第V章第3・4節)。(奈良)

ⅢF-109A・B(図Ⅲ-33 図版68-5・6) 位置:Q-22区 規模:94×68×10cm

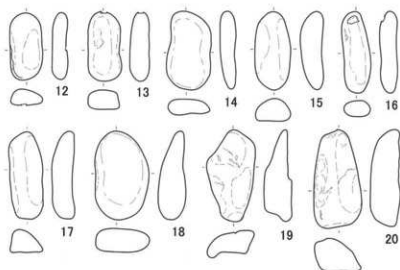
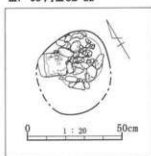
確認・調査:包含層調査中に、焼骨片や炭化物を多量に含む集中範囲(ⅢF-109B)を検出し、焼土を想定したが、地山被熱層の検出には至らなかった。周囲の調査が進行し、Ⅲc層上面で、南東に隣接する位置で炭化物や焼骨片を少量含む焼土焼燬面(1層)を検出し、改めてⅢF-109を設定した。焼燬面はやや窪み、Ⅲb層を被覆した状態で検出したことから、浅く掘り込まれた焼土と思われる。

堆積状態:109Aは地山被熱層(2・3層)も明赤褐色に変色し、発達している。付帯黒色層も確認でき比較的規模の大きい焼土である。109Bは層厚1cm前後の焼土ブロックを含む灰層で、周辺の清掃作業等で遺失している。下位からは地山被熱層を検出していない。以上の調査結果から、ⅢF-109Bは後から検出した焼土(ⅢF-109A)の掻き出し層の可能性が高い。



图Ⅲ-34 集中区8出土遺物(1)

ⅢP-08 ⅢⅢSB-22



図Ⅲ-35 集中区8出土遺物(2)

表Ⅲ-38 集中区8土坑属性表

棟号	図版番号	遺構名	グリッド	層位	平面形	調査面規模(cm)		坑底面規模(cm)		深さ(cm)	長軸方向	調査面長短比	坑底面長短比	備考
					調査面/坑底面	長軸	短軸	長軸	短軸					
Ⅲ-33	40-5-6	ⅢP-08	Q-24	Ⅲbl.	円形/円形	48	44	26	20	20	N-40° E	1.09	1.30	土坑内にⅢSB-22
Ⅲ-33	40-7-8	ⅢP-09	Q-24	Ⅲbl.	隅丸方形/隅丸方形	156	108	120	80	36	N-67° E	1.44	1.50	
Ⅲ-33	41-3-5	ⅢP-11	P-22	Ⅲbl.	隅丸方形/隅丸方形	304	104	284	80	36	N-35° W	2.92	3.50	A・Bの2基が併合。上面に焼土。

表Ⅲ-39 集中区8焼土属性表

棟号	図版番号	遺構名	グリッド	層位	平面形	規模(cm)		灰・骨片の有無	備考
						長軸	短軸		
Ⅲ-32	62-5	ⅢP-42	P-24	Ⅲbl.	楕円形	60	40	—	
Ⅲ-33	—	ⅢP-91	Q-21	Ⅲbl.	楕円形	110	54	骨	
Ⅲ-33	—	ⅢP-92	Q-23	Ⅲbl.	楕円形	52	32	—	
Ⅲ-33	66-8	ⅢP-100	Q-23-24	Ⅲbl.	楕円形	72	44	骨	
Ⅲ-33	68-5	ⅢP-109	Q-22	Ⅲbl.	楕円形	94	68	10	骨

表Ⅲ-40 集中区8出土土器属性表

棟号	図版番号	遺構名	個体名称	分類	遺物番号	グリッド	層位	器種	部位	器面調整		点数	備考
										内側	外側		
Ⅲ-34-1	105-1	ⅢPB-13	SF041A	ⅤB1b	31687.31688.31790他	Q-23	Ⅲbl.	甕	口縁～胴部	ハナメ [5%] 内面黒色処理	ハナメ ナゲ	22	
					30933.30934	Q-26	Ⅲbl.					1	
					32177	Q-25	Ⅲbl.					2	
					58535.58537	W-21	Ⅲbl.					2	
Ⅲ-34-2	105-2	ⅢPB-16 P-22 Q-23	SF038A	ⅤB2b	32729.32972.34008他	Q-23	Ⅲbl.	甕	口縁～胴部	ハナメ [5%] 内面黒色処理	ナゲ	17	
					32947	P-22	Ⅲbl.					1	
					34674	Q-23	Ⅲbl.					1	
Ⅲ-34-3	105-3	ⅢP-11	SF070A	ⅤB	34091	P-22	Ⅲbl.	甕	底部	[5%] [5%] 内面黒色処理	ハナメ ナゲ	1	
Ⅲ-34-4	105-4	ⅢP-09	SF037F	ⅤB1b	34143	Q-24	7	甕	口縁	ハナメ [5%] 内面黒色処理	ナゲ	1	
Ⅲ-34-5	105-5	ⅢP-09	SF037G	ⅤB1b	32632-32634.32633	R-24	Ⅲbl.	甕	胴部	ハナメ [5%] 内面黒色処理	[5%]	4	
					34147	Q-24	11					1	
Ⅲ-34-6	105-6	ⅢPB-13 Q-23	SF037C	ⅤB1b	32042	Q-23	Ⅲbl.	甕	底部	ハナメ [5%] 内面黒色処理	(ハナメ) [5%]	1	
					32080.32081.32083他	Q-24	Ⅲbl.					5	
					20429	Q-23	Ⅲbl.					1	

出土遺物：完形品と思われる板状鉄製品1点(11)が燃焼面層位より下層で出土している。平面形が長方形で長軸端部の中央に小孔がある。厚さは1mmと非常に薄い。燃焼面や掻き出し層のフローテーションサンプルからはクルミやブドウ科の他、キビ4粒などの炭化種子が少量出土し、焼骨片は哺乳綱が主体である。(乾)

### ⅢPB-13 (図Ⅲ-32 図版54-7)

位置：Q-24区 規模：144×92cm

確認・調査：Ⅲb層調査中に遺構が集中するQ-23区で土器集中を確認した。写真撮影後に微細図、遺物取り上げを行った。

遺物出土状態：口縁部から胴部にかけて出土し、個々の破片も大きい。やや窪まった地点から出土しているが自然の窪みによるものである。ⅢF-100の北西側に同一個体の底部が出土している。

出土遺物：1・6はⅧB1bの裏で、1は口縁部文様帯に多条の横走沈線を施す。内面はミガキ、黒色処理されている。2は底部で内面黒色処理が施される。底面の縁辺はナデつけにより丸みを帯びている。(奈良)

### ⅢPB-16 (図Ⅲ-34-2 図版105-2)

位置：Q-23・P-22区 規模：180×160cm

確認・調査：斑状に見られるB-Tmの直上で出土した小破片の集中である。同一面から礫も混在して出土している。

出土土器(図Ⅲ-34-2)：推定口径118mm、現存高約110mmの小型な甕形土器である。口唇部は切り出し状で綾杉状の刻文が施されている。文様帯は頸部のくびれ部分で上下2段に構成され、無文地に2条1対の沈線で構成される鋸歯文が施されている。文様帯下縁には断面形が三角形となる隆起帯がある。器面調整はミガキのみで、器内面は黒色処理されている。粗雑な作りで粘土帯接合面での破損が著しい。(乾)

出土遺物(図Ⅲ-33)：8は長軸端部に敲打痕をもつたたき石である。剥離を伴うが潰れが顕著ではないため使用頻度は少ないと思われる。10は刀身の基部片で、刀身部がやや反り返っている。区は作出されていないことから、再加工品の可能性があり、茎部分の断面形はやや潰れた状態である。(奈良)

表Ⅲ-41 集中区8出土遺物属性表

挿図番号	図版番号	個体名称	遺物番号	遺物名	分類	層位	遺構名	グリッド	計測値(mm)			重量(g)	材質	備考
									長軸	短軸	厚さ			
Ⅲ-34-7	105-7	-	34448	たたき石	I B3	2	ⅢP-11	P-22	115.0	43.0	45.0	297.0	Mud.	
Ⅲ-34-8	105-8	-	31654	たたき石	I A2	ⅢbL	-	Q-23	(79.0)	(63.0)	28.0	135.0	Sa.	被熱
Ⅲ-34-9	105-9	-	32325	台石	-	1	ⅢSB-22	O-24	220.0	185.0	84.0	3180.0	Sa.	
Ⅲ-34-10	105-10	-	20003	刀子茎	-	ⅢbL	ⅢF-100	Q-23	(64.0)	15.5	4.0	45.4	Fe	周辺
Ⅲ-34-11	105-11	-	33654	板状製品	-	Ⅲc	ⅢF-109	P-22	21.0	15.0	1.0	1.5	Fe	

表Ⅲ-42 ⅢSB-22磔属性表

押印 番号	図版 番号	個体 名称	遺物 番号	層位	状態	計測値(mm)					長短比 標準 偏差	重量(g)	被熱	材質	備考		
						長軸	標準 偏差	短軸	標準 偏差	厚さ						標準 偏差	
Ⅲ-35-12	105-12	-	32120	1	完形	71.0	-16.5	34.0	-7.0	16.0	-9.3	2.09	-0.09	56.5	-	Sa.	
Ⅲ-35-13	105-12	3S0782	32102他	1	完形	73.0	-14.5	35.0	-6.0	20.0	-5.3	2.09	-0.09	75.9	-	Sa.	他1点
Ⅲ-35-14	105-12	-	32115	1	完形	83.0	-4.5	47.0	6.1	17.0	-8.3	1.77	-0.41	97.3	-	Sa.	
Ⅲ-35-15	105-12	-	33138	4	完形	83.0	-4.5	38.0	-3.0	24.0	-1.3	2.18	0.00	93.0	-	Sa.	
Ⅲ-35-16	105-12	-	33139	4	完形	86.0	-1.5	30.0	-11.0	18.5	-6.8	2.87	0.69	64.3	-	Sa.	
Ⅲ-35-17	105-12	-	33145	4	完形	92.0	4.5	36.0	-5.0	24.0	-1.3	2.56	0.38	101.0	-	Sa.	
Ⅲ-35-18	105-12	-	32315	1	完形	93.0	5.5	57.0	16.1	29.0	3.8	1.63	-0.55	188.6	被熱	Sa.	
Ⅲ-35-19	105-12	-	33143	4	完形	97.0	9.5	52.0	11.1	30.0	4.8	1.87	-0.31	125.6	-	Mud.	
Ⅲ-35-20	105-12	-	32468	3	完形	104.0	16.5	51.0	10.1	32.0	6.8	2.04	-0.14	232.0	被熱	Sa.	
完形合計						1925.5	157.3	900.8	126.7	555.7	150.8	47.93	5.60	2392.3			
完形平均値						87.5	7.2	41.0	5.8	25.3	6.9	2.18	0.30	108.7			
遺物総重量												3150.1					

※完形 22点

## 集中区9 (図Ⅲ-36～38・図版Ⅲ-53・54・106)

位置：J-28・29, K-28区 規模：700×500cm

関連遺構：焼土 ⅢF-60・62・65・70・73・74・137 土器集中 ⅢPB-09 磔集中 ⅢSB-16・20

確認・調査：火山灰除去終了時に、攪乱坑にかかるかたちで焼土を2基確認した。構築面をⅢb層下位と考えたことから、その段階では焼土番号をつけず、Ⅲ層調査の進行を待った。その後、ⅢH-03・04の柱穴確認のため周囲のⅢb層掘削の必要がでてきたため、2基の焼土(ⅢF-62・65)近辺を精査した結果、新たに4基の焼土(ⅢF-60・70・73・74)と、1カ所の土器集中(ⅢPB-09)、2カ所の磔集中(ⅢSB-16・20)を検出した。土器集中・磔集中については写真からの図化を目的に平面写真を撮影後、取上げを行い、焼土については平面・断面の記録後、土壌サンプルを採取した。6基の焼土調査終了後、周囲の掘削を進めた際、ⅢF-73の下位においてⅢb層の落込みとその上位に形成された小規模な焼土を検出したことから、他の焼土と同様に記録を取り、調査を終了した。

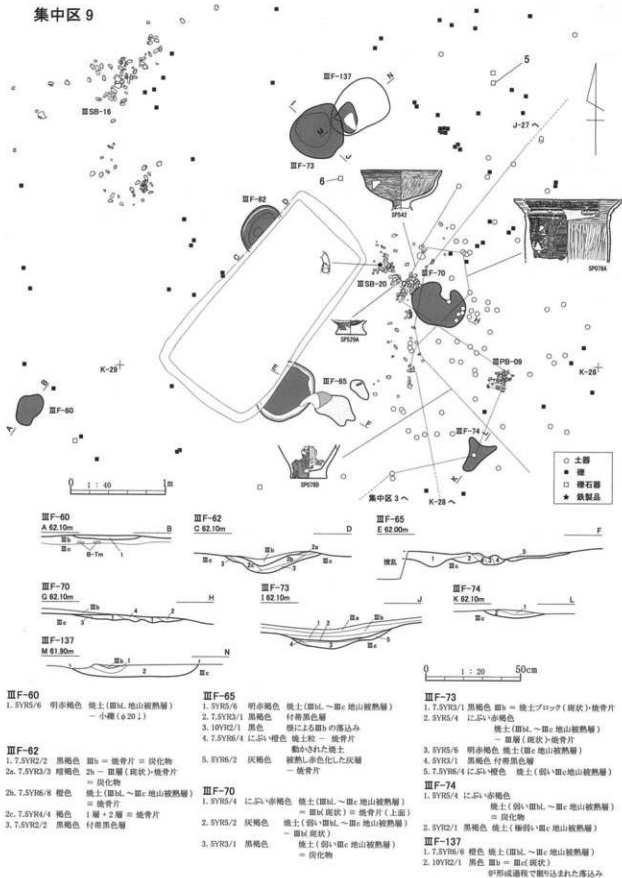
焼土(図Ⅲ-36)：灰層を伴う焼土(ⅢF-65)、焼骨片を含む焼土(ⅢF-62・73)、焼骨片を含まない焼土(ⅢF-60・70・74)の3種類がある。ⅢF-65の灰層は土壌化が進んでおり、焼土面上位ではなく、焼土の南東側に焼土粒と共に掻き出されている。ⅢF-62・73は焼土中央が窪む。ⅢF-60は焼土面上に長軸長1cm前後の小砂利が多く含まれ、当初下位のⅦ層が攪乱で上がったものとも考えたが、周囲に風倒木痕等の攪乱は認められず、また断面を観察したところ、他の焼土と同様レンズ状の焼土層を確認できたことから、擦文文化期の焼土として判断した。小砂利のサンプルを採取しなかったため、被熱の有無は確認できなかった。フローテーションの結果、ⅢF-73からサケ科・ウグイを含む魚骨と僅かな哺乳綱の骨片を得ている。

土器集中：ⅢPB-09はⅢF-70の東側で検出した坏1個体分の土器片集中である。

磔集中：ⅢF-62・73の西側でⅢSB-16を、ⅢF-20の西側でⅢSB-20を検出した。ⅢSB-16は磔個体総数129点中、完形個体63点で、ⅢH-03と隣接する位置で出土しているが、ⅢH-03に伴う遺物とは明確な高低差をもって出土した。ⅢSB-20は個体総数80点中、完形個体35点で、被熱磔の比率が高い。被熱磔には、結縛帯と考えられる、磔の途中で短軸に並行する被熱度合いの異なる範囲が認められる。

出土遺物(図Ⅲ-37)：1・2は同一個体で、ⅦB3aの甕で、胴部文様帯は横走沈線を廻らした後、樹枝状文が施文し、口縁部文様帯は、木口面を押し当てて斜位の刻みを入れている。外面は明瞭なハ

## 集中区 9

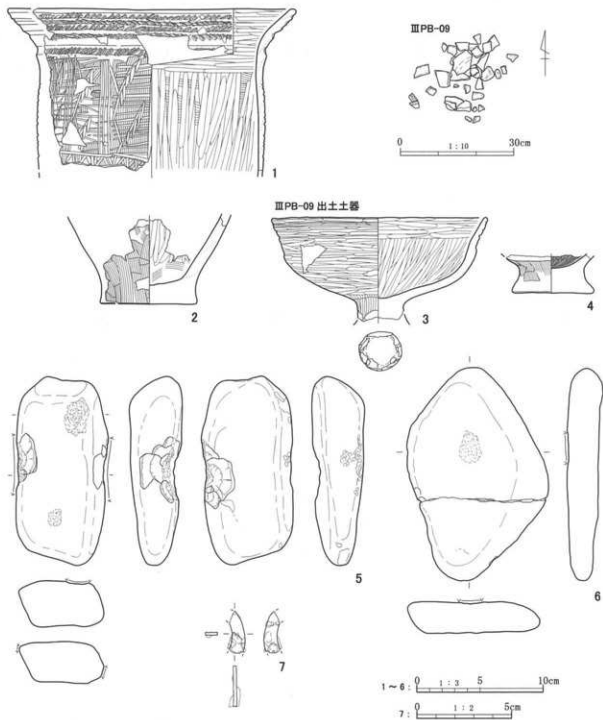


図Ⅲ-36 集中区9平面図及び関連遺構断面

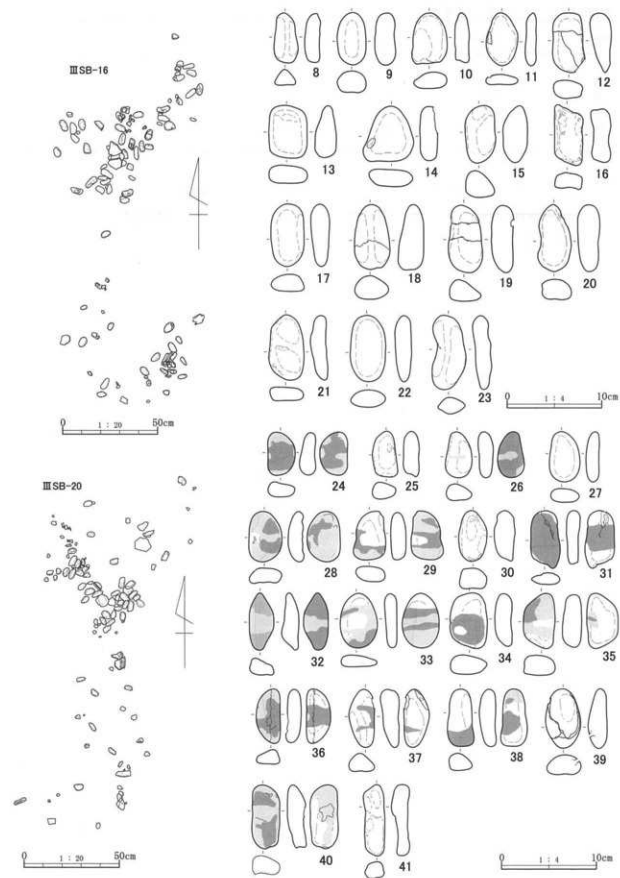


表Ⅲ-43 集中区9焼土属性表

挿図番号	図版番号	遺構名	グリッド	層位	平面形	規模(cm)			灰・骨片の有無	備考
						長軸	短軸	厚さ		
Ⅲ-36	53-4	ⅢF-62	J-28	ⅢbL	-	50	(24)	4	骨	
Ⅲ-36	53-5	ⅢF-65	K-28	ⅢbL	-	56	(36)	8	-	
Ⅲ-36	54-2	ⅢF-70	J-28	ⅢbL	槽円形	58	42	2	骨	
Ⅲ-36	54-3-4	ⅢF-73	J-28	ⅢbL	円形	60	52	4	骨	
Ⅲ-36	64-3-4	ⅢF-74	K-28	ⅢbL	不整形	40	30	4	-	
Ⅲ-36	73-6-7	ⅢF-137	J-28	ⅢbL	不整形	36	24	6	-	



図Ⅲ-37 集中区9出土遺物(1)



図Ⅲ-38 集中区9出土遺物(2)

表Ⅲ-44 集中区9出土土器属性表

埴田 番号	図版 番号	遺構名	個体 名称	分類	遺物番号	グリッド	層位	器種	部位	器面調整		点数	備考
										内側	外側		
Ⅲ-37-1	106-2		SF079A	ⅣB33	28512,28890他	J-28	ⅡB1	甕	口縁へ 胴部	ハナメ ナメ	ハナメ ナメ	10	
					28541,28542,28544	K-28	ⅡB1					3	
					28890,29045	J-28	ⅡB1					2	
					34331	K-28	ⅡB1					1	
Ⅲ-37-2	106-3	I-27	SF079D	ⅣB33	28521,28537,28539	J-28	ⅡB1	甕	底部	ハナメ ナメ	ハナメ	1	
					22444	I-27	ⅡB1					1	
					28059,2806	J-28	ⅡB1					2	
Ⅲ-37-3	106-1		SF542A	ⅣC4a	28553,28602他	K-27	ⅡB1	甕	口縁へ 体部	ハナメ ナメ	ハナメ ナメ	32	底部打 ち掻き
					27327	Q-25	ⅡB1					1	
					28519,28533他	J-28	ⅡB1					3	
					28530	J-28	ⅡB1					1	
Ⅲ-37-4	106-4		SF29A	ⅣC3	28530	J-28	ⅡB1	甕	台部	ナメ 内面黒色処理 ハナメ ナメ	1		

表Ⅲ-45 集中区9出土遺物属性表

埴田 番号	図版 番号	個体 名称	遺物 番号	遺物名	分類	層位	遺構名	グリッド	計測値(mm)			重量(g)	材質	備考
									長軸	短軸	厚さ			
Ⅲ-37-5	106-8	-	28874	たたく石	I A3	ⅡB1	ⅡD-137	J-28	150.0	82.0	43.0	534.0	Sa	
Ⅲ-37-6	106-6	3ST0004	224134他	たたく石	Ⅱ A3	ⅡB1		J-25	168.0	110.0	25.0	584.0	Sa	他1点
Ⅲ-37-7	106-7	-	28551	板状製品		ⅡB1	ⅢSB-20	J-28	22.0	9.5	1.7	0.9	Fe	

表Ⅲ-46 ⅢSB-16磔属性表

埴田 番号	図版 番号	個体 名称	遺物 番号	層位	状態	計測値(mm)					長短比	標準 偏差	重量(g)	被熱	材質	備考	
						長軸	標準 偏差	短軸	標準 偏差	厚さ							標準 偏差
Ⅲ-38-8	106-8	-	28710	ⅡB1	完形	53.0	-8.6	26.0	-6.8	17.0	-3.5	2.01	0.18	24.9	-	Sa	
Ⅲ-38-9	106-8	-	28705	ⅡB1	完形	55.0	-8.6	31.0	-1.8	22.0	1.5	1.77	-0.09	51.4	-	Sa	
Ⅲ-38-10	106-8	-	28704	ⅡB1	完形	54.0	-7.6	37.0	4.2	15.0	-5.5	1.46	-0.40	34.7	-	Ta	
Ⅲ-38-11	106-8	-	28755	ⅡB1	完形	56.0	-5.6	34.0	1.2	12.0	-8.5	1.65	-0.21	24.7	-	Sa	
Ⅲ-38-12	106-8	3S0015	28671	ⅡB1	完形	63.0	1.4	39.0	6.2	22.5	2.0	0.03	-1.83	57.5	-	Mud	
Ⅲ-38-13	106-8	-	28633	ⅡB1	完形	56.0	-5.6	41.0	8.2	22.0	1.5	1.37	-0.49	71.6	-	Sa	
Ⅲ-38-14	106-8	-	28698	ⅡB1	完形	58.0	58.0	53.0	53.0	19.0	19.0	1.99	1.99	71.1	-	Sa	
Ⅲ-38-15	106-8	-	28776	ⅡB1	完形	61.0	-0.6	33.0	0.2	28.0	5.5	1.85	-0.01	64.9	-	Com	
Ⅲ-38-16	106-8	-	28690	ⅡB1	完形	64.0	2.4	30.0	-2.8	21.0	0.5	2.13	0.27	45.7	-	Ta	
Ⅲ-38-17	106-8	-	28672	ⅡB1	完形	66.0	4.4	35.0	2.2	19.0	-1.5	1.89	0.03	58.5	-	Sa	
Ⅲ-38-18	106-8	-	28691	ⅡB1	完形	69.0	7.4	37.5	4.7	27.0	6.5	1.84	-0.02	70.3	-	Sa	
Ⅲ-38-19	106-8	3S0018	28636他	ⅡB1	完形	72.0	10.4	37.0	4.2	24.0	3.5	1.95	0.09	68.5	-	Sa	他2点
Ⅲ-38-20	106-8	-	28652	ⅡB1	完形	71.0	9.4	35.0	2.2	22.5	2.0	2.03	0.17	79.2	-	Sa	
Ⅲ-38-21	106-8	-	28643	ⅡB1	完形	69.0	7.4	37.0	4.2	19.0	-1.5	1.86	0.00	59.4	-	Sa	
Ⅲ-38-22	106-8	-	28678	ⅡB1	完形	70.0	8.4	38.0	5.2	18.0	-2.5	1.84	-0.02	58.3	-	Sa	
Ⅲ-38-23	106-8	-	28649	ⅡB1	完形	79.0	17.4	37.0	4.2	20.0	-0.5	2.14	0.28	57.8	-	Sa	
完形合計						3877.8	473.1	2086.6	307.4	1287.9	233.5	116.70	19.10	3427.5			
完形平均値						61.6	7.5	32.3	4.9	20.4	3.7	1.86	0.30	51.4			
遺物総重量																	3761.0

準完形 63点

表Ⅲ-47 ⅢSB-20磔属性表

埴田 番号	図版 番号	個体 名称	遺物 番号	層位	状態	計測値(mm)					長短比	標準 偏差	重量(g)	被熱	材質	備考	
						長軸	標準 偏差	短軸	標準 偏差	厚さ							標準 偏差
Ⅲ-38-24	106-9	-	25942	ⅡB1	完形	46.0	-10.6	29.0	-2.3	17.0	-1.2	1.59	-0.22	30.2	被熱	Sa	結核点
Ⅲ-38-25	106-9	-	25982	ⅡB1	完形	48.0	-8.6	27.0	-4.3	17.0	-1.2	1.78	-0.03	28.8	被熱	Mud	
Ⅲ-38-26	106-9	-	25973	ⅡB1	完形	49.0	-7.6	29.0	-2.3	16.0	-2.2	1.69	-0.12	28.0	被熱	Sa	結核点
Ⅲ-38-27	106-9	-	28908	ⅡB1	完形	53.0	-3.6	33.0	1.8	14.0	-4.2	1.61	-0.20	30.4	被熱	Sa	結核点
Ⅲ-38-28	106-9	-	25980	ⅡB1	完形	53.5	-3.1	35.0	3.8	12.0	-6.2	1.53	-0.28	34.1	被熱	Sa	結核点
Ⅲ-38-29	106-9	-	25988	ⅡB1	完形	52.0	-4.6	33.0	1.8	16.0	-2.2	1.58	-0.23	39.8	被熱	Sa	結核点
Ⅲ-38-30	106-9	-	25990	ⅡB1	完形	54.0	-2.6	30.0	-1.3	22.0	3.8	1.80	-0.01	35.6	被熱	Ta	
Ⅲ-38-31	106-9	-	25939	ⅡB1	完形	61.0	4.4	31.0	-0.3	15.0	-3.2	1.97	0.16	29.4	被熱	Sa	結核点
Ⅲ-38-32	106-9	-	25994	ⅡB1	完形	61.0	4.4	26.0	-5.3	13.0	-5.2	2.35	0.54	30.7	被熱	Mud	結核点
Ⅲ-38-33	106-9	-	25991	ⅡB1	完形	58.0	1.4	29.0	7.8	13.0	-5.2	1.49	-0.32	36.1	被熱	Sa	結核点
Ⅲ-38-34	106-9	-	28503	ⅡB1	完形	59.0	2.4	29.0	7.8	18.5	0.3	1.51	-0.30	57.9	被熱	Ta	
Ⅲ-38-35	106-9	-	25972	ⅡB1	完形	59.0	2.4	33.0	1.8	20.5	2.3	1.79	-0.02	55.8	被熱	Sa	結核点
Ⅲ-38-36	106-9	-	25970	ⅡB1	完形	58.0	1.4	26.0	-5.3	16.0	-2.2	2.23	0.42	27.7	被熱	Sa	結核点
Ⅲ-38-37	106-9	-	25989	ⅡB1	完形	62.0	5.4	27.0	-4.3	19.0	0.8	2.30	0.49	30.2	被熱	Ta	
Ⅲ-38-38	106-9	-	25978	ⅡB1	完形	61.0	4.4	28.0	-3.3	18.0	-0.2	2.18	0.37	36.1	被熱	Sa	結核点
Ⅲ-38-39	106-9	3S0707	25956他	ⅡB1	完形	62.0	5.4	37.0	5.8	20.0	1.8	1.68	-0.13	41.8	被熱	Mud	結核点
Ⅲ-38-40	106-9	-	25975	ⅡB1	完形	67.0	10.4	30.0	-1.3	20.0	1.8	2.23	0.42	50.1	被熱	Sa	
Ⅲ-38-41	106-9	-	28508	ⅡB1	完形	75.0	18.4	23.0	-8.3	19.0	0.8	3.26	1.45	40.4	被熱	Mud	
完形合計						1982.2	254.1	1091.0	151.1	638.1	97.1	65.22	9.50	1401.8			
完形平均値						56.6	7.3	31.3	4.3	18.2	2.8	1.81	0.27	40.1			
遺物総重量																	219.0

準完形 35点

ケメ調整が行われている。2はⅦC4aの坏で、高台部に縦位のハケメ調整を残す以外は、内外面共精緻なミガキ調整を加えている。台部は打ち掻かれた後、しばらく使用されたようで、破断面が摩滅している。集中区3出土破片と接合している。4は平底の高台部をもつⅦC3の坏台部で、内面は黒色処理されている。5・6はたたき石で、5は扁平な縦長礫の側縁を使用し、6は不整形礫の1面に敲打痕が残る。7は弧状に曲がった板状鉄製品である。(小野)

**集中区10** (図39-40 図版55-1~3) 位置: Q-28区 規模: 320×240cm

関連遺構: ⅢF-68 ⅢPB-10 ⅢSB-18

確認・調査: Q-28区の調査中にⅢb層下位で焼骨片を伴う楕円形の焼土を確認した。周辺を燃焼面まで掘り下げて範囲確認を行ったところ焼土(ⅢF-68)とその西側周辺に土器集中(ⅢPB-10)および礫集中(ⅢSB-18)が出土した。遺物の分布範囲を確認するため周辺精査を行った結果、焼土から半径約3m以内に遺物が集中し、礫は西側に多く出土することがわかった。(奈良)

**ⅢF-68** (図Ⅲ-39 図版55-2・3) 規模: 64×44×8cm

堆積状態: 1層はⅢb層に焼骨片少量含む土壌化した灰層と思われる。2・3層は地山被熱層で、3層は弱い被熱層である。4層は付帯黒色土に焼土ブロックを少量含む、5層はⅢ層に焼骨片を少量含む。被熱層下位から出土する少量の焼骨片は根等による二次的移動と考えられる。

出土遺物: 動物遺存体は魚中心でサケ属が多く、ウグイも少量出土している。炭化種子はブドウ科、クルミが出土している。(第V章第3・4節)。(奈良)

**ⅢPB-10 ⅢSB-18** (図Ⅲ-39 図版55-1)

規模: ⅢPB-10 94×38cm ⅢSB-18 276×240cm

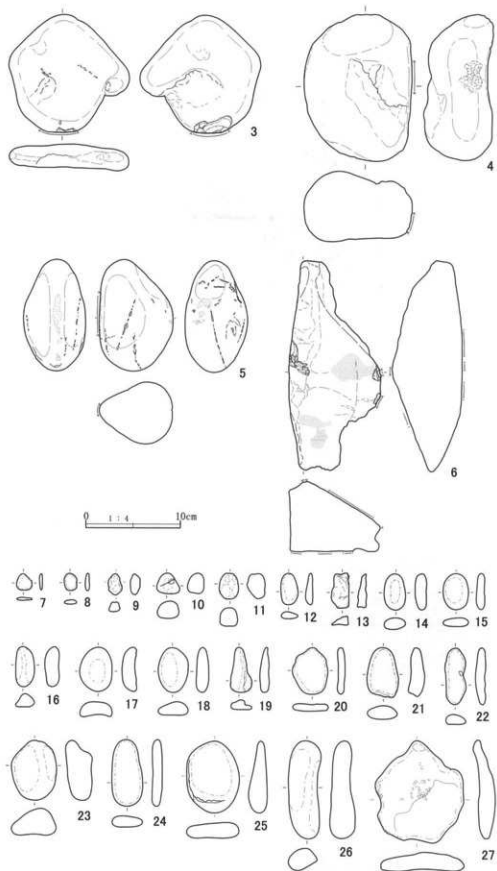
遺物出土状態 (図Ⅲ-39): ⅢPB-10はⅢF-68の北側約1mに出土する。根による影響か土器出土地点の黒色土は締まりがなく、僅かにⅢa起源の層を確認した。ⅢSB-18の中でも小さな礫は土器周辺で出土している。礫の本体はⅢF-68の南西側に分布し、礫石器は焼土に近い位置で出土する。

出土遺物 (図Ⅲ-39・40): 1はⅦB3c 號で口縁から胴部である。口縁部文様帯は多段に刻文が施され口唇部は肥厚し、胴部上半は横走沈線で区画後、胴部に横環する貼付帯、斜位・縦位の沈線が施される。2~5はたたき石である。2は側縁稜、3は端部に敲打痕をもつ。4・5は側縁に敲打痕が認められ、4は花崗岩製である。本遺跡では砂岩・泥岩に比し少量だが花崗岩を用いた礫石器が認められる。7~27はⅢSB-18より出土した構成礫の一部である。円形の小礫から棒状礫まで出土し、標準偏差も長軸15.1、短軸7.8、厚さ5.0と長軸がばらつくという結果を得ている。石材は砂岩を主体としているが、チャート、泥岩、花崗岩の4種類出土している。(奈良)

**表Ⅲ-48 集中区10焼土属性表**

挿図番号	図版番号	遺構名	グリッド	層位	平面形	規模(cm)			灰・骨片の有無	備考
						長軸	短軸	厚さ		
Ⅲ-39	55-2・3	ⅢF-68	Q-28	ⅢbL	楕円形	64	44	8	骨	





図Ⅲ-40 集中区10出土遺物(2)

表Ⅲ-49 集中区10出土土器属性表

棟号	図版番号	遺構名	個体名称	分類	遺物番号	グリッド	層位	器種	部位	器面調整		点数	備考
										内側	外側		
Ⅲ-39-1	107-1	ⅢPB-10	SP076A	ⅣB3c	26548-26552,26557他	Q-28	ⅢbL	甕	口縁～胴部	内面 15% 内面黒色処理	ナデ	10	

表Ⅲ-50 集中区10出土礫石器属性表

棟号	図版番号	個体名称	遺物番号	遺物名	分類	層位	遺構名	グリッド	計測値(mm)			重量(g)	材質	備考
									長軸	短軸	厚さ			
Ⅲ-39-2	107-2	-	26426	たたき石	I B2	ⅢbL	ⅢSB-18	Q-28	128.0	124.0	23.0	600.0	Sa.	
Ⅲ-40-3	107-3	-	26418	たたき石	ⅡA2	ⅢbL	ⅢSB-18	Q-28	128.0	124.0	23.0	415.0	Sa.	
Ⅲ-40-4	107-4	-	26430	たたき石	ⅡB2	ⅢbL	ⅢSB-18	Q-28	156.0	122.0	73.0	1960.0	Gra.	※
Ⅲ-40-5	107-5	-	26424	たたき石	ⅡB2	ⅢbL	ⅢSB-18	Q-28	118.0	79.0	77.0	726.0	Mud.	
Ⅲ-40-6	107-6	-	26425	磨石面と敲打痕のある大型礫	Ⅱ	ⅢbL	ⅢSB-18	Q-28	222.0	100.0	73.0	1481.0	Sh.	

※ 側面に敲打痕

表Ⅲ-51 ⅢSB-18礫属性表

棟号	図版番号	個体名称	遺物番号	層位	状態	計測値(mm)						重量(g)	被熱	材質	備考		
						長軸	標準偏差	短軸	標準偏差	厚さ	標準偏差					長短比	標準偏差
Ⅲ-40-7	107-7	-	26477	ⅢbL	完形	16.8	-27.0	16.0	-9.8	3.5	-10.6	1.05	-0.70	0.90	-	Tu.	
Ⅲ-40-8	107-7	-	26459	ⅢbL	完形	18.0	-25.8	13.0	-12.8	4.0	-10.1	1.38	-0.37	1.40	-	Mud.	
Ⅲ-40-9	107-7	-	26460	ⅢbL	完形	22.0	-21.8	14.0	-11.8	20.9	6.8	1.57	-0.18	1.20	-	Gra.	
Ⅲ-40-10	107-7	-	26412	ⅢbL	完形	22.0	-21.8	24.0	-1.8	17.0	2.9	0.92	-0.83	11.30	-	Sa.	
Ⅲ-40-11	107-7	-	26481	ⅢbL	完形	27.0	-16.8	20.0	-4.8	18.0	3.9	1.35	-0.40	14.90	-	Ch.	
Ⅲ-40-12	107-7	-	26414	ⅢbL	完形	33.0	-10.8	18.0	-7.8	7.0	-7.1	1.83	0.08	4.10	被熱	Sa.	
Ⅲ-40-13	107-7	-	26508	ⅢbL	完形	32.0	-11.8	18.0	-7.8	1.0	-13.1	1.78	0.03	6.60	-	Mud.	
Ⅲ-40-14	107-7	-	26528	ⅢbL	完形	37.0	-6.8	23.0	-2.8	12.0	-2.1	1.61	-0.14	12.50	-	Sa.	
Ⅲ-40-15	107-7	-	26443	ⅢbL	完形	37.0	-6.8	27.0	1.2	8.0	-6.1	1.37	-0.38	12.30	-	Sa.	
Ⅲ-40-16	107-7	-	26485	ⅢbL	完形	42.0	-1.8	20.0	-8.8	15.0	0.9	2.10	0.35	14.30	-	Sa.	
Ⅲ-40-17	107-7	-	26537	ⅢbL	完形	47.0	3.2	34.0	8.2	16.0	1.9	1.38	-0.37	30.60	-	Sa.	
Ⅲ-40-18	107-7	-	26496	ⅢbL	完形	47.0	3.2	31.0	5.2	13.0	-1.1	1.52	-0.23	23.80	-	Sa.	
Ⅲ-40-19	107-7	-	26467	ⅢbL	完形	47.0	3.2	23.0	-2.8	9.0	-5.1	2.04	0.29	10.20	-	Mud.	
Ⅲ-40-20	107-7	-	26504	ⅢbL	完形	49.0	5.2	38.0	12.2	8.0	-6.1	1.29	-0.46	20.00	-	Sa.	
Ⅲ-40-21	107-7	-	26533	ⅢbL	完形	52.5	8.7	33.0	7.2	17.0	2.9	1.59	-0.16	28.50	-	Sa.	
Ⅲ-40-22	107-7	-	26526	ⅢbL	完形	59.0	18.2	23.0	-2.8	11.0	-3.1	2.57	0.82	16.30	-	Mud.	
Ⅲ-40-23	107-7	-	26420	ⅢbL	完形	63.0	19.2	47.0	21.2	28.0	13.9	1.34	-0.41	113.70	-	Gra.	
Ⅲ-40-24	107-7	-	26422	ⅢbL	完形	70.0	26.2	32.0	6.2	10.0	-4.1	2.19	0.44	37.80	-	Sa.	
Ⅲ-40-25	107-7	-	26419	ⅢbL	完形	76.0	43.8	55.0	29.2	20.0	5.9	1.38	-0.37	98.70	-	Sa.	
Ⅲ-40-26	107-7	-	26431	ⅢbL	完形	103.0	59.2	33.0	7.2	27.0	12.9	3.12	1.37	99.60	被熱	Sa.	
Ⅲ-40-27	107-7	-	26423	ⅢbL	完形	108.0	64.2	93.0	67.2	23.0	8.9	1.16	-0.59	186.40	-	Mud.	
完形合計						2511.2	874.5	1498.2	452.2	806.3	290.5	101.49	25.70	1406.1			
完形平均値						43.8	15.1	25.8	7.8	13.9	5.0	1.75	0.44	21.7			
遺物総重量														311.1			

※完形 58点

## 集中区 11 (ⅢⅢ-41) 位置: 0-32, M・N-32・33区 規模: 740×730cm

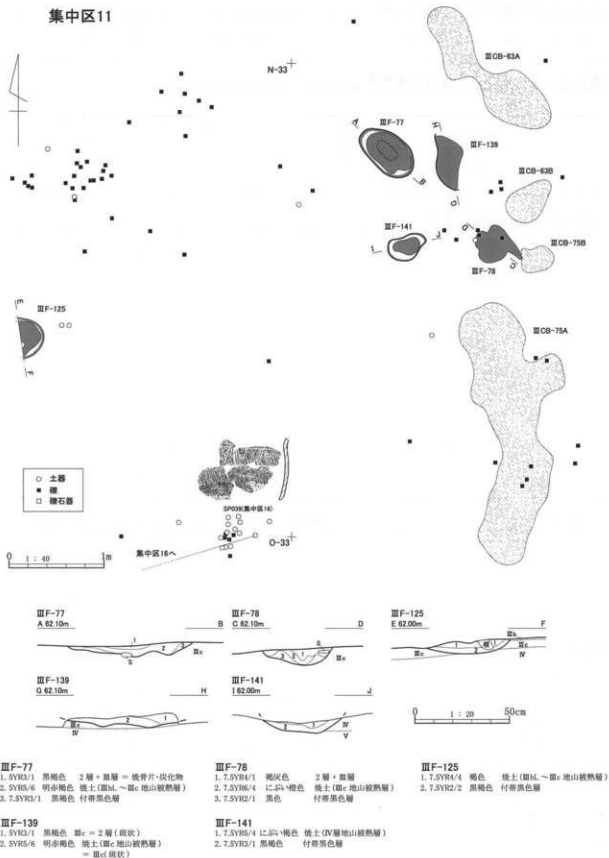
関連遺構: 焼土 ⅢF-77・78・125・139・141 炭化物集中 ⅢCB-63A・63B・75A・75B

確認調査: 沢地形の低みにあたるN-32・33区のⅢb層下位を調査中、2基の焼土を並ぶかたちで検出した(ⅢF-77・78)。平面断面の記録後、さらに周囲の掘削を進めたところ、隣接する位置で2基の焼土(ⅢF-139・141)と、4m離れた位置で1基の焼土(ⅢF-125)を新たに確認した。ⅢF-77近辺では他に4カ所の炭化物集中も検出したことから、それぞれ記録をとった上で土壌サンプルを回収した。0-33区杭近くで少数の土器片がまとめて出土したが、位置のみ記録し取り上げている。

焼土(ⅢⅢ-41): 検出した焼土はいずれも厚さ6cm前後の比較的良好に形成されたものである。

ⅢF-77で極僅かに焼骨片の分布を確認したが、本集中区の焼土は絶じて骨片を伴わない。

遺物出土状態: 焼土群の南側で土器片が少数まとめて出土しており、集中区16との間で接合関係をもつ。ⅢF-125の北側では礫が散在していた。(小野)



図Ⅲ-41 集中区11平面図及び関連遺構断面



表Ⅲ-52 集中区11焼土属性表

挿図番号	図版番号	遺構名	グリッド	層位	平面形	規模(cm)			灰・骨片の有無	備考
						長軸	短軸	厚さ		
Ⅲ-41	64-5-6	ⅢF-77	N-32	ⅢbL	楕円形	66	40	6	骨	
Ⅲ-41	64-7	ⅢF-78	N-32	ⅢbL	不整形	44	40	18	-	
Ⅲ-41	71-1	ⅢF-125	N-33	ⅢcU	-	44	(24)	6	-	
Ⅲ-41	74-2-3	ⅢF-139	N-32	ⅢcU	不整形	(60)	38	4	-	
Ⅲ-41	74-6-7	ⅢF-141	N-32	ⅣU	楕円形	42	26	6	-	

表Ⅲ-53 集中区11炭化物集中属性表

挿図番号	図版番号	遺構名	グリッド	層位	平面形	規模(cm)		備考
						長軸	短軸	
Ⅲ-41	-	ⅢCB-63A	N・M-32	ⅢbL	不整形	172	52	
Ⅲ-41	-	ⅢCB-63B	N-32	ⅢbL	楕円形	56	36	
Ⅲ-41	-	ⅢCB-75A	N-32	ⅢbL	不整形	276	100	
Ⅲ-41	-	ⅢCB-75B	N-32	ⅢbL	不整形	36	28	

## 集中区 12 (図Ⅲ-42・43・図版 108)

位置：0-24・25区 規模：750×600cm

関連遺構：焼土 ⅢF-106・129 土器集中 ⅢPB-12

調査・確認：火山灰を除去した段階で、樹根の影響でⅢa層上面に浮き上がった擦文土器片を確認した。下位に土器集中があることが予測できたが、すぐに調査は行わず、周囲のⅢa～Ⅲb層中位の調査を先行して行った。Ⅲb層下位の調査に入った後、土器集中ⅢPB-12として設定し、土器片分布の拡がりの検出に努めた。検出位置には樹根痕が残りTa-bPの落込みも認められ、土器片の垂直分布は約20cmと、上下動の激しいものであった。検出終了後、出土状態を記録し、取上げを行った。取上げ後、周囲のⅢb層掘削を進めたところ、2ヵ所の焼土(ⅢF-106・129)を検出したため、平面・断面の記録を行った。本集中区南側にはアイヌ文化期の遺構であるⅢBB-05が、一部重なるかたちで隣接していたが、そこでの土器出土はⅢBB-05 獣骨取上げ後の最終精査段階であり、明確な高低差をもって出土している。

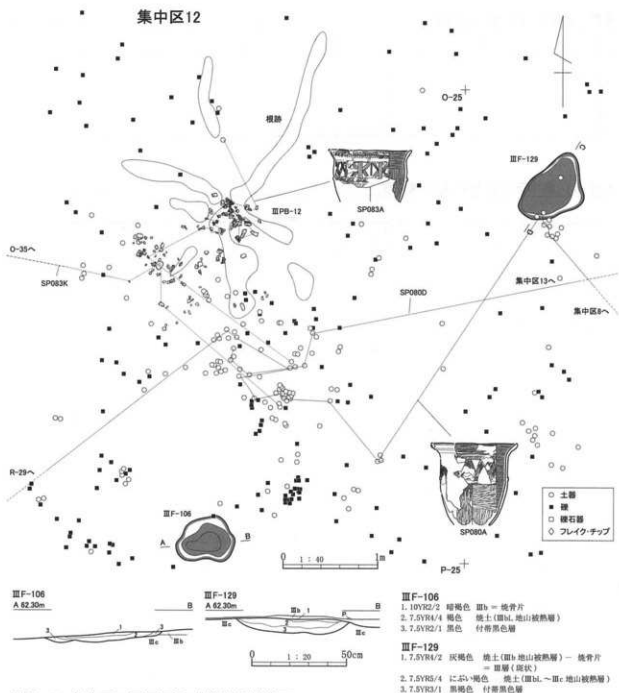
焼土(図Ⅲ-42)：ⅢF-106・129は共に層厚5cm前後で、フローテーションの結果、共にサケ科と哺乳綱の骨が得られ、ⅢF-129ではイトウとウグイの骨も含まれていた。またⅢF-106からはキビ、シソ属、ブドウ科の炭化種子も得ている。

遺物出土状態：ⅢPB-12からは2個体分の土器片が出土しているが、個体毎に大きく分かれて分布している。樹根痕直上では主としてSP083の個体片が出土しており、ⅢF-106北側ではSP080の個体片が出土している。SP080はⅢF-126上面にもまとまった分布がみられ、集中区8出土片との間で接合関係をもつ。

出土遺物(図Ⅲ-43)：1と2(SP080)、3と4(SP083)はそれぞれ同一個体で、共にⅦB3cの甕である。

表Ⅲ-54 集中区12焼土属性表

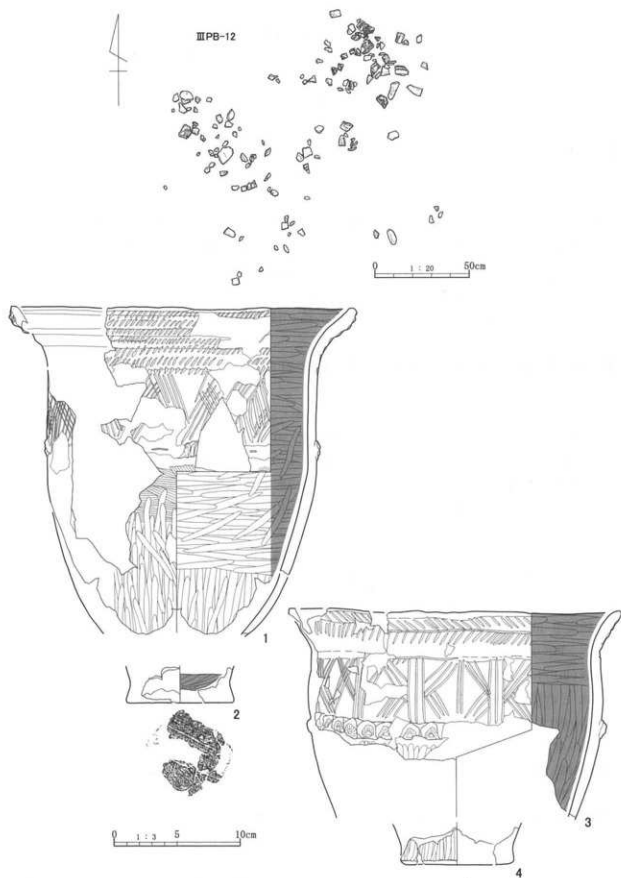
挿図番号	図版番号	遺構名	グリッド	層位	平面形	規模(cm)			灰・骨片の有無	備考
						長軸	短軸	厚さ		
Ⅲ-42	67-8	ⅢF-106	O-25	ⅢbL	楕円形	64	48	4	骨	
Ⅲ-42	71-5	ⅢF-129	O-24	ⅢbL	楕円形	62	44	6	-	



図Ⅲ-42 集中区12平面図及び関連遺構断面

表Ⅲ-55 集中区12出土土器属性表

採図 番号	図版 番号	遺構名 個体 名称	分類	遺物番号	グリッド	層位	器種	部位	器面調整		点数	備考	
									内側	外側			
Ⅲ-43-1	108-1	ⅢPB-12 O-24 P-23 Q-23 Q-24 R-29	SP080A	VII B3c	33283, 33337, 34062他	O-25	Ⅲbl.	変	口縁〜 胴部	ハケ シガ 内面黑色処理	ハケ シガ	13	
					29073, 33357他	O-24	Ⅲbl.			7			
					29110, 31539, 31566他	P-23	Ⅲbl.			15			
					32283	Q-23	Ⅲbl.			1			
					20421他	Q-24	Ⅲbl.			4			
32480	R-29	Ⅲbl.	1										
Ⅲ-43-2	108-2	ⅢPB-12 O-25	SP080K	VII B3c	33280, 34072, 34097他	O-25	Ⅲbl.	変	底部	ハケ シガ 内面黑色処理	ナデ	6	
					34885	O-25	Ⅲbl.			1			
					33178, 33348, 34081他	O-25	Ⅲbl.			48			
Ⅲ-43-3	108-3	ⅢPB-12 O-25	SP083A	VII B3c	33481, 33489他	O-25	Ⅲbl. KR	変	口縁〜 胴部	ハケ シガ 内面黑色処理	ハケ シガ	5	
					34295他	O-25	Ⅲcl.			2			
					33259, 33296, 34041他	O-25	Ⅲbl.			5			
Ⅲ-43-4	108-4	ⅢPB-12 O-35	SP083B	VII B3c	23312	N-35	Ⅲbl.	変	底部	-	ハケ シガ	1	



図Ⅲ-43 ⅢPB-12平面図及び出土遺物

SP080 は胴部文様帯に 4 条 1 対の沈線で鋸歯文を施文し、口縁部文様帯には工具を引くようにして入れた刻みを 7 段廻らしている。貼付囲繞体は、横走沈線による位置決めを行った上で貼付されており、馬蹄形疋痕文が施文されている。SP083 は胴部文様帯に縦位の沈線で区画した後、斜位の沈線で間を埋めており、口縁部文様帯は横走沈線を引いた後、SP080 と同様工具を引くように刻みを入れている。貼付囲繞体には馬蹄形疋痕文が施文されている。(小野)

### 集中区 13 (図Ⅲ-44~47 図版 55-56)

位置：N-23, 0-22~24, P-23-24 区 規模：700×550 cm

関連遺構：ⅢF-101・102・105, ⅢP-10・15・48, ⅢPB-15, ⅢSB-21・23・24, ⅢCB-60・71

ⅢF-101A・B、ⅢP-15 を中心に広がる遺構遺物群を集中区 13 とした。これらの焼土を中心にやや一定の間隔を置いて各遺構・集中遺物等が出土している。特に、ⅢF-101A・B、ⅢP-15 は皿状の窪みの中心部で形成されており、中心的な焼土であった可能性がある。

ただし、ⅢF-105 は長軸方向が異なることから時間差を有する可能性がある。また試掘トレンチを挟んだ南側の遺構(ⅢP-10, ⅢSB-23)は、ⅢPB-15 の接合資料(22)から、当集中区に含めた。

(乾)

### ⅢF-101A・B, ⅢF-101・C, ⅢF-102, ⅢP-15・48, ⅢSB-21 (図Ⅲ-44・45・47 図版 55-4, 56-2~5)

位置・規模

ⅢF-101A・B 0-21 区 101A 52×43×11cm 101B 82×47×18cm

ⅢF-102 0-23 区 28×22×3cm ⅢP-15 0-23 区 60×52×14cm

ⅢP-48 0-22 区 36×28×14cm ⅢSB-21 0-23 区 120×(50)cm

確認・調査等：Ⅲc 層上面で 400×280cm 前後の楕円形で皿状に浅く窪む範囲の中央部付近からⅢF-101 を検出した。当初はⅢF-101A(1~6 層)のみの検出であったが、半截時に隣接する古い焼土(ⅢF-101B:7・8 層)を確認した。ⅢF-101A と 101B の分層は 101A に伴う付帯黒色層(4 層)によって切られていることから判断した。また 101A 燃焼面に続く 6 層は古い焼土(101B)を埋め戻し整地したものである。ⅢF-101B は燃焼面が削平されⅢb 層を主体とする 6 層を直接的に被覆している。燃焼面はいずれも東西方向に長軸をもつ楕円形を呈している。北東側には、ⅢF-101B から連続する面に炭化物集中 ⅢF-101.C を検出している。

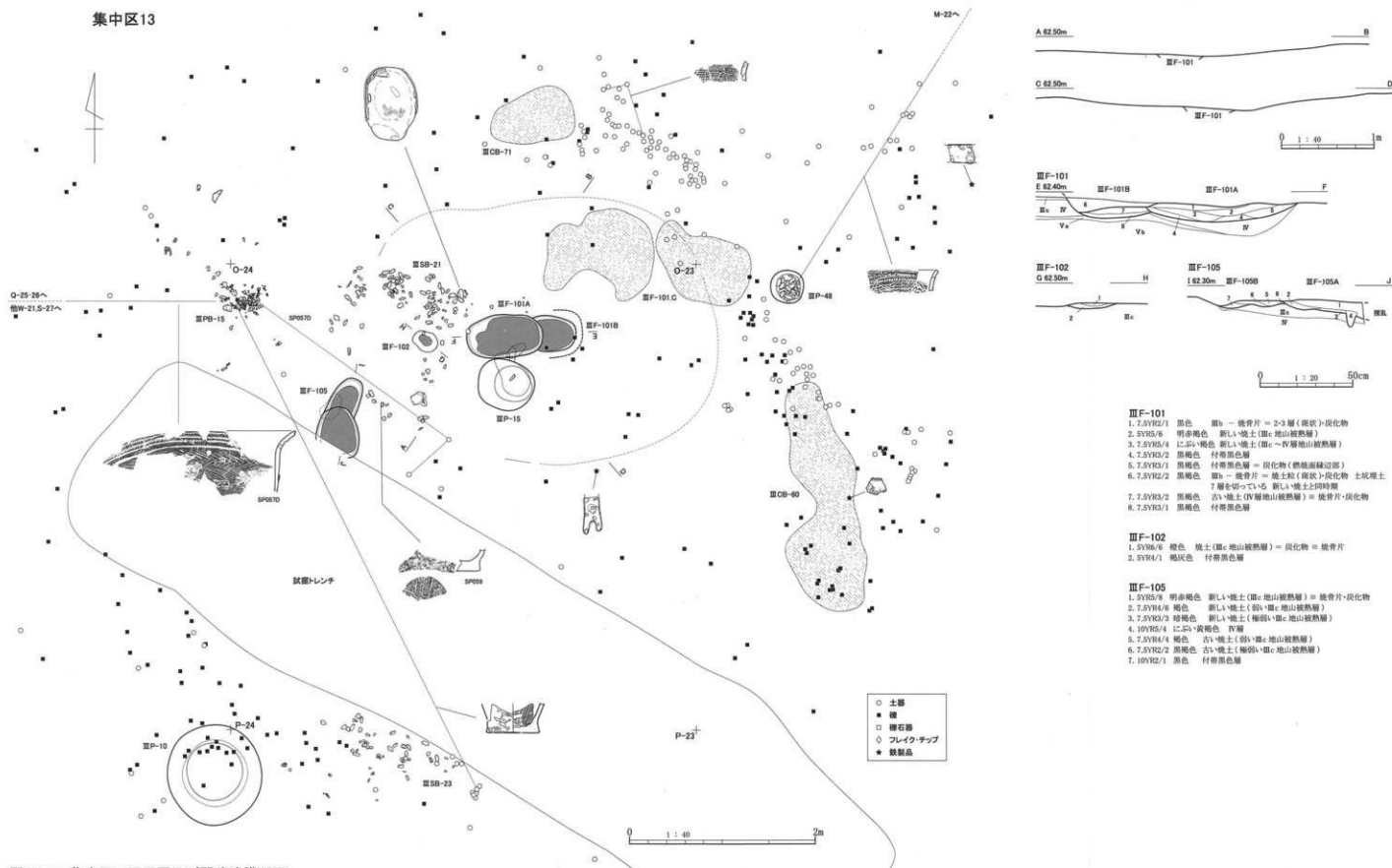
また、ⅢF-101A 燃焼面の灰層縁部を検出するため南側へ精査範囲を広げたところ、灰層がⅢc 主体層(ⅢP-15:1 層)の下に潜り込む状態であった。土坑の存在を想定した調査に切り替え、ⅢF-101A との関係を探るため南北方向へのトレンチを設定した。Ⅳ層下位まで灰層主体層(ⅢP-15:4 層)が続くことが判明した。ⅢP-15 は円形の浅い土坑で、ⅢF-101A の灰層埋め戻しの土坑である。埋土はⅢc 層を主体とし、風化が進んだ灰層や炭化物・焼骨片を斑状に含んでいる。

ⅢF-102：ⅢF-101A の西側約 50cm に燃焼面を遺失する状態で検出した。Ⅲc 層地山被熱層と付帯黒色土で構成されている。

ⅢSB-21：ⅢF-101A と 102 の検出作業において、北西側に隣接して出土した。一部はⅢF-102 の縁部部にまで広がり、構成礫はより上層から出土している。大きく 3 ブロックにまとまり、完形品で 54 点が出土している。うち、8 点に被熱の痕跡が認められる。長軸平均は 67.2mm とやや大型の礫を主体とする。共にたつき石(25)も出土している。

(乾)

集中区13



- 層F-101**
1. 2.YR2/4 黒色 竈 - 焼骨片 = 2-3層(層状)炭化物
  2. 5.YS5/6 明赤褐色 新しい埴土(黒c地山被熱層)
  3. 7.YR5/4 にかい褐色 新しい埴土(黒c~IV層地山被熱層)
  4. 2.YR2/2 黒褐色 付帯黒色層
  5. 2.YR3/1 黒褐色 付帯黒色層 = 炭化物(熱炭層縁辺部)
  6. 7.YR2/2 黒褐色 竈 - 焼骨片 = 焼土状(層状)炭化物 土埋埋土 7層から7cまで 新しい埴土と同層
  7. 7.YR3/2 黒褐色 古い埴土(IV層地山被熱層) = 焼骨片/炭化物
  8. 2.YR2/1 黒褐色 付帯黒色層
- 層F-102**
1. 5.YR5/6 褐色 埴土(黒c地山被熱層) = 炭化物 = 焼骨片
  2. 5.YR1/1 黄灰色 付帯黒色層
- 層F-105**
1. 5.YS5/6 明赤褐色 新しい埴土(黒c地山被熱層) = 焼骨片/炭化物
  2. 7.YR4/6 褐色 新しい埴土(弱い埴c地山被熱層)
  3. 7.YR2/2 暗褐色 新しい埴土(極弱い埴c地山被熱層)
  4. 5.YR5/4 にかい黄褐色 IV層
  5. 7.YR4/4 褐色 古い埴土(弱い埴c地山被熱層)
  6. 7.YR2/2 暗褐色 古い埴土(極弱い埴c地山被熱層)
  7. 5.YR2/1 褐色 付帯黒色層

図III-44 集中区13平面図及び関連遺構断面

遺構間の新旧関係：これらの遺構の観察より、ⅢF-101A およびⅢSB-21 が最も新しく、より古い周辺焼土の整地、攪拌の結果、ⅢF-101B・102、ⅢP-15 が形成されたものと思われる。（乾）

#### ⅢP-48（図Ⅲ-45 図版44-3～5）

位置：0-22区 規模：36×28×14cm

礫集中土坑：ⅢP-48 は内部に72点の棒状礫が納められた小規模な土坑である。礫は土坑中央部では敷き詰めるように積み重ねられ（ⅢSB-22）、土坑外壁側では縦位置に収められていた。土坑内部の堆積土はⅢc 主体のしまりのない土で、炭化物を少量含んでいる。礫出土状態の記録を取りながら遺物取上げを行ったが、全てを取上げるまでに4回の平面情報を記録する必要があった。坑底部には棒状礫と1に図示したⅧB3aの甕口縁部片の他、土壌が付着し明瞭ではないが、テン?と思われる陸棲小型獣の下顎骨が出土している（小野）

#### ⅢCB-60・71、ⅢF-101.C（図Ⅲ-44 図版56）

位置・規模：ⅢCB-71A N-23区 92×60cm 71B N・0-23区 116×80cm  
71C N・0-22・23区 108×72cm ⅢCB-60 0-22区 244×84cm

確認・調査等：ⅢF-101A・Bの北から南東部にかけて帯状に検出した炭化物集中区群である。多くは炭化材で構成されⅢCB-60からはブドウやキハダが少量出土している。ⅢCB-71とⅢF-101.C、ⅢCB-63とⅢF-101.Cとの間には擦文土器片がややまとまって出土しており、全体として北西から南へ帯状に連続している。（乾）

#### ⅢF-105（図Ⅲ-44 図版67-6・7）

位置・規模：0-23区 105A 54×36×6cm 105B 56×44×9cm

試掘トレンチ壁面にてレンズ状に地山被熱層を確認していた焼土である。検出作業を行った結果、南北に長軸を有する焼土で、長軸セクションを新たに設定した。1層はトレンチ壁面から連続する焼土で、トレンチより約45cmで1層が途切れる。しかし、さらに被熱度合いの弱い焼土を検出し、別時期に形成されたものとしてA・Bに細分した。長軸方向が全く異なることから前述した焼土・遺構群とは異なる性格、時期の可能性がある。（乾）

#### ⅢPB-15（図Ⅲ-44-21～22 図版55-5・108-2）

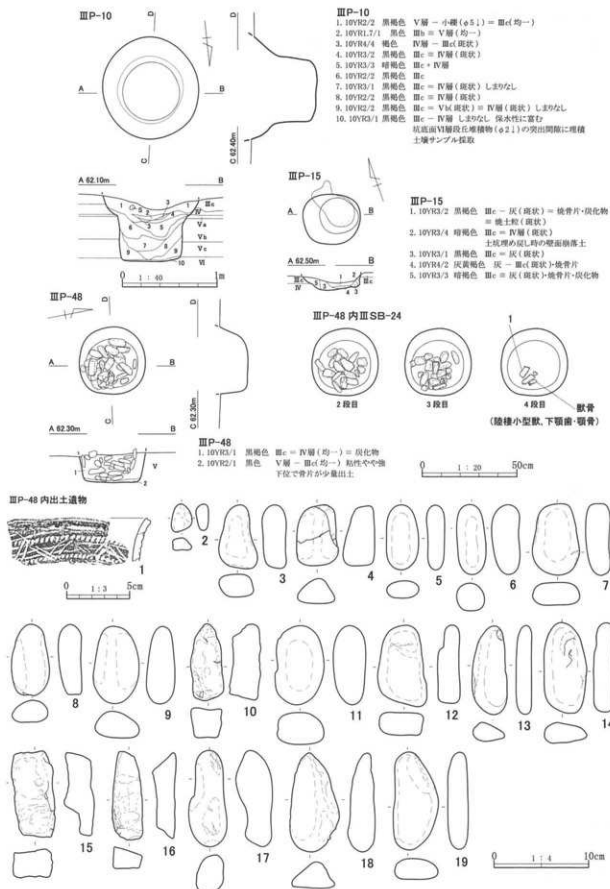
位置：0-23・24区 規模：60×42cm

確認・調査等：ⅢF-105の北西約1.5mの位置に検出した。口縁部から底部片までの1個体分（20～22）が出土している。22はⅢSB-23同一面出土の破片と接合関係をもっている。また、口縁部から胴部にかけての20も広範囲にわたって接合関係をもつ資料である。（乾）

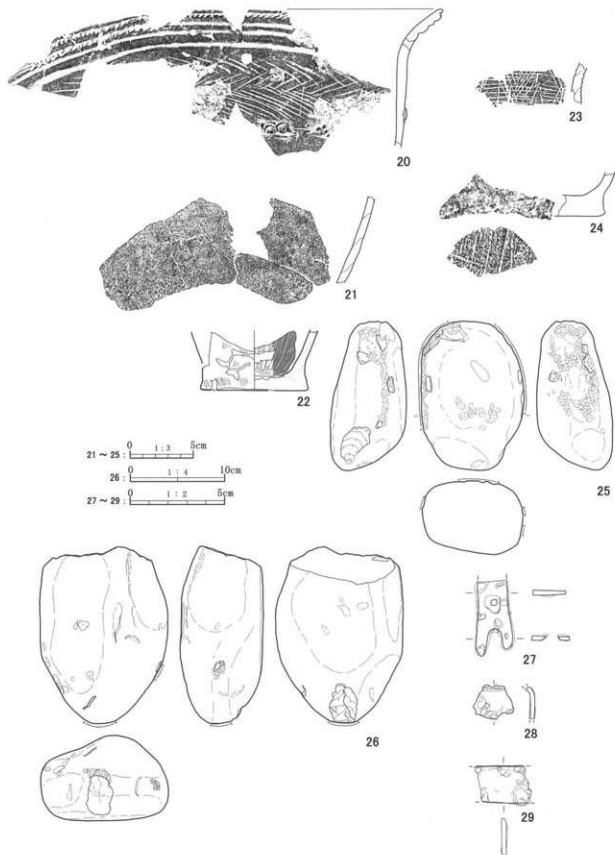
#### ⅢP-10（図Ⅲ-45 図版41-1・2）

位置：P-23・24区 規模：108×104×64cm

確認・調査等：Ⅲc層上面にて直径約100cmのほぼ円形落ち込みを検出した。半載し水平な坑底と明瞭な屈曲を持って垂直に立ち上がる壁面を確認したことからⅢP-10を設定した。確認面からの深

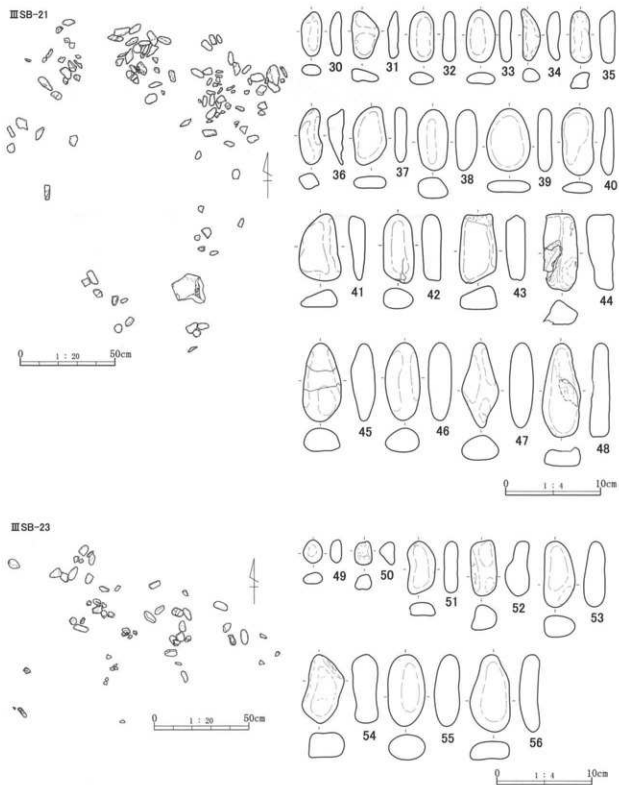


図Ⅲ-45 集中区13関連土坑及び出土遺物(1)



図Ⅲ-46 集中区13出土遺物(2)





図III-47 集中区13集石平面図及び出土遺物(3)

表Ⅲ-56 集中区13焼土属性表

挿図番号	図版番号	遺構名	グリッド	層位	平面形	規模 (cm)			灰・骨片の有無	備考
						長軸	短軸	厚さ		
Ⅲ-44	56-1・3・4	ⅢF-101A	O-23	Ⅲbl.	楕円形	52	43	11	骨	
Ⅲ-44	56-1・3・4	ⅢF-101B	O-23	Ⅲbl.	楕円形	82	47	18	骨	
Ⅲ-44	56-5	ⅢF-102	O-23	Ⅲbl.	楕円形	28	22	3	骨	
Ⅲ-44	67-6・7	ⅢF-105A	O-23	Ⅲbl.	楕円形	54	36	6	骨	
Ⅲ-44	67-6・7	ⅢF-105B	O-23	Ⅲbl.	楕円形	56	44	9	骨	

表Ⅲ-57 集中区13炭化物集中属性表

挿図番号	図版番号	遺構名	グリッド	層位	平面形	規模 (cm)		備考
						長軸	短軸	
Ⅲ-44	-	ⅢCB-71A	N-23	Ⅲbl.	不整形	92	60	
Ⅲ-44	-	ⅢCB-71B	N・O-23	Ⅲbl.	不整形	116	80	
Ⅲ-44	-	ⅢCB-71C	N・O-22-23	Ⅲbl.	不整形	108	72	
Ⅲ-44	-	ⅢCB-60	O-22	Ⅲbl.	不整形	244	84	

表Ⅲ-58 集中区13土坑属性表

挿図番号	図版番号	遺構名	グリッド	層位	平面形 調査面/ 坑底面	調査面規模		坑底面規模		深さ (cm)	長軸方向	調査面 長短比	坑底面 長短比	出土 遺物	備考
						長軸	短軸	長軸	短軸						
Ⅲ-45	41-1・2	ⅢP-10	P-23・24	Ⅲbl.	円形/円形	108	104	80	80	64	N-2° W	1.03	1.00	-	
Ⅲ-45	56-1・2	ⅢP-15	O-23	Ⅲbl.	円形/円形	60	52	40	38	14	N-66° W	1.15	1.05	-	
Ⅲ-45	44-3~5	ⅢP-48	O-22	Ⅲbl.	円形/円形	36	28	36	24	14	-	1.28	1.50	-	

表Ⅲ-59 集中区13出土土器属性表

挿図 番号	図版 番号	遺構名	個体 名称	分類	遺物番号	グリッド	層位	器種	部位	器面調整		点数	備考	
										内側	外側			
Ⅲ-45-1	108-12	ⅢSB-24	SPO49A	ⅤB2a	37807	O-22	Ⅲbl.	甕	口縁	ハケメ シナ	ハケメ ナデ	1		
					31284	M-22	Ⅲbl.				1			
Ⅲ-46-20	108-5	ⅢPB-15	SPO57D	ⅤB3b	34166.34167	O-23	Ⅲbl.	甕	口縁～ 胴部	ハケメ シナ	ハケメ ナデ	2		
					32497.32526.32557 32561.32563.32564他					内面黒色処理	シナ	13		
Ⅲ-46-21	108-6	ⅢPB-15	SPO57A	ⅤB3b	32494.32507.32540	O-24	Ⅲbl.	甕	胴部	ハケメ シナ	ハケメ ナデ	3		
					32520	O-23	Ⅲbl.		内面黒色処理	シナ	1			
Ⅲ-46-22	108-7	ⅢPB-15	SPO57M	ⅤB3b	32539.3262他	O-23	Ⅲbl.	甕	底部	ハケメ シナ	ハケメ ナデ	18		
Ⅲ-46-23	108-8		SPO55B	ⅤB2a	33776.33779	N-23	Ⅲbl.	甕	胴部	シナ	ナデ	2		
Ⅲ-46-24	108-9	ⅢSB-21	SPO59	ⅤB	31956	O-23	Ⅲbl.	甕	底部	ナデ	内面黒色処理	シナ	1	

表Ⅲ-60 集中区13出土遺物属性表

挿図 番号	図版 番号	個体 名称	遺物 番号	遺物名	分類	層位	遺構名	グリッド	計測値 (mm)			重量 (g)	材質	備考
									長軸	短軸	厚さ			
Ⅲ-46-25	108-11	-	33629	たたき石	Ⅱ B3	Ⅲbl.	ⅢF-101-102	O-23	119.0	84.0	60.0	758.0	Sa.	
Ⅲ-46-26	108-10	-	29395	たたき石	Ⅱ B2	Ⅲbl.	ⅢP-10	P-24	(188.0)	138.0	87.0	3040.0	Sa.	
Ⅲ-46-27	108-14	-	30719	鉄鏝未成品?	-	Ⅲbl.	ⅢX-03	O-23	(40.0)	21.5	2.5	8.1	Fe	
Ⅲ-46-28	108-15	-	25648	板状製品	-	Ⅲbl.	ⅢCB-60	O-22	(21.8)	18.2	6.0	3.0	Fe	
Ⅲ-46-29	108-16	-	31953	板状製品	-	Ⅲbl.	ⅢSB-21	O-23	(30.0)	22.0	3.0	7.0	Fe	

表Ⅲ-61 ⅢSB-21礫属性表

挿入 番号	図版 番号	個体 名称	遺物 番号	層位	状態	計測値(mm)					長短比		重量(g)	被熱	材質	備考	
						長軸	標準 偏差	短軸	標準 偏差	厚さ	標準 偏差	長短比					標準 偏差
Ⅲ-7-30	109-17	-	31896	Ⅲbl.	完形	47.0	-20.2	22.0	-13.4	12.0	-6.1	2.14	0.21	14.6	-	Sa.	
Ⅲ-7-31	109-17	-	31883	Ⅲbl.	完形	51.0	-16.2	29.0	-6.4	11.0	-7.1	1.76	-0.17	18.6	-	Mud.	
Ⅲ-7-32	109-17	-	31891	Ⅲbl.	完形	53.0	-14.2	27.0	-8.4	14.0	-4.1	1.96	0.03	25.5	-	Sa.	
Ⅲ-7-33	109-17	-	31876	Ⅲbl.	完形	55.0	-12.2	30.5	-4.9	13.0	-5.1	1.80	-0.13	28.4	-	Sa.	
Ⅲ-7-34	109-17	-	31839	Ⅲbl.	完形	55.0	-12.2	20.0	-15.4	14.0	-4.1	2.75	0.82	17.1	-	Mud.	
Ⅲ-7-35	109-17	-	31892	Ⅲbl.	完形	55.0	-12.2	22.0	-13.4	16.0	-2.1	2.50	0.57	24.2	-	Mud.	
Ⅲ-7-36	109-17	-	31879	Ⅲbl.	完形	59.0	-8.2	25.0	-10.4	17.0	-1.1	2.36	0.43	23.6	-	Sa.	
Ⅲ-7-37	109-17	-	31857	Ⅲbl.	完形	62.0	-5.2	35.0	-0.4	13.0	-0.1	1.77	-0.16	36.1	-	Sa.	
Ⅲ-7-38	109-17	-	31908	Ⅲbl.	完形	64.0	-3.2	32.0	-3.4	23.0	4.9	2.00	0.07	60.2	-	Sa.	
Ⅲ-7-39	109-17	-	31887	Ⅲbl.	完形	66.0	-1.2	46.0	-10.6	15.0	-5.1	1.43	-0.30	54.1	-	Sa.	
Ⅲ-7-40	109-17	-	31873	Ⅲbl.	完形	71.0	3.8	24.0	-1.4	13.0	-5.1	2.09	0.16	36.5	-	Sa.	被熱
Ⅲ-7-41	109-17	-	31840	Ⅲbl.	完形	71.0	3.8	44.0	8.6	17.0	-1.1	1.61	-0.32	55.8	-	Mud.	被熱
Ⅲ-7-42	109-17	-	31889	Ⅲbl.	完形	73.0	5.8	32.0	-3.4	21.0	2.9	2.28	0.35	62.7	-	Sa.	
Ⅲ-7-43	109-17	-	31859	Ⅲbl.	完形	72.0	4.8	40.0	4.6	20.0	1.9	1.80	-0.13	92.1	-	Mud.	
Ⅲ-7-44	109-17	-	31922	Ⅲbl.	完形	81.0	13.8	35.0	-0.4	29.0	10.9	2.31	0.38	99.8	-	Sa.	
Ⅲ-7-45	109-17	-	31920	Ⅲbl.	完形	83.0	15.8	41.0	5.6	25.0	6.9	2.02	0.09	90.8	-	Sa.	
Ⅲ-7-46	109-17	-	31902	Ⅲbl.	完形	82.0	14.8	37.0	1.6	24.0	5.9	2.22	0.29	86.5	-	Sa.	
Ⅲ-7-47	109-17	-	31916	Ⅲbl.	完形	89.0	21.8	39.0	3.6	24.0	5.9	2.28	0.35	80.4	-	Mud.	
Ⅲ-7-48	109-17	-	31929	Ⅲbl.	完形	99.0	31.8	41.0	5.6	21.0	2.9	2.41	0.48	96.6	-	Sa.	
完形合計						3626.3	700.0	1969.2	324.8	978.4	291.9	104.00	15.00	3020.1			
完形平均値						67.2	13.0	35.4	6.0	18.1	5.4	1.93	0.28	55.9			
遺物総重量														5620.8			

※完形 54点

表Ⅲ-62 ⅢSB-23礫属性表

挿入 番号	図版 番号	個体 名称	遺物 番号	層位	状態	計測値(mm)					長短比		重量(g)	被熱	材質	備考	
						長軸	標準 偏差	短軸	標準 偏差	厚さ	標準 偏差	長短比					標準 偏差
Ⅲ-7-49	109-18	-	33097	Ⅲbl.	完形	25.0	-31.2	20.0	-12.5	12.0	-8.6	1.25	-0.47	7.3	-	Sa.	
Ⅲ-7-50	109-18	-	33048	Ⅲbl.	完形	24.0	-32.6	18.0	-15.7	15.0	-5.1	1.40	-0.32	7.7	-	Sa.	
Ⅲ-7-51	109-18	-	33017	Ⅲbl.	完形	56.0	-0.2	30.0	-2.5	9.0	-11.6	1.87	0.15	32.7	-	Sa.	
Ⅲ-7-52	109-18	-	33028	Ⅲbl.	完形	59.0	2.8	28.0	-4.5	25.0	4.4	2.11	0.39	50.0	-	Sa.	
Ⅲ-7-53	109-18	-	33024	Ⅲbl.	完形	69.0	12.8	33.0	0.5	23.0	2.4	2.09	0.37	67.5	-	Sa.	
Ⅲ-7-54	109-18	-	33027	Ⅲbl.	完形	73.0	16.8	45.0	12.5	27.0	6.4	1.62	-0.10	101.1	-	Sa.	
Ⅲ-7-55	109-18	-	33013	Ⅲbl.	完形	75.0	18.8	40.0	7.5	27.0	6.4	1.88	0.16	100.9	-	Sa.	
Ⅲ-7-56	109-18	-	33050	Ⅲbl.	完形	81.0	24.8	42.0	9.5	21.0	0.4	1.93	0.21	72.0	-	Sa.	
完形合計						1123.3	328.5	649.4	176.8	412.5	113.0	34.41	5.20	1133.1			
完形平均値						56.2	16.4	32.5	8.8	20.6	5.7	1.72	0.26	56.7			
遺物総重量														2202.8			

※完形 20点

表Ⅲ-63 ⅢSB-24礫属性表

挿入 番号	図版 番号	個体 名称	遺物 番号	層位	状態	計測値(mm)					長短比		重量(g)	被熱	材質	備考	
						長軸	標準 偏差	短軸	標準 偏差	厚さ	標準 偏差	長短比					標準 偏差
Ⅲ-45-2	109-19	-	37808	Ⅲbl.	完形	30.0	-53.1	22.0	-20.7	13.0	-13.3	1.39	-0.61	9.0	-	And.	
Ⅲ-45-3	109-19	-	37374	Ⅲbl.	完形	68.0	-14.2	41.0	-2.8	25.0	-0.8	1.75	-0.25	87.1	-	Sa.	
Ⅲ-45-4	109-19	3S0399	37042nd	Ⅲbl.	完形	64.0	-18.4	44.0	2.2	33.0	6.6	1.45	-0.55	107.8	-	Sa.	組2点
Ⅲ-45-5	109-19	-	37014	Ⅲbl.	完形	68.0	-14.4	34.0	-7.8	19.0	-7.4	2.00	0.00	62.5	-	Sa.	
Ⅲ-45-6	109-19	-	37013	Ⅲbl.	完形	74.0	-8.3	32.0	-9.8	30.0	3.6	2.31	0.31	85.9	-	Sa.	
Ⅲ-45-7	109-19	-	37040	Ⅲbl.	完形	75.0	-7.3	50.0	8.2	26.0	-0.4	1.50	-0.50	133.4	-	Sa.	
Ⅲ-45-8	109-19	-	35492	Ⅲbl.	完形	76.0	-6.3	40.0	-1.8	24.0	-2.4	1.90	-0.10	91.3	-	Sa.	
Ⅲ-45-9	109-19	-	37378	Ⅲbl.	完形	81.0	-1.3	49.0	7.2	30.0	3.6	1.65	-0.35	135.6	-	Sa.	
Ⅲ-45-10	109-19	-	37375	Ⅲbl.	完形	81.0	-1.3	35.0	-6.8	33.0	6.6	2.31	0.31	128.6	-	Sa.	
Ⅲ-45-11	109-19	-	37027	Ⅲbl.	完形	84.0	1.7	52.0	10.2	35.0	8.6	1.62	-0.38	192.2	-	Sa.	
Ⅲ-45-12	109-19	-	37001	Ⅲbl.	完形	86.0	3.7	52.0	10.2	23.0	-3.4	1.65	-0.35	151.5	-	Sa.	
Ⅲ-45-13	109-19	-	35499	Ⅲbl.	完形	93.0	16.7	37.0	-4.8	16.0	-10.4	2.51	0.51	80.6	-	Sa.	
Ⅲ-45-14	109-19	-	35490	Ⅲbl.	完形	95.0	12.7	45.0	3.2	21.0	-5.4	2.11	0.11	132.9	-	Sa.	
Ⅲ-45-15	109-19	-	35486	Ⅲbl.	完形	91.0	8.7	46.0	4.2	31.0	-4.6	1.98	-0.02	155.8	-	Sa.	
Ⅲ-45-16	109-19	-	35491	Ⅲbl.	完形	93.0	10.7	32.5	-9.3	25.0	-1.4	2.98	0.86	103.8	-	Sh.	
Ⅲ-45-17	109-19	-	37011	Ⅲbl.	完形	102.0	19.7	40.0	-1.8	39.0	12.6	2.55	0.55	177.8	-	Sa.	
Ⅲ-45-18	109-19	-	37026	Ⅲbl.	完形	104.0	21.7	53.0	11.2	29.0	2.6	1.96	-0.04	163.7	-	Sa.	
Ⅲ-45-19	109-19	-	37050	Ⅲbl.	完形	104.0	21.7	48.0	6.2	20.0	-6.4	2.17	0.17	136.9	-	Sa.	
完形合計						4199.9	427.4	2129.9	258.4	1344.8	214.8	101.88	14.30	5884.3			
完形平均値						82.4	8.4	41.8	5.1	26.4	4.21	2.00	0.28	115.4			
遺物総重量														7294.3			

※完形 51点

さは64cmで、開口部付近で大きく開く特徴をもつ。堆積状態では坑底面に1~2cm程度の薄層で、保水性に富む10層が堆積している。9層は開口部のⅢc層の崩落層で自然堆積の土坑である。3層はIV層主体土の褐色砂質土で、本遺構外からの廃土と思われる。特徴的形態であり、最下層の土壌についても他の土坑では検出しない状況であることから、何らかの特殊作業用の施設と考え、周囲の柱穴精査を繰り返し行ったが、柱穴と判断できるものはなかった。なお、10層は寄生虫卵分析を行ったが、少量の花粉を分析するのみであった(第V章6節)。(乾)

**ⅢSB-23** (図Ⅲ-47・図版109-19) 位置: O-P-23区 規模: 100×(40) cm

確認・調査: 試掘トレンチに差し掛かってⅢSB-23を検出した。構成礫は、完形品20点が出土している。長軸は55~70mm前後のもの25mm前後のものに分かれる。また、被熱礫も含む。

(乾)

出土遺物(図Ⅲ-47): 20~22はⅢPB-15出土の同一個体片で、20はQ-25の他、S-27など広範囲に接合破片を有する土器である。直立する胴部文様帯で口縁部は外反する。口唇部は切り出し状で1条の沈線が廻り、斜位の列点文が重複している。外反部分には3条の平行沈線、文様帯には綾杉文が施されている。文様帯下縁には馬蹄形疔痕文を有する貼付帯が施されている。貼付帯剥落部分には文様割り付け用の沈線が施されている。この様な製作、施文に係る特徴は、他にも数点確認できる。21は胴部下半の資料。22は底部片。23はⅢCB-71に隣接する土器片集中から出土した胴部文様帯資料で、横走沈線地に鋸歯状の沈線文が施されている。24はⅢF-105東側で出土した土器で、器表面はミガキが施され、丁寧なつくりの底部資料である。25はⅢSB-21から出土したたき石で、両側縁を使用し、荒い敲打痕が観察できる。26はたき石で、例外的に規模の大きいものである。素材礫の長軸下端部に敲打痕が残されていることから、通常の台石等の設置と異なり、振り下ろしによるものと判断し分類した。他、27は集中区中央部の縁辺部から出土した板状の鉄製品で、形態から鉄製の未成品の可能性もある。28・29は板状の鉄製品である。(乾)

**集中区15** (図Ⅲ-48・49) 位置: M-30・31区 規模: 810×560 cm

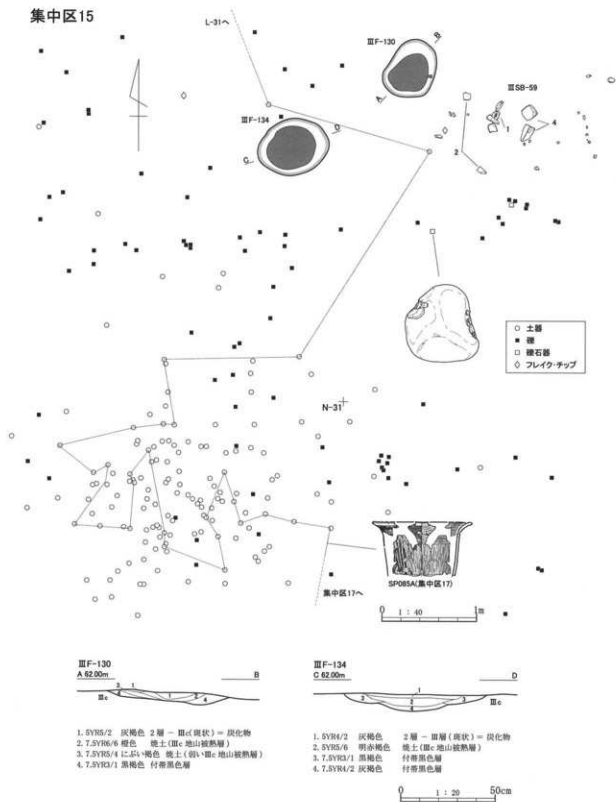
関連遺構: ⅢF-130・134, ⅢSB-59

**ⅢF-130** (図Ⅲ-48・図版71-6・7) **ⅢF-134** (図Ⅲ-48 図版73-2・3)

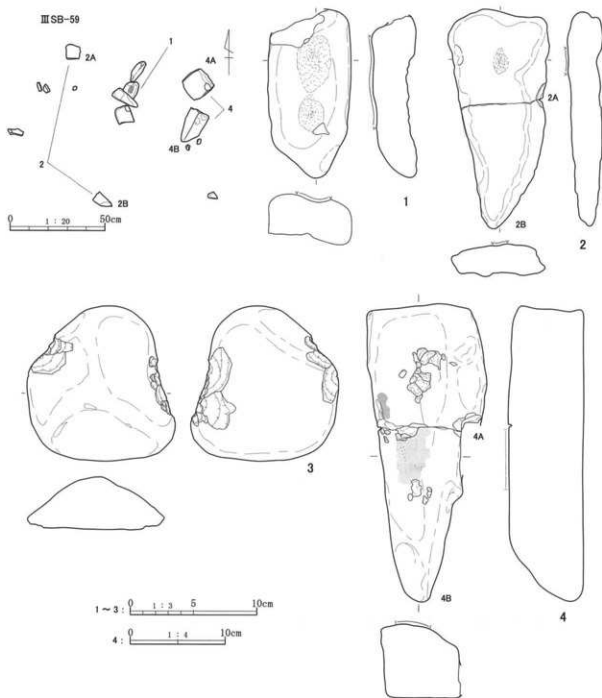
位置: M-30・31区 規模: 130 64×50×6 cm 134 76×58×8 cm

確認・調査等: 沢状地形の緩い傾斜面にて、約80cm南にあるⅢF-134と同時に検出し、類似する焼土である。確認面層位はⅢb層調査が終了し、擦文文化期の遺物も切れるⅢc層上位で、周辺より土器等の遺物が殆ど出土していないことから、包含層の土層観察に注意を怠ったことにより、形成面で検出することができなかった。

堆積状態: 焼骨片は含まないが、炭化物を少量含み、Ⅲb層と斑状になる燃焼面(1層)が残存していることから、焼土形成面と思われるⅢb層下位より窪む燃焼面となる。地山被熱層(130:2・3層134:2層)はレンズ状に発達し、明瞭な付帯黒色土層(130:4層 134:3・4層)も発達している。フローテーションにより、極微量のヒエ、ブドウ科、クルミ属の炭化種子とサケ科椎骨1点などの魚骨が回収されており、土層観察の所見と一致する内容であった。(乾)



図Ⅲ-48 集中区15平面図及び関連遺構断面



図Ⅲ-49 集中区15集石平面図及び出土遺物

## ⅢSB-59 (図Ⅲ-49) 位置: M-30区 規模: 47×40cm

ⅢSB-59 は整理段階で設定した礫集中で、大型の被熱礫で構成される特徴をもつ。出土状態は、約30cmの間隔をもつ2列で、礫が直立した状態で出土していた。これらの礫が炉壁を構成している焼土を想定し、セクションラインを設け半截した。しかし、焼土およびその痕跡は認められなかったことから、構成礫の輪郭等を記録し、包含層資料として取上げたものである。このため、出土状態の写真やフローテーションサンプルは回収していない。

構成礫は、長軸100mm以上の礫で、全て被熱した礫6点で構成されている。うち1はたたき石、4は台石である。

ⅢSB-59出土の掲載遺物は1・2・4である。1は縦長の扁平礫を素材とし、長軸2ヵ所に楕円形の敲打痕を有する。敲打痕は単位が不明瞭である。素材礫の敲打使用面のみ黒色化した被熱痕が認められる。2はⅢSB-59の列を構成するものでないが、比較的近位置より出土したことから掲載した。長軸端上方に浅い敲打痕範囲が認められ、2Bのみに黒色化した被熱痕が認められる。4は、2点が接合し長軸316mmの大型の棒状礫である。接合個体毎に被熱状態が異なっていることから、折損後に被熱した資料で、4Aは礫中央部に荒い敲打痕と左側縁の下方に錆が付着している。4Bの中央部には滑沢面を有する。3は、板状礫側縁に剝離を伴う敲打痕を有するものである。

遺物出土状態(図Ⅲ-54-1 個体SP085): ⅢF-134の南側約3.3mに土器片の集中範囲がある。ⅢF-130・134との密着な層位関係は不明である。ほぼ図Ⅲ-54-1の個体片のみで構成される集中で、小破片がやや散逸した状態であったことから、集中番号を付さなかったものと思われる。なお、本個体は集中区17でも多量の破片が出土しており、当集中区個体片との接合関係も確認できている。さらに、L-31区やX-32区への接合関係もある。個体の事実記載は集中区17で記載しているので省略する。

(乾)

表Ⅲ-64 集中区15焼土属性表

挿図番号	図版番号	遺構名	グリッド	層位	平面形	規模(cm)			灰・骨片の有無	備考
						長軸	短軸	厚さ		
Ⅲ-48	71-6・7	ⅢF-130	M-30	ⅢcU	楕円形	64	50	6	-	
Ⅲ-48	73-2・3	ⅢF-134	M-31	ⅢcU	楕円形	76	58	8	-	

表Ⅲ-65 集中区15出土礫石器属性表

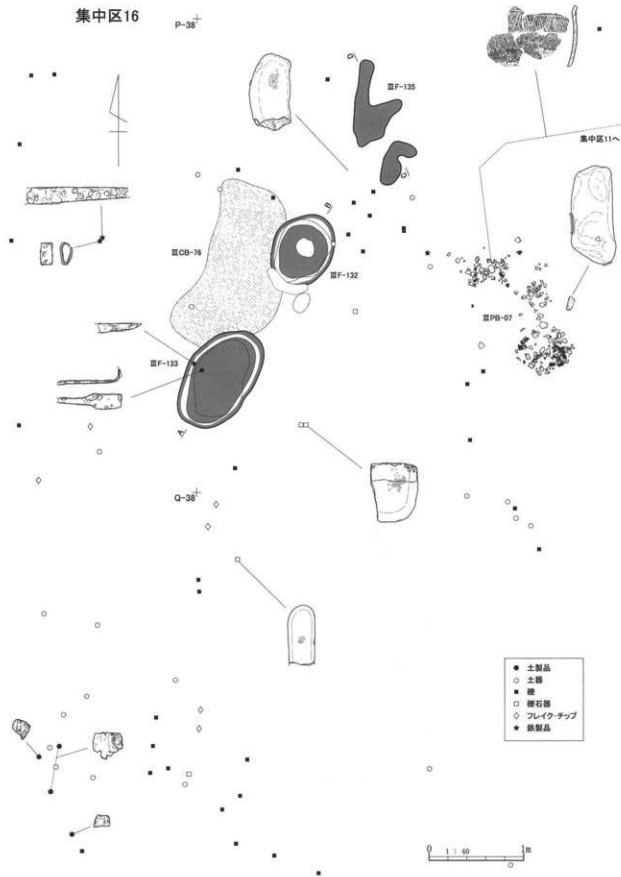
挿図番号	図版番号	個体名称	遺物番号	遺物名	分類	層位	遺構名	グリッド	計測値(mm)			重量(g)	材質	備考
									長軸	短軸	厚さ			
Ⅲ-49-1	110-1	-	26672	たたき石	I A3	Ⅲbl.	ⅢSB-59	M-30	133.0	66.0	35.0	418.0	Sa.	被熱
Ⅲ-49-2	110-2	3ST0021	26674	たたき石	I A1	Ⅲbl.	ⅢSB-59	M-30	174.0	80.0	26.0	400.0	Sa.	被熱
			26679	たたき石										
Ⅲ-49-3	110-3	-	26690	たたき石	ⅡA2	Ⅲbl.	ⅢSB-59	M-30	123.0	117.0	42.0	625.0	Sa.	被熱
Ⅲ-49-4	110-5	3ST0027	26666	台石	-	Ⅲbl.	ⅢSB-59	M-30	316.0	129.0	78.0	3820.0	Sa.	被熱
			26667	台石										

## 集中区16 (図Ⅲ-50~52 図版54-6, 72-1・3~5, 73-1)

位置: P-Q-37-38区 規模: 700×600cm

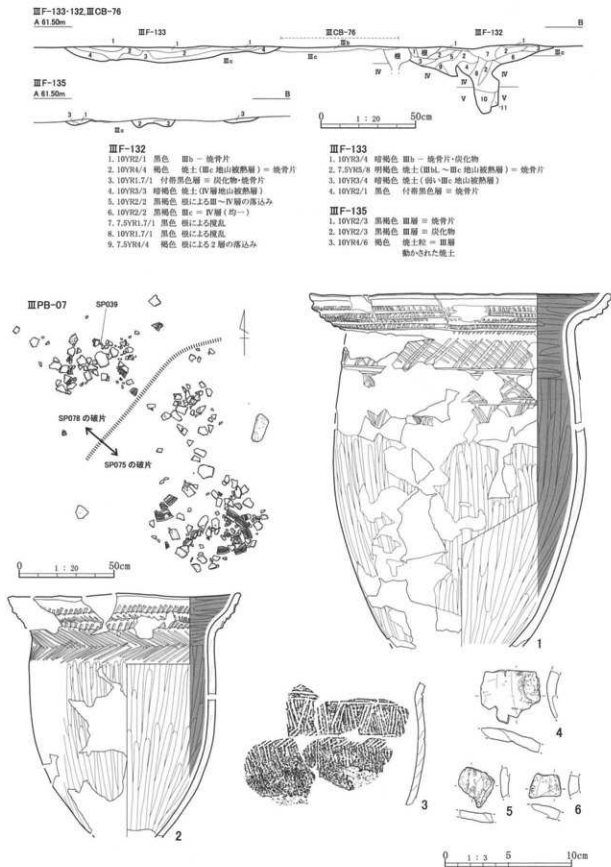
関連遺構: ⅢF-132・133・135 ⅢCB-76 ⅢPB-07

確認・調査: 調査区西側縁辺部のⅢb層調査中、楕円形の焼土と2基(ⅢF-132・133)と付属する炭化物集中(ⅢCB-76)を検出した。周辺の精査でⅢF-132の北側に不整形の焼土(ⅢF-135)を検出。長軸にセクションラインを設定し掘り下げると、北側の焼土は根穴により著しい攪乱を受けていることがわかった。ⅢF-133の燃焼面からは鉄器が2点(図Ⅲ-50)出土し、周辺からも鉄器・礫

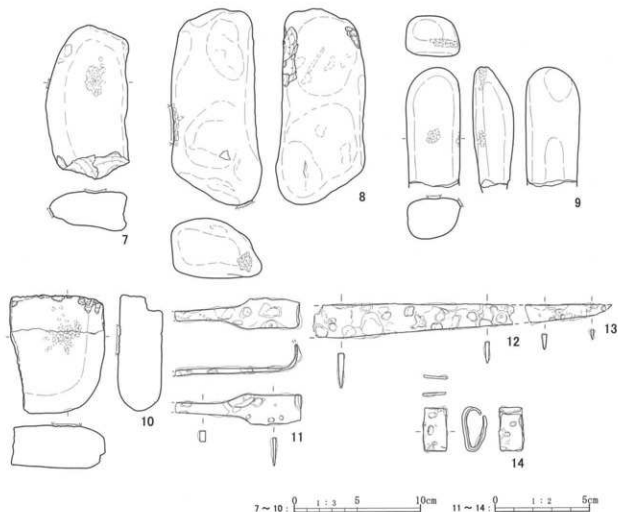


図Ⅲ-50 集中区16平面図





図Ⅲ-51 集中区16関連遺構断面及び出土遺物(1)



図Ⅲ-52 集中区16出土遺物(2)

表Ⅲ-66 集中区16焼土属性表

挿図番号	図版番号	遺構名	グリッド	層位	平面形	規模(cm)			灰・骨片の有無	備考
						長軸	短軸	厚さ		
Ⅲ-51	72-3	ⅢF-132	P-37	ⅢbL	楕円形	76	66	34	骨	
Ⅲ-52	72-4	ⅢF-133	P-37・38	ⅢcU	円形	116	72	8	骨	
Ⅲ-53	73-1	ⅢF-135	P-37	ⅢbL	不整形	118	56	4	骨	

表Ⅲ-67 集中区16炭化物集中属性表

挿図番号	図版番号	遺構名	グリッド	層位	平面形	規模(cm)		備考
						長軸	短軸	
Ⅲ-51	-	ⅢCB-76	P-37・38	ⅢbL	不整形	180	88	

表Ⅲ-68 集中区16出土土器属性表

挿図番号	図版番号	遺構名	個体名称	分類	遺物番号	グリッド	層位	器種	部位	器面調整		点散	備考
										内側	外側		
Ⅲ-51-1	110-6	ⅢPB-07	SP075A	ⅧB34	21909,21980,22000 22640,22874他	P-37	ⅢbL	甕	口縁～胴部	ハナメ 内面黒色処理	ハナメ 内面	76	
Ⅲ-51-2	110-7	ⅢPB-07	SP078A	ⅧB36	22654,22672,22734他	P-37	ⅢbL	甕	口縁～胴部	ハナメ 内面黒色処理	ハナメ 内面	40	
Ⅲ-51-3	110-8	ⅢPB-07	SP039H	ⅧB33?	22696,22738,22739 33684	P-37 N-33	ⅢbL	甕	胴部	ハナメ 内面	ハナメ ナゲ	3 1	

石器・羽口など特異な遺物が集中している。また、焼土東側約3m地点にはⅢPB-07が出土している。172×114cmの範囲に3個体の破片が散在し、1・2の個体は検出時から分布域を異にしている(図Ⅲ-51)。(奈良)

### ⅢF-132-133-135 ⅢCB-76 (図Ⅲ-50~52 図版72-3・4 73-1) 位置:P-37-38区

規模:ⅢF-132 76×66×34cm(木根が貫入) ⅢF-133 116×72×8cm

ⅢF-135 118×56×4cm ⅢCB-76 180×88cm

堆積状態(図Ⅲ-51):ⅢF-132は燃焼面が著しく攪乱を受けている。2・8・10層は縮まりなく、傾きも一定ではないため根穴と判断した。133は地山Ⅲc層に被熱層を形成し、1層は土壌化した灰層である。135は被熱層がブロック状に散在しているため、132起源の焼土と思われる。

遺物出土状態(図Ⅲ51-52):ⅢF-133の1層から鉄器2点出土している。いずれも焼骨片を確認した下位からの検出であるため焼土に伴うものである。また、ⅢCB-76はクルミを含む炭化物範囲で、133の燃焼面からも視認できるクルミが出土している。羽口は焼土から南に約4mの段丘縁辺部に近いところで4点出土している。

出土遺物(図Ⅲ-52):1は南東側に出土したⅧB3dの甕で外側は剥落が著しい。口縁部文様帯は数条の横走沈線に刻文が、胴部文様帯には3段に区画した横走沈線に「X」状沈線が施される。内面はハケメ、ミガキと黒色処理が施される。2は北西側に出土したⅧB3bの甕で、胴部文様帯に綾杉文が内面はミガキと黒色処理が施される。3はⅧB3cの甕胴部である。胴部文様帯の構成は1に類似する。4~6は羽口で4は外面にガラス質発泡が認められる。胎土は縁辺に磨耗が著しいことから全て未焼成と思われる。胎土に砂粒やスサの混入はない。7~10は平坦面、側縁稜、端部に敲打痕を有するたたき石である。9は平坦面の敲打は浅く不明瞭なため対象物が柔らかいものであったと考えられる。10は被熱により全体が赤色化している。11~13は刀子で11・13はⅢF-133の燃焼面から出土した。11は刀子の刃部を折り曲げ二次的加工している。14は帯金具である。ⅢF-132はフローターションからチップ0.08g、ⅢF-133はチップ0.52g、鉄片1.52gを回収した。動物遺存体は魚中心で、サケ属、ウグイが出土している。また、ⅢF-135は金属器によるカットが著しい。ⅢCB-76は金属器の加工痕明瞭な哺乳網(哺乳網?)が出土している。炭化種子はⅢCB-76からオオムギ、コムギ、キビ、シソ属、ブド科、キハダ属、クルミ、コナラ属が出土している。ⅢF-132-133はキビ、ブド科、キハダ属、クルミが出土し、ⅢF-132はコナラ属も出土している(第V章第3・4節)。(奈良)

表Ⅲ-69 集中区16出土遺物属性表

神図 番号	図版 番号	個体 名称	遺物 番号	遺物名	分類	層位	遺構名	グリッド	計測値(mm)			重量(g)	材質	備考
									長軸	短軸	厚さ			
Ⅲ-91-4	110-9	3ICP001	24309地	羽口	-	Ⅲbl	-	Q-38	(47.0)	(43.0)	(9.0)	14.3	Cray.	地1点
Ⅲ-91-6	110-10	-	33973	羽口	-	Ⅲcl	-	Q-38	(32.0)	(28.0)	(8.0)	4.6	Cray.	
Ⅲ-91-6	110-11	-	33976	羽口	-	Ⅲcl	-	Q-38	(25.0)	(19.0)	(9.0)	3.4	Cray.	
Ⅲ-92-7	111-12	-	22756	たたき石	I A1	Ⅲbl	ⅢPB-07	P-37	122.0	66.0	30.0	343.0	Sa.	
Ⅲ-92-8	111-13	3ST0016	22743	たたき石	I B3	Ⅲbl	ⅢPB-07	P-37	156.0	76.0	42.0	601.0	And.	
Ⅲ-92-9	111-14	-	27567	たたき石	I B3	Ⅲbl	ⅢF-133	Q-37	(95.0)	47.0	32.0	192.0	Sa.	
Ⅲ-92-10	111-15	3ST0048	33981地	たたき石	II A1	Ⅲcl	ⅢF-132,133	P-37	104.0	96.0	34.0	376.0	Sa.	被熱 地1点
Ⅲ-92-11	111-16	-	34352	刀子	-	I	ⅢF-133	-	67.0	17.0	(17.0)	8.7	Fe	
Ⅲ-92-12	111-17	-	33966	刀子	-	Ⅲbl	ⅢF-132	P-38	(105.0)	18.0	18.0	19.9	Fe	
Ⅲ-92-13	111-18	-	34353地	刀子	-	I	ⅢF-133	P-38	(46.2)	10.0	8.0	2.6	Fe	地1点
Ⅲ-92-14	111-19	-	33965	帯金具	-	Ⅲbl	ⅢF-132	P-37	24.8	13.9	13.3	4.6	Fe	

## 集中区 17 (図Ⅲ-53・54 図版 43-5・6, 73-4・5, 76-7・8)

位置: 0・P-31・32区 規模: 10.5×7.5m

関連遺構: ⅢP-21 ⅢF-136 ⅢCB-77 ⅢSB-19 ⅢKP-44~47・86・90

確認・調査: P-31・32区を調査するにあたり、Ⅲb層下位からⅢSB-19、ⅢCB-77、ⅢF-138を検出した。それぞれ平面・断面および微細図の記録を行い、遺物を取り上げながら周辺を面的に掘り下げたところⅢSB-19北東側に円形のプランを確認した。土坑は埋め戻しによるもので1の破片が出土し、ⅢSB-19の礫は埋土上位に出土している。柱穴はⅢc層~Ⅳ層上面までジョレンで面的に精査を繰り返し、散水した後乾燥の度合いを観察しながら黒色プランが等間隔または列を成すものを考慮して調査を進めた。結果、不規則であるが6本の柱穴を確認した。(奈良)

## ⅢP-21 (図Ⅲ-53・54 図版 43-5, 73-4・5, 76-7・8)

位置: P-31区 規模: 72×68cm

堆積状態: 4層以外にはV層ブロックが少なからず認められ、1, 2, 4~6層はV層主体層が堆積している。壁面に確認されるプライマリーなV層より上位に堆積していることから埋め戻しと判断した。坑底面はほぼ水平で締まりない。(奈良)

## ⅢF-136 ⅢCB-77 (図Ⅲ-53) 位置: P-31・32区

規模: ⅢF-136 44×30×6cm ⅢCB-77 144×44cm

堆積状態: ⅢF-136の1層地山被熱層に少量の炭化物混じる。

出土遺物 (図Ⅲ-54): 動物遺存体はⅢF-136よりサケ属が多く出土する。炭化種子はⅢCB-77よりキハダ属・クルミが出土している。(第V章第3・4節)。(奈良)

## ⅢKP-44~47・86・90 (図Ⅲ-53) 位置: 0・P-30区 規模・構成: 不明

柱穴: 44~47・90は平~丸底で、86はやや尖り気味である。全て掘立柱で全体的に締まり弱く、46・47のB, D層は特に締りがないため柱痕の可能性が高い。(奈良)

## ⅢSB-19 (図Ⅲ-53・54 図版 76-7・8) 位置: P-31区 規模: 72×60cm

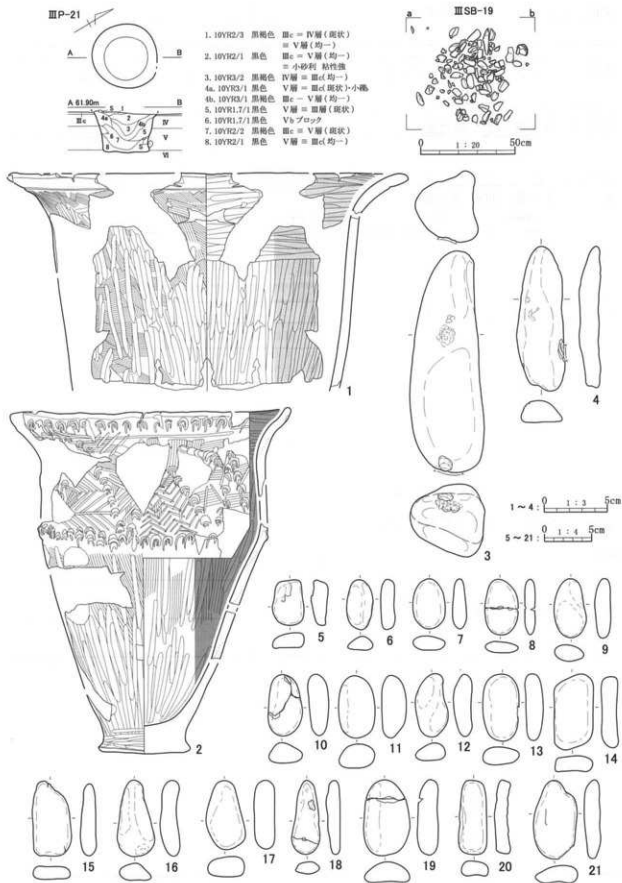
遺物出土状態: ⅢP-21の南西側Ⅲb層下位より棒状礫がまとまった状態で出土した。ⅢP-21の埋土上位に棒状礫が出土することから土坑が埋まりきった後に形成されたと思われる。西側に土器が分布しており、検出層位も同じであることから同時期の所産と考えられる。

出土遺物: 3は平坦部、端部に敲打痕が認められるたたき石である。4は縁辺を一部敲打により打ち欠いている加工痕ある礫である。5~21はⅢSB-19の完形礫で標準偏差が長軸11.6mm、短軸6.2mm、厚さ4.2mmと長軸長にばらつきがみられる。(奈良)

## 出土遺物 (図Ⅲ-54-1・2)

1はⅧB3eの甕で、胴上半部までしか接合できなかったが、本遺跡出土土器の中では大型の部類である。口縁の大きく開く器形で、口縁下に段上の沈線が1条廻る。外面が粗雑なハケメ調整の後、部分的にやはり粗雑なミガキ調整が行われている。内面も粗いミガキ調整の後、黒色処理が施され





図Ⅲ-54 集中区17関連遺構及び出土遺物

表Ⅲ-70 集中区17焼土属性质表

神図番号	図版番号	遺構名	グリッド	層位	平面形	規模(cm)			灰・骨片の有無	備考
						長軸	短軸	厚さ		
Ⅲ-53	73-4-5	ⅢP-130	P-31	Ⅲbl.	楕円形	44	30	6	-	

表Ⅲ-71 集中区17炭化物集中属性质表

神図番号	図版番号	遺構名	グリッド	層位	平面形	規模(cm)		備考
						長軸	短軸	
Ⅲ-53	-	ⅢCB-77	P-32	Ⅲbl.	不整形	144	44	

表Ⅲ-72 集中区17土坑属性质表

神図番号	図版番号	遺構名	グリッド	層位	平面形	調査面規模(cm)			坑底面規模(cm)	深さ	長軸方向	調査面長短比	坑底面長短比	出土遺物	備考
						長軸	短軸	坑底面							
Ⅲ-54	43-5	ⅢP-21	P-31	Ta-c1	円形/円形	72	68	44	42	44	-	1.05	1.04	-	

表Ⅲ-73 集中区17ⅢKP属性质表

神図番号	図版番号	遺構名	規模(cm)		傾き(度)	タイプ	備考
			上端	下端			
Ⅲ-53	-	ⅢKP-44	17	11	12	5°	直立
Ⅲ-53	-	ⅢKP-45	18	8	16	10°	直立
Ⅲ-53	-	ⅢKP-46	34	8	34	3°	直立
Ⅲ-53	-	ⅢKP-47	21	3	34	2°	直立
Ⅲ-53	-	ⅢKP-86	20	2	42	2°	直立
Ⅲ-53	-	ⅢKP-90	15	10	26	8°	直立

表Ⅲ-74 集中区17出土土器属性质表

神図番号	図版番号	遺構名	個体名称	分類	遺物番号	グリッド	層位	器種	部位	器面調整		点数	備考
										内側	外側		
Ⅲ-54-1	111-20	SP085A	ⅢB3c	ⅢSB-19	29676,29713他	P-31	Ⅲbl.	甕	口縁へ削部	内面黒色処理	ハケメ跡	9	
					29684,29685	P-32	Ⅲbl.					2	
					33695,33905,34401他	O-31	Ⅲbl.					5	
					22471,33914,334688他	P-31	Ⅲbl.					12	
					34407	P-32	Ⅲbl.					1	
					34941	Q-32	Ⅲbl.					1	
26753	Q-28	Ⅲbl.	1										
63990,65809他	X-32	Ⅲbl.	9										
Ⅲ-54-2	111-19	SP077A	ⅢB3c	ⅢSB-13	28383	P-31	Ⅲbl.	甕	口縁へ削部	内面黒色処理	ハケメ跡	1	
					29670,29705,29774他	P-31	Ⅲbl.					9	
					34485	P-31	Ⅲbl.					1	
					33912	O-31	Ⅲbl.					1	
					33697,33912,33914他	P-31	Ⅲbl.					13	
					30548	Q-36	Ⅲbl.					2	

表Ⅲ-75 集中区17出土礫石器属性质表

神図番号	図版番号	個体名称	遺物番号	遺物名	分類	層位	遺構名	グリッド	計測値(mm)			重量(g)	材質	備考
									長軸	短軸	厚さ			
Ⅲ-54-3	111-21	-	26297	たつき石	1 B3	Ⅲbl.	ⅢCB-77	P-32	175.0	59.0	56.0	566.0	Sa.	
Ⅲ-54-4	111-22	-	29583	加工痕のある礫	-	Ⅲbl.	ⅢSB-19	P-31	114.0	40.0	17.0	41.0	Mud.	

表Ⅲ-76 ⅢSB-19礫器属性质表

神図番号	図版番号	個体名称	遺物番号	層位	状態	計測値(mm)						重量(g)	被熱	材質	備考		
						長軸	標準偏差	短軸	標準偏差	厚さ	標準偏差					長短比	標準偏差
Ⅲ-54-6	111-24	-	29559	Ⅲbl.	完好	48.0	-16.6	33.5	0.5	18.0	-0.1	1.43	-0.56	37.7	-	Sa.	
Ⅲ-54-6	111-24	-	29642	Ⅲbl.	完好	53.0	-11.6	28.0	-5.1	15.0	-3.1	1.89	-0.10	25.6	-	Sa.	
Ⅲ-54-7	111-24	-	29526	Ⅲbl.	完好	53.0	-11.6	34.0	1.0	14.0	-4.1	1.56	-0.43	35.6	-	Sa.	
Ⅲ-54-8	111-24	-	29741	Ⅲbl.	完好	59.0	-5.6	36.0	3.0	10.0	-8.1	1.64	-0.35	32.9	-	Sa.	
Ⅲ-54-9	111-24	-	29558	Ⅲbl.	完好	63.0	-1.6	34.0	1.0	17.0	-6.1	1.85	-0.14	43.8	-	Sa.	
Ⅲ-54-10	111-24	3S051A	28460他	Ⅲbl.	完好	65.0	0.4	36.0	3.0	22.0	4.0	1.81	-0.18	65.2	-	Sa.	他2点
Ⅲ-54-11	111-24	-	29560	Ⅲbl.	完好	66.0	1.4	38.0	5.0	26.0	8.0	1.74	-0.25	88.0	-	Sa.	
Ⅲ-54-12	111-24	-	29543	Ⅲbl.	完好	61.0	-3.6	34.0	1.0	20.0	2.0	1.79	-0.20	52.8	-	Sa.	
Ⅲ-54-13	111-24	-	29557	Ⅲbl.	完好	71.0	6.4	39.0	6.0	19.0	0.9	1.82	-0.17	72.4	-	Sa.	
Ⅲ-54-14	111-24	-	29597	Ⅲbl.	完好	80.0	15.4	42.0	9.0	18.0	-0.1	1.9	-0.09	95.4	-	Sa.	
Ⅲ-54-15	111-24	-	29538	Ⅲbl.	完好	79.0	14.2	41.0	7.5	15.0	-3.3	1.92	-0.06	101.8	-	Sa.	
Ⅲ-54-16	111-24	-	29628	Ⅲbl.	完好	80.0	15.2	40.0	6.5	21.0	2.7	2.00	0.02	68.0	-	Sa.	
Ⅲ-54-17	111-24	-	28454	Ⅲbl.	完好	72.0	7.4	42.0	9.0	22.0	4.0	1.71	-0.28	92.2	-	Sa.	
Ⅲ-54-18	111-24	3S052Z	29519他	Ⅲbl.	完好	72.0	7.4	30.0	-3.1	14.0	-4.1	2.4	0.41	38.6	被熱	Sa.	他1点
Ⅲ-54-19	111-24	3S052Z	29566他	Ⅲbl.	完好	80.0	15.4	49.0	16.0	22.0	4.0	1.63	-0.36	110.4	-	Sa.	他1点
Ⅲ-54-20	111-24	-	29590	Ⅲbl.	完好	78.0	13.4	30.0	-3.1	17.0	-1.1	2.6	0.61	57.4	-	Sa.	
Ⅲ-54-21	111-24	-	29568	Ⅲbl.	完好	83.0	18.4	46.0	13.0	17.0	-1.1	1.81	-0.19	87.9	-	Sa.	
完形合計						3769.1	675.1	1944.2	360.8	1064.1	245.0	114.60	23.20	3004.3			
完形平均値						64.8	11.6	33.5	6.2	18.3	4.2	1.98	0.40	51.8			
遺物総重量													10659.3				

未完形 58点

ている。2はⅧB3cの歪なつくりの甕である。文様も大雑把で、胴部文様帯に馬蹄形圧痕文を縦位、斜位に連続して押し付けた後、太く深い沈線を描いた文様で間を埋めている。口縁部文様帯と胴部文様帯下端にも馬蹄形圧痕文を廻らせている。文様帯下端部は貼付帯ではなく、本体の粘土を寄せて上げて作出している。内外面ともハケメ調整の後、粗いミガキ調整を加え、内面は黒色処理している。(小野)

#### 集中区 18 (図Ⅲ-55~60 図版 57)

位置：S・T・U-19区，T-20区 規模：700×550cm 関連遺構：ⅢF-08

確認・調査：T-19・20区付近のⅢb層下位の調査で、1個体分のⅢPB-01を検出した。検出作業と同時に、周囲の包含層調査を進行中、銅甕(18)や坏(ⅢPB-05・2)、たたき石や台石などの礫石器類が同一面に散在した状態で出土した。また、U-19区付近では同一面に燃焼面を有す、比較的規模の大きいⅢF-08を検出した。これらは調査段階から、ⅢF-08を中心に出土、分布する一括遺物群と認識し、礫石器構成や焼土の形態や内容物などから“作業場跡”と称していた範囲である。今回の報告にあたり、新たな遺構名として「集中区」と統一したことから、「集中区 18」とした。遺物検出作業と同時に柱穴確認も行い、取り上げ後はジョレンを用いて精査を進めたが、認定できた柱穴は2本(ⅢKP-11・13)のみであった。(乾)

#### ⅢF-08 (図Ⅲ-55 図版 57-4・5, 112)

位置：T・U-19区 規模：152×92×9cm

確認・調査：U・T-19・20区のⅢb層下位の調査がほぼ終了し、遺物が面的に出土した状態で焼骨片を多く含む範囲を確認した。焼土を想定した調査に切り替え、燃焼面の検出作業を行った結果、長軸約150cmで規模の大きい長楕円形の燃焼面(1層)を検出した。燃焼面は周囲の遺物面より僅かに窪んだ状態で、多量の焼骨片や炭化物を含んでいた。平面形は、緩く「く」の字状にくびれていることから焼土の重複等を検討したが、1基の焼土と判断した。おそらくは堆積図6層の木の根などの影響と思われる。また伴う遺物として燃焼面北半部の東西両側の同一面にたたき石3点(6~8)が出土している。

堆積状態：燃焼面層(1a~1c層)は2cm前後とやや厚く堆積している。地山被熱層(2・3層)も発達し、付帯黒色土層も比較的明瞭に発達している。燃焼面層のフローテーションの結果、シカを主体とする哺乳綱とウグイの焼骨片が多量に出土している。なお、サケ科椎骨破片は1点のみである。植物遺体ではクルミがややまとまった量で、他にブドウ科を回収している。

出土遺物：6~8はたたき石で、6は板状礫右側縁の比較的鋭角な稜部分と表面の稜部分に敲打痕が認められる。7は角柱状の大型礫を素材とし、4ヵ所の稜部分を使用箇所としている。また、実測図の上縁部分には左右側面に剥離が及ぶ加工痕が認められる。重量等から台石として利用されていた可能性が高い。二次被熱により変色している。8は棒状礫の表裏面の長軸端部付近に敲打痕が認められる。表面は敲打範囲が広く、大きく窪む。敲打痕は木目細かく、単位は不明瞭である。また、左上側面には剥離を伴う敲打面と表裏面からの剥離加工が施されている。(乾)



## ⅢKP-11-13 (図Ⅲ-55)

調査・確認：本集中区は焼土の規模および内容物から、擦文文化期の平地式住居を想定し、ⅢF-08を中心に4グリッド範囲を、Ⅲc層上面からⅣ層下位にかけて柱穴精査を繰り返した範囲でもある。Ⅲb層の落ち込み10ヵ所以上を半載したが、柱穴と認定できたものは、この2基のみである。

柱穴：いずれも類似形態の柱穴で、打ち込みによる杭跡で、確認面からの深さが20cmである。確認面はⅣ層下位であることから、構築面からの推定のが30cm以上に達する。(乾)

## ⅢPB-01 (図Ⅲ-56-1 図版57-1~3) 位置：T-19・20区

確認・調査：本集中区で最初に確認した遺物集中で、20ライン付近のⅢb層下位で検出した。土器片は密集した状態で検出している。構成遺物は擦文土器1個体分(1)とたたき石2点(10・12)で、12は後述するⅢPB-05出土の破片と接合関係をもつ。土器片の出土状態は、大きく2段に重なり、検出時の1段目には土器の器表面を上にするやや大型の破片が多く、脱色等のやや風化が認められた。下位の2段目は、土器内面を向けるものが主体を占めていた。集中する土器片が出土する基底面とたたき石の下底面とは一致するレベルである。

出土遺物(図Ⅲ-56~58)：1は擦文土器甕で口縁部から底部付近までの復元ができた。口縁部はほぼ全周するが、胴部から底部付近にかけては実測面側のみが復元できた個体である。器形は胴部が直立し、口縁部は外反し、直立気味に口唇部が立ち上がる。口縁部は平行沈線と斜位および縦位の刻文が施されている。胴部文様帯は1~3条1対で2列構成の縦位沈線文で区画され、縦位と横位の綾杉文が充填されている。下縁は斜格子状沈線文により区画されている。器面調整は胴部全面にハケメが施されている。胴部下半は、文様帯の沈線文施文後に再調整され、文様帯下縁付近は弧を描くハケメが明瞭に観察できる。10・12はたたき石で、10は完形品で素材礫表裏面の中央部と右及下方の側縁に敲打痕を有する。表面の敲打痕はやや窪んでおり、単位は細かく不明瞭である。全面が被熱により黒色化しており被熱している。12は破損礫を素材とし、頂部や側縁の裏面側を使用している。(乾)

## ⅢPB-05 (図Ⅲ-56-2 図版112) 位置：U-20区

確認・調査：ⅢPB-01調査中の周辺Ⅲb層下位除去中に検出した。構成遺物は坏1個の1/4破片(2)とたたき石(12)の小破片1点が出土している。出土状態から本来、より大きな1破片であった可能性がある。

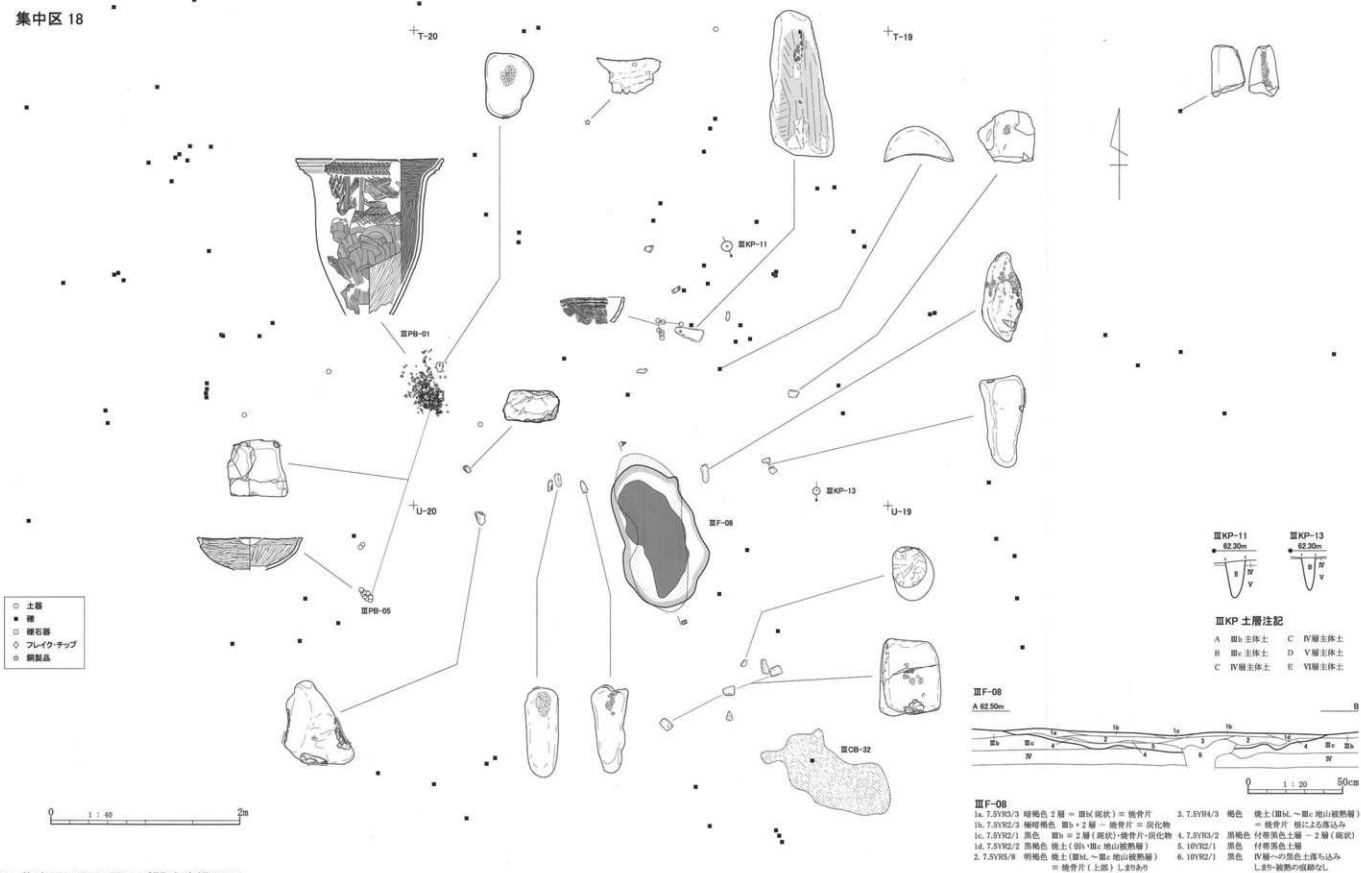
出土遺物：2の坏は口縁部から胴部下位にかけて復元できた資料である。胴部はややふくらみをもって立ち上がり、口縁部とは不明瞭な段を有する。口唇部は丸くやや外反している。器表面、内面共に強いミガキ調整が施されている。(乾)

## ⅢCB-32 (図Ⅲ-55~58 図版112)

確認・調査：本集中区の南側を調査中にⅢb層下位で検出した。集中を構成する炭化物の殆どが炭化材で、フローテーションサンプルからはキハダが極少数出土している。(乾)

遺物出土状態(図Ⅲ-56~58)：上記の関連遺構以外も含めた集中区内からは、集中区の中心となるⅢF-08に周辺(50cm前後以内)からたたき石3点(5~7、うち1点は台石として使用の可能性有)が出土している。他の遺物はⅢF-08縁部より100cm前後の距離に、南側で台石(14)や自然礫(16)

集中区 18



図III-55 集中区18平面図及び関連遺構断面

等のブロック、140cm 北側に坏の小片(3)と滑沢面と敲打痕をもつ大型礫(15)や自然礫(17)、150cm 西側に火打石(4)とたたき石(13)、北西 200cm にⅢPB-01、西に 270cm の位置にⅢPB-05 が出土している。これらの状態を概観するとⅢF-08 の北部に多く、南部からの出土は殆ど無い。また、ⅢF-08 からの距離は約 140cm 以上の距離をおいて出土している。この他、北へ約 350cm の位置から被熱した銅錠片 1 点(18)が出土しているが、ⅢF-08 から離れた位置で、伴う遺物の可能性は不明である。(乾)

#### 遺物出土状態 (図Ⅲ-56～58)

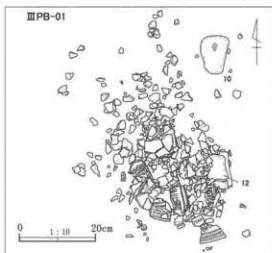
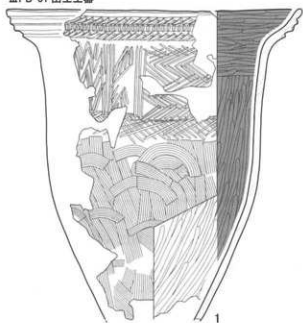
上記の関連遺構以外も含めた集中区内からは、集中区の中心となるⅢF-08 に周辺(50cm 前後以内)からたたき石 3 点(5～7)が出土している。他の遺物はⅢF-08 縁辺部より 100cm 前後の距離に、南側で台石(14)や自然礫(16)等のブロック、140cm 北側に坏の小片(3)と滑沢面と敲打痕をもつ大型礫(15)や自然礫(17)、150cm 西側に火打石(4)とたたき石(13)、北西 200cm にⅢPB-01、西に 270cm の位置にⅢPB-05 が出土している。これらの状態を概観するとⅢF-08 の北部に多く、南部からの出土は殆ど無い。また、ⅢF-08 からの距離は約 140cm 以上の距離をおいて出土している。この他、北へ約 350cm の位置から被熱した銅錠の破片 1 点(18)が出土しているが、ⅢF-08 から離れた位置で、伴う遺物の可能性は不明である。

出土遺物(図Ⅲ-56～58)：関連遺構以外からの出土遺物について記述する。3 は 15 と共に出土した坏の口縁部資料で、ミガキにより潰れた 2 条の沈線が痕跡的に残る。4 は緑色チャートを石材とする火打石で、転礫面を残す横長の板状剥片を素材としている。下縁の表裏面に連続する横長の小剥離が見られる。角度は 45° 以上の鈍角で縁辺部上面観や側面の稜線も凹凸が著しい。他の縁辺部については、若干の調整剥離が見られるものの、一方向からの剥離である。以上の特徴からスクレイパーなどの利器類ではなく、火打石として分類した。6・9・11・13 はたたき石で、6 は棒状礫の一侧縁に、9・11 は表面上部、13 は側縁および表面中央に敲打痕が認められる。14 は直方体状の礫を素材とする台石で、表裏面の中央部に敲打痕が残り、下縁の一部には剥離痕が認められる。15 は滑沢面および敲打痕を有する大型の角柱状礫である。滑沢面は 3 面にある。弱い稜線や擦痕も観察でき、使用面単位や方向が推定できる面もある。敲打痕は素材礫の両面に認められ、長軸端部側に偏る。16・17 は硬質な自然礫で、表面が極めて円滑な転礫で、いずれも被熱し変色している。18 は銅錠の口縁部資料で、被熱による変形が著しく保存状態は不良である。調査時点では、実測図のおおよそ 2 倍の大きさの破片であったが、取り上げ時点で損壊している。口唇部はやや肥厚し、尖状となっている。内面に沈線は施されていない。集中区 1・2 からも銅錠が出土しているが、本資料のみ赤褐色の腐食が進んでいる。成分分析の結果(第 VI 章第 8 節)でも他の資料と比較して Su. の数値が低く、Pb. の数値が高い。分析の結果から同一個体と思われる資料が集中区 1 から出土している。(乾)

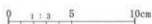
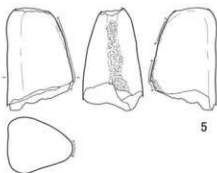
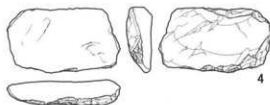
表Ⅲ-77 集中区18焼土属性表

挿図番号	図版番号	遺構名	グリッド	層位	平面形	規模(cm)			灰・骨片の有無	備考
						長軸	短軸	厚さ		
Ⅲ-55	57-4	ⅢF-08	T・U-19	ⅢbL	楕円形	152	92	9	-	作業場

ⅢPB-01 出土土器



ⅢPB-05 出土土器



図Ⅲ-56 集中区18出土遺物(1)



図Ⅲ-57 集中区18出土遺物(2)



図Ⅲ-58 集中区18出土遺物(3)

表Ⅲ-78 集中区18ⅢKP属性表

挿図 番号	図版 番号	遺構名	規模(cm)			傾き (度)	タイプ	備考
			上端	下端	深さ			
Ⅲ-55	-	ⅢKP-11	11	2	18	2°	打込み	
Ⅲ-55	-	ⅢKP-13	7	1	17	2°	打込み	

表Ⅲ-79 集中区18出土土器属性表

挿図 番号	図版 番号	遺構名	個体 名称	分類	遺物番号	グリッド	層位	器種	部位	器面調整		点数	備考		
										内側	外側				
Ⅲ-56-1	112-1	ⅢPB-01	SP001A	ⅤB3b	682,780,806,830他	T-19	Ⅲbl	甕	口縁へ 胴部	ハタ	ハタ	41			
					1621,1629,1630					T-20	Ⅲbl		3		
					3641					T-20	Ⅲbl	内面黒色処理		1	
					4021					T-20	Ⅲc		1		
Ⅲ-56-2	112-2	ⅢPB-05	SP505A	ⅤC4a	1837-1843,1845他	U-20	Ⅲbl	甕	口縁へ 体部	シキ	シキ	9			
					1766,1767					U-20	Ⅲbl		2		
Ⅲ-56-3	112-3	-	SP510A	ⅤC4a	3550	R-18	Ⅲc	甕	口縁	シキ	シキ	1			
					3606,3607,3609					T-19		内面黒色処理	シキ	3	

表Ⅲ-80 集中区18出土遺物属性表

挿図 番号	図版 番号	個体 名称	遺物 番号	遺物名	分類	層位	遺構名	グリッド	計測値(mm)			重量(g)	材質	備考
									長軸	短軸	厚さ			
Ⅲ-56-4	112-4	-	604	火打石	-	Ⅲbl	-	T-19	90.0	52.0	20.0	119.0	Qz-Sch.	
Ⅲ-56-5	112-5	-	1826	たたき石	I B2	Ⅲbl	-	T-18	(80.0)	52.0	47.0	200.0	Sa.	
Ⅲ-56-6	112-6	35T0038	628他	たたき石	I A3	Ⅲbl	ⅢF-08	T-19	145.0	70.0	36.0	363.0	Sa.	他3点
Ⅲ-57-7	112-7	-	3152	たたき石	I B2	Ⅲbl	ⅢF-08	T-19	189.0	86.0	71.0	1340.0	Sa.	
Ⅲ-57-8	112-8	-	602	たたき石	I B3	Ⅲbl	ⅢF-08	T-19	141.0	53.0	37.0	340.0	Sa.	
Ⅲ-57-9	112-9	-	601	たたき石	I B3	Ⅲbl	-	T-19	140.0	60.0	34.0	360.0	Sa.	
Ⅲ-57-10	112-10	-	685	たたき石	II A3	Ⅲbl	ⅢPB-01	T-19	103.0	89.0	43.0	440.0	Sa.	被熱
Ⅲ-57-11	112-11	-	624	たたき石	II A1	Ⅲbl	-	T-19	89.0	83.0	37.0	320.0	Sa.	被熱
Ⅲ-57-12	112-12	35T0028	839他	たたき石	II A2	Ⅲbl	ⅢPB-01-05	T-19	95.0	90.0	(27.0)	320.0	Sa.	他3点
Ⅲ-58-13	112-13	-	1762	たたき石	II B2	Ⅲbl	-	U-19	146.0	93.0	48.0	660.0	Sa.	
Ⅲ-58-14	112-14	35T0031	1748他	台石	-	Ⅲbl	-	U-19	181.0	168.0	85.0	2780.0	Sa.	被熱
Ⅲ-58-19	112-15	-	621	滑り面と敲打痕のある大型礎	II	Ⅲbl	-	T-19	302.0	135.0	89.0	4780.0	Sa.	
Ⅲ-58-16	112-16	-	1754	自然礎	ⅢB	Ⅲbl	-	U-19	86.0	65.0	53.0	340.0	Con.	被熱
Ⅲ-58-17	112-17	-	4476	自然礎	ⅢA	Ⅲbl	-	T-19	(108.0)	(55.0)	(43.0)	280.0	And.	被熱
Ⅲ-58-18	112-18	-	1580	銅鏡	-	Ⅲbl	-	T-19	(45.0)	(26.0)	1.3	11.0	Cu	被熱

## 第4節 土坑 (Ⅲ-59-60 図版41・42)

2カ年の調査で、集中区に入らない土坑を計8基検出した。円形のものと同様に近いものというように、集中区に関連する土坑と平面形では共通するが、堆積状態は様々な様相を呈する。(小野)

## ⅢP-12 (Ⅲ-59 図版41)

位置: J・K-26・27区 規模: 128×112×42cm 平面形: 隅丸方形

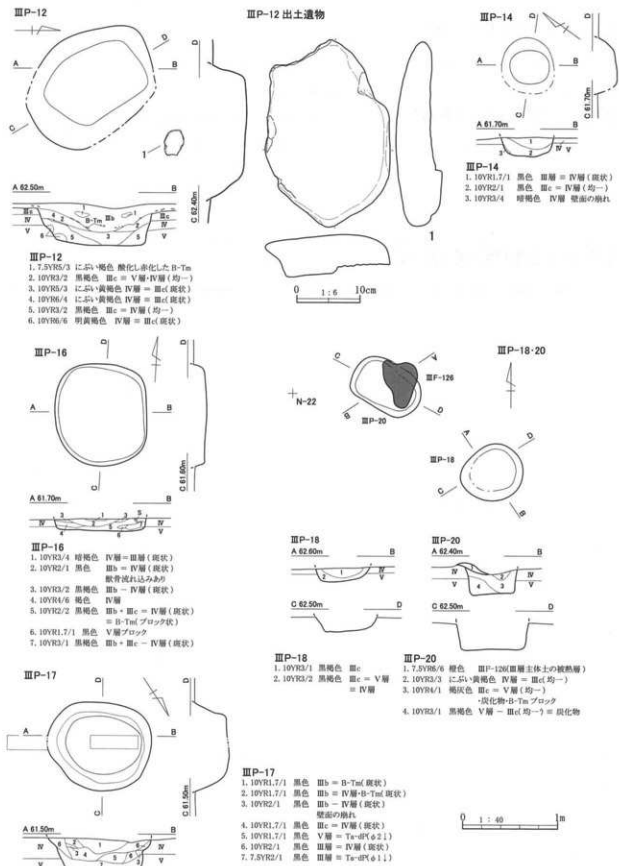
確認・調査: ⅢH-07の柱穴確認のためジョレン精査を行っていた際に、Ⅲc層上面においてⅢb層の落込みを検出した。27ラインのセクションベルトにかかるかたちであったため、ベルトを掘削し、全体の平面形を確認した上で土層観察面を設定し、半截した。結果、平坦な坑底部を検出したことから、土坑と判断し、ⅢP-12として設定した。断面の記録後、残り半分を掘削し、完掘状態の記録を行い、調査を終了した。なお本土坑上位には炭化物集中ⅢCB-64が形成されていた。

形態: 隅丸方形プランを呈し、V層を掘削し平坦な坑底面を形成している。壁面は北側では垂直に近い立ち上がりを見せ、南側ではやや開く形態をしている。

堆積状態: 土坑内の堆積土はⅢc層、及びⅣ層主体土が堆積し、V層起源の土は少ないことから、壁面のⅢc層・Ⅳ層の崩れによる覆土と考えられる。また上位にB-Tmが堆積していることから、B-Tm降下以前に構築された土坑と考えられる。

出土遺物: 土坑の脇で長軸295mmの板状礎が出土している。

(小野)



図Ⅲ-59 土坑(1)



ⅢP-16 (図Ⅲ-59 図版 42-3) 位置: P-36区 規模: 108×96×12cm

確認・調査: Ⅲc層下位からⅣ層上面にかけて柱穴調査をしている際、Ⅳ層上面で黒色の円形プランを検出した。短軸にセクションラインを設定し半掘した。断面観察の結果立ち上がりが明瞭で、坑底面が水平であることから土坑と判断し調査を行った。

堆積状態: 確認面はⅣ層上面であるが、坑底面に堆積する5層は斑状にB-Tmを含むため、掘りこみ面はⅢb層下位と考えられる。1~7層は自然堆積層で、2層からはシカの後臼歯が1点出土している(第V章第3・4節)。(奈良)

ⅢP-17 (図Ⅲ-59 図版 42-5-6) 位置: O-36区 規模: 100×92×16cm

確認・調査: Ⅲc層下位からⅣ層上面にかけて柱穴調査をしている際、Ⅳ層上面で黒色の円形プランを検出した。トレンチを設定してV層上面まで掘り下げると、坑底壁面の立ち上がりが明瞭であることから土坑であると判断し半載して調査を行った。

堆積状態: 1・2層はB-Tmを斑状に含み、3・4・6層はⅢ層主体の流れ込みで、5・7層はTa-dPを少量含む。起源はプライマリーなV層に含まれるもので自然堆積である。(奈良)

ⅢP-18 (図Ⅲ-59 図版 43) 位置: N-21区 規模: 68×60×28cm 平面形: 円形

確認・調査: 集中区1の調査終了後、N-21区の柱穴確認のためジョレン精査を行っていた際に検出した。土層堆積観察面を設定し半載した結果、V層中に平坦な坑底面の形成を確認したため、土坑と判断し、ⅢP-18として設定した。断面の記録後完掘し、平面の記録を行い、調査を終了した。

形態: 円形プランで、V層中にやや傾斜するが平坦な坑底部を形成している。壁面は開き気味に立ち上がる。

堆積状態: 堆積土はⅢc層主体で、V層の混入は少量であることから、壁面の崩れによる覆土と考えられる。(小野)

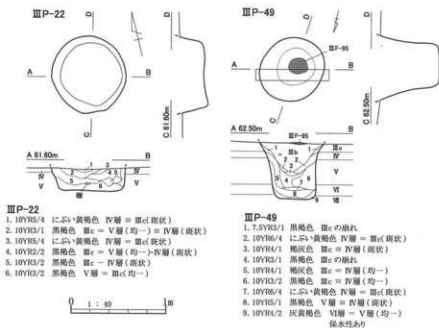
ⅢP-20 (図Ⅲ-59 図版 43) 位置: N-21区 規模: 76×56×18cm 平面形: 隅丸方形

確認・調査: ⅢP-18に隣接する位置で焼土を1基検出した(ⅢF-126)。焼土のプランを把握するため全体形状の検出に努めたところ、下位にⅢ層主体土の落込みを確認したことから、焼土と合せた土層堆積観察面を設定し、半載した。結果、V層中に平坦な坑底部の形成を確認したことから、土坑と判断し、ⅢP-20として設定した。断面の記録後、焼土サンプルを回収し、残り半分の掘削を行った。完掘後、平面形の記録を行い、調査を終了した。

形態: 隅丸方形プランで、V層中の坑底面は平坦であり、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。

堆積状態: 土坑内堆積土3層に炭化物とB-Tmブロックが混入し、4層がV層主体土であることから、埋め戻しによる埋土と考えられる。2層はⅣ層主体土で、埋め戻し後の壁面の崩れと考えられる。ⅢF-126は埋め戻し後の土坑上面に形成されている。

焼土: ⅢF-126は不整形プランの焼土で、層厚4cmの良好な焼土層を形成している。土壌サンプル中からは僅かな骨片の他、キビをはじめとする炭化種子も得られたが、キビについては集中区1からの混入の可能性が高い。(小野)



図Ⅲ-60 土坑(2)

表Ⅲ-81 土坑属性表

挿図 番号	図版 番号	遺構名	グリッド	層位	平面形		調査面規模(cm)		坑底面規模(cm)		深さ (cm)	長軸方向	調査面 長短比	坑底面 長短比	出土 遺物	備考
					調査面/ 坑底面	長軸	短軸	長軸	短軸							
Ⅲ-59	41-6	ⅢP-12	J-K-26-27	ⅢcU	隅丸方形/ 隅丸方形	128	112	104	72	42	N-30° W	1.14	1.44	-		
Ⅲ-59	42-1	ⅢP-14	R-29	-	円形/円形	(56)	60	40	36	20	N-49° E	-	1.11	-		
Ⅲ-59	42-3	ⅢP-16	P-36	ⅢbL	隅丸方形/ 隅丸方形	108	96	100	92	12	N-2° E	1.12	1.08	-		
Ⅲ-59	42-5	ⅢP-17	O-36	ⅢbL	楕円形/ 楕円形	100	92	80	80	16	N-50° W	1.08	1.00	-		
Ⅲ-59	42-7	ⅢP-18	N-21	ⅢcU	円形/円形	68	60	(48)	44	28	N-60° E	1.13	1.09	-		
Ⅲ-59	43-3	ⅢP-20	N-M-21	ⅢbL	隅丸長方形/ 隅丸長方形	76	56	64	48	18	N-60° W	1.35	1.33	-		
Ⅲ-60	43-7	ⅢP-22	P-35-36	ⅢbL	円形/円形	80	80	68	64	24	-	1.00	1.06	-		
Ⅲ-60	44-7	ⅢP-49	L-26	ⅢbL	円形/円形	72	64	40	36	60	-	1.12	1.11	-		

表Ⅲ-82 土坑出土礎石器属性表

挿図 番号	図版 番号	個体 名称	遺物 番号	遺物名	分類	層位	遺構名	グリッド	計測値(mm)			重量(g)	材質	備考
									長軸	短軸	厚さ			
Ⅲ-59-1	113-1	-	30333	自然礫	ⅢA	ⅢbL	ⅢP-12	J-26	295.0	196.0	74.0	4,400	Sa.	

III-P-22 (図III-60 図版43-7) 位置:P-35・36区 規模:72×64×24cm

確認・調査:IIIc 下位からIV層上面にかけて柱穴調査をしている際、IV層上面で黒色の円形プランを検出した。短軸にセクションラインを設定し半載した。断面観察の結果坑底面がほぼ水平で、壁面が垂直に立ち上がることから土坑であると判断し調査を行った。

堆積状態(図III-60):1~5層はIIIc~IV層主体の黒色土およびにぶい黄褐色土が流れ込み、6層上面に堆積している。覆土の堆積から自然堆積と思われる。(奈良)

III-P-49 (図III-60 図版44) 位置:L-26区 規模:72×64×60cm 平面形:円形

確認・調査:L-26区にてIII-F-95を検出した際、焼土の下に径60cmのIIIb層の落込みを確認した。土坑の可能性が想定されたことから、焼土と合わせた堆積状態観察面を設定し、半載した。結果VII層中に平坦な坑底部を確認したことから、土坑として判断した。当初III-F-95に関連する土坑と考えたため、遺構名をIII-F-95.PITとして設定していたが、整理段階に土坑番号III-P-49として設定しなおした。調査は断面の記録後、焼土の土壌サンプルを回収した上で、残り半分の掘削を行った。完掘後、平面形の記録を行い、調査を終了した。

形態:円形プランで、VII層中に形成された坑底部は平坦に掘り込まれ、壁面は垂直に立ち上がるが、IV層付近から漏斗状に開口している。

堆積状態:堆積土8・9層にV層・VI層主体土が位置しているが、その上位の堆積土はIIIc層・IV層を主体としている。壁面の開口状態も考慮すると、壁面崩落による自然堆積の覆土と考えられる。上位にはIIIb層覆土が厚く堆積し、III-F-95は土坑が完全に埋没した後形成されている。坑底部直上の9層は保水性に富んでいた。(小野)

## 第5節 焼土 (図III-61~65 図版58~75)

IIIb層下位~IIIc層において検出し、他の遺構との有意な関連性を想定できなかった焼土は、合計37ヵ所確認した。例外はあるが、これらの傾向として、a. 灰層を伴わないこと、b. 付帯黒色部が不明瞭なこと、c. 燃焼面は大半が平坦であることの3点をあげることができる。a、bの特徴は経年の要素と考えられ、多数検出している焼骨片のみを伴う例は、灰層が土壌化したものと考えられる。しかし同時に焼骨片をほとんど伴わない例もあり、焼土自体の性格の違いを反映している可能性がある。cの特徴は、アイヌ文化期の焼土と比べた場合、対照的な特徴といえ、灰の掻き出し行為の有無と関係する可能性がある。ここでは上記の特徴を踏まえ、検出した焼土を分類した上で、特筆すべき例のみ個別に扱う。(小野)

### 燃焼面が平坦で焼骨片を伴う焼土

III-F-12・19・61・90・99・107・108・110・111・112・114・124の12ヵ所が該当する。概ね付帯黒色部が確認でき、分布は集中区6・8・12・13が密集するT<sub>2</sub>東側に偏る傾向がある。

III-F-61 (図-61 図版63)

沢地形の縁に位置するJ-30区で検出した。層厚6cmの良好な焼土層が形成されており、上面に炭化物・焼骨片が確認できた。南側に30cm離れた位置で、花崗岩製の台石が出土している(図III-65-1)。長軸30cm、厚さ13cmの大きさで、礫の稜と面を使用している。使用面にある僅かな礫の窪み内に

鉄分の付着が認められたが、岩手県立博物館赤沼英男氏に鑑定を依頼したところ、自然のものではなく、人工物の鉄錆である可能性が高いとのご教示を得た。焼土に隣接した出土位置を考慮すると、鍛冶作業に使用された台石の可能性が高い。しかし土壤サンプル中からは哺乳綱の骨のみで、鍛造剥片等鍛冶関連遺物は得られなかった。

### ⅢF-90 (図Ⅲ-62)

集中区 12 の北西側、N-26 区で検出した。長軸長 88cm、層厚 10cm の極めて良好な焼土層が形成されており、上面に多量の焼骨片が認められた。土壤サンプル中からは多量の魚網と哺乳綱の骨の他、コムギ、ブドウ科の炭化種子を得た。

### ⅢF-107 (図Ⅲ-64 図版 68)

I-33 区で検出した。長軸長 36cm、層厚 6cm の楕円形プランの焼土で、上面に骨片を確認できた。土壤サンプル中からは哺乳綱の骨とクルミ属の炭化種子を得た他、釣針先端部と考えられる骨角器が含まれていた(図Ⅲ-65-3)。骨角器は、刃物で面取りされ、かえしが作出されている。(小野)

### 燃焼面が平坦で焼骨片を伴わない焼土

ⅢF-23・24・30・55・69・79・83・85・88・94・95・96・103・104・118・127・131・140・142・143 の 20 ヲ所が該当する。付帯黒色部が不明瞭な例が多く、T<sub>2</sub> 西側も含め調査区内全体で検出した。

### ⅢF-55 (図Ⅲ-61 図版 63)

沢地形の最深部にあたる I-27 区で検出した。長軸 114cm を測る大型の焼土で、燃焼面には炭化物が認められるが、骨片はほとんど確認できなかった。土壤サンプル中からは極僅かの骨片の他、ブドウ科、クマシデ属、ウルシ属の炭化種子、並びに小鉄片を得ている。

### ⅢF-95 (図Ⅲ-62)

M-26 区において、円形の土坑ⅢP-49 の覆土中に形成されている。層厚 3cm の小規模な焼土で、骨片を僅かに含む。土坑覆土中からは土器片も出土した(図Ⅲ-65-2)。VIIc4a と思われる坏の口縁部片で、口縁部には 2 本の沈線が廻る。内外面共ミガキ調整が施され、内面に黒色処理が行われている。土壤サンプル中からは哺乳綱の骨と、ブドウ科、キハダ属、クルミ属の炭化種子を得た。

### ⅢF-143 (図Ⅲ-65 図版 75)

M-28 区のⅢc 層上面において柱穴確認のためジョレン精査を行っていた際、自然の窪みに落込んだⅢb 層中で検出した。長軸長 100cm、層厚 8cm の規模の大きい焼土で、上面で僅かに炭化物が認められた。土壤サンプル中からも特筆すべき資料は得られていない。(小野)

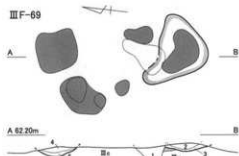
### 燃焼面が窪む焼土

ⅢF-59 の 1 ヲ所が該当する。

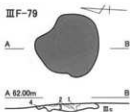
### ⅢF-59 (図Ⅲ-61 図版 63)

H-32 区で検出した。周囲は耕作によりⅢc～Ⅳ層まで削平されていたが、窪む燃焼面が残されていた。削平の影響もあるが、本焼土が形成された T<sub>2</sub> 段丘面北端部付近ではⅢb 層下位での遺物出土が極端に低い。また他の擦文期焼土に窪むものが僅少であることから、アイヌ文化期の焼土である可能性も考えられる。土壤サンプル中からは哺乳綱の骨の他、クルミ属の炭化種子を得ている。

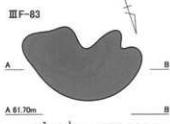




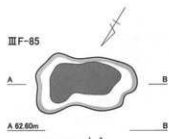
- ⅢF-69**
1. 10YR2/1 黒色 根による土の落ち込み
  2. 7.5YR4/6 暗褐色 焼土(Ⅲb, ~Ⅲc 地山被熱層)
  3. 7.5YR4/3 に近い褐色 焼土(Ⅲc 地山被熱層)
  4. 7.5YR4/3 に近い褐色 焼土(Ⅲc 地山被熱層)
  5. 7.5YR3/3 暗褐色 焼土(Ⅲc 地山被熱層)



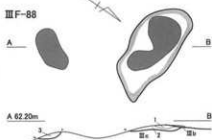
- ⅢF-79**
1. 10YR2/2 黒褐色 2層・Ⅲc
  2. 7.5YR3/4 暗褐色 焼土(Ⅲc 地山被熱層)
  3. 7.5YR3/3 暗褐色 焼土(Ⅲc 地山被熱層)
  4. 10YR3/2 黒褐色 Ⅲc + 3層



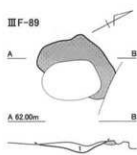
- ⅢF-83**
1. 7.5YR4.7/1 黒色 Ⅲ層 = 焼骨片(φ2.1)
  2. 7.5YR4/4 褐色 焼土(Ⅲc 地山被熱層) = 炭化物
  3. 7.5YR4/4 褐色 焼土(Ⅲc 地山被熱層) = Ⅲ層(炭状)
  4. 10YR2/3 黒褐色 焼土(Ⅲc 地山被熱層)
  5. 7.5YR2/2 黒褐色 焼土(Ⅲc 地山被熱層)



- ⅢF-85**
1. 5YR5/6 明赤褐色 焼土(Ⅲc 地山被熱層)
  2. 5YR2/1 黒褐色 付帯黒色層
  3. 7.5YR3/1 黒褐色 付帯黒色層



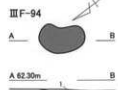
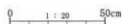
- ⅢF-88**
1. 7.5YR3/4 暗褐色 焼土(Ⅲc 地山被熱層) = 炭化物
  2. 7.5YR3/2 黒褐色 付帯黒色層
  3. 7.5YR3/4 暗褐色 焼土(Ⅲc 地山被熱層) = 炭化物



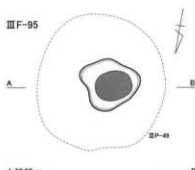
- ⅢF-89**
1. 7.5YR4/2 灰褐色 焼土粒 - 焼骨片 = Ⅲ層(炭状)



- ⅢF-90**
1. 5YR5/4 に近い赤褐色 2層 - Ⅲ層(炭状) - 焼骨片
  2. 5YR5/6 明赤褐色 焼土(Ⅲc 地山被熱層) = Ⅲ層(炭状)
  3. 7.5YR5/3 に近い褐色 焼土(Ⅲc 地山被熱層)
  4. 5YR4/3 に近い赤褐色 根による土の落ち込み = 焼骨片

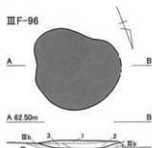


- ⅢF-94**
1. 5YR5/4 に近い赤褐色 焼土(Ⅲc 地山被熱層)

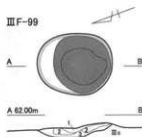


- ⅢF-95**
1. 7.5YR6/4 に近い褐色 焼土(Ⅲc 地山被熱層) = Ⅲ層(炭状) = 焼骨片
  2. 7.5YR2/2 黒褐色 付帯黒色層
- ⅢF-49 覆土上位に形成された焼土

図Ⅲ-62 焼土(2)



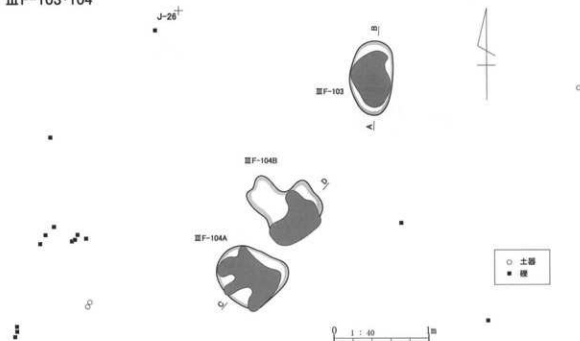
- III F-96**
1. 5YR5/3 にぶい赤褐色 2層 + 皿層 (碗状)
  2. 5YR4/6 赤褐色 焼土(皿M. ~ 皿c 地山被熱層)
  3. 5YR4/1 褐色 焼土(弱い皿M. ~ 皿c 地山被熱層)



- III F-99**
1. 7.5YR2/1 黒色 皿a = 焼骨片  
皿b = プロック層がに含む
  2. 7.5YR3/4 暗褐色 焼土(皿c 地山被熱層)
  3. 10YR2/1 黒色 付帯黒色層

0 1 : 20 50cm

III F-103・104

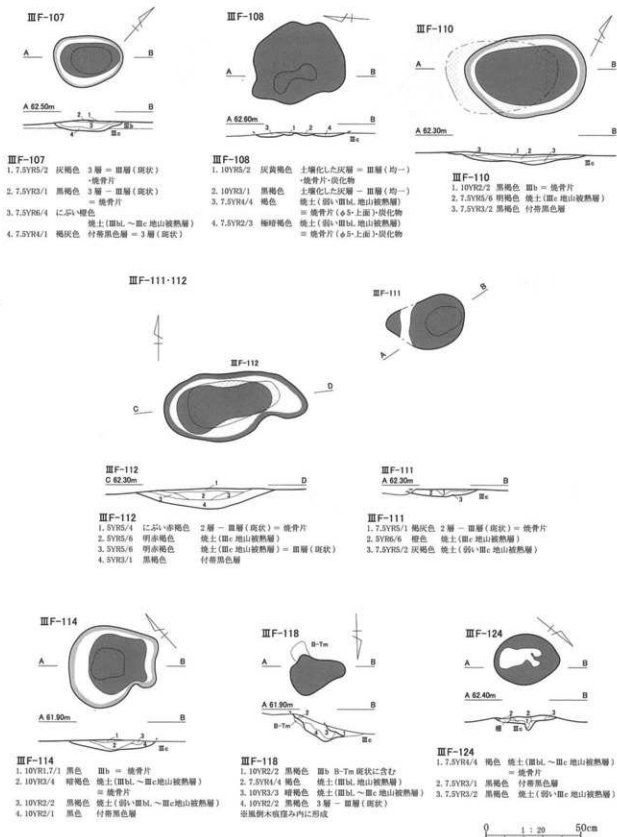


- III F-103**
1. 7.5YR5/3 にぶい褐色 2層 + 皿層
  2. 7.5YR6/6 橙色 焼土(皿M. ~ 皿c 地山被熱層)
  3. 7.5YR3/1 黒褐色 付帯黒色層

- III F-104**
1. 5YR4/2 灰褐色 2層 - 皿層 (碗状)
  2. 5YR5/6 明赤褐色 焼土(皿M. ~ 皿c 地山被熱層)
  3. 5YR3/1 黒褐色 付帯黒色層
  4. 5YR5/2 灰褐色 5層 = 皿層 (碗状)

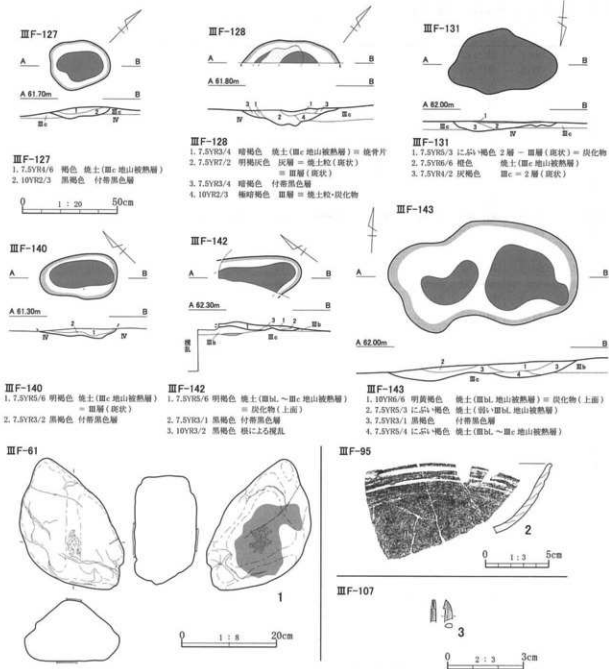
5. 5YR5/6 明赤褐色 焼土(皿M. ~ 皿c 地山被熱層)
6. 5YR5/4 にぶい赤褐色 焼土(弱い皿M. ~ 皿c 地山被熱層)
7. 5YR3/1 黒褐色 付帯黒色層

図III-63 焼土(3)



図Ⅲ-64 焼土(4)





図Ⅲ-65 焼土(5)及び焼土出土遺物

表Ⅲ-83 擦文文化期焼土属性表

挿図番号	図版番号	遺構名	グリッド	層位	平面形	規模(cm)			灰・骨片の有無	備考
						長軸	短軸	厚さ		
Ⅲ-61	58-1	ⅢF-12	Q・R-20	ⅢbL	楕円形	42	30	4	骨	
Ⅲ-61	59-3	ⅢF-19	O-19	ⅢbL	楕円形	46	(30)	6	骨	
Ⅲ-61	61-7	ⅢF-23	P-19	ⅢbL	不整形	46	34	2	-	
Ⅲ-61	-	ⅢF-24	M-19	ⅢbL	楕円形	50	26	4	-	
Ⅲ-61	62-1	ⅢF-30	L-25	ⅢbL	-	(60)	(22)	4	-	
Ⅲ-61	63-1	ⅢF-55	I-27	ⅢbL	不整形	114	64	6	-	
Ⅲ-61	63-5	ⅢF-59	H-32	ⅢcU	円形	32	30	4	骨	
Ⅲ-61	63-7	ⅢF-61	J-30	ⅢbL	楕円形	52	30	6	-	
Ⅲ-62	64-1	ⅢF-69	G-34	ⅢbL	不整形	38	32	4	-	
Ⅲ-62	64-8	ⅢF-79	O-33	ⅢbL	不整形	34	32	4	-	
Ⅲ-62	65-2	ⅢF-83	O-36	ⅢbL	不整形	46	40	6	-	
Ⅲ-62	65-3	ⅢF-85	G-34・35	ⅢbL	楕円形	54	28	6	-	
Ⅲ-62	65-6	ⅢF-88	I-28	ⅢcU	楕円形	24	12	2	-	
Ⅲ-62	65-8	ⅢF-89	P-27	ⅢbL	楕円形	42	28	4	骨	
Ⅲ-62	-	ⅢF-90	N-26	ⅢbL	楕円形	88	50	10	骨	
Ⅲ-62	66-2	ⅢF-94	M-26	ⅢbL	楕円形	24	16	4	-	
Ⅲ-62	44-6	ⅢF-95	M-26	ⅢbL	円形	28	26	3	-	ⅢP-49覆土上位
Ⅲ-63	66-4	ⅢF-96	M-22	ⅢbL	円形	44	42	4	-	
Ⅲ-63	66-6	ⅢF-99	R-28	ⅢbL	楕円形	40	32	6	骨	
Ⅲ-63	67-2	ⅢF-103	J-25	ⅢbL	楕円形	78	46	8	骨	
Ⅲ-63	67-5	ⅢF-104A	J-25	ⅢbL	楕円形	76	64	8	骨	
Ⅲ-63	67-5	ⅢF-104B	J-25	ⅢbL	不整形	80	66	8	-	
Ⅲ-64	68-2	ⅢF-107	I-33	ⅢbL	楕円形	36	28	6	骨	
Ⅲ-64	68-4	ⅢF-108	E-30	Ⅲc	不整形	48	44	2	骨	
Ⅲ-64	68-7	ⅢF-110	Q・R-25	ⅢbL	楕円形	64	42	4	骨	
Ⅲ-64	69-2	ⅢF-111	M-25	ⅢbL	楕円形	42	38	4	骨	
Ⅲ-64	69-3	ⅢF-112	M-25	ⅢbL	長楕円形	72	36	10	骨	
Ⅲ-64	69-6	ⅢF-114	R-27	ⅢbL	不整形	52	46	6	骨	
Ⅲ-64	61-2	ⅢF-118	Q-27	Ⅲc	不整形	30	22	6	-	
Ⅲ-64	70-7	ⅢF-124	M-27	ⅢbL	楕円形	34	26	8	骨	
Ⅲ-65	71-2	ⅢF-127	P-34	ⅢcU	楕円形	32	26	6	-	
Ⅲ-65	71-3	ⅢF-128	R-29	Ⅲc	-	52	(12)	8	灰	
Ⅲ-65	71-8	ⅢF-131	N-30	ⅢcU	楕円形	58	34	4	-	
Ⅲ-65	74-4	ⅢF-140	P-36・37	Ta-cU	楕円形	40	24	4	-	
Ⅲ-65	74-8	ⅢF-142	P-24	ⅢbL	-	(44)	(22)	2	-	
Ⅲ-65	75-2	ⅢF-143	M-28	ⅢbL	楕円形	100	52	8	-	

表Ⅲ-84 擦文文化期焼土出土土器属性表

挿図番号	図版番号	遺構名	個体名称	分類	遺物番号	グリッド	層位	器種	部位	器面調整		点数	備考
										内側	外側		
Ⅲ-69-2	113-3	ⅢF-95	SP541A	ⅢC4a?	31055-31057	L-25	ⅢbL	杯	口縁～ 体部	内面黒色処理 (9%)	(9%)	3	

表Ⅲ-85 擦文文化期焼土出土遺物属性表

挿図番号	図版番号	個体名称	遺物番号	遺物名	分類	層位	遺構名	グリッド	計測値(mm)			重量(g)	材質	備考	
									長軸	短軸	厚さ				
Ⅲ-65-1	113-2	-	25868	台石	-	-	ⅢbL	ⅢF-61	K-30	306.0	186.0	131.0	8580.0	Gra.	※1
Ⅲ-65-3	113-4	-	51336	骨製釣針	-	-	-	ⅢF-107	-	(8.5)	3.8	2.0	0.04	B	Fl.T

※1 鍛冶作業によると考えられる鉄錆が作業面に付着

### 灰層を伴う焼土

ⅢF-128の1ヵ所が該当する。

#### ⅢF-128 (図Ⅲ-65 図版71)

R-29区の試掘トレンチ壁面で検出した。推定長軸長52cm、層厚8cmの良好な焼土が形成されており、焼土層の間に厚さ6cmの灰層が挟まれていた。周囲に根による攪乱の痕跡は確認できなかったことから、焼土形成後、掘り返し等の行為により灰が動かされたと考えられる。土壌サンプル中からも特筆すべき資料は得られていない。(小野)

### 投棄された焼土ブロック

ⅢF-89の1ヵ所が該当する。

#### ⅢF-89 (図Ⅲ-62 図版65・66)

P-27区のⅢb層下位で検出した。焼土中に焼骨片を多量に含み、Ⅲ層黒色土を斑状に含んでいることから、現地性の焼土ではなく、他所で形成された焼土を投棄したものと考えられる。土壌サンプル中からは魚網、哺乳綱の骨が得られた。(小野)

## 第6節 集中遺物

#### ⅢPB-06 (図Ⅲ-66・図版76・113)

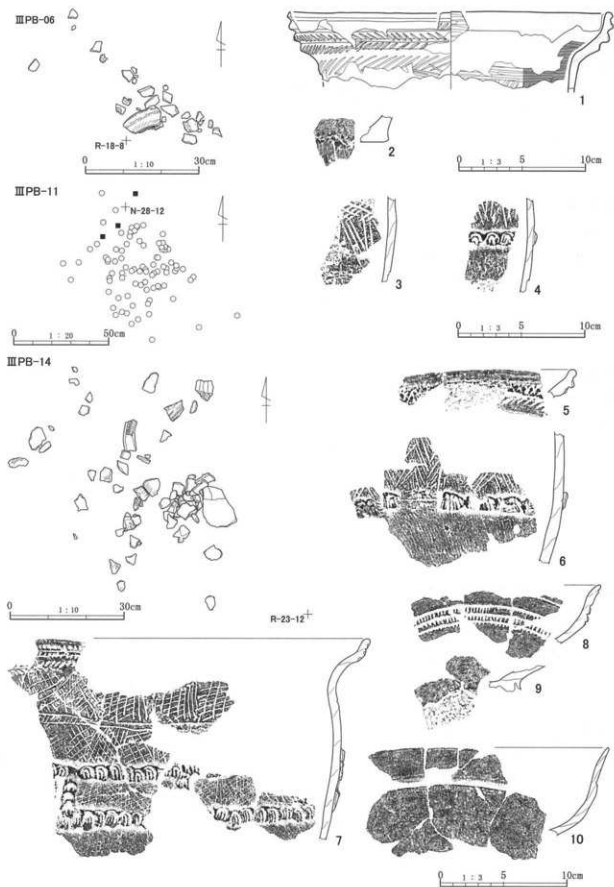
R-18区の攪乱坑の脇で検出した。100×20cmの範囲に1個体分、150点の土器片がやや散漫な状態で出土した。1は口縁部、2は底部片で、ⅧB3bの甕である。胴部文様帯には横走綾杉文、口縁部文様帯には薄手の篋状工具による刻みが入れている。特徴的な要素として、胎土に粒径1mm前後の石英結晶を僅かに含む点をあげることができる。「仮称富良野盆地系土器」(乾・小野・奈良2006)とした縄文土器において類似しているが、遺跡内出土の擦文土器には他に例がないため、今後の類例増加を期待したい。(小野)

#### ⅢPB-11 (図Ⅲ-66・図版76・113)

N-28区で出土した。60×60cmの範囲に1個体分、65点の土器片がまとまって出土した。3・4共に胴部片で、ⅧB3cの甕である。貼付囲繞帯は横走沈線で位置決めを行った後に付けられ、馬蹄形圧痕文が施文されている。囲繞帯の上位には2条1対の沈線で鋸歯文を描き、さらにその上段に連続した斜位の沈線による文様が施文されている。胴部外面は粗雑なミガキ調整が行われ、内面も粗雑なミガキ調整の後、黒色処理が施されている。また3の内面には炭化物が付着する。(小野)

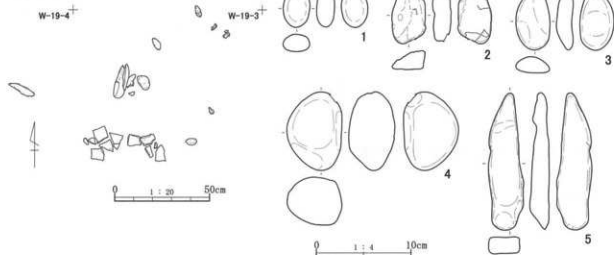
#### ⅢPB-14 (図Ⅲ-66・図版76・113)

集中区8の南側、R-23区で出土した。2個体分の土器片が出土し、その周囲にも2個体分が散在していた。この位置には2号土壙墓が形成されており、その構築時に土器片が散逸したと考えられる。5・6は同一個体分で、ⅧB3bの甕である。胴部文様帯には縦位の綾杉文、鋸歯状文が描かれ、両者の文様の間を2条1対の縦位の沈線で区画している。貼付囲繞帯は横走沈線で位置決めを行った後に付けられ、馬蹄形圧痕文が施文されている。口縁部文様帯はやや厚みのある篋状工具で刻みを入れている。7はⅧB3dの甕で、2本の貼付囲繞帯と、その間に縦位の貼付帯が付され、馬蹄形圧痕文が施されている。胴部の文様は、2本の囲繞帯間に先の細い工具による格子目状の沈線を入れ、



図Ⅲ-66 土器集中平面図及び出土遺物

ⅢSB-07



図Ⅲ-67 碟集中平面図及び出土遺物

表Ⅲ-86 土器集中出土土器属性表

挿図番号	図版番号	遺構名	個体名称	分類	遺物番号	グリッド	層位	器種	部位	器面調整		点数	備考
										内側	外側		
Ⅲ-66-1	113-5	ⅢPB-06	SP005A	ⅣB3b	3431.3443.4033他	R-18	Ⅲbl.	甕	口縁	①② 内面黒色処理	ハナメナナ'	9	
Ⅲ-66-2	113-6	ⅢPB-06	SP005D	ⅣB3b	16553	R-18	Ⅲbl.	甕	底部	①② 内面黒色処理	ナナ'	1	
Ⅲ-66-3	113-7	ⅢPB-11	SP043C	ⅣB3c	29288.29303	N-28	Ⅲbl.	甕	胴部	①② 内面黒色処理	ナナ'	2	
Ⅲ-66-4	113-8	ⅢPB-11	SP043B	ⅣB3c	29293.29317	N-28	Ⅲbl.	甕	胴部	①② 内面黒色処理	①②ナ	2	
Ⅲ-66-6	113-11	ⅢPB-14	SP044D	ⅣB3b	31711.31726.31734	R-23	Ⅲbl.	甕	胴部	①② 内面黒色処理	ハナメナナ'	3	
Ⅲ-66-5	113-9	ⅢPB-14	SP044E	ⅣB3b	31150.31153	R-23	Ⅲbl.	甕	口縁	①② 内面黒色処理	ナナ'	2	
Ⅲ-66-7	113-10	ⅢPB-14	SP042A	ⅣB3c	20192.20213.20227他	Q-23	Ⅲbl.	甕	口縁～胴部	①② 内面黒色処理		9	
					31696.31715	R-23						2	
					20192	R-23						1	
					18960	HTR-22						1	
Ⅲ-66-8	113-12	-	SP509A	ⅣC3a	32726	Q-23	Ⅲbl.	坏	口縁～体部	①② 内面黒色処理		1	ⅢPB-14 周辺出土
					3599.3603	S-20						2	
					3610	T-19						1	
					31671	Q-23						1	
Ⅲ-66-9	113-13	-	SP509D	ⅣC3a	20310.20517	R-23	Ⅲbl.	坏	体部～台部	①② 内面黒色処理	①②ナ	2	ⅢPB-14 周辺出土
Ⅲ-66-10	113-14	-	SP538A	ⅣC3a	20251.20205.31679	R-23	Ⅲbl.	坏	口縁～体部	①② 内面黒色処理		3	ⅢPB-14 周辺出土
					23619.32140.32141	O-25						3	
					20428	Q-24						1	
-	-	-	-	-	59558	S-24	-	-	-	-	1	-	

表Ⅲ-87 ⅢSB-07碟属性表

挿図番号	図版番号	個体名称	遺物番号	層位	状態	計測値(mm)				長短比		重量(g)	被熱	材質	備考		
						長軸	標準偏差	短軸	標準偏差	厚さ	標準偏差					長短比	標準偏差
Ⅲ-67-1	113-15	-	1224	Ⅲbl	完形	39.7	-154.6	28.3	-100.7	19.1	9.0	-40.05	1.40	26.42	-	Sa.	
Ⅲ-67-2	113-15	-	1238	Ⅲbl	完形	56.9	56.9	35.1	35.1	21.8	21.8	21.80	1.62	46.60	-	Sa.	
Ⅲ-67-3	113-15	-	1243	Ⅲbl	完形	63.1	26.8	36.3	16.5	18.0	-1.8	-21.60	1.74	47.01	-	Sa.	
Ⅲ-67-4	113-15	-	1240	Ⅲbl	完形	82.8	-111.5	58.3	-70.7	50.3	40.2	-8.85	1.42	30.10	-	Ser.	
Ⅲ-67-5	113-15	-	1226	Ⅲbl	完形	144.1	144.1	36.3	36.3	19.8	19.8	19.80	3.97	123.52	-	Sa.	
完形合計						386.6	144.6	194.3	38.8	129.0	49.0	10.15	3.88	273.7			
完形平均値						77.3	28.9	38.9	7.8	25.8	9.8	2.03	0.78	54.7			
遺物総重量																373.5	

※完形 5点

圍繞帯の上段には先の太い工具を用いて同様の文様を2段に施文している。口縁部文様帯は先の太い工具で刻みを廻らせている。8・9は同一個体片で、VIC4aの坏の口縁部と台部である。口縁直下に1本、さらにその下位に3本の沈線を廻らし、下位の沈線間に刻みを入れている。内外面共にミガキ調整を施し、内面に黒色処理を行っている。10もVIC4aの坏で、体部中程に段状沈線を廻らしている。沈線下外面にミガキ調整を加え、内面はミガキ調整の後、黒色処理を行っている。なお6・7の内面には炭化物が付着している。(小野)

## 第7節 包含層出土遺物(擦文文化期)

### 土器(図Ⅲ-68・69 図版114)

1はVII B3eの小型甕で、底部側面は明瞭な面取りの跡があることから、ケズリ調整の後にミガキを施していると思われる。2・3は共に甕胴下半部で、底部から胴部最大径まで直線的に広がる器形である。4も甕底部片で、底部側面からほぼ直線的な外傾で立ち上がる。5はVIC4bの坏で体部外面に縦位・横位の綾杉文を施し、その上段に工具木口面を押し当てて矢羽状の刻みを廻らしている。6は坏の台部で4ヵ所に切れ目を入れ、外面の一部にケズリ調整の痕跡を残す。7～9はVII B3の口縁部片で、9は口縁下に刺突を廻らしている。10は無文の甕口縁部。11はVII B3cの甕で、3条1対の沈線で胴部文様体を縦位に区画し、間に斜位の沈線を施し、最後に文様帯下端に横走沈線を廻らしている。口縁部は浅く外反して立ち上がる器形で、口縁下に補修孔があり、その斜め下に穿孔途中の痕跡もある。12～14はVII B2bの同一個体甕片で、口唇部は角状で、口縁は外反し、胴部上半の文様帯は1条の沈線で格子目状の文様を施文している。文様帯下端には円形の刺突を廻らしている。15・16はVII B3fの甕口縁部片で、共に横走沈線を廻らしている。16は頸部から口縁にかけて「く」の字状に開く器形で、文様要素も含め、札前遺跡にみるような渡島半島の擦文土器に類似している。17・18は甕の胴上半部片、19は胴下半部片で、19の胎土には径2mm前後の小円礫が含まれる。20・21は甕底部片で、20は外面にケズリ調整を行った上でミガキ調整を施している。22はVIC4aの坏口縁部片で、外面に目の細かいハケメ調整が施されている。23はVIC4bの坏口縁部片で体部には横走沈線で文様帯を区画した後、斜位の沈線を施文している。(小野)

### 剥片石器(巻頭カラー4-3 図Ⅲ-69 図版115)

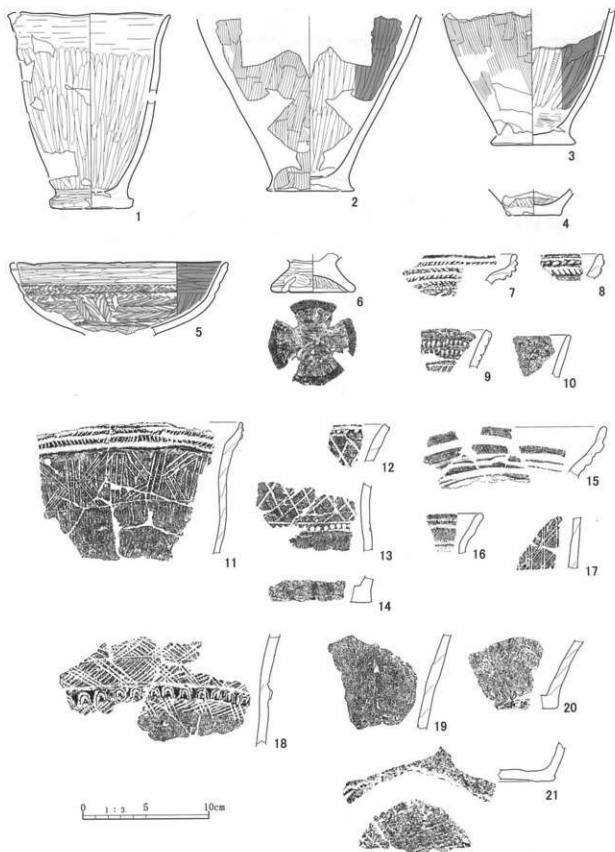
28はメノウ製の火打石である。規模は144×97mm、厚さ33mm、色調は褐色～黄褐色で一部透明結晶を含む。下縁に連続した剥離がある。アイヌ文化期の火打石に比べ、剥離単位は大きい。「稜の磨耗」が顕著であるため火打石として報告した。また、腹面にはバンチ痕が認められる。火打石としては道内最古の資料。(奈良)

### 礫石器(図Ⅲ-69 図版115)

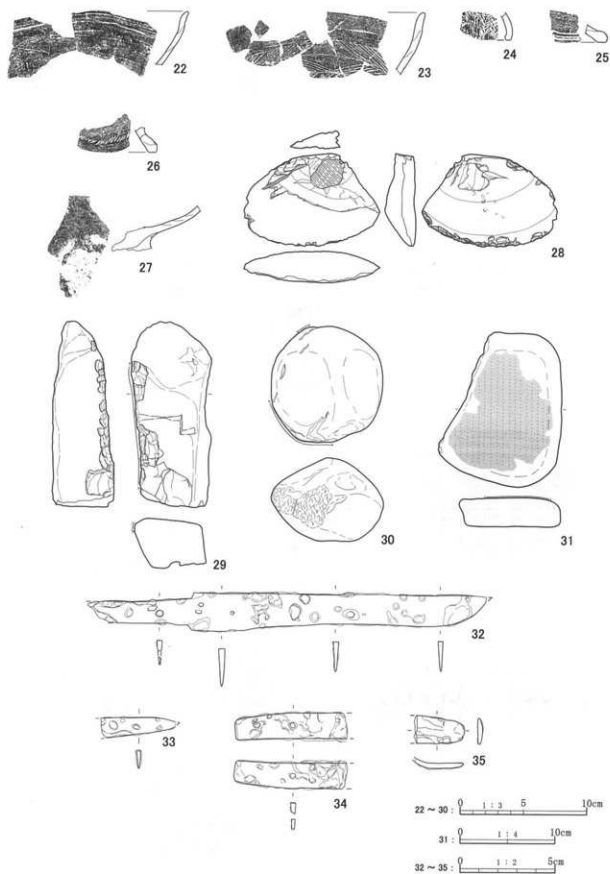
29・30はたたき石で、29は角柱状礫の稜部分を使用している。30は球形状の花崗岩礫面に敲打痕を有する。敲打痕は木目細かく、単位は不明瞭である。31は滑沢面のある板状礫。(乾)

### 金属製品(図Ⅲ-69・70 図版115)

32は刀身長16cm、平棟平造りの小刀で、茎は刀身部同様刃部側に向けて薄くなり、目釘孔がある。



図Ⅲ-68 擦文文化期包含層(Ⅲ層下位)出土遺物(1)



図Ⅲ-69 擦文文化期包含層(Ⅲ層下位)出土遺物(2)

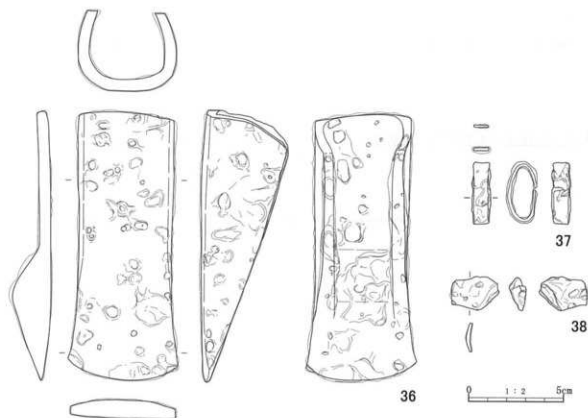


33 は刀子の切先。34 は小刀の茎で僅か反りが入る。35 は筈状工具の先端部片で、刃部に厚みがなく、ⅢIPB-01 出土資料(図Ⅱ-59-7)に類似する。36 は袋柄型の鉄斧でソケット部は巻き返しが無く、刃部は若干撥状に広がる。37 は鐘と思われる帯金具。38 は変形し歪みが見られる板状製品である。

(小野)

表Ⅲ-88 包含層出土土器属性表

神岡 番号	図版 番号	遺構名	個体 名称	分類	遺物番号	グリッド	層位	器種	部位	器面調整		点数	備考
										内側	外側		
Ⅲ-68-1	114-1	-	SP081A	ⅣB3c	21552,23202	M-23	Ⅲbl	罍	口縁へ 底部	ハナ	ハナ	2	
					32899他	M-24	Ⅲbl			ナメ	ナメ	3	
					30378,30400,34615他	M-26	Ⅲbl			シシ	シシ	13	
					30801-30807他	M-26	Ⅲbl			シシ	シシ	9	
Ⅲ-68-2	114-2	-	SP051A	ⅣB	28079,30248	J-27	Ⅲbl	罍	胴部へ 底部	ハナ	ハナ	2	
					26007,34336	K-27	Ⅲbl			内面黒色処理	ハナ	1	
					26006	K-27	Ⅲbl					1	
					24258	L-31	Ⅲbl					1	
Ⅲ-68-3	114-3	-	SP081A	ⅣB	26887	N-31	Ⅲbl	罍	胴部へ 底部	ハナ	ハナ	1	
					23322,26335,29887他	N-35	Ⅲbl			内面黒色処理	ナメ	9	
					23305,26323他	O-35	Ⅲbl				ナメ	9	
Ⅲ-68-4	114-4	-	SP062A	ⅣB	31089	O-22	Ⅲbl	罍	底部	シシ	シシ	1	
					20156,20157	J-24	Ⅲbl			内面黒色処理		1	
Ⅲ-68-5	114-5	-	SP530A	ⅣC4b	22415	J-25	Ⅲbl	罍	口縁へ 体部	シシ	ハナ	2	
					30330他	J-26	Ⅲbl			内面黒色処理	シシ	6	
Ⅲ-68-6	114-6	-	SP515A	ⅣB4	18959	BTR	Ⅲbl	罍	台部	-	ナメ	1	
Ⅲ-68-7	114-7	-	SP027A	ⅣB3	33176	Q-24	Ⅲbl	罍	口縁	シシ	ハナ	1	
					34693	Q-23	Ⅲbl					1	
Ⅲ-68-8	114-8	-	SP028	ⅣB3	20190	M-21	Ⅲbl	罍	口縁	シシ	ナメ	1	
Ⅲ-68-9	114-9	-	SP006A	ⅣB3	1885	W-18	Ⅲbl	罍	口縁	シシ	ナメ	1	
Ⅲ-68-10	114-10	-	SP031A	ⅣB3c	20104	F-29	Ⅲbl	罍	口縁	シシ	シシ	1	
Ⅲ-68-11	114-11	-	SP081B	ⅣB3c	23315-23320,26340他	N-35	Ⅲbl	罍	口縁	シシ	ナメ	7	
Ⅲ-68-12	114-12	-	SP0561A	ⅣB2b	24499	N-22	Ⅲbl	罍	口縁	ナメ	ナメ	1	
					30763	L-21				内面黒色処理	ナメ	1	
Ⅲ-68-13	114-13	-	SP056A	ⅣB2b	32407,32410	O-22	Ⅲbl	罍	胴部	ナメ	ナメ	2	
					24497	N-22				内面黒色処理	ナメ	1	
Ⅲ-68-14	114-14	-	SP0561	ⅣB2b	32384	N-22	Ⅲbl	罍	底部	ナメ	ナメ	1	
Ⅲ-68-15	114-15	-	SP008A	ⅣB3R	17255,17261,17264	N-18	Ⅲbl	罍	口縁	シシ	シシ	6	
					17266,17320,17321	M-20				内面黒色処理			
Ⅲ-68-16	114-16	-	SP088A	ⅣB3c	32109	R-26	Ⅲbl	罍	口縁	ハナ	ハナ	1	
Ⅲ-68-17	114-17	-	SP010A	ⅣB3c	3302,24438	M-21	Ⅲbl	罍	胴部	シシ	ナメ	2	
Ⅲ-68-18	114-18	-	SP007A	ⅣB	3332,3333 3337-3339	Q-20	Ⅲbl	罍	胴部	ハナ	ハナ	5	
Ⅲ-68-19	114-19	-	SP064A	ⅣB	33987	1-26	Ⅲbl	罍	胴部	ハナ	ナメ	1	小磯宮
Ⅲ-68-20	114-20	-	SP067A	ⅣB	30011	Q-34	Ⅲbl	罍	底部	シシ	ハナ	1	
Ⅲ-68-21	114-21	-	SP068A	ⅣB	24306	K-38	Ⅲbl	罍	底部	シシ	ナメ	1	
Ⅲ-69-22	114-22	-	SP537A	ⅣC4a	27558,27560-27563	Q-37	Ⅲbl	罍	口縁	ナメ	ナメ	5	
					27540	R-36				内面黒色処理	シシ	1	
Ⅲ-69-23	114-23	-	SP540D	ⅣC4b	30976	M-21	Ⅲbl	罍	口縁へ 体部	シシ	シシ	1	
					24494	N-22						5	
Ⅲ-69-24	114-24	-	SP523A	ⅣC4b	25555	1-27	Ⅲbl	罍	台部	ナメ	ナメ	1	
Ⅲ-69-25	114-25	-	SP525	ⅣC4	28844	J-29	Ⅲbl	罍	台部	ハナ	ナメ	1	
Ⅲ-69-26	114-26	-	SP526	ⅣC4	32250	Q-23	Ⅲbl	罍	台部	シシ	シシ	1	
Ⅲ-69-27	114-27	-	SP543	ⅣC4	35018	L-27	Ⅲbl	罍	台部	シシ	シシ	1	



図Ⅲ-70 擦文文化期包含層(Ⅲ層下位)出土遺物(3)

表Ⅲ-89 包含層出土遺物属性表

挿図 番号	図版 番号	個体 名称	遺物 番号	遺物名	分類	層位	遺構名	グリッド	計測値(mm)			重量(g)	材質	備考
									長軸	短軸	厚さ			
Ⅲ-69-28	115-28	-	3681	火打石	-	ⅢbL	-	S-19	144.0	97.0	33.0	430.0	Age.	
Ⅲ-69-29	115-29	-	29136	たたき石	I B2	ⅢbL	-	L-28	146.0	64.0	39.0	499.0	Sa.	焼熟
Ⅲ-69-30	115-30	-	33700	たたき石	ⅢB	ⅢbL	-	P-31	92.0	83.0	65.0	698.0	Gra.	
Ⅲ-69-31	115-31	-	24259	滑沢面のある礎	-	ⅢbL	-	L-31	163.0	129.0	31.0	930.0	Sa.	
Ⅲ-69-32	115-32	-	22151	刀子	-	ⅢbU	-	O-30	213.0	20.0	3.5	47.1	Fe	
Ⅲ-69-33	115-33	-	25029	刀子先端部	-	ⅢbL	-	N-22	41.2	12.0	2.0	4.4	Fe	
Ⅲ-69-34	115-34	-	23101	刀子茎	-	ⅢbL	-	R-28	59.0	15.5	2.8	7.7	Fe	
Ⅲ-69-35	115-35	-	20509	筒状製品	-	ⅢbL	-	F-29	21.5	15.0	5.0	3.0	Fe	
Ⅲ-70-36	115-36	-	690	袋柄型鉄斧	-	ⅢbL	-	R-18	143.0	58.0	46.0	572.0	Fe	
Ⅲ-70-37	115-37	-	34399	帯金具	-	ⅢbL	-	Q-32	33.0	10.0	11.5	5.8	Fe	
Ⅲ-70-38	115-38	-	26819	薄板状製品	-	ⅢbL	-	P-31	26.0	18.0	8.5	4.2	Fe	

表Ⅲ-90 フローテーション回収微細遺物属性表(1)

関連遺構名	遺構名/グリッド	FLTN	遺物番号	遺物名/重量(g)				漆塗 検片	ガラス 玉 (点数)	骨角 器 (点数)	材質	備考		
				鉄	銅	PC	火打石							
ⅢH-01	ⅢP-04	430,433	51301,51365	0.10	-	-	-	-	-	-	Fe			
			18561,18560	-	-	0.01<	-	-	-	-	-	Obs.		
ⅢH-01	ⅢP-05	1603	51260	-	-	0.01<	-	-	-	-	Obs.			
			1800他	51206	-	-	-	-	●	-	-	JP		
ⅢH-02			51182	-	-	-	0.44	-	-	-	Qu.			
			1819	51173	-	-	0.02	-	-	-	Obs.			
			ⅢPB-12	51223	-	-	-	9.9	-	-	-	Qu.		
			ⅢP-40	51050	-	-	0.01<	-	-	-	-	Obs.		
ⅢH-03	ⅢP-57	1380,1747	51099,51100	0.18	-	-	-	-	-	-	Fe			
			1380	51104	-	-	-	-	-	-	1	B		
ⅢH-04	ⅢP-43		51101	0.06	-	-	-	-	-	-	Fe	計		
			1369,2	51102,51103	1.56	-	-	-	-	-	-	Fe		
			1150,1151,1155,1157,1560,156	51291,51293-51295,51459-	0.83	-	-	-	-	-	-	-	Fe	
			9,1621,1627	51461,51463	-	-	-	-	-	-	-	-	Fe	
			1159他	51509	-	-	-	-	●	-	-	-	JP	
ⅢH-04	ⅢP-44		51477	-	-	-	0.12	-	-	-	Qu.			
			1197,1383	51097,51098	-	-	0.38	-	-	-	-	Obs.		
			ⅢPB-15	51174,51259,51252,51253,51259	-	-	1.68	-	-	-	-	-	Obs.	
ⅢH-05	ⅢP-67	1934	51232	-	-	-	3.71	-	-	-	Qu.			
			1687,1687,2006	51211-51213	-	-	1.72	-	-	-	-	Obs.		
ⅢH-07	ⅢP-25		51055-51059	2.58	-	-	-	-	-	-	Fe			
			1218,1219,1221,1235,1239	51060	-	-	-	●	-	-	-	JP		
			1235	51052,51051	-	-	1.32	-	-	-	-	Obs.		
			1221,1228	51062	-	-	-	-	-	1	-	G,		
ⅢH-07			51063	-	-	-	-	-	1	-	G,			
			1232	51063	-	-	-	-	-	-	-	G,		
集中区1	ⅢPB-02		98,1083,1086,1101,1315	51021,51452,51455,51466,51470	0.33	-	-	-	-	-	-	Fe		
			754	51516	-	0.01	-	-	-	-	-	-	Cu	
			94,1534	51338,51496	-	1.01	-	-	-	-	-	-	Cu	
			1124	51467	-	-	-	0.34	-	-	-	-	Ch.	
			1096,1258-1260,1262-264,	51264,51367,51368-	-	-	-	-	-	-	-	-	Fe	
			1267,1269,1303,1305,1310,131	51375,51378,51382,51388,	-	-	4.37	-	-	-	-	-	Obs.	
			4,1327,1330,1334,1335,1534	51389,51413,51495	-	-	-	-	-	-	-	-	Obs.	
			ⅢP-50	51580,1268,1564,1271	51265,51377,51209,51387	-	-	0.37	-	-	-	-	Obs.	
			M-20	649,652,654,667,675,683,684,6	2883,18695-18708,18478-18481	-	-	4.97	-	-	-	-	Obs.	
			N-20	91,695,697,702-704,706-709,	18541-18543,18621,8622,51343,	-	-	4.97	-	-	-	-	Obs.	
N-20	729,731-734,736,737	51344,51346-51348,51350-51354	-	-	-	-	-	-	-	Obs.				
N-20	742,744	51363,51364	-	0.36	-	-	-	-	-	Cu				
N-20	387,388,341,345,347-349,351,	18598-18614,18597,51027-	-	-	1.99	-	-	-	-	Obs.				
V-20	353,425-427,748,751	51034,51345,51349	-	-	-	-	-	-	-	Obs.				
W-20	498,5000	18484-18487,18557-18559	-	-	0.11	-	-	-	-	Obs.				
W-20	494	18744	-	-	0.01<	-	-	-	-	Obs.				
集中区2	ⅢSB-05		18752-,18762,18745-	-	-	1.39	-	-	-	-	Obs.			
			505,607,627,630,631,636,776	18748,18763-18772,51905-	-	-	0.01<	-	-	-	-	Obs.		
			433,467,471	18482,18545,18482	-	-	0.01<	-	-	-	-	Obs.		
			ⅢCB-40	517	18540	-	-	0.01<	-	-	-	-	Obs.	
集中区3	ⅢP-03		18477,18544	-	-	0.28	-	-	-	-	Obs.			
			1562	51308	-	-	-	-	●	-	-	JP		
			1547	51215	-	-	0.11	-	-	-	-	Obs.		
			ⅢP-04	1544,1551,1578,1595	51242,51267,51266,51254	-	-	1.02	-	-	-	Obs.		
			ⅢP-06	1710,1704	51241,51216	-	-	0.18	-	-	-	-	Obs.	
			51304,51303	1514,1518	-	-	-	0.19	-	-	-	Ch.		
			ⅢP-47	1514	51303	-	-	-	0.12	-	-	-	Qu.	
			1518	51335	-	-	-	-	-	1	-	B		
			ⅢP-80	1675	51284	0.01<	-	-	-	-	-	-	Fe	
			R-35	1596,1664	51203,51298	0.04	-	-	-	-	-	-	Fe	
集中区5	R-35		51175,51176,51218,51219,51240,	-	-	5.56	-	-	-	-	Obs.			
			9,1596,1597,1634,1636,1638,5	51247-51250,51282,51442,	-	-	-	-	-	-	-	Obs.		
			1514,51515,51250	51443,51513-51515	-	-	-	-	-	-	-	Obs.		
			447	51024	-	-	0.07	-	-	-	-	Obs.		
集中区6	ⅢP-13		51011	-	-	0.01<	-	-	-	-	Obs.			
			468	51025	-	-	0.12	-	-	-	-	Obs.		
			ⅢP-17	474	18853	-	-	0.01<	-	-	-	Obs.		
			ⅢP-18	478	18853	-	-	0.01<	-	-	-	Obs.		
集中区6	ⅢH-32		51468	0.15	-	-	-	-	-	-	Fe			
			1214	51385,51390,51384,51265	-	-	0.76	-	-	-	-	Obs.		
集中区8	ⅢP-93		51196	0.09	-	-	-	-	-	-	Fe			
			1206,1207,1208,1772	51197,51198,51445	0.92	-	-	-	-	-	-	Fe		
集中区8	ⅢP-109		51407,51504,51160,51395	-	-	0.59	-	-	-	-	Obs.			
			1863,1864,1879	51292	0.01<	-	-	-	-	-	-	Fe		
集中区9	ⅢP-74		51292	0.01<	-	-	-	-	-	-	Fe			
			1652	51257	-	-	0.54	-	-	-	-	Obs.		
集中区9	ⅢP-70		51257	-	-	0.54	-	-	-	-	Obs.			
			1692	51257	-	-	0.54	-	-	-	-	Obs.		

表Ⅸ-11 フローテーション回収微細遺物属性表(2)

関連遺構名	遺構名/ グランド	FL.TNo.	遺物番号	遺物名/重量(g)							備考	
				鉄	銅	FC	火打石	漆塗 陶片	ガラス 玉 (点数)	骨角 器 (点数)		材質
集中区11	ⅢCB-63	1684	51290	0.01<	-	-	-	-	-	-	-	Fe
	ⅢCB-63	1670	51263	-	-	0.03	-	-	-	-	-	Ohs.
集中区13	ⅢSB-24	2067	51273	-	-	0.77	-	-	-	-	-	Ohs.
	ⅢF-105	1923	51285	0.01<	-	-	-	-	-	-	-	Fe
		1879,1905,1882,1883	51270	-	-	0.59	-	-	-	-	-	Ohs.
	ⅢCB-60	1472	51278	0.01	-	-	-	-	-	-	-	Fe
		1474	51309	-	-	-	-	●	-	-	-	JP
1081,1082		51400,51401	-	-	0.18	-	-	-	-	-	Ohs.	
集中区15	ⅢF-130	448	51026	-	-	0.30	-	-	-	-	Ohs.	
集中区16	ⅢF-132	2997	51245	-	-	0.08	-	-	-	-	-	Ohs.
	ⅢF-133	2012,2014	51279,5128	1.57	-	-	-	-	-	-	-	Fe
	2014	51214	-	-	0.52	-	-	-	-	-	-	Ohs.
集中区18	ⅢF-08	434	51022	0.01<	-	-	-	-	-	-	Fe	
集中区19	ⅢF-33	1143,1144	51444,51448	0.06	-	-	-	-	-	-	-	Fe
		1138,1139,1142	51391,51441,51399	-	-	0.23	-	-	-	-	-	Ohs.
ⅢAS-01	ⅢGP-01	1249	51465	0.09	-	-	-	-	-	-	-	Fe
	1399,1404,1406,1408,1165,1117 0-1172	51282,51287-51290, 51449, 51458, 51462,51469	2.10	-	-	-	-	-	-	-	-	Fe
		1179	51432	-	-	-	-	●	-	-	-	JP
	1180,1406	51376,51329	-	-	0.25	-	-	-	-	-	Ohs.	
	1395	51092	-	-	-	-	-	-	1	-	B	
	1124	51492	-	-	-	-	-	-	1	-	B	
	1395	51093	-	-	-	-	-	-	1	-	B	
	1123	51491	-	-	-	-	-	-	1	-	B	
	1171	51494	-	-	-	-	-	-	1	-	B	
	1122	51493	-	-	-	-	-	-	1	-	B	
	1128	51471	-	-	-	-	-	-	1	-	G.	
	1128	51472	-	-	-	-	-	-	1	-	G.	
	ⅢAS-05	1861,1901	51199,512	0.26	-	-	-	-	-	-	-	Fe
		1881,1901,1931	51159,51158,51157	-	-	1.32	-	-	-	-	-	Ohs.
ⅢBB-05	1243	51386	-	-	0.10	-	-	-	-	-	Ohs.	
ⅢBB-13	1436	51205	-	-	-	0.98	-	-	-	-	Qu.	
ⅢX-01	1002	51446	0.01<	-	-	-	-	-	-	-	-	Fe
	1008,1012,1020,1021,1027,103 0-1172	51170,51171,51217,51246,51251, 51269,51272,51276,51366,51392, 51394,51396,51397,51404- 51406,51408-51411,51511	-	-	4.09	-	-	-	-	-	-	Ohs.
	1497	51312	-	-	-	-	●	-	-	-	-	
	1490	51307	-	-	0.17	-	-	-	-	-	-	Ohs.
	ⅢF-09	189	51342	-	-	0.10	-	-	-	-	-	Ohs.
	ⅢF-13	448	51020	0.14	-	-	-	-	-	-	-	Fe
	ⅢF-34	1117-1119, 1122, 1124, 1128, 1130,1131	51447,51450,51451,51453, 51455-51457,51467	2.46	-	-	-	-	-	-	-	Fe
	1132	51403	-	-	0.01<	-	-	-	-	-	-	Ohs.
	ⅢF-36	1109	51490	-	-	0.03	-	-	-	-	-	Cu
	ⅢF-41	1757	51168	-	-	0.06	-	-	-	-	-	Ohs.
ⅢF-45	1265,1774,1778	51195,51297,51464	0.80	-	-	-	-	-	-	-	Fe	
	1265	51481	-	-	0.09	-	-	-	-	-	Cu	
ⅢF-49	1962,1963,1778,1781	51178,51179,51207,51473	-	-	-	1.78	-	-	-	-	-	Ch.
	1358	51383	-	-	0.40	-	-	-	-	-	-	Ohs.
ⅢF-55	1521,5126	51283,51296	0.05	-	-	0.15	-	-	-	-	-	Fe
	1522	51210	-	-	-	-	-	-	-	-	-	Ohs.
ⅢF-60	1552	51281	0.01	-	-	-	-	-	-	-	Fe	
ⅢF-64	1557	51255	-	-	1.15	-	-	-	-	-	Ohs.	
ⅢF-69	ⅢF-94	1771	51328	-	-	0.54	-	-	-	-	-	Ohs.
	ⅢF-103	1832	51244	-	-	0.29	-	-	-	-	-	Ohs.
	ⅢF-104	10850,1926	51165,51166	-	-	0.77	-	-	-	-	-	Ohs.
	ⅢF-107	1844	51299	0.16	-	-	-	-	-	-	-	Fe
ⅢCB-42	522	51048	-	-	0.04	-	-	-	-	-	Ohs.	
ⅢCB-56	540,538	18854,18855	-	-	0.01	-	-	-	-	-	Ohs.	
ⅢCB-109	1918	51172	-	-	0.08	-	-	-	-	-	Ohs.	
ⅢP-19	481	51010	-	-	0.21	-	-	-	-	-	Ohs.	
Q-22	1870,1872	51271,51177	-	-	0.61	-	-	-	-	-	Ohs.	
Q-35	1581,1639,1640,1644	51220,51258,51243,51327	-	-	1.89	-	-	-	-	-	Ohs.	
Q-22	1862,1870,1871	51201,51202,51286	0.85	-	-	-	-	-	-	-	Fe	

## 第四章 続縄文・縄文時代の調査

これらの時期の遺構は検出されず、復元個体3個体と破片資料2個体分が出土している。

## 第1節 集中遺物

ⅢPB-08 (図IV-1-1) 位置:L-21区 規模:130×70cm

確認・調査等:当初、同位置で出土している擦文土器(ⅢPB-08)の調査中に検出した。擦文土器片集中(図Ⅲ-31-1)と重複して出土している。当初は同一面と思われたが、擦文土器片(SP009)と続縄文土器(ZP004:本個体)が上下混在した状態で出土している。また、比較的大型の破片が多い中、小破片が落ち込み密集する範囲があり、木の根による影響と思われる。それ以外では2~3cmのレベル差を確認できる範囲もある。1は大型の深鉢形土器でほぼ完形にまで復元できた資料である。上げ底の底部で底面中央部がやや凸状になる。口縁部までは緩やかなふくらみをもって立ち上がる。平縁で、口唇上に斜位の深い刻みが施され、小波状となる。口縁部文様帯は無文地に縄線文3条が施され、下縁のものは破線状となる。地文はRL縦走縄文である。

ⅢPB-04 (図IV-1-6) 位置:V-15区 規模:40×15cm

確認・調査等:V-15区の段丘崖裾付近の斜面地で出土した。コンターに直行する状態で出土しており、破片の流出移動が想定される。6は鉢ないしは深鉢形土器である。底部は凸底である。文様は地文のみで、底部付近はRL斜行縄文が施され、胴部上位は条が縦走する。

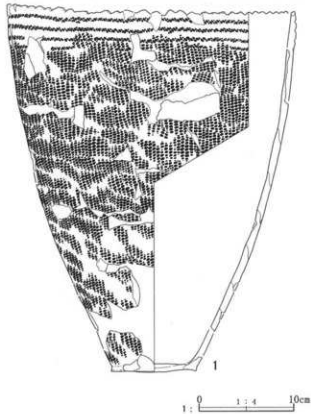
## 第2節 包含層出土遺物(図IV-1-2~5)

2は小型の鉢形土器で1/4ほどが復元された。口縁部は緩い波状を呈し、波頂部には2個1対の刻みがある。文様は地文のみで、胴部下半が縦走、上半は横走気味に施文されている。3は直立する口縁部に台形状の小突起を有し、焼成前の貫通孔(O)が施されている。地文は極めて浅く、条が縦走する。4は外反する口縁部に縄線文3条、口唇上に刺突文が施文されている。5は斜位回転施文

表IV-1 Ⅲ層出土続縄文・縄文晩期土器属性表

挿図番号	図版番号	個体名称	分類	調査区遺構名	層位	遺物番号/調査区/層位	部位	器形等		文様		胎土
								口縁-口唇/胴部/底面-変換点-底面	口唇-口縁-内面/胴部-内面/底側面-底面-内面			
IV-1-1	115-39	ZP004A	VIA1b	ⅢPB-08, L-M-21	Ⅲbl. ~ Ⅲc	23626,23627 他147点 31822他2点 24440,30970	口縁 ~胴部	直立-小波状 /直立/外傾	斜位刻み/RL縦走縄文/RL縦走縄文		砂粒やや多い	
IV-1-2	115-40	ZP001A	VIA1b	O-23	Ⅲbl.	1938,1940 他7点	口縁 ~底部	やや外反/横走縄文/上げ底	横走縄文/縦走縄文		砂粒やや多い	
IV-1-3	115-41	ZP002A	VIA1b	O-17	複丸	16816/ O-17/KR	口縁	直立-台形状小突起・丸形/直立/-	貫通孔(O)/RL縦走		砂粒多 繊維少	
IV-1-4	115-42	ZP003A	VIA1b	Q-17	Ⅲbl.	924/Q-17/ Ⅲbl.	口縁	外反-内側ぎ切り出し状/-	刺突列-縄線文/-/-		砂粒多 繊維少	
IV-1-5	115-43	ZP037B	VC1	ⅢPB-04,V-15	Ⅲc	713,719 他2点	胴	-/直立/-	RL縦走縄文		砂粒多 繊維少	
IV-1-6	115-44	ZP037A	VC1	ⅢPB-04,V-15	Ⅲc	719,18659/ ⅢPB-04/Ⅲc	胴~ 底部	-/直立/内湾-隅丸角 -やや凸	RL縦走縄文		砂粒多 繊維少	

ⅢPB-08 出土土器



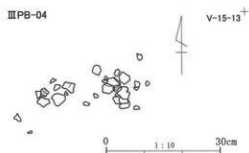
ⅢPB-08



ⅢPB-04 出土土器



ⅢPB-04



図IV-1 続縄文・縄文土器